福岡市埋蔵文化財調査報告書　第324集

那珂遺跡 8

－那珂遺跡群第20次調査の報告－

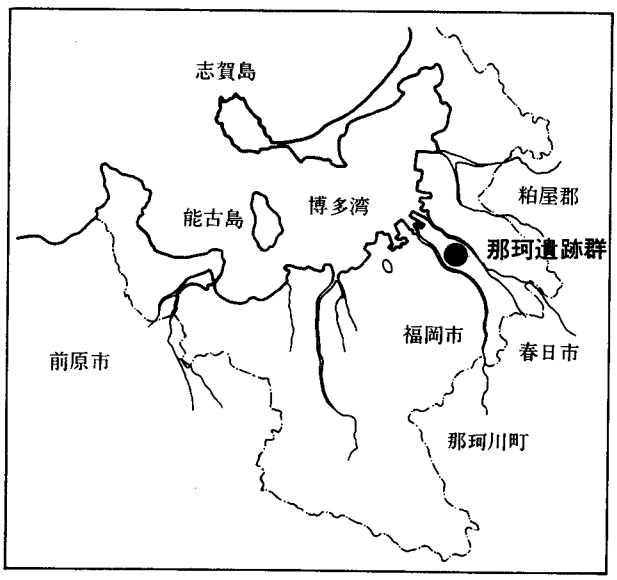
1993

福岡市教育委員会

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第324集

那珂遺跡 8

－那珂遺跡群第20次調査の報告－



遺跡調査番号　8906
遺跡略号　ＮＡＫ20

1993

福岡市教育委員会

（上）第Ⅰ区調査区全景（東から）　　（下）ＳＤ01　遺物出土状況（北から）

（上）ＳＤ01出土遺物（鋳型・青銅鋤先）　（下）ＳＤ01　出土遺物（祭祀土器）

序

福岡平野のほぼ中央部を南東から北西に延びる広大な那珂台地には、先人達の残した文化遺産が数多く分布しています。都心部に近いこの地域は住環境にすぐれ、住宅建設が活発に行なわれている地域です。

このたび、民間の共同住宅建設に先立って那珂遺跡群の一部を発掘調査いたしました。

調査の結果、弥生時代の環濠や銅戈の鋳型、古墳時代の集落跡、古代の掘立柱建物群、中世の集落跡など各時期の遺構・遺物が密度濃く発見されました。

本書は、これら発掘調査の成果を収録したものです。

本書が、埋蔵文化財に対する市民の方々のご理解、さらには学術研究上役立つことができれば幸甚に存じます。

最後になりましたが、発掘調査から整理に至るまで施主広田満氏、施工宮﨑建設株式会社をはじめ、多くの方々のご理解とご協力を賜わりましたことに対し、心より感謝の意を表します。

平成５年１月

福岡市教育委員会

教育長　井口雄哉

例　言

1．本書は、民間の共同住宅建設に伴い、受託事業として福岡市教育委員会が1989（平成元）年４月17日から同年６月30日までと1990年（平成２）年２月22日から同年３月３日にかけて発掘調査を実施した、那珂遺跡群の第20次緊急発掘調査の報告書である。

2．遺構の呼称は記号化し、竪穴住居址→ＳＣ、掘立柱建物→ＳＢ、井戸→ＳＥ、土坑→ＳＫ、溝→ＳＤ、その他の遺構→ＳＸ、ピット→ＳＰとした。なお、遺構番号は種類に関係なく連番とした。ただし、第II区は100番台から始めている。また、ＳＰはＳＰだけで番号を付している。

3．本書に使用した遺構図作成は、下村　智、荒牧宏行、大橋隆司、池田裕司が行なった。現場写真は、下村、荒牧があたった。遺物実測図は、下村、荒牧、大橋、池田、常松幹夫、上方高弘が作成した。また、整図は、下村、上方、井英明、安野　良、副田則子、鳥飼悦子、塩沢美子、伊藤美紀が行なった。遺物写真の撮影は上方高弘による。

4．本調査で出土した遺物は厖大であった。そのためできるだけ図化に努め、挿図に掲載したが、諸般の都合上個別説明が不充分になっている。機会をみて遺物観察表を作成したいと考えている。

5．本書で用いる遺構の方位は全て磁北である。また、レベル高は那珂小学校設置のＨ＝7.9112ｍ（国土地理院高）から移動した。

6．那珂遺跡群第20次調査に係る遺物・記録類（図面、写真、スライドなど）は、報告終了後福岡市埋蔵文化財センターで収蔵・管理される予定である。

7．本書の執筆・編集は、荒牧と協議のうえ下村が行なった。

<table>
<tr><td>遺跡調査番号</td><td colspan="2">8906</td><td>遺跡略号</td><td colspan="3">NAK20</td></tr>
<tr><td>調査地地籍</td><td colspan="3">博多区那珂二丁目257 外</td><td colspan="2">分布地図番号</td><td>038-A-3</td></tr>
<tr><td>開発面積</td><td>1406㎡</td><td>調査対象面積</td><td>800 ㎡</td><td colspan="2">調査実施面積</td><td>900 ㎡</td></tr>
<tr><td>調査期間</td><td colspan="3">1989年４月17日～1989年６月30日
1990年２月22日～1990年３月３日</td><td colspan="2">事前審査番号</td><td>63-2-395</td></tr>
</table>

本　文　目　次

序

I　はじめに ……1

1　調査に至る経過 ……1

2　調査の組織 ……1

II　遺跡の立地と環境 ……3

III　調査の記録 ……6

1　調査の経過と調査概要 ……6

2　竪穴住居址 ……8

3　掘立柱建物 ……17

4　土坑 ……29

5　井戸 ……31

6　溝 ……45

7　その他の遺構 ……78

IV　おわりに ……79

挿　図　目　次

Fig. 1　那珂遺跡群位置図(1/25,000) …2
Fig. 2　調査地点周辺測量図(1/1,000) …4
Fig. 3　調査区位置図 (1/400) ……5
Fig. 4　那珂遺跡第20次調査第Ⅰ区遺構配置図(1/200) ……折込
Fig. 5　那珂遺跡第20次調査第Ⅱ区遺構配置図(1/200) ……7
Fig. 6　SC04遺構実測図 (1/60)……8
Fig. 7　SC04出土遺物実測図(1/4, 1/2)…9
Fig. 8　SC05遺構実測図 (1/60)……9
Fig. 9　SC14遺構実測図 (1/60) ……10
Fig. 10　SC15出土遺物実測図 (1/4)……10
Fig. 11　SC15遺構実測図 (1/60) ……11
Fig. 12　SC16遺構実測図 (1/60) ……12
Fig. 13　SC28遺構実測図 (1/60) ……13
Fig. 14　SC28出土遺物実測図(1/4、1/2)…13
Fig. 15　SC29遺構実測図 (1/60) ……14
Fig. 16　SC29出土遺物実測図 (1/4)……14
Fig. 17　SC32遺構実測図 (1/60) ……15
Fig. 18　SC40遺構実測図 (1/60) ……16
Fig. 19　SB20遺構実測図 (1/60) ……17
Fig. 20　SB21遺構実測図 (1/60) ……19
Fig. 21　SB22遺構実測図 (1/60)……折込
Fig. 22　SB23遺構実測図 (1/60) ……21
Fig. 23　SB33遺構実測図 (1/60) ……22
Fig. 24　SB34遺構実測図 (1/60) ……23
Fig. 25　SB42遺構実測図 (1/60) ……24
Fig. 26　SB43遺構実測図 (1/60) ……25
Fig. 27　SB44遺構実測図 (1/60) ……26
Fig. 28　SB45遺構実測図 (1/60) ……27
Fig. 29　SB46遺構実測図 (1/60) ……28
Fig. 30　SB47遺構実測図 (1/60)……折込
Fig. 31　SK38遺構実測図 (1/40) ……29
Fig. 32　SK38遺物実測図 (1/4)……29
Fig. 33　SK06・07・17・19・24・25・30・36遺構実測図 (1/40) ……30
Fig. 34　SE03遺構実測図 (1/60) ……31
Fig. 35　SE03中層・下層出土遺物実測図 (1/4、1/2) ……32
Fig. 36　SE03下層出土遺物実測図 (1/4)…33
Fig. 37　SE08遺構実測図 (1/60) ……34
Fig. 38　SE08上層出土遺物実測図 (1/4)…35
Fig. 39　SE08下層出土遺物実測図 (1/4)…36
Fig. 40　SE08下層出土遺物実測図(1/4、1/2)…37
Fig. 41　SE26遺構実測図 (1/60) ……38
Fig. 42　SE26出土遺物実測図(1/4 、1/2)…38
Fig. 43　SE27遺構実測図 (1/60) ……39
Fig. 44　SE27出土遺物実測図 (1/3、1/4)…40
Fig. 45　SE35遺構実測図 (1/60) ……41
Fig. 46　SE37遺構実測図 (1/60) ……41

Fig. 47　SE37出土遺物実測図(1/4 、1/2)…42
Fig. 48　SE102 遺構実測図 (1/60) ……43
Fig. 49　SE103 遺構実測図 (1/60) ……43
Fig. 50　SE102 出土遺物実測図 (1/4)　…44
Fig. 51　SE102・103 出土遺物実測図
(1/4 、1/2)　……45
Fig. 52　SD01西側土層断面実測図(1/40)…46
Fig. 53　SD01中央部土層断面実測図
(1/40) ……46
Fig. 54　SD01遺物出土状況実測図
(1/60) ……47
Fig. 55　SD01出土遺物実測図１ (石器)
(1/2)……49
Fig. 56　SD01出土遺物実測図２ (石器)
(1/1、1/2) ……50
Fig. 57　SD01出土遺物実測図３ (石器)
(1/2)……51
Fig. 58　SE01出土遺物実測図４(石器・石製品)
(1/1、1/2) ……52
Fig. 59　SD01出土遺物実測図５
(石器・石製品・土製品・鉄器)(1/2)…53
Fig. 60　SD01出土遺物実測図６
(土製品) (1/2) ……54
Fig. 61　SD01・ピット群出土遺物実測図
(石器・石製品・青銅器)
(1/1・1/2)……55
Fig. 62　SD01出土遺物実測図 (1/4、1/6)…58
Fig. 63　SD01出土遺物実測図 (1/4、1/6)…59
Fig. 64　SD01出土遺物実測図 (1/6、1/4)…60
Fig. 65　SD01出土遺物実測図 (1/4)……61
Fig. 66　SD01出土遺物実測図 (1/4、1/6)…62
Fig. 67　SD01出土遺物実測図 (1/4)……63
Fig. 68　SD01出土遺物実測図 (1/4)……64
Fig. 69　SD01出土遺物実測図
(1/6、1/4、1/2)……65
Fig. 70　SD01出土遺物実測図
(1/2、1/4、1/6)……66
Fig. 71　SD01出土遺物実測図 (1/4)……67
Fig. 72　SD01出土遺物実測図 (1/4、1/6)…68
Fig. 73　SD01出土遺物実測図 (1/4、1/6)…69
Fig. 74　SD01出土遺物実測図 (1/4、1/6)…70
Fig. 75　SD01出土遺物実測図 (1/2、1/4)…71
Fig. 76　SD01出土遺物実測図 (1/4、1/6)…72
Fig. 77　SD01出土遺物実測図 (1/4、1/6)…73
Fig. 78　SD01出土遺物実測図 (1/2, 1/4)…74
Fig. 79　SD02出土遺物実測図 (1/4)……75
Fig. 80　SX13遺構実測図 (1/60) ……76
Fig. 81　SX13出土遺物実測図 (1/4, 1/2)…77

図 版 目 次

PL. 1　(1) 調査区から北方那珂八幡古墳を望む
　(2) 調査区西方油山を望む
PL. 2　調査区全景第Ⅰ区（東から）
PL. 3　(1) 調査区全景第Ⅰ区（南から）
　(2) 調査区全景第Ⅱ区（西から）
PL. 4　(1) SC04（左）・SC14（右）出土状況（北から）
　(2) SC05出土状況（南から）
PL. 5　(1) SC15出土状況（北から）
　(2) SC28出土状況（西から）
PL. 6　(1) SD09～12・SX13出土状況（西から）
　(2) SB20出土状況（南から）
PL. 7　(1) SB21出土状況（北から）
　(2) SB22・23出土状況（北から）
PL. 8　(1) SB34・SC29・32出土状況（西から）
　(2) SB33出土状況（西から）
PL. 9　(1) SB42・43出土状況（東から）
　(2) SK38出土状況（北から）
PL. 10　(1) SE04出土状況（東から）
　(2) SE08出土状況（東から）
PL. 11　(1) SE26出土状況（南から）
　(2) SE27出土状況（南から）
PL. 12　(1) SE35出土状況（南から）
　(2) SE37出土状況（北から）
PL. 13　(1) SE102 出土状況（西から）
　(2) SE103 出土状況（東から）
PL. 14　SD01出土状況（西から）
PL. 15　(1) SD01中央部土層断面（東から）
　(2) SD01西側土層断面（東から）
PL. 16　(1) SD01銅戈鋳型他遺物出土状況（東から）
　(2) SD01中広銅戈鋳型出土状況（東から）
PL. 17　SD01青銅鋤先出土状況（北から）
　(2) SD01石鎌出土状況（北から）
PL. 18　(1) SD01西側遺物出土状況（北から）
　(2) SD01東側遺物出土状況（北から）
PL. 19　(1) SD01東側遺物出土状況（西から）
　(2) SD01東側遺物出土状況（北から）

ＰＬ．20　（１）ＳＤ01東側筒形器台出土状況（西から）
（２）ＳＤ01東側筒形器台出土状況（北から）
ＰＬ．21　（１）ＳＤ01中央部遺物出土状況（西から）
（２）ＳＤ01中央部遺物出土状況（北東から）
ＰＬ．22　（１）ＳＤ01中央部遺物出土状況（西から）
（２）ＳＤ01中央部遺物出土状況（北東から）
ＰＬ．23　（１）ＳＤ01中央部遺物出土状況（北東から）
（２）ＳＤ01中央部遺物出土状況（西から）
ＰＬ．24　（１）ＳＤ01中央部西側仕切溝出土状況（北から）
（２）ＳＤ01中央部東側仕切溝出土状況（北から）
ＰＬ．25　ＳＤ09～12出土状況（南から）
ＰＬ．26　（１）ＳＸ13出土状況（西から）
（２）ＳＸ13遺物出土状況（東から）
ＰＬ．27　出土遺物（１）
ＰＬ．28　出土遺物（２）
ＰＬ．29　出土遺物（３）
ＰＬ．30　出土遺物（４）
ＰＬ．31　出土遺物（５）
ＰＬ．32　出土遺物（６）
ＰＬ．33　出土遺物（７）
ＰＬ．34　出土遺物（８）
ＰＬ．35　出土遺物（９）
ＰＬ．36　出土遺物（10）
ＰＬ．37　出土遺物（11）
ＰＬ．38　出土遺物（12）
ＰＬ．39　出土遺物（13）
ＰＬ．40　出土遺物（14）
ＰＬ．41　出土遺物（15）
ＰＬ．42　出土遺物（16）
ＰＬ．43　出土遺物（17）
ＰＬ．44　出土遺物（18）
ＰＬ．45　出土遺物（19）
ＰＬ．46　出土遺物（20）
ＰＬ．47　出土遺物（21）
ＰＬ．48　出土遺物（22）
ＰＬ．49　出土遺物（23）
ＰＬ．50　出土遺物（24）

Ⅰ　は　じ　め　に

1　調査に至る経過

1988（昭和63）年10月29日付で、地権者広田　満氏から福岡市博多区那珂二丁目257・259・260地内における共同住宅建設に伴う埋蔵文化財事前審査願が、市教育委員会埋蔵文化財課に提出された。埋蔵文化財課では、建設予定地が那珂遺跡群の範囲内であり、同遺跡群のこれまでの調査では弥生時代から中世にわたる良好な遺構・遺物が発見されていることなどから、事前に試掘調査が必要であると判断した。同年11月１日現地踏査を行ない、関係者と協議のうえ同年11月10日に試掘調査を実施することになった。試掘調査は、予定建物（500㎡）の中央部にトレンチを東西方向に入れて実施した。試掘調査の結果、地表下－0.4ｍで遺物包含層が検出され、－0.7ｍで黄褐色の鳥栖ロームが基盤となって遺構が検出された。検出遺構は、弥生後期の溝状遺構とそれに掘り込まれた柱穴群である。出土遺物は、弥生中期から古墳時代、古代に及んでいた。そこで、試掘結果をもとに関係者と遺跡の取り扱いについて協議を重ね、建物部分で止む無く破壊される遺構については、事前に記録保存のための発掘調査を実施することになった。1989（平成１）年４月11日現地で関係者と最終的な打ち合わせを行ない、４月17日から予定建物部分500㎡について発掘調査を開始した。ところが、表土掘削にかかったところ、表土下－0.2ｍ前後で遺構が出土し、浅い位置で遺構群の広がりが確認できた。今後の工事工程では建物以外でも－0.7ｍの掘削が予定されている部分があり、最終的にはその部分も含めて調査を行うことになった。調査は、広田　満氏の受託調査として実施した。

2　調査の組織

調査委託：　広田　満

調査主体：福岡市教育委員会　教育長　佐藤善郎（前任）　井口雄哉

調査総括：埋蔵文化財課長　柳田純孝（前任）　折尾　学

埋蔵文化財第２係長　柳沢一男（前任）　塩屋勝利

調査庶務：埋蔵文化財第１係長　折尾　学（前任）　飛高憲雄

埋蔵文化財第１係　松延好文（前任）　吉田麻由美

事前審査：主任文化財主事　横山邦継　文化財主事　常松幹雄

調査担当：常松幹雄（試掘調査）　埋蔵文化財第２係　下村　智　荒牧宏行

調査補助：大橋隆司（現佐賀県牛津町教育委員会）　池田裕司（現本市埋蔵文化財課）

上方高弘

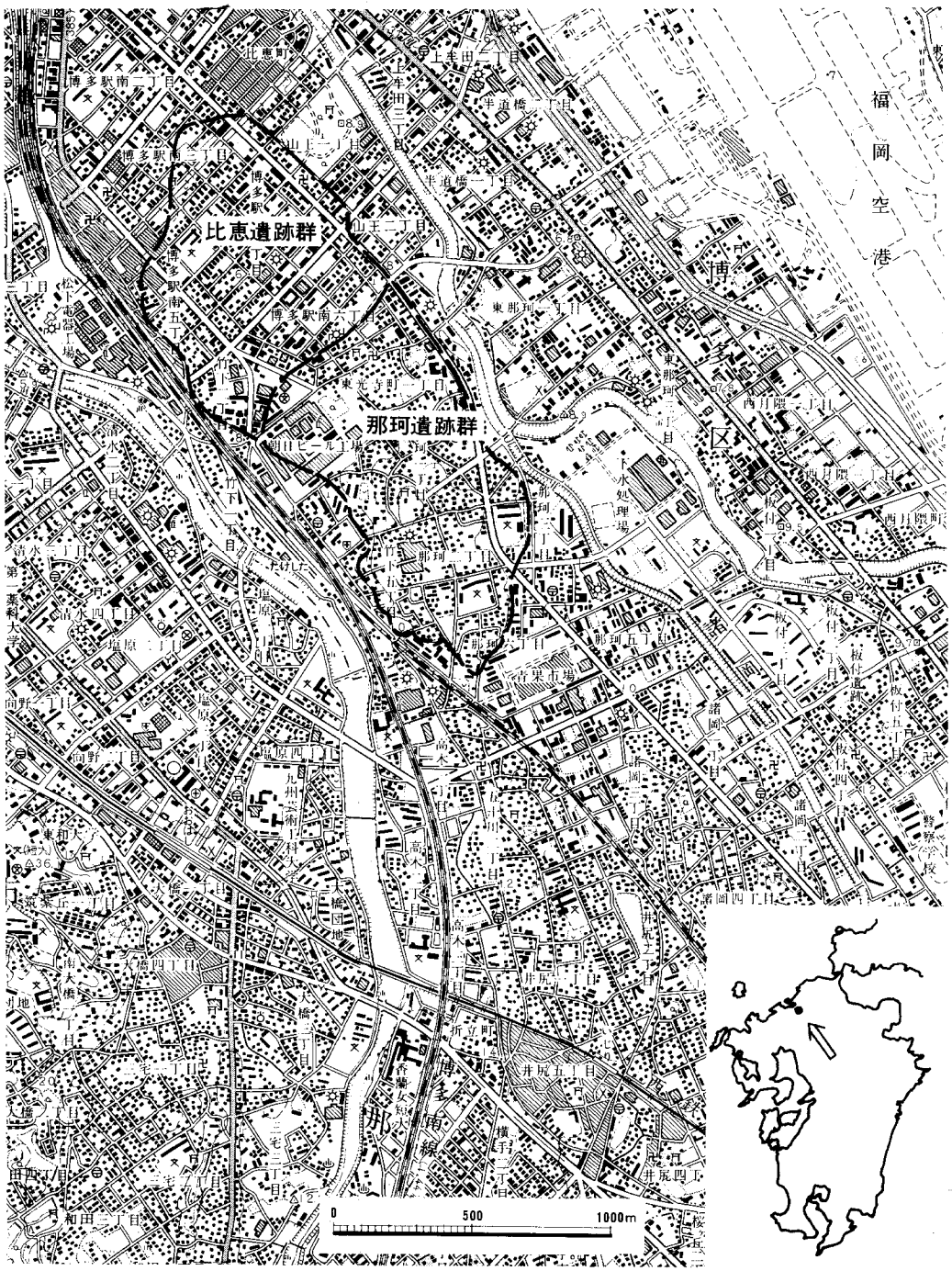


Fig. 1　那珂遺跡群位置図（1/25,000）

調査作業：出雲義往、上野龍夫、権藤辰二、大長正弘、徳永静雄、松永武士、山部増人、高田茂、日高伊勢雄、楢崎富造、波佐間英彦、梶塚辰夫、山崎一夫、石松　晋、仲田忠孝、高砂章二、鴨川　整、江嶋光子、奥田弘子、久良木シヅエ、舎川キチエ、富田輝子、光安利津子、安高久子、山口みえ子、山村スミ子、広田光子、稲田恵美子、嶋ヒサ子、山本后代、松浦ウメノ、吉住クニ子、二牟禮香代子、山下智子、楢崎泰子、梶塚トキワ、菅野シゲ、西野悦子、松井良子、長浦芙美子、川上すぎえ、村田トモヨ、野中雅子他

整理作業：上方高弘、安野　良、松尾絹世、副田則子、竹原りえ、吉村智子、長浦芙美子、室以佐子、山本正子、鳥飼悦子、宮原つや子、塩沢美子他

Ⅱ　遺跡の立地と環境

那珂遺跡群第20次調査地点は、御笠川と那珂川にはさまれた中位段丘上のほぼ中央部に位置し、那珂遺跡群のやや南側にあたる。標高は9.8m前後である。現況は宅地と畑地とからなっており平坦な地形が広がっている。調査地点の東側は、平坦な台地部が続き、やがて標高を減じて低地部へと移行する。低地部には那珂深ヲサ遺跡などの低湿地遺跡が広がっている。西側は台地部の中心になり、西方200mには第23次調査地点がある。第23次調査地点からさらに西側は台地部が収束し、那珂川の氾濫原に至る。南側は500m程度台地部が続き、それ以南は低い地形となる。北側には中心的な台地部が延び、北方200m地点には昭和60年度の調査で三角縁神獣鏡が出土した那珂八幡古墳がある。さらに、北方には剣塚古墳がのる平坦な台地部が広がるが、那珂八幡古墳ののる台地との間には狭い低地部があり、水路が東から西に流れている。この北側の台地部には、第８次調査地点やアサヒビール工場内の各調査地点が広がっている。

那珂遺跡群の位置する那珂台地は、福岡平野のほぼ中央部を東南から北西に向って広がっており、南は春日丘陵に連なり、北方は標高５～６ｍの比恵台地部へと続く。これらの台地上には、後期旧石器時代から中世にかけての遺跡が連綿とみられ、特に、弥生時代から古代にかけての遺構密度が高い。

近年、那珂遺跡群の調査が増加し、1991（平成４）年度までに41次の調査が実施されている。200m西方の第23次調査では、第20次調査の延長と考えられる断面逆台形の環濠が出土し、５群以上に分かれる祭祀土器群がまとまって出土している。丹塗りの筒形器台を中心に、広口・無頸・短頸・長頸・直口・小形・袋状口縁・瓢形の壺、鋤先状・くの字状口縁の甕、鉢、蓋、高坏、器台、支脚、ミニチュア土器、土製品などが組み合わさる。多くは丹塗りが施され、これらの祭祀土器は、甕棺墓地にみられる墓地祭祀の土器の組成とよく類似している。また、環濠の中から中細銅戈の鋳型が３点出土している。第21次調査では、甕棺墓地群が検出され、甕

Fig. 2　調査地点周辺測量図（1/1,000）

棺墓を方形に区画したと考える溝から、墓地祭祀に使用されたとみられる筒形器台、各種の甕、壺、高坏などが群を成して出土している。遺物の殆どは丹塗り磨研の優美なものである。

古墳時代初頭の土器群も注意しておかなければならない。各次の調査で、住居址や井戸から庄内式土器、布留式土器がまとまって出土し、この時期の集落が広がっていたことを物語っている。また、山陰系の土器群も流入している。三角縁神獣鏡を副葬した古式の那珂八幡古墳の成立基盤を考える上での重要な要素であろう。

第23次調査では、7世紀前半代の梁行総長4.8m、桁行総長6.3mの3間×4間をとる掘立柱建物が3棟並んで検出されたことは注目される。これらは柱筋が通り間隔も狭いことから、桁を繋げたひとつの建物（倉庫）と考えられる。掘立柱建物は瓦葺きではないが、建物に関係する溝から牛頸窯跡群神ノ前窯跡出土と同じ軒丸瓦・平瓦が出土している。また、包含層から月ノ浦窯跡出土と同じタイプの軒丸瓦も出土している。神ノ前タイプの初期瓦は第22次調査でまとまって出土している。最近、7世紀前半代に属する初期瓦と7世紀後半代に属する古瓦が那珂遺跡の各地点で出土しはじめており、この時期に一部瓦を使用した建物があった可能性がある。牛頸の窯で焼かれた初期瓦の供給先のひとつは那珂台地であったことが判明した。

また、古墳時代後期から終末にかけての時期に3間×4間の総柱建物が複数並んで発見され

例が、比恵遺跡から那珂遺跡にかけて増加している。一般集落にみられる倉庫群とは異なり、公的な性格を持つ倉庫群の可能性がある。

以上のことから、那珂遺跡は、各時期を通じて主要な遺構群・遺物群がまとまって出土しており、福岡平野の中心的な遺跡のひとつであると考えることができる。

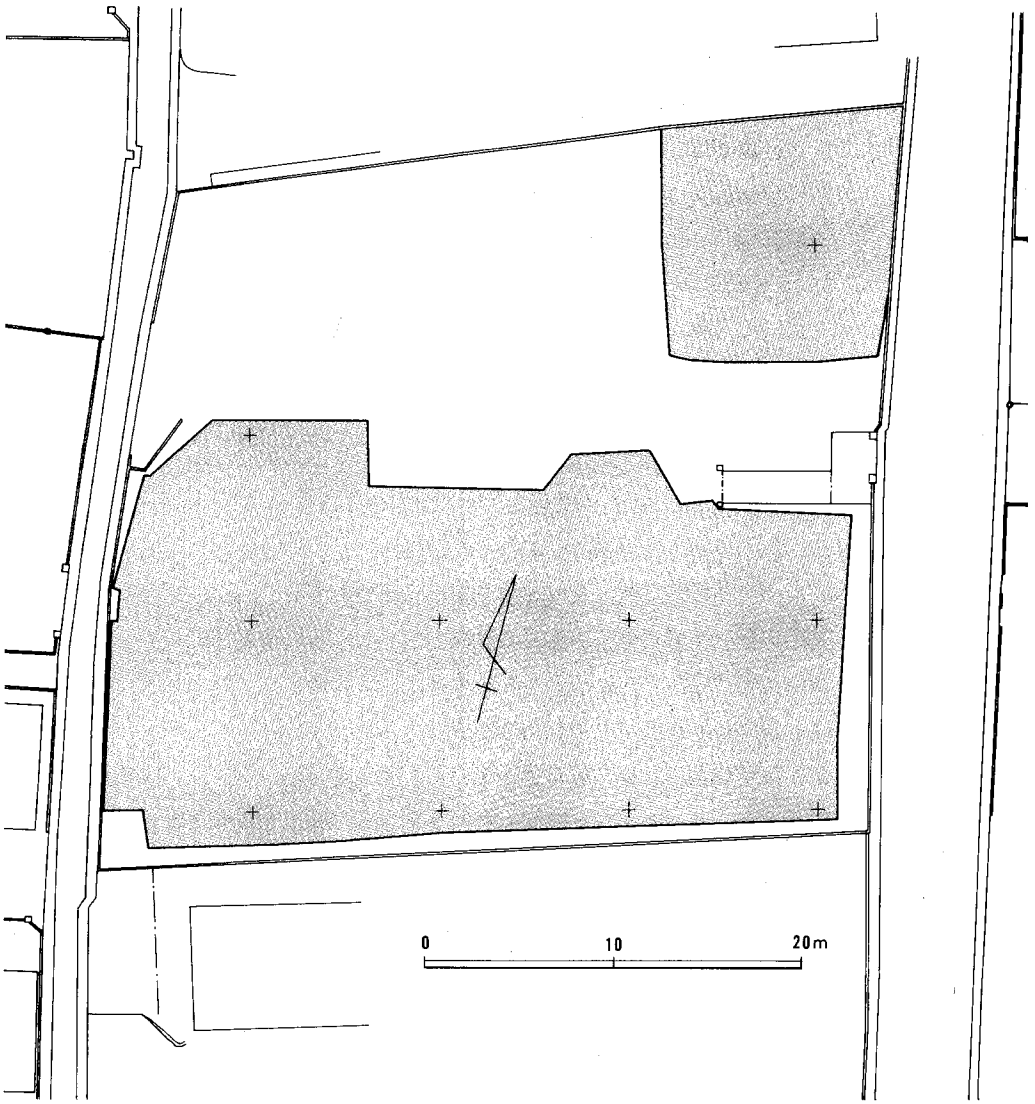


Fig. 3　調査区位置図（1/400）

Ⅲ 調 査 の 記 録

1 調査の経過と調査概要

発掘調査は4月17日から着手し、先ず、重機による表土剝ぎから開始した。遺構面までの深さは、浅い所で10cm強しかなく、他は20～30cm前後で遺構面に到達する。基盤層は黄褐色の鳥栖ロームで、この層に遺構が掘り込まれている。遺構覆土は、時期によって色調が異なっている。黒色土を呈するものは弥生土器が出土し、茶味を帯びたやや黒っぽい土壌は須恵器や土師器を出土する古墳時代、淡茶褐色から淡黄褐色の覆土は青磁・白磁などが出土する中世期のもの、と大きく3つに分けられる。覆土は遺構確認の際かなり注意した。4月25日頃から遺構確認作業にはいり、4月27日から遺構の掘り下げにかかった。溝状遺構、ピット群、竪穴住居址と調査を進めていった。SD01の大溝から5月2日銅戈鋳型出土、5月10日青銅鋤先が出土して俄かに色めき立った。この溝からの遺物量は非常に多く、1日にパンケース30～40個分にもなった。この溝はやがて断面逆台形を呈する環濠の一部であることが判明した。

調査は、当初予定建物500㎡を対象にして作業を進めていったが、遺構が浅い位置から出土するということで、建物以外の工事計画について見直しが必要になってきた。試掘調査は、地表下－0.7mで遺構面となっていたので、協議は全てこの基準で進められてきた。しかし、試掘箇所は調査の進展に伴い環濠の肩の部分であることが分かり、その部分は他の遺構面よりもかなり深くなっていることが判明した。工事計画では建物以外でも0.7m程度の地下げが予定されていたので、このままの計画で実施されると遺構が全部削平されてしまう結果になる。そこで、地権者、工事関係者、埋蔵文化財担当の3者で遺跡の取り扱いについて協議を重ね、5月11日に、①調査区南側は計画変更ができないので今回の調査に含めること。②北側の駐車場部分はできるだけ現状保存を前提とし、前面道路との比高差で乗り込みを作らなければならない部分は調査の対象にすること、の2点を確認した。5月15日再度3者で協議を行ない、①北側駐車場部分は計画高を0.5m上げて削平を0.2mにとどめ、遺構の保存を計る。②駐車場乗り込み部分150㎡については工事の進渉をみながら来年2月上旬頃調査を行う、ということで合意に達し、さらに5月23日の協議では、①南側拡張調査面積を250㎡とし、②調査期間を6月20日までとした。この当初調査予定の500㎡と拡張調査予定の250㎡を合わせて750㎡とし、この調査区を第Ⅰ区、駐車場乗り入れ部分の150㎡の調査区を第Ⅱ区とすることにした。

第Ⅰ区の調査は協議期間中も続行し、溝、井戸、住居址などの掘り下げを行なった。5月12日から15日にかけては、環濠東側の中層中に弥生中期後半の土器群がまとまって出土し、丹塗りの祭祀土器が多数含まれているのが発見された。5月13日には調査区東側で検出された溝か

Fig. 4　那珂遺跡第20次調査第Ⅰ区遺構配置図（1/200）

ら高麗青磁が出土し、5月16日にはSE03から弥生後期初めの土器がまとまって出土した。SE08からは−2.5m地点で奈良時代の遺物がまとまって出土しはじめ、5月20日井戸底からほぼ完形の須恵器広口壺が単独に出土した。

5月30日からは、南側拡張部分の遺構確認を開始した。竪穴住居址、土坑、掘立柱建物群が確認でき、掘り下げに着手した。6月1日環濠東端部から筒形器台が単独に1個体出土。6月にはいり、環濠中央部に遺物の集中する地点が確認され、掘り下げを精力的に進めた。筒形器台を含む弥生中期後半代の土器群が100個体以上押し並べたような状態で出土した。破片として取り上げた分も含めると200個体以上あったのではなかろうか。6月後半、遺構の個別写真撮影、遺構実測を並行して行ない、6月22日全景写真を撮影した。6月23日午前中SE37の調査を終了し、Ⅰ区の全調査工程を完了した。第Ⅰ区の調査期間中に那珂小学校6年生4クラス160名の見学とNHK教育『土曜倶楽部』の撮影もこの調査現場で行なった。

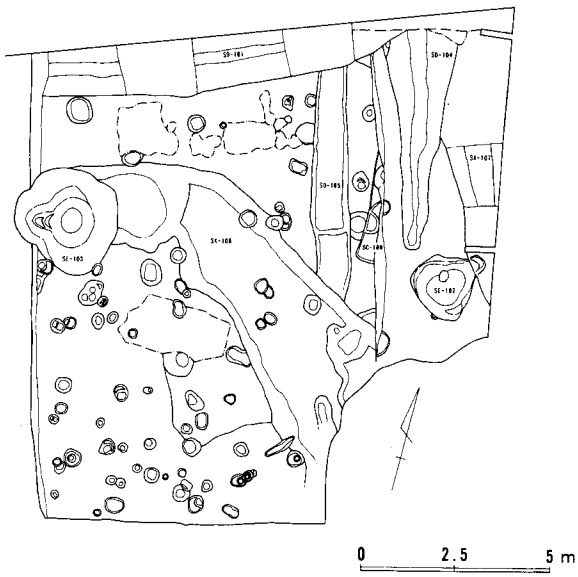


Fig. 5　那珂遺跡第20次調査第Ⅱ区遺構配置図（1 200）

第Ⅱ区の調査は、1990年2月22日から着手し3月3日で終了した。井戸、溝、ピット群などが出土し、SE102の底からは古式土師器の甕が出土している。この第Ⅱ区の調査期間中は雨が多く、殆ど全日雨かくもりの天候であったので、上にシートを張り全天候型で調査作業を続けた。

第Ⅰ区、第Ⅱ区の調査で検出した遺構は、竪穴住居址13軒、掘立柱建物12棟、土坑9基、井戸8基、溝10条、その他の遺構が3基の計55基である。ピットは竪穴住居址、掘立柱建物のも含めて724穴あり、遺物が出土したピットはそのうち437穴であった。

遺構の分布は、調査区全体に万遍なく見られるが、弥生時代の遺構は第Ⅰ区中央部やや南寄りを東西方向に走る環濠と、この環濠より北側に分布する掘立柱建物や井戸などである。古墳時代の竪穴住居址は全体に広がっている。古代の溝、掘立柱建物、井戸は磁北をとるSD02に直交するように軸を揃えて東側に分布している。中世のピットや井戸は中央部に多く、V字溝（SD09）や巨大な竪穴状遺構（SX13）は、第Ⅰ区東側と第Ⅱ区に分布している。

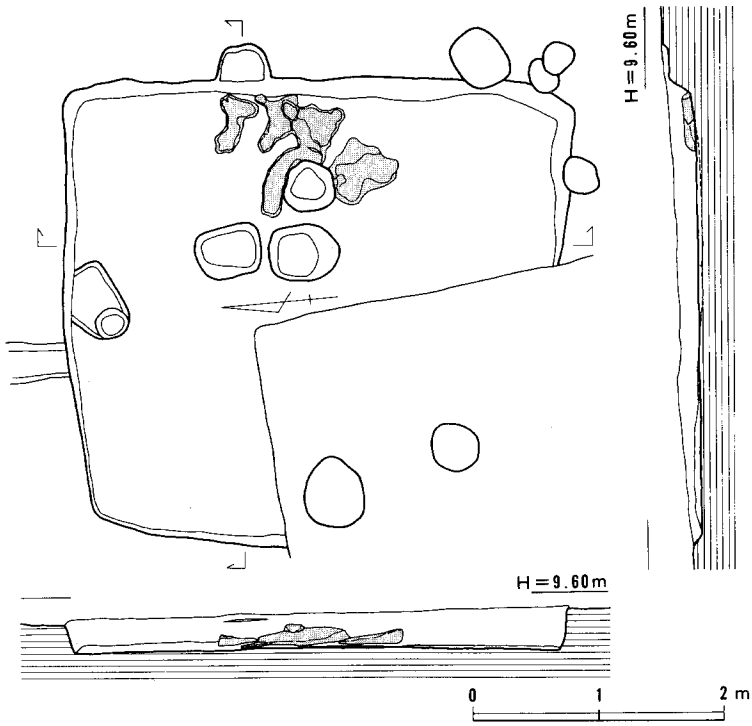


Fig. 6　ＳＣ04遺構実測図（1/60）

2　竪穴住居址

SC04（Fig. 6・7、PL. 4・27）　調査区西端部で検出したやや小型の竪穴住居址である。弥生後期のSE03を切り、SC14に切られている。規模は南北4.0m、東西3.7mでやや南北に長い長方形を呈している。深さは33cmで、東側にカマドの崩壊した白粘土が分布している。主柱ははっきりしないが、南北に2個の柱穴があり、これらが関係するものであろうか。

Fig. 7はこの住居址から出土した遺物である。1～3は須恵器坏蓋である。1は口径11.7cm器高3.2cmで、上面2分の1にヘラケズリが施され、ヘラ記号が入れられる。2は口径12.3cm器高4.0cmで、1より器高が高く丸みを持っている。ヘラケズリは上面2分の1の範囲に施され、1と同様、横一本線に縦2本の線を加えるヘラ記号が施される。1・2とも灰黒色を呈し、胎土は精良で焼成も良い。3は口径11.9cm、器高4.4cmで、体部中央部でやや窪み器高がさら

に高くなる。回転ヘラケズリは上部２分の１に施され、上面には手ナデが加えられる。外面は淡青灰色を呈し、胎土に２～３㎜大の石英・長石砂を僅かに含む。焼成はあまり良くない。**4**は手捏ねのミニチュア土器である。口径3.5cm、胴径4.8cm、底径2.8cm、器高3.0～3.2cmを測り、胎土に２～３㎜大の石英・長石砂を多く含む。内外面とも淡茶褐色を呈し、焼成は良好である。内外面には指おさえの痕が残る。この手捏ね土器は古墳時代のものではなく、SE03との切り合い関係から、弥生後期に属するSE03の遺物が混入したものではなかろうか。SE03の上層からは他にも数点手捏ね土器が出土している。その他、図化しなかったが、SC04からは口端部が肥厚する甕口縁と須恵器Ⅳbに属する坏身の破片が出土している。坏身は小破片なので別な柱穴などからの混入品とみられる。この住居址の時期は出土遺物から６世紀後半代と考えられる。

SC05（Fig.８、PL.４）調査区西側で出土した竪穴状の遺構である。方形を呈し、東西2.5m、南北2.45m、深さ0.5mを測り、かなり小型である。底面に主柱穴は見当らず、土坑の一種であるかも知

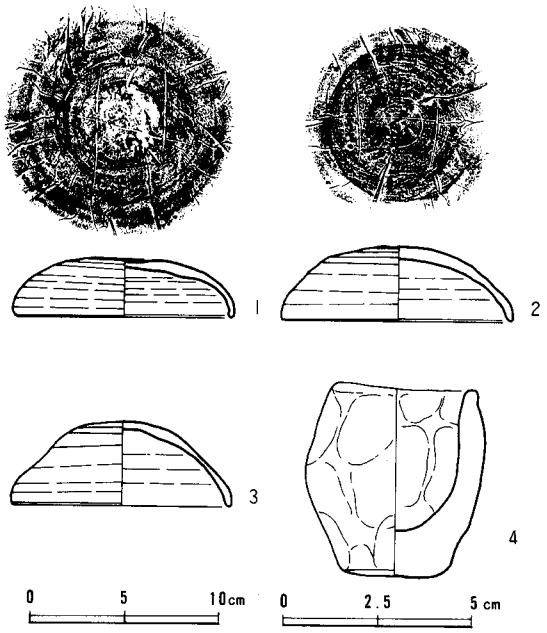


Fig. 7　ＳＣ04出土遺物実測図（１～３・1/4，４・1/2）

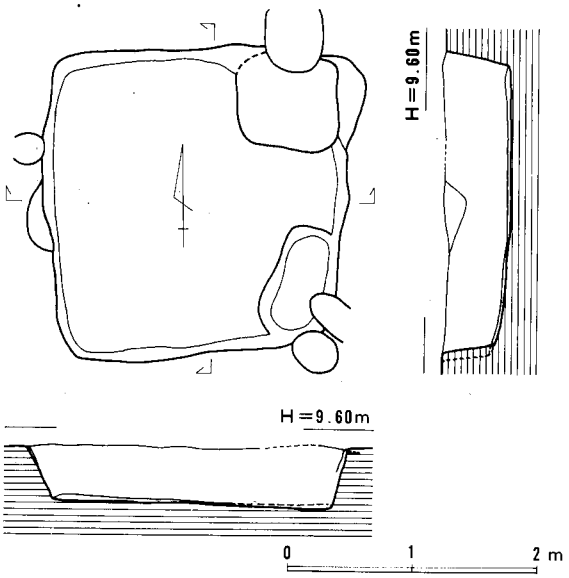


Fig. 8　ＳＣ05遺構実測図（1/60）

れない。覆土は黒色土で、弥生中期後半の土器が出土している。図化できなかったが、逆L字状口縁を持つ甕や丹塗りの壺片などがみられた。須恵器の坏蓋片が極少量出土しているがこれは柱穴の切り合いを見落したものから出土したと考えられる。SC04は、出土遺物や覆土の状況から、弥生中期後半に属し、住居址というよりも方形土坑である可能性が高い。

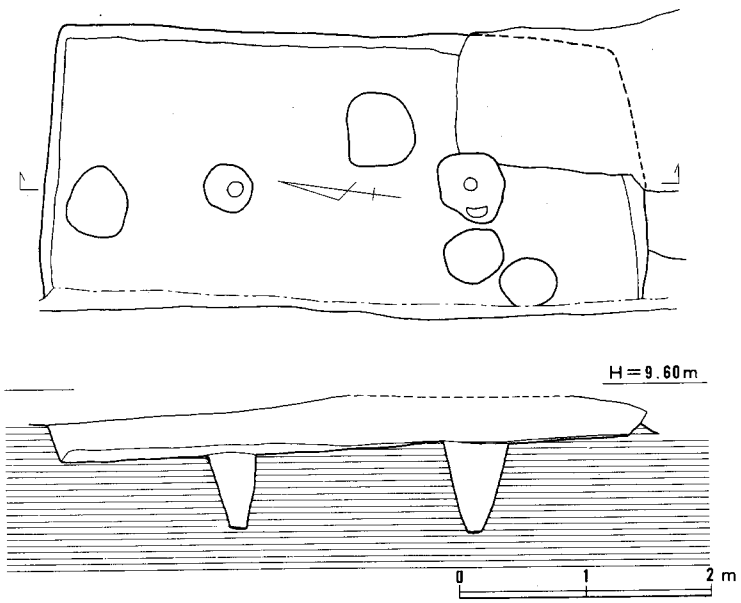


Fig. 9　ＳＣ14遺構実測図（1/60）

SC14（Fig.9、PL.4）調査区西端部で検出された方形の竪穴住居址である。SC04を切っており、南側の一部は攪乱で破壊されている。規模は南北4.8m、深さ0.4mで、東西は2.2mまで確認できるが、西側は調査区外に延びており全長が分らない。主柱は4本と考えられ、柱穴が2本分だけ確認されている。柱穴間は1.85mである。遺物の出土量は少く、須恵器の坏身、やや古い様相をもつ蓋、甕、土師器片などがある。図示できる遺物はないが、須恵器坏身から6世紀末の時期であろう。

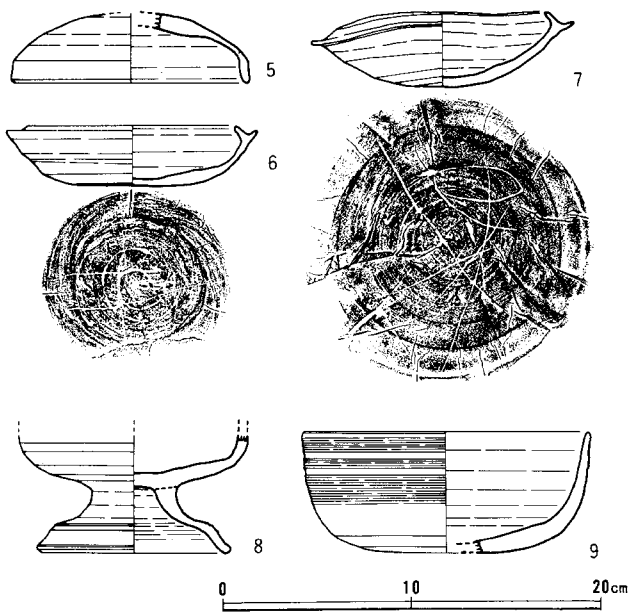


Fig. 10　ＳＣ15出土遺物実測図（1/4）

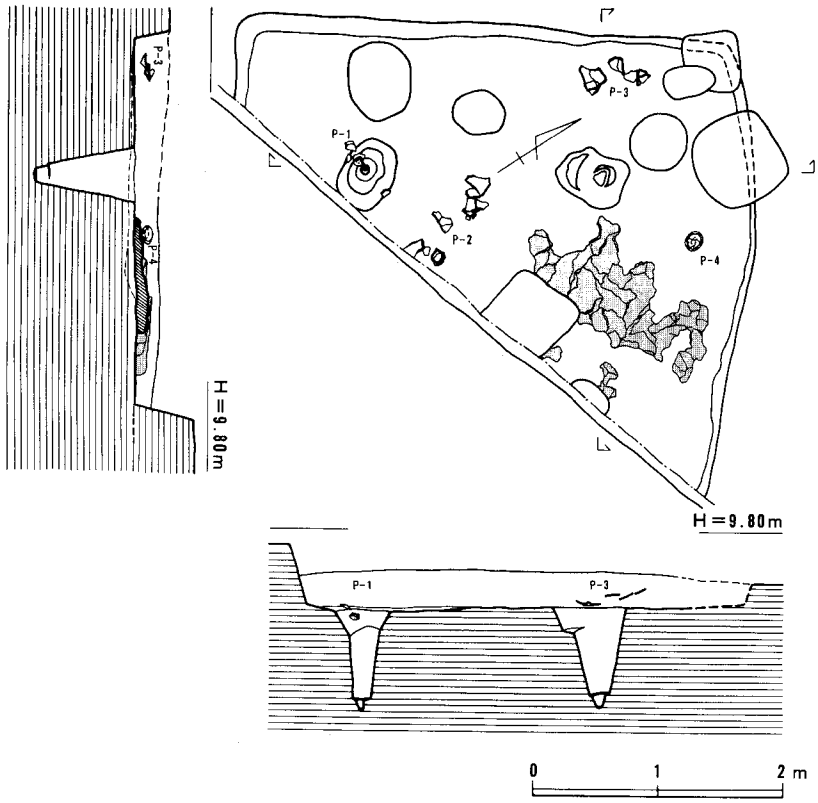


Fig. 11　ＳＣ15遺構実測図（1/60）

SC15（Fig.10・11、PL.15・27・29）　調査区南端部西寄りで出土した方形の竪穴住居址である。SK38土坑を切り、SB21・22・23掘立柱建物に切られている。規模は北東から南西方向が4.1mで、中央部で計測すればこれよりも若干大きくなるとみられる。北西から南東方向は3.6mまで確認できるが、実際は３分の１程度が南側の未調査区に伸びていて、全長は分らない。床面までの深さは30cmで、北東側にはカマドの崩壊した白粘土が分布している。主柱穴は４本で、各柱穴間の間隔は1.85mである。柱穴の深さは80cmを測り、かなり深い。

住居址からの出土遺物は、他の住居址に比べると多かった。須恵器の高坏、横瓶、甕、坏などがある。Fig.10はその中で図化した遺物群である。**5**は口径12.6cm、器高3.7cmの坏蓋である。口縁部が内弯気味に立ち上り体部へ移行する。体部の３分の２には回転ヘラケズリが施される。胎土は１mm大の石英・長石砂を僅かに含むが精良で、器表は灰黒色を呈し焼成堅緻である。**6**は口径10.9cm、受部径13.3cm、器高3.2cmの坏身である。蓋受けの立ち上りは短く内傾している。回転ヘラケズリは底部２分の１に加えられ、横２本線のヘラ記号が施される。色調は内外面とも淡い青灰色を呈し、胎土は精良で焼成堅緻である。南西部の主柱穴部から出土し

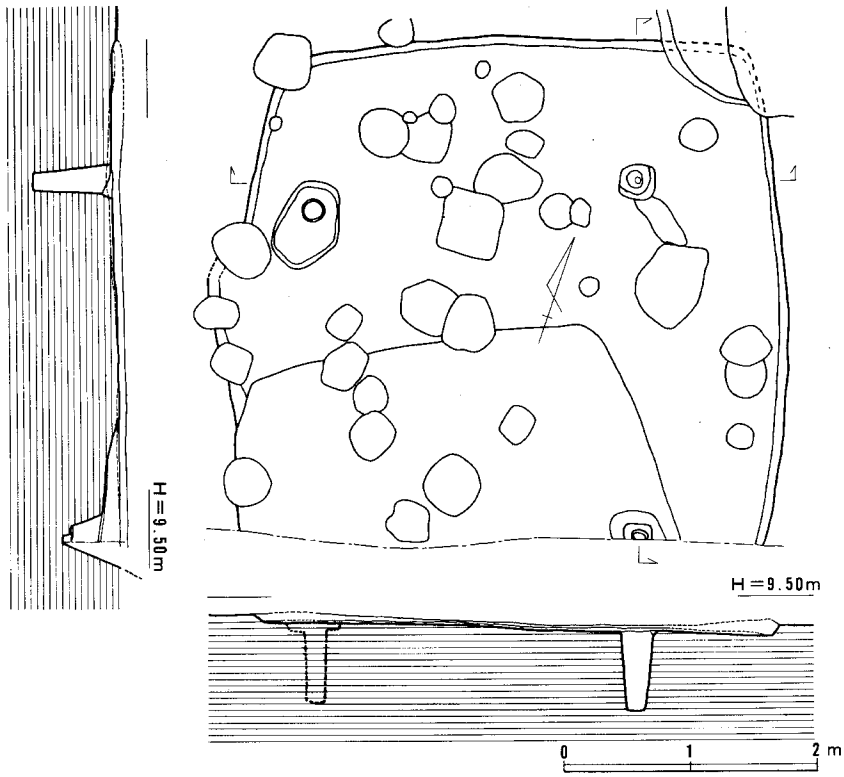


Fig. 12　ＳＣ16遺構実測図（1/60）

た。7は北東部で出土した坏身である。焼けひずみがあり歪つになっている。口径11.2cm、受部径13.8cm、器高3.1～4.0cmである。灰色を呈する。8は短脚の高坏脚部である。底径10.2cm、残高6.2cmを測り、脚部は段を持って外方へ広がる。段の部分に沈線が1条巡り、脚端部は平坦になる。器色は黒灰色を呈する。南西部の主柱穴から出土。9は口径15.2cm、器高6.4cmの坏である。体部上半には2条の沈線が巡り、カキ目調整が施される。回転ヘラケズリは底部付近に施されている。器色は暗灰色を呈する。7～9は胎土に1～3mm大の石英・長石粒を僅かに含み、焼成は堅緻である。PL.27の322は中央部で出土した横瓶である。口径11.2cmで、灰色から灰褐色を呈し、外面には平行タタキとカキ目、内面には同心円タタキ調整が施される。口縁部外面1箇所と内面2箇所には十字のヘラ記号が施されている。PL.29の323は提瓶の破片である。推定胴径23.0cmで、灰色を呈し、カキ目調整、ヘラ記号が認められる。その他、須恵Ⅲbに属する坏蓋片も出土している。SC15は出土遺物から推察すると6世紀末から7世紀初めにかけての時期であろう。

SC16（Fig.12）　調査区南端部中央に位置し、南端部は未調査区へ延びている。南側は

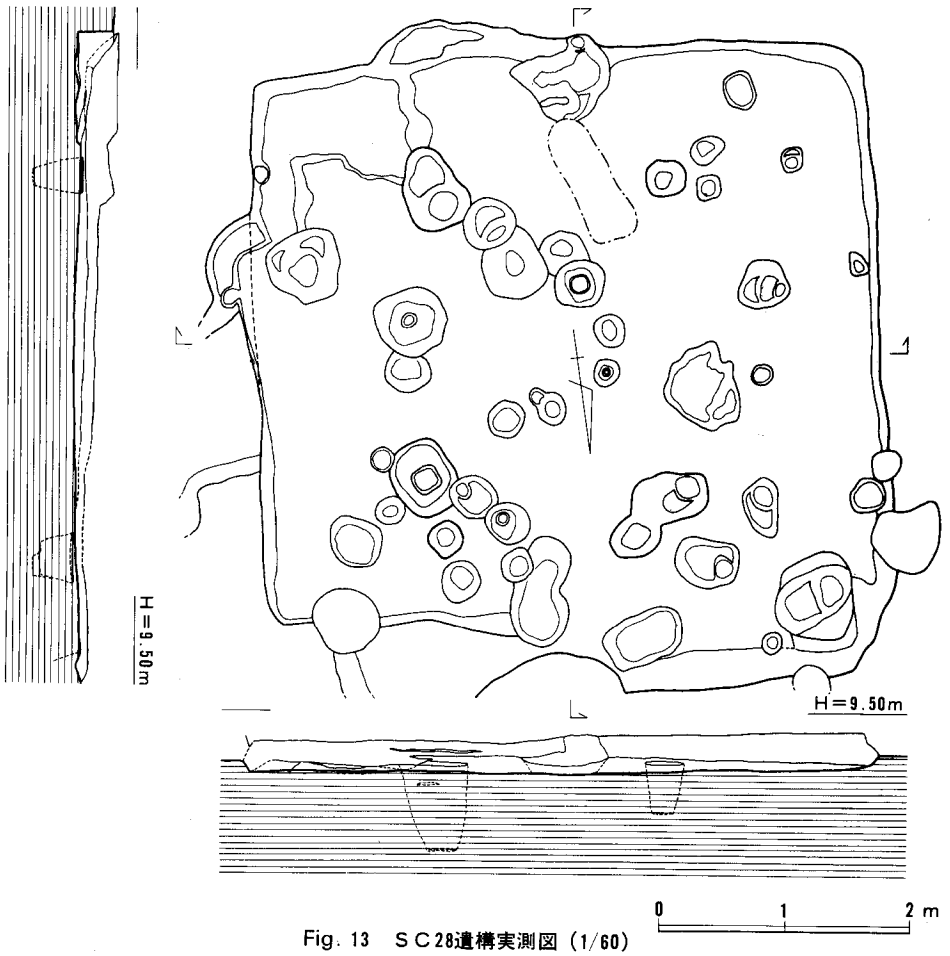


Fig. 13　ＳＣ28遺構実測図（1/60）

さらにSC40に切られている。方形を呈し、東西は4.3m、南北は４m以上あり、深さは10cmしか残存していない。残りが悪く、本来はもっと規模が大きな住居址であったと考えられる。主柱は４本で、柱間隔は東西が2.5m、南北が2.85mである。柱穴の深さは床面から－60cmである。出土遺物は遺構の残りが悪かったため殆ど検出していない。住居址の形態及び分布から６世紀後半代の時期と考えておきたい。

SC28（Fig.13・14、PL.５・27）　調査区中央部に位置する中心的な方形の竪穴住居址である。SC39・41と切り合いになり、南北5.15m、東西5.0m、深さ30cmを

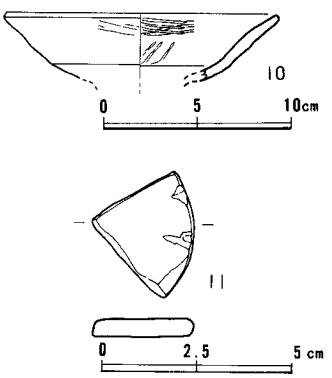


Fig. 14　ＳＣ28出土遺物実測図
（10・1/4, 11・1/2）

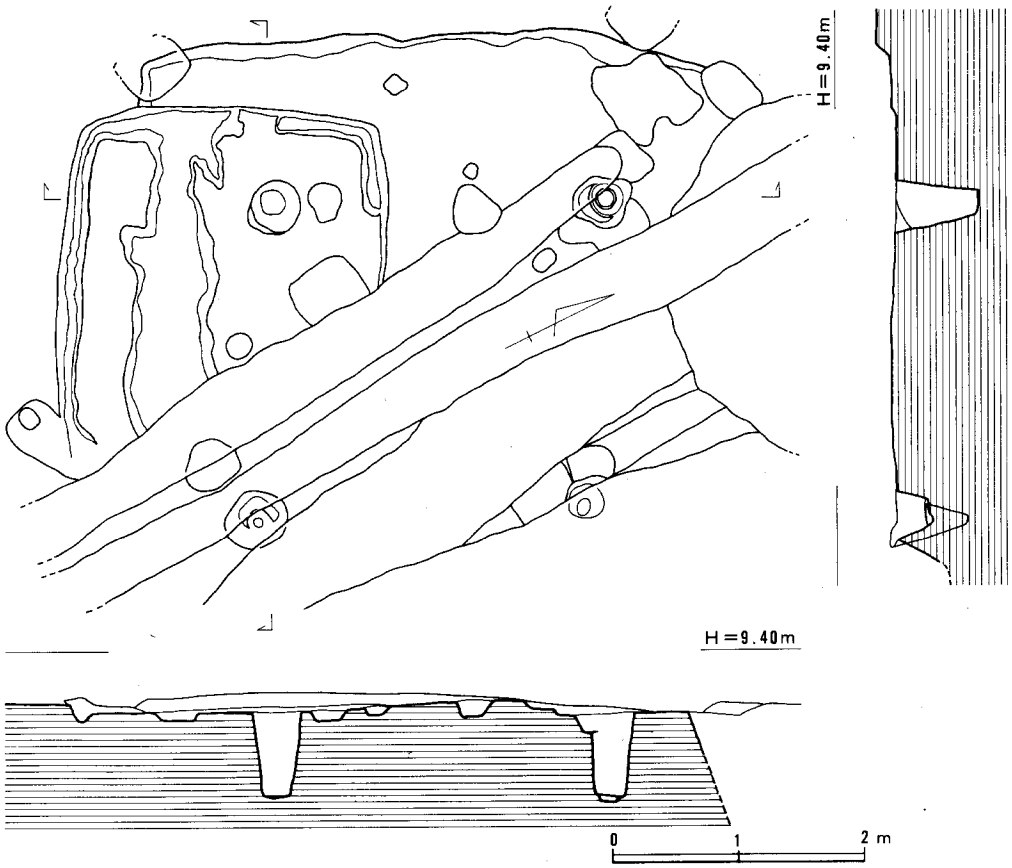


Fig. 15　ＳＣ29遺構実測図（1/60）

測る。主柱は４本で、柱間隔は東西方向が1.8～2.1m、南北方向が2.2～2.4mで少し歪つである。柱穴の深さは床面から40～65cmである。床面には深い柱穴が多く、切り合いと建替が行なわれた結果であろう。床面西側と南側には焼土が分布していた。遺物の出土量は割と多かったが、殆ど甕の破片で図化できるものは少なかった。Fig.14の10は土師器高坏である。口径14.6cmを測り、内外面にヘラによる研磨が施されている。11は石製紡錘車である。復元径は６cmよりもやや大きくなるか。最大厚0.5cmで暗灰色を呈する頁岩製である。粗雑な作りであ

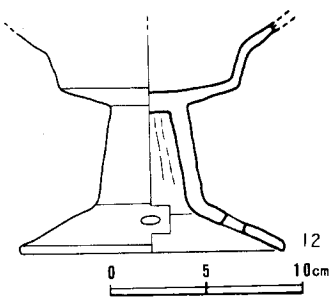


Fig. 16　ＳＣ29出土遺物実測図（1/4）

る。その他、10と同一個体になる高坏の脚、長胴で外面に平行タタキ、内面に当て具痕の残る須恵器的調整を施す土師質の甕などがある。須恵器は、坏、甕などがあり坏身の立ち上りから須恵Ⅲb～Ⅳaに属するものが多い。器高が高く体部に2条の沈線を施す坏も出土している。出土遺物からSC28は6世紀後半～末に属する時期と考えられる。

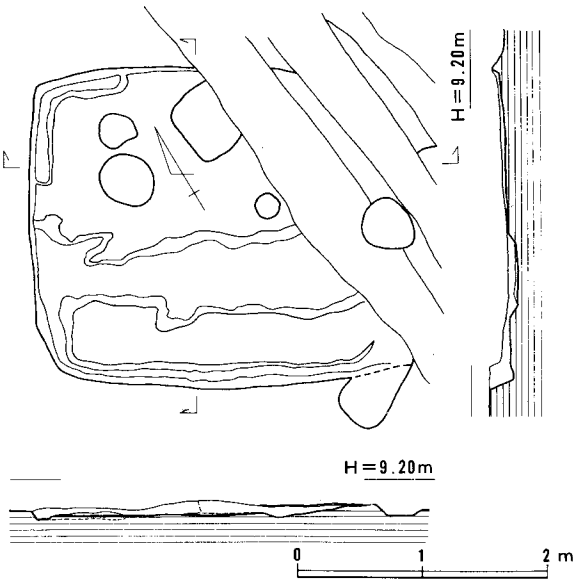


Fig. 17　ＳＣ32遺構実測図（1/60）

SC29（Fig.15・16、PL.8）

調査区東側で出土した方形の竪穴住居址で、SC32、SD10～12、SX13などに切られ残りが悪い。規模は南北5m、東西4.5m以上で、本来はもっと大きくなるとみられる。深さは深い所で15cm程度である。主柱穴は4本で、各柱間隔は2.5～2.6mである。Fig.16の**12**は古式土師器の高坏である。底径14cm、器高11.9cmを測り、淡茶褐色を呈する。胎土は精良であるが焼成は良くない。坏部には段を有し、脚部は途中で屈折して広がり、透孔を施す。その他、火を受けた土師器甕の底部が出土している。時期を決める確定的な遺物はないが、覆土、形状から古墳時代後期に属するものではなかろうか。12は古いものが混入したものとみられる。

SC31（Fig.4）　SC28の西隣りに位置し、切り合い関係は判然としないが、SC28、SC39に切られているとみられる。西側には壁溝が残り、主柱穴2個が確認できる。本来は4本柱の方形竪穴住居址であろう。主柱の柱間隔は2.5mである。遺構の残りが悪く遺物も殆ど出土していないが、須恵器の坏や甕片、土師器の甕片などが散見される。古墳時代後期に属するものであろう。

SC32（Fig.17、PL.8）　調査区東側に位置する小型の竪穴住居址である。SC29を切り、SD10・12に東側を切られている。やや長方形を呈し、東西3.0m以上、南北2.55mを測る。床面までの深さは10cm程度で、遺構の残りは良くない。壁溝まで含めると20cm程残っている。壁溝は、北西側に一部と西側から南側にかけて残存している。中央部には壁溝から繋る幅広の溝状落ち込みが認められる。主柱穴ははっきりせず、確認できなかった。出土遺物は極端に少なく、土師器片が数点出土したのみであった。出土遺物からは時期を明確にしがたい。

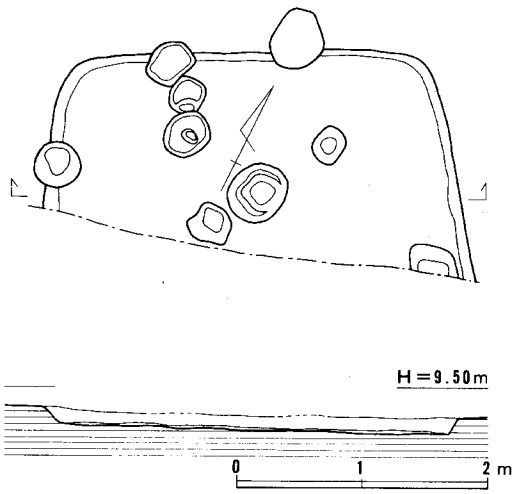


Fig. 18　ＳＣ40遺構実測図（1/60）

ＳＣ39（Fig. 4、PL. 5）　調査区中央部で出土し、大部分はＳＣ28で切られている。４本柱を持つ方形の竪穴住居址である。残りが悪く全体の様子は判然としないが、東西5.1ｍ、南北5.6ｍを測る。主柱穴は４本で柱間隔は2.3ｍ前後である。ＳＣ28との切り合いで、遺物の出土は殆どみられないが、時期的にはＳＣ28よりも古く、６世紀後半代以前と考えられる。

ＳＣ40（Fig. 18）　調査区南端中央部で検出された小型の竪穴住居址である。ＳＣ16を切り、南半分は未調査区に延びている。東西幅は3.4ｍで南北長は不明である。深さ13cmしか残存しておらず、残りは悪い。壁溝及び主柱穴は確認できていない。出土遺跡は極端に少なく、須恵器の坏底部片と土師器片が出土しているに過ぎない。切り合い関係から、竪穴住居址群では最も新しい時期に属すると考えられ、７世紀代になると推察される。

ＳＣ41（Fig. 4. PL. 5）　調査区中央部のＳＣ28と切り合いになる住居址である。ＳＣ28の調査の際、東側に遺溝の広がりが確認でき、精査したところ竪穴住居址の一部とみられたので、住居址の番号を付し掘り下げを行なった。遺溝の殆どはＳＣ28に切られており全容は分からない。古墳時代後期に属する住居址の一部であろう。

ＳＣ108（Fig. 5）　第II区東寄りで出土した方形の竪穴住居址である。東側の段落ち部分にあたるため殆ど破壊されていて、西壁の一部と南壁の一部が残存しているに過ぎない。壁高は10cm程確認している。出土遺物は無く時期を決め難いが、覆土から古墳時代に属するものと考えられる。

その他、第Ｉ区の南東端部で、溝の底から竪穴住居址の壁溝部分が鉤形に検出され、もう一軒竪穴住居址を確認した。しかし、残りが極端に悪かった上、出土遺物もなかったので、番号を付けていない。住居址の分布から考えると、大事な位置での出土である。

今回の調査で確認した竪穴住居址群は、概して壁高の残りが悪く、かなり削平されていることが判明した。調査時でも竪穴住居址かどうか判断に迷う遺溝もあり、また、既に削平されてしまった住居址も存在すると考えられる。

3　掘立柱建物

ＳＢ20（Fig. 19、PL. 6）　調査区中央部東寄りで検出した梁行２間、桁行２間の掘立柱建物である。主軸はＮ78°Ｅで略東西方向を取る。柱穴の一部は中世の溝ＳＤ18に切られ、南側の柱穴群は、弥生時代の溝ＳＤ01が埋没した後に掘り込まれている。北側の桁行総長3.45ｍ、南側の桁行総長3.2ｍ、東側の梁行総長3.1ｍ、西側は3.2ｍでややバラつきがある。柱間隔は北側桁行が東から測って1.85ｍと1.6ｍ、南側桁行が同じく東から測って1.7ｍと1.5ｍである。梁行は、東側が北から測って1.6ｍと1.5ｍ、西側は柱間が３間分あり、北側から測って1.1ｍ、1.4ｍ、0.7ｍである。変則的な柱の配置となっている。各柱穴の掘方径は30～40cmの略円形で、深さは40～60cm程度である。柱穴の深さは、小さいものになると土色の変化が掴めず、掘り過ぎたり掘り足りなかったりする場合があるので、やや誤差が生じてくる。柱穴の中には柱痕跡が残っているものがあり、径15cm前後である。柱穴の埋土は暗茶褐色である。遺物は各柱穴か

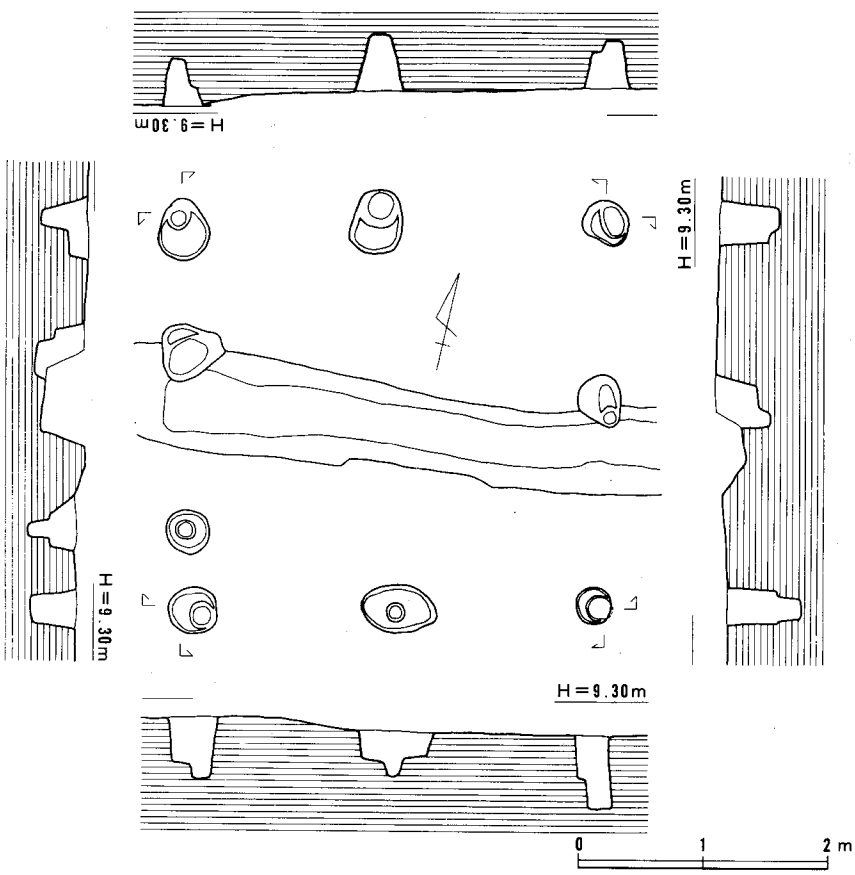


Fig. 19　ＳＢ20遺構実測図（1/60）

ら出土しているが、破片が小さく実測できるものはない。ＳＰ94からは土師器の甕片、庄内式土器の甕片などが出土している。ＳＰ96からは須恵器坏蓋片、ＳＰ101からは土師器片が出土している。須恵器坏蓋は端部が欠けているので時期がはっきりしない。ＳＰ103からは坏蓋の端部が出土している。中央部がやや盛り上がったボタン状のツマミが付くと考えられ、端部は屈曲して下方へ折れ曲る。８世紀前半代に属すると考えられ、柱穴群から出土した遺物はこれが最も新しい時期のものである。柱穴埋土の色調、端部が折れ曲る坏蓋の特徴などから、ＳＢ20は８世紀前半代と考えておきたい。

ＳＢ21（Fig. 20、PL. 7）　調査区南端部西寄りに位置する梁行２間、桁行４間の掘立柱建物である。西側にＳＤ02、 東側にＳＢ22・23が方位を揃えて出土している。 北西隅の２柱穴は弥生時代の溝ＳＤ01が埋没した後に掘り込まれていたと考えられるが、調査の工程上ＳＤ01を先に掘り下げてしまったため、見落としてしまった。切り合い関係は、ＳＫ19、ＳＣ15とも切っており、それらよりも時期的に新しい。

主軸はＮ88°Ｅで、ほぼ東西方向を取っている。東側の梁行総長3.75ｍ、南側の桁行総長6.7ｍを測る。各柱間隔は、東側梁行が北側から測って1.6ｍと2.0ｍ、西側は一間分のみしか計測できないが、2.0ｍを測る。桁行は北側が２間分のみ確認でき、東側から1.6ｍと1.7ｍである。南側は全部残っており、東側から、1.6ｍ、1.75ｍ、1.5ｍ、1.8ｍである。ややバラつきがある。柱穴の形状は角の丸い略方形で、大きさは差渡し60㎝前後である。深さは40～60㎝で、柱痕は15～20㎝である。

遺物は各柱穴から出土しているが、ＳＰ193からは須恵器の坏蓋と坏身が出土している。坏蓋は扁平な擬宝珠状のツマミが付き、口縁端部は一旦上方へ盛り上がって下方へ折れ曲る。坏身は断面コの字状に近いやや高い高台を有する。口縁部は薄くなって外方へ伸びる。ＳＰ194からは須恵器坏蓋の一部と土師器片が出土している。須恵器坏蓋の口縁端部は直角に折れ曲り、下端部は三角形状に尖る。ＳＰ196からは須恵器の高坏脚部片が出土している。透しのある脚部で時期的に遡る。古いものが混入したのであろう。ＳＰ197からは須恵器坏身・坏蓋、土師器の坏などの破片が出土している。須恵器坏身は高台が付くものとそうでないものがある。高台は、ハの字状に外開きになるが、高さはあまり高くない。坏蓋の端部は直角に折れ曲り三角形状に尖る。土師器の坏は、平底から体部が立ち上がり、やや外傾し端部は薄くなって尖る。柱穴出土の遺物は７世紀終末から８世紀前半にかけての時期のものが多い。新しい遺物から考えると８世紀前半代に属すると考えた方が妥当であろう。

ＳＢ22（Fig. 21、PL. 7）　調査区南端中央部で検出した掘立柱建物である。桁行５間、梁行は２間分検出しているが、遺溝は未調査区へ広がっており全体の様子が分からない。規模から梁行３間、桁行５間の建物になるのではないかと推察される。切り合い関係は、ＳＣ15・16、ＳＫ38を切っており、ＳＢ23とも重複する。ＳＢ23とは直接柱穴の切り合いはないが、次頁で

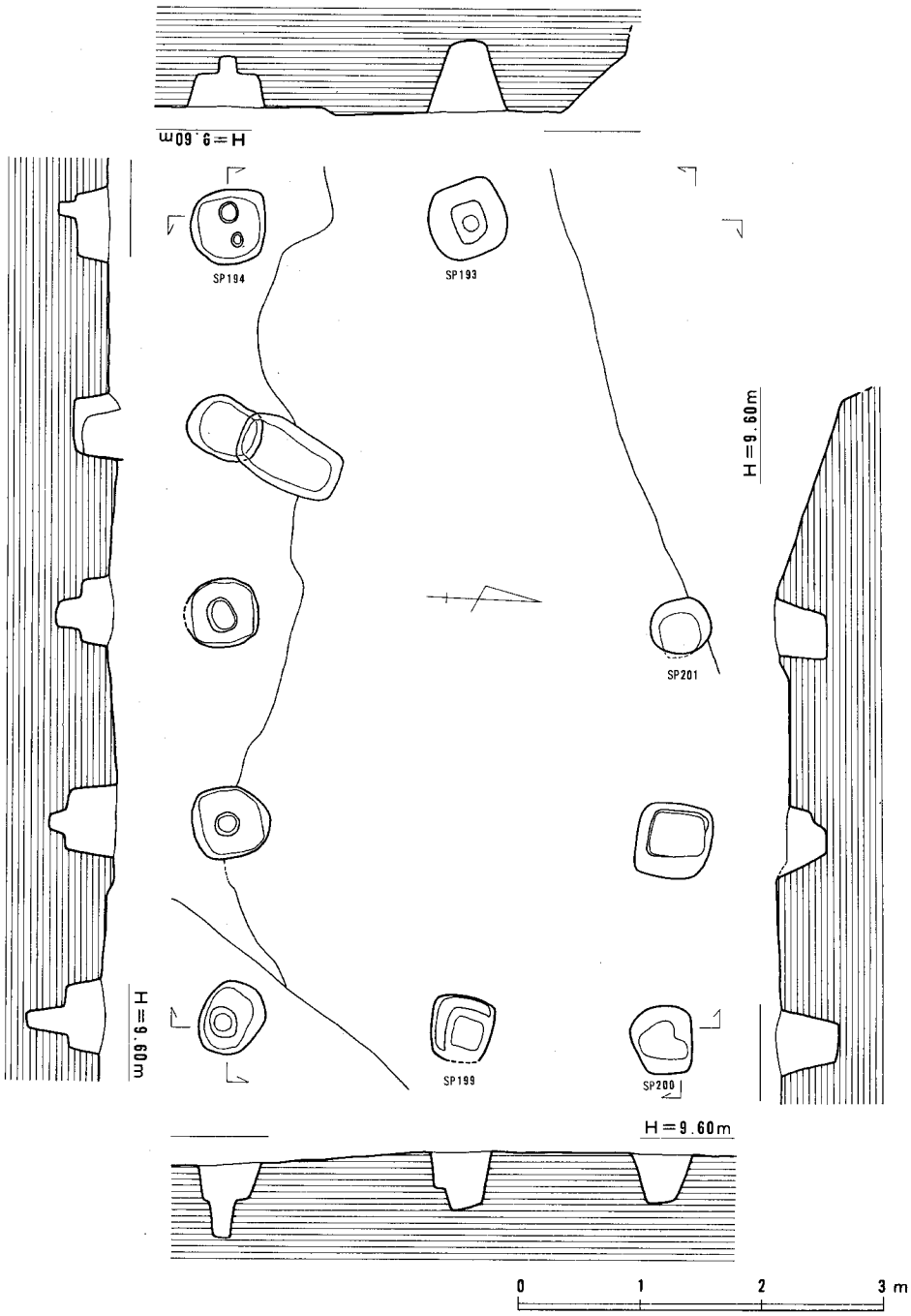


Fig. 20　ＳＢ21遺構実測図（1/60）

説明するようにＳＢ23の方がやや新しい時期のものと判断できる。

ＳＢ22は桁行総長9.6ｍで、柱間隔は東から1.65ｍ、1.75ｍ、２ｍ、2.2ｍ、２ｍである。東側の柱間隔が狭くバラつきがある。西側の梁行は２間分が確認でき、北側から計測すれば２ｍと2.15ｍである。柱穴の大きさは50～70㎝大で、略方形の形状を有する。深さは確認面から40～50㎝で、比較的揃っている。柱穴の中には柱痕が確認されるものがあり、15～20㎝である。主軸はＮ87°Ｅでほぼ東西方向をとる。ＳＢ21、23と同一方向で、意識された配列である。

遺物は６個の柱穴から出土した。ＳＰ215からは須恵器坏身・坏蓋・甕片などが出土している。坏身は受部の立ち上がりが極端に短く内傾する。１点だけ混入品と考えられるがⅢｂに属する古い時期のものがあった。坏蓋は端部が直角に折れ曲って三角形状に突るものや、への字状に屈折して端部が丸くなるものなどがある。甕は平行タタキの胴部片である。ＳＰ216からは須恵器坏身と土師器の坏身などが出土している。須恵器坏身は高台を有するもので、高台は低くて外方へ突出する。土師器の坏身は体部から口縁部にかけてのもので、体部は底部から外傾して立ち上がり、端部は薄く丸味を持って仕上げられている。ＳＰ217からは須恵器坏身、土師器坏蓋が出土している。ＳＰ218からは須恵器甕、坏蓋、土師器の甕などが出土している。坏蓋の端部は直角に折れて端部が突る。土師器甕は粗製のもので、口縁部がくの字状に外反し、内面に粗いヘラ削りが施される。ＳＰ219からは須恵器坏身、甕土師器片などが出土している。坏身には低いコの字状の高台が付く。ＳＰ220からは平底の須恵器坏身が出土している。

ＳＢ22の柱穴群から出土した遺物は８世紀代に属するものが殆どである。８世紀代でも中葉から後半にかけてのものであろうか。

ＳＢ23（Fig. 22、PL. 7）　調査区南側中央寄りで確認された梁行２間、桁行３間の掘立柱建物である。主軸はＮ87°Ｅにとり、ＳＢ21や22と同じ方位である。切り合い関係は、ＳＣ15・16、ＳＫ38を切っている。梁行総長は東側及び西側は共に3.2ｍである。柱間隔は東側が1.6ｍと1.6ｍである。西側は、北から1.7ｍと1.5ｍでやや不揃いである。桁行総長は、北側が4.8ｍ、南側が4.9ｍを測る。柱間隔は、北側が東から計測して1.55ｍ、1.65ｍ、1.6ｍである。南側は、同じく東側から計測して1.6ｍ、1.7ｍ、1.6ｍとなる。南北とも中央部の柱間隔が両サイドよりも僅かに広い。柱穴の形態は略方形に近いものが多く、差渡し45㎝前後である。深さは10～35㎝でバラつきがある。柱痕は13㎝前後である。

遺物は７個の柱穴から出土した。ＳＰ222からは須恵器坏蓋と甕片が出土している。坏蓋は平坦な天井部からへの字状に折れて口縁部へ至る。ＳＰ221からは須恵器坏身と土師器の甕片が出土している。須恵器の坏身は受け部の立ち上がりが内傾しているものや長いものがあり、須恵Ⅲb～Naのに属するとみられる。古い時期のものが混入したものであろう。もう１点の坏身は、体部から口縁部にかけての破片で、底部からやや外傾して立ち上がり、端部はやや薄く仕上げる。底部に高台があったかどうかは不明である。ＳＰ225からは、須恵器甕片と土師器

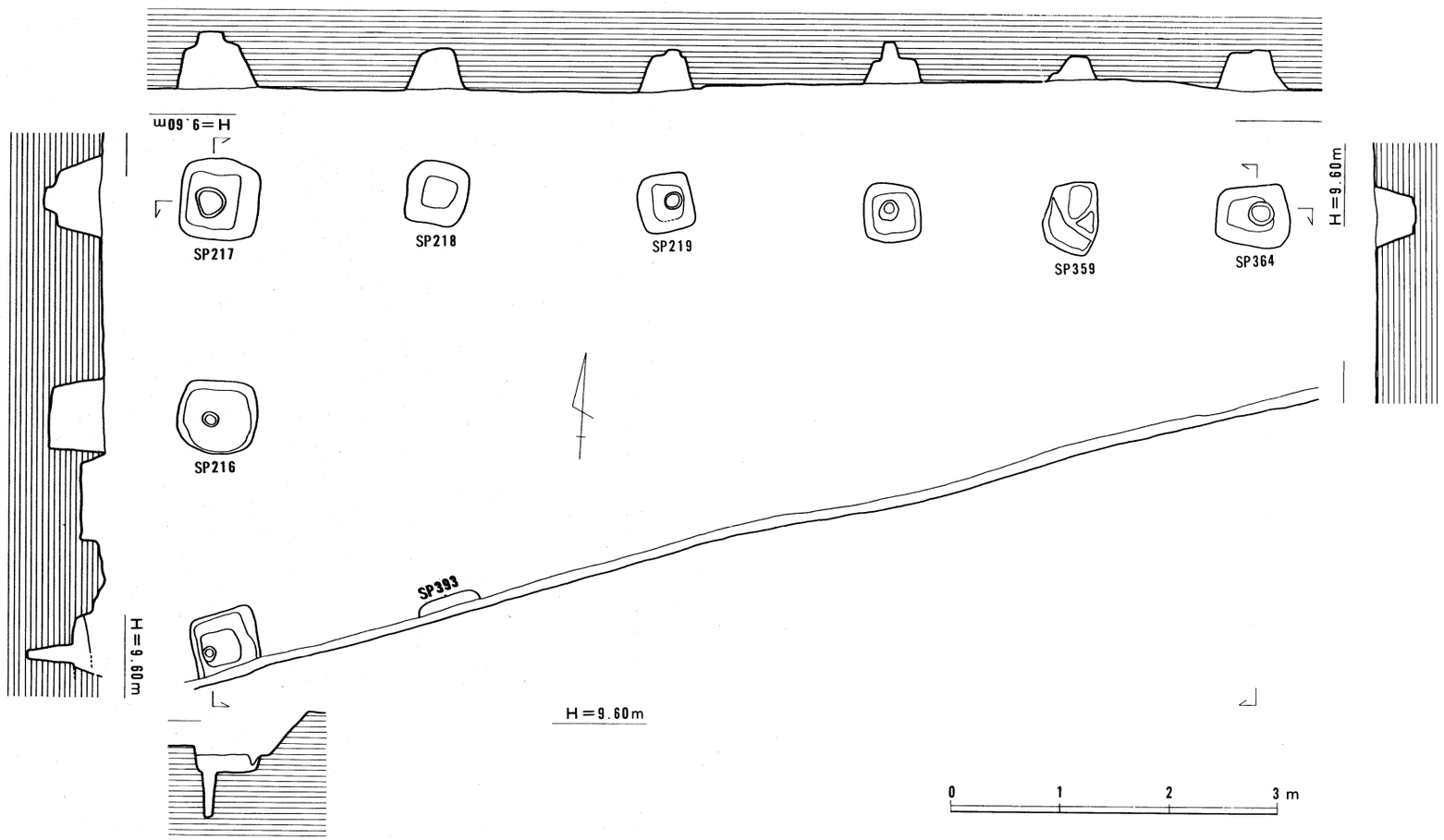


Fig. 21　ＳＢ22遺構実測図（1/60）

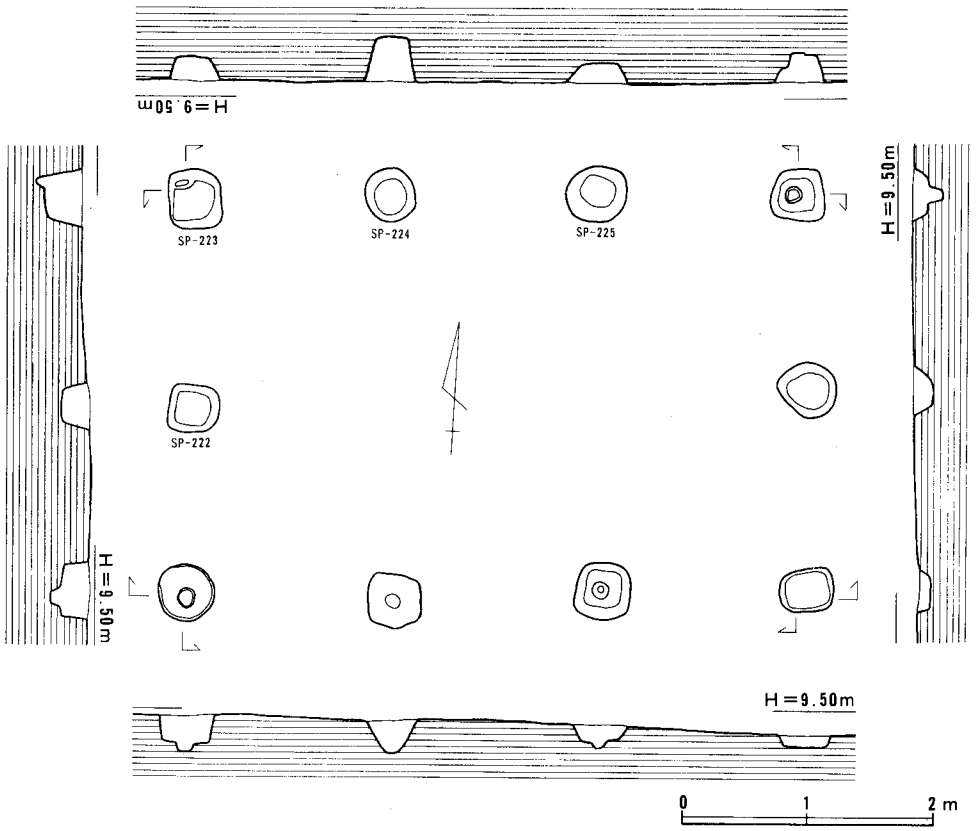


Fig. 22　ＳＢ23遺構実測図（1/60）

片が出土している。ＳＰ227からは須恵器坏身と土師器甕片が出土している。坏身は底部にコの字状の高台を有し、底部から体部に移行する部分には角を持つ。ＳＰ228からは須恵器の甕片、ＳＰ229からは須恵器甕片、坏底部、土師器片などが出土している。坏底部は平底で高台を有しない。焼成が良くないのかやや瓦質っぽい仕上がりになっている。ＳＰ230からは須恵器坏蓋、土師器のカマド片などが出土している。坏蓋は、体部から口縁部に移行する部分に沈線を有するものがある。 時期的に古いもので混入品であろう。その他、坏蓋の口縁端部が直角に折れ曲るものと、天井部から口縁部にかけて丸く弯曲し、端部を丸く仕上げる坏蓋が出土している。ＳＢ23の柱穴から出土した遺物は８世紀代でも新しい時期のものが多く、建物は８世紀後半代に属するものと考えられる。

ＳＢ33（Fig. 23、PL. 8）　調査区東側で検出した梁行１間、桁行２間の掘立柱建物である。ＳＣ29、32の調査後、それぞれの床面で柱穴の掘り方を確認したので、これらの竪穴住居址よ

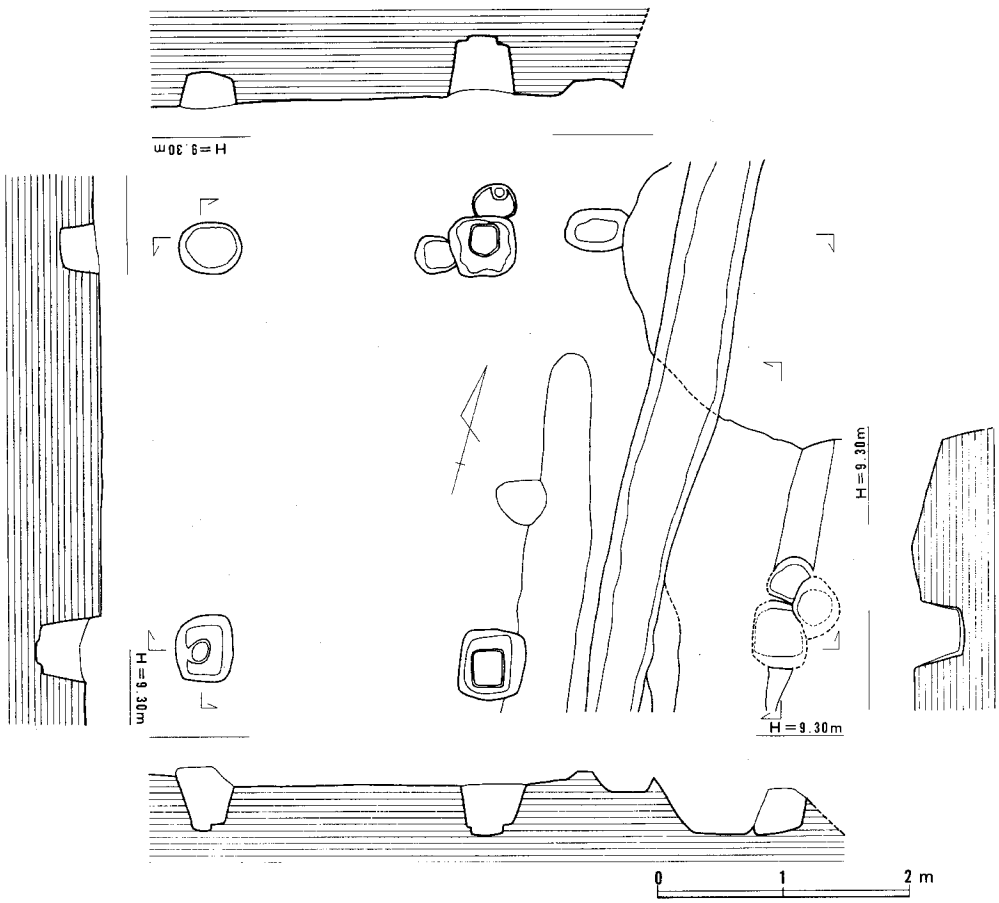


Fig. 23　ＳＢ33遺構実測図（1/60）

りも時期的に古い。またＳＤ09、11、ＳＸ13からも切られており、ＳＸ13で切られた部分は柱穴が無くなっている。主軸はＮ74°Ｅをとり、南側の弥生時代中期後半から後期前半に属する環濠とほぼ並行して建てられている。西側の梁間１間は3.2ｍ、南側の桁行総長は4.6ｍで柱間隔はそれぞれ2.3ｍである。北側の柱間隔も2.3ｍで規格性がある。柱穴の掘り方は略方形で、大きさは50cm前後である。埋土は黒色土で、柱穴の深さは30～50cmを測る。柱穴の底には20～25cmの方形の柱痕が確認され、方形の柱が使用されていた可能性がある。遺物は各柱穴から出土している。ＳＰ262からは弥生時代中期後半の丹塗りの壺破片が出土している。胴部の一部でＭ字状の突帯が巡る。ＳＰ270、271、315からはそれぞれ弥生土器片が出土している。小さな破片ではあるが、胎土、焼成、刷毛目の調整などから甕の破片であろう。ＳＰ313からは複合口縁壺の口縁部片が出土している。口縁中央部の屈曲はシャープで、外弯しながら内傾する。

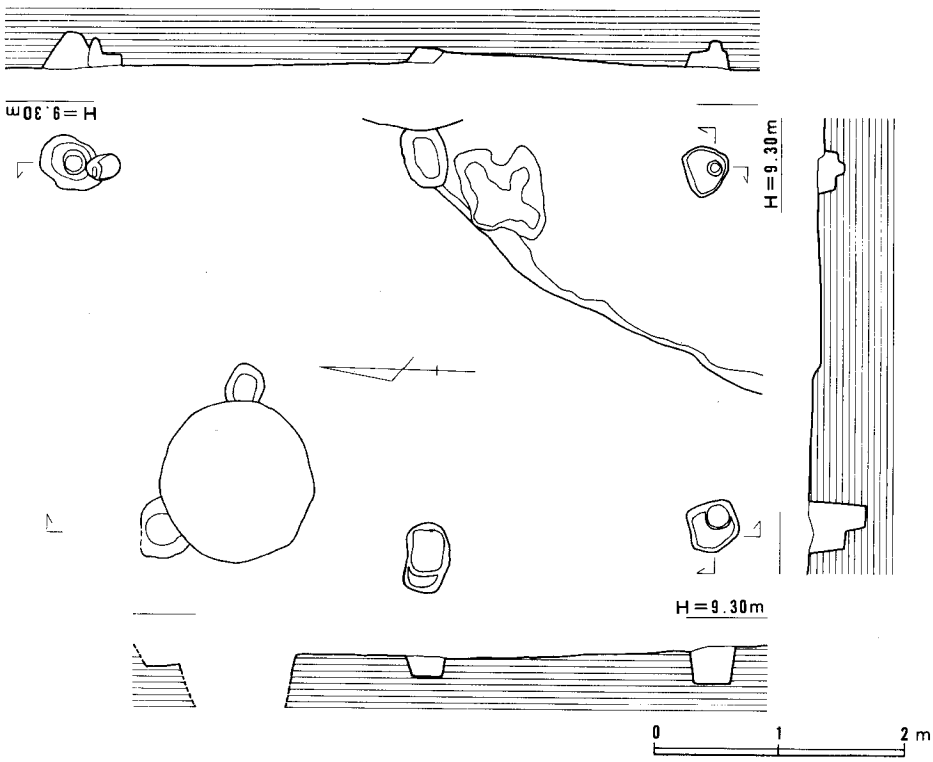


Fig. 24　ＳＢ34遺構実測図（1/60）

弥生後期中葉から後半代のものであろう。ＳＢ33は柱と柱のスパンが長いこと、柱穴は略方形の掘方を持ち、埋土は黒色土、柱穴からする遺物は殆ど弥生中期後半から後期にかけてのものであることなどから、新しく見積もっても弥生後期中葉から後半代の時期であろうと推察される。

ＳＢ34（Fig. 24、PL. 8）　調査区東側に位置する梁行１間、桁行２間の掘立柱建物である。ＳＣ29に切られており、柱穴は切り合わないがＳＢ33と重複する。主軸はＮ１°Ｅでほぼ磁北をとる。梁行は南側で2.8ｍ、桁行総長は東側で5.1ｍを測る。西側は柱穴１個が未調査区に含まれるため計測できない。東桁行の柱間は北側から2.8ｍと2.3ｍである。西側の南側１間分は2.3ｍである。梁行、桁行とも柱間隔が広い。柱穴の掘方は略円形を呈し、径40～50cmである。深さは確認面から20～40cmでバラつきがある。埋土は黒色土で、10～15cmの柱痕が残っているものがある。遺物は、ＳＰ268から器台、ＳＰ269から弥生後期の壺片、ＳＰ267とＳＰ277からは弥生土器片がそれぞれ出土している。出土遺物から判断すれば弥生後期後半に属すると考えられ、ＳＢ33よりもやや新しい時期の所産ではなかろうか。

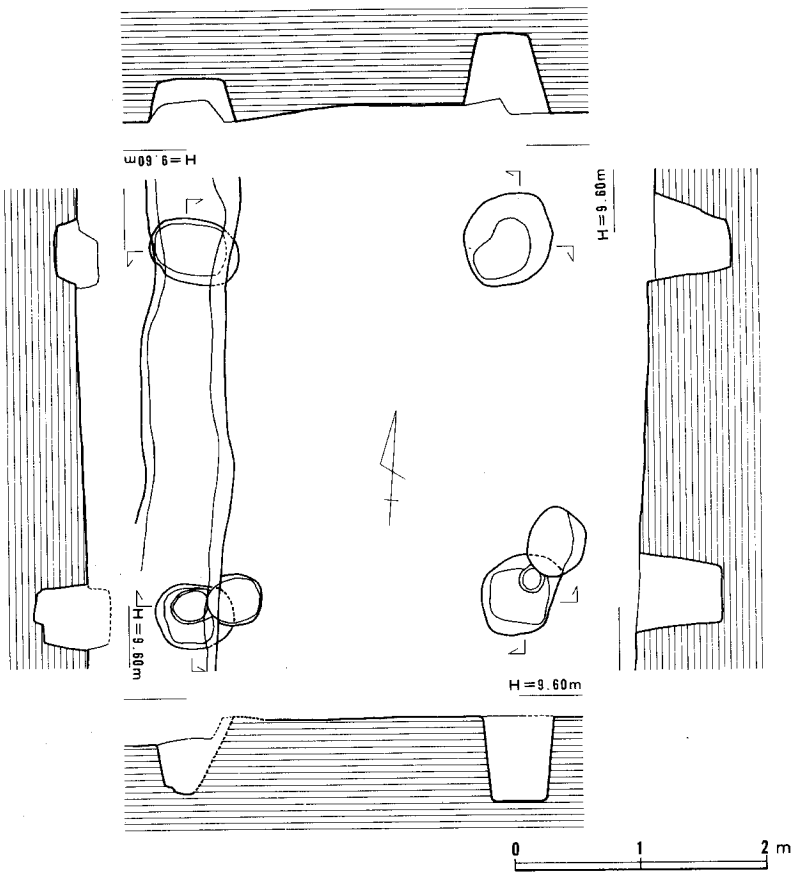


Fig. 25　ＳＢ42遺構実測図（1/60）

ＳＢ42（Fig. 25、PL. 9）　調査区西側で検出した梁行１間、桁行１間の掘立柱建物である。西側の柱穴はＳＤ02の溝底で確認した。ＳＢ43と重複関係にあるが柱穴そのものはお互いに切り合っていないので、遺構の切り合いからは新旧関係を判断できない。主軸はＮ４°Ｗでほぼ真北に近い。各柱の間隔はあまり差がないが、南側と北側がやや狭いので、こちら側を梁間と考えておきたい。北側梁間2.5ｍ、南側は2.6ｍである。東側の桁行が2.6ｍ、西側の桁行が2.8ｍである。柱穴は60cmから70cmで、掘方はほぼ円形である。深さ40cmから70cmまである。柱痕は確認できるもので20cm程度である。覆土は黒色土で、均質な状態で詰まっていた。柱穴からの出土遺物は全く検出されなかった。建物が建てられる以前には生活の痕跡がなく、埋土に遺物が混入しにくかったのであろう。柱穴の大きさや掘方、各柱間のスパンの長さ、黒色の埋土、方位などから弥生時代に属する可能性が高く、環濠とも方位に共通点があることなどから、ＳＢ42は弥生中期後半から末頃に比定できるのではなかろうか。

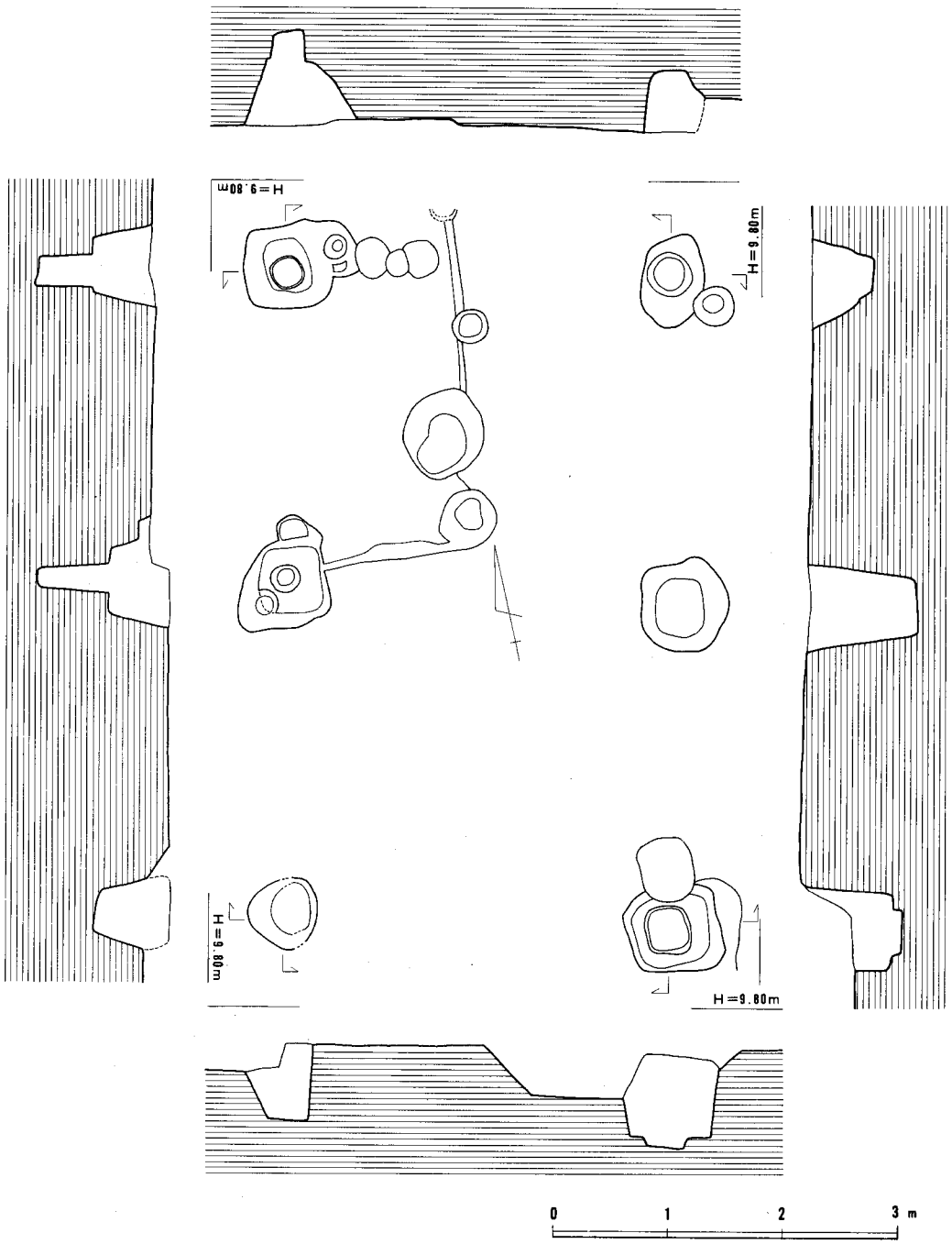


Fig. 26　ＳＢ43遺構実測図（1/60）

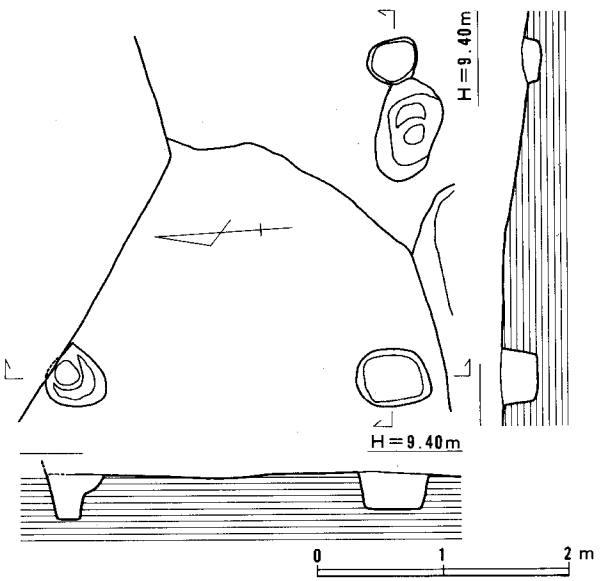


Fig. 27　ＳＢ44遺構実測図（1/60）

ＳＢ43（Fig. 26、PL. 9）　調査区西側に位置する梁行１間、桁行２間の掘立柱建物である。ＳＤ02に切られ、ＳＣ05とも切り合い関係にある。覆土の色調が良く類似しているためはじめはどちらが先に掘られているか確認し得なかったが、ＳＣ05の床面近くの調査では柱穴の方が切っているのが確認され、柱穴の方が新しい時期のものであると判断できた。

主軸はＮ12°Ｅにとり、南側及び北側の梁行はそれぞれ3.3ｍを測る。東側の桁行総長は5.7ｍで、柱間隔は北側から2.85ｍ、2.8ｍである。西側の桁行総長は5.5ｍで、柱間隔は北側から2.65ｍ、2.9ｍである。桁行の柱間隔にはややバラつきがある。柱穴の掘方は略方形で幅は70cm前後である。深さは50cmから最も深いものは110cmを測る。この特に深い柱穴は掘り過ぎたのかも知れない。柱痕跡は、確認できるものでは25cm前後を測ることができる。柱穴の覆土は均質な黒色土で、遺物は全く検出することができなかった。柱穴の形状、黒色の覆土、各柱穴間のスパンの長さ、方位などから、この建物は弥生時代に属するものと考えることができる。弥生中期終末から後期前半頃の時期ではないかと想定しておきたい。

ＳＢ44（Fig. 27）　調査区北側東寄りに位置するもので、北側部分は未調査区へ延びており全体の様子は分からない。梁行１間、桁行１間分が確認できている。実際は梁行１間、桁行２間になると考えられる。主軸はＮ４°Ｅで、磁北に近い方向をとる。南側の梁行は2.5ｍ、西側桁行の柱間隔は2.6ｍを測る。梁行、桁行ともに柱間隔が広い。柱穴は略方形を呈し、幅50cm前後である。深さは検出面から20～30cmである。全体にかなり削平を受けている。柱穴の覆土は黒色土である。黒色土の覆土をもつ遺溝は、那珂遺跡の調査では弥生期に属するものが多く、ＳＢ44も出土遺物はないが、弥生期に属する可能性が高い。柱間隔が長いのも弥生期に多くみられる要素である。

ＳＢ45（Fig. 28）

調査区北側中央部で確認した建物である。梁行１間、桁行１間分を検出しているが、実際は桁行が２間になると推察される。西側の柱穴はＳＣ28と重複しているが、柱穴は床面で確認できたので、ＳＣ28よりも古い。主軸はN42° Wである。南側の梁間は2.7ｍ、東側の桁行の柱間隔は2.0ｍ、西側は2.2ｍを測る。柱穴の掘方は60cm前後で略方形を呈している。深さは検出面から30～40cmである。覆土は黒色土である。遺物の出土は極端に少ないが、ＳＰ388から弥生土器片が出土している。覆土の状況、各柱穴間隔の広さなどから弥生期に属するものであろう。弥生中期末から後期前半頃と考えておきたい。

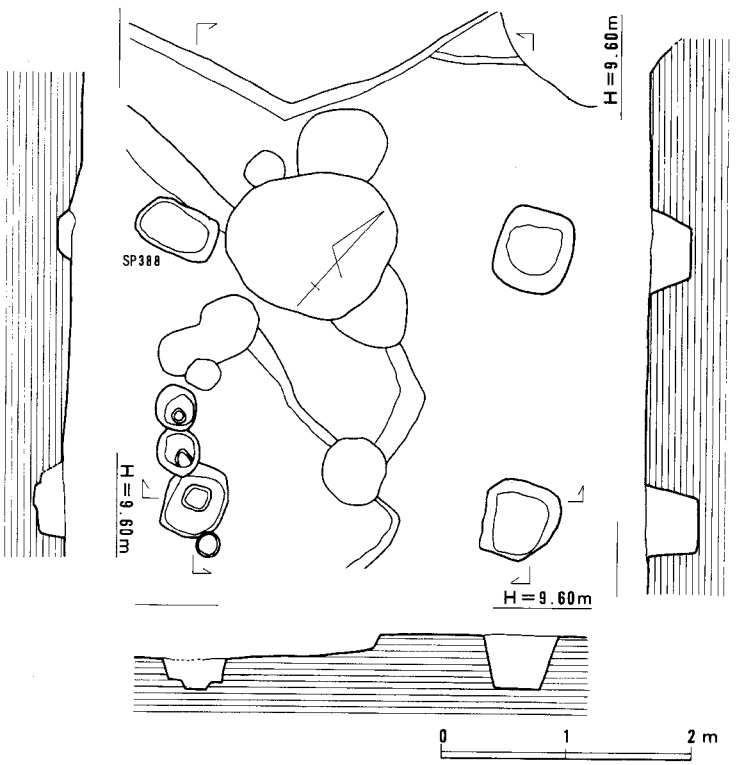


Fig. 28　ＳＢ45遺構実測図（1/60）

ＳＢ46（Fig. 29）　調査区中央部で検出した梁行２間、桁行２間の建物である。南側の柱穴はＳＤ01が埋没した後に掘り込まれている。主軸はN87° Eでほぼ東西方向をとっている。東側の梁間は3.2ｍで、柱間隔は北側から1.8ｍと1.4ｍである。西側の梁間は2.8ｍで、柱間隔は北側から1.35ｍと1.45ｍである。梁間の間隔はかなり歪っである。北側の桁行は4.3ｍで、中央部に攪乱があり柱穴が確認できていない。南側の桁行も4.3ｍである。柱間隔は東側から2.3ｍと２ｍである。全体的に柱間隔が不揃いである。柱穴の掘方は円形を呈し、差渡し40cm前後である。柱穴の深さは検出面から30cm前後である。かなり削平されていることを窺わせる。確認できる柱痕は細いもので、径10～12cm程度である。柱穴からの出土遺物はあまり多くない。ＳＰ110からは中世の土師皿が出土している。土師器片も少量含まれている。ＳＰ112からは弥生土器片が出土している。ＳＤ01を掘り込んで柱穴が掘られているので、混入したものであろう。柱穴の埋土は茶褐色気味であり、調査時点では古墳時代の建物と考えていたが糸切り底の

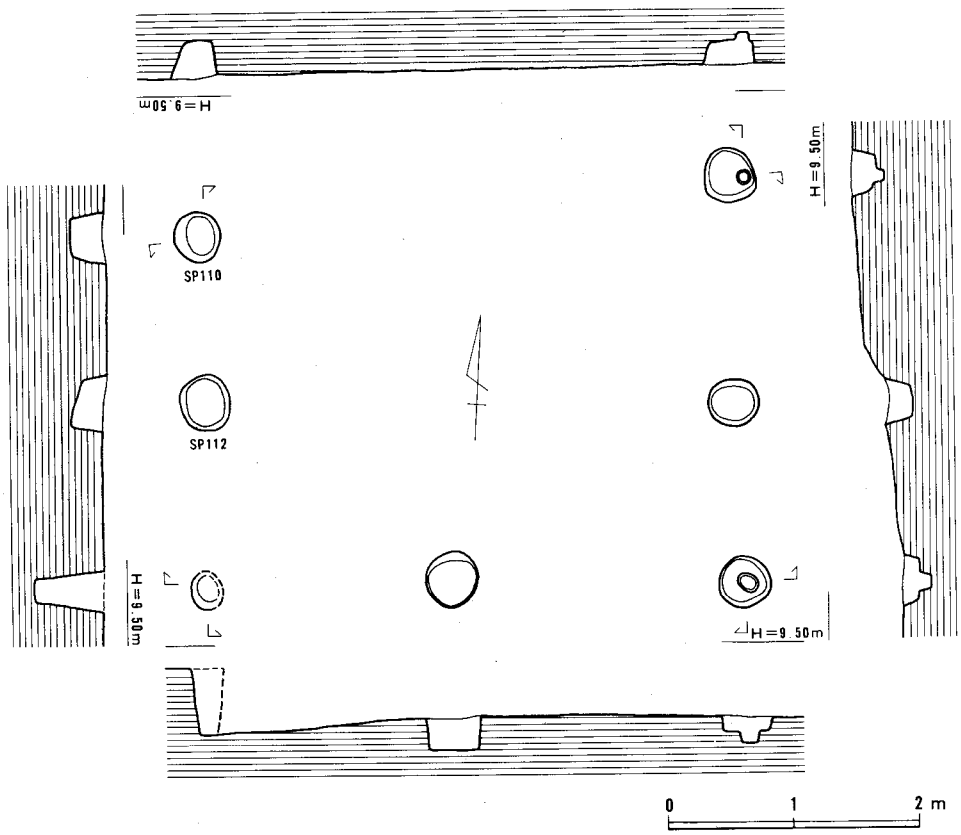


Fig. 29　ＳＢ46遺構実測図（1/60）

土師皿などが出土しているので、中世の時期と考えておきたい。同時期の遺構は、他に土坑、井戸、溝などが検出されている。

ＳＢ47（Fig. 30）　調査区西側で検出した梁行２間、桁行２間の掘立柱建物である。主軸はN17°Wにとり、北側梁間4.5ｍ、南側梁間4.35ｍを測る。桁行は東側が4.5ｍ、西側が4.6ｍである。北側の梁間と東側の桁間にはそれぞれ束柱と考えられる規模の小さな柱穴が伴う。南側及び西側にも存在したと考えられるが、南側はＳＤ02で、西側は後世の攪乱でそれぞれ破壊されているとみられる。北側梁間の柱間隔は東から1.8ｍと2.7ｍである。東側の柱間隔は北側から2.2ｍと2.3ｍである。主柱穴の掘方は略方形で、長さ50～80cmを測る。深さは確認面から70～80cm残存している。束柱はこれよりも浅い。柱痕は確認できるもので20ｍ前後である。覆土は黒色土であるが、遺物が全く出土していない。時期は柱穴の形態、柱間隔、覆土の状態から弥生期のものであろう。

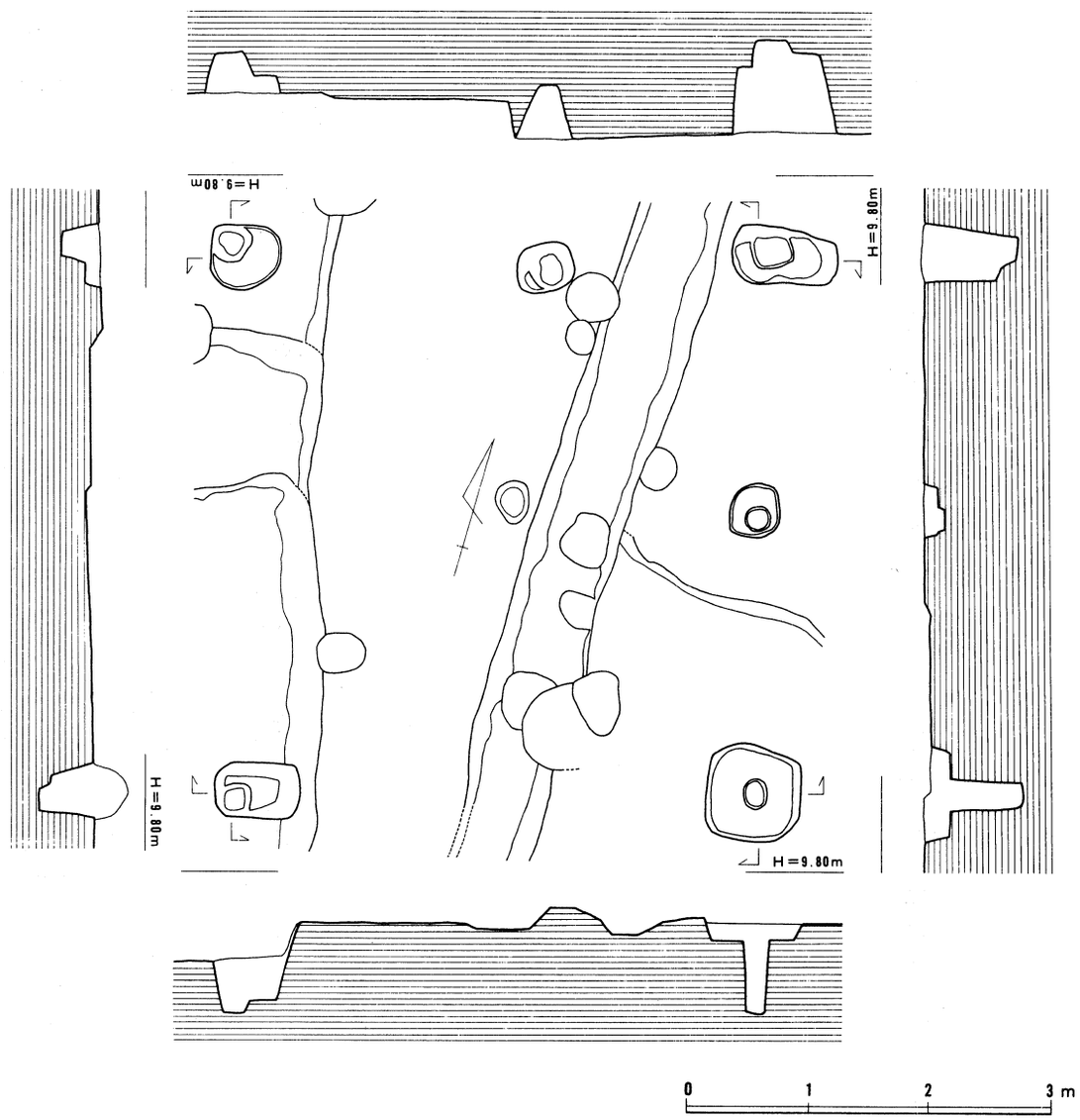


Fig. 30　ＳＢ47遺構実測図（1/60）

4　土坑

ＳＫ06（Fig. 33）　調査区北側に位置する。長径1.3ｍ、深さ0.2ｍである。北側半分は未調査区へ延びる。遺物は扁平で端部が直角に折れる須恵器坏蓋片が出土。８世紀代か。

ＳＫ07（Fig. 33）　ＳＫ06の南側に位置する。長径1.2ｍ、深さ0.1ｍ強である。一部段落ちで破壊されている。遺物は須恵器高坏脚部片、土師器片などが出土。古墳時代後期。

ＳＫ17（Fig. 33）　調査区中央部で検出。一部攪乱によって破壊されている。長径1.2ｍ、深さ0.15ｍである。遺物は須恵器高台付壺片、坏、甕片などがある。８～９世紀代か。

ＳＫ19（Fig. 33）　調査区南側西寄りに位置する。長径3.4ｍ、深さ0.15ｍを測る。須恵IVｂの坏片、甕、土師器片が出土している。坏蓋で端部が直角に折れ曲る破片はＳＢ21との切り合いで混入したものであろう。７世紀初めに属する時期と考えられる。

ＳＫ24（Fig. 33）　ＳＫ19の西側に位置する。長径0.9ｍ、深さ0.4ｍである。須恵器の甕、坏片、土師器片などが出土している。古墳時代後期に属するものであろう。

ＳＫ25（Fig. 33）　ＳＫ24の南側に位置する。長径0.85ｍ、深さ0.25ｍである。ＳＫ24と形態的に類似している。遺物は弥生時代の甕底部が出土している。時期ははっきりしない。

ＳＫ30（Fig. 33）　調査区北側に位置する。半分は北側の未調査区へ延びる。長径1.4ｍ、深さ0.2ｍである。遺物は糸切りの土師皿が出土している。15～16世紀のものであろう。

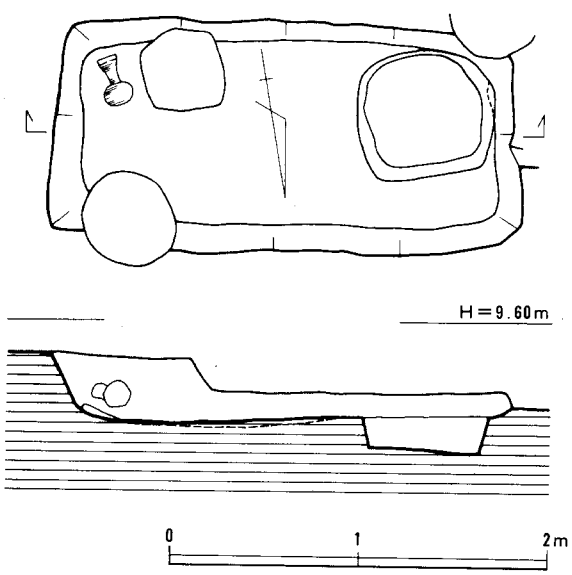


Fig. 31　ＳＫ38遺構実測図（1/40）

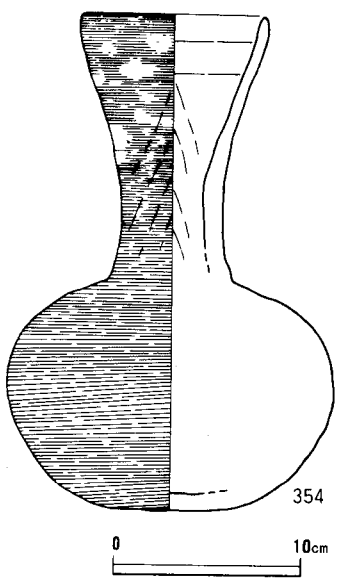


Fig. 32　ＳＫ38出土遺物実測図（1/4）

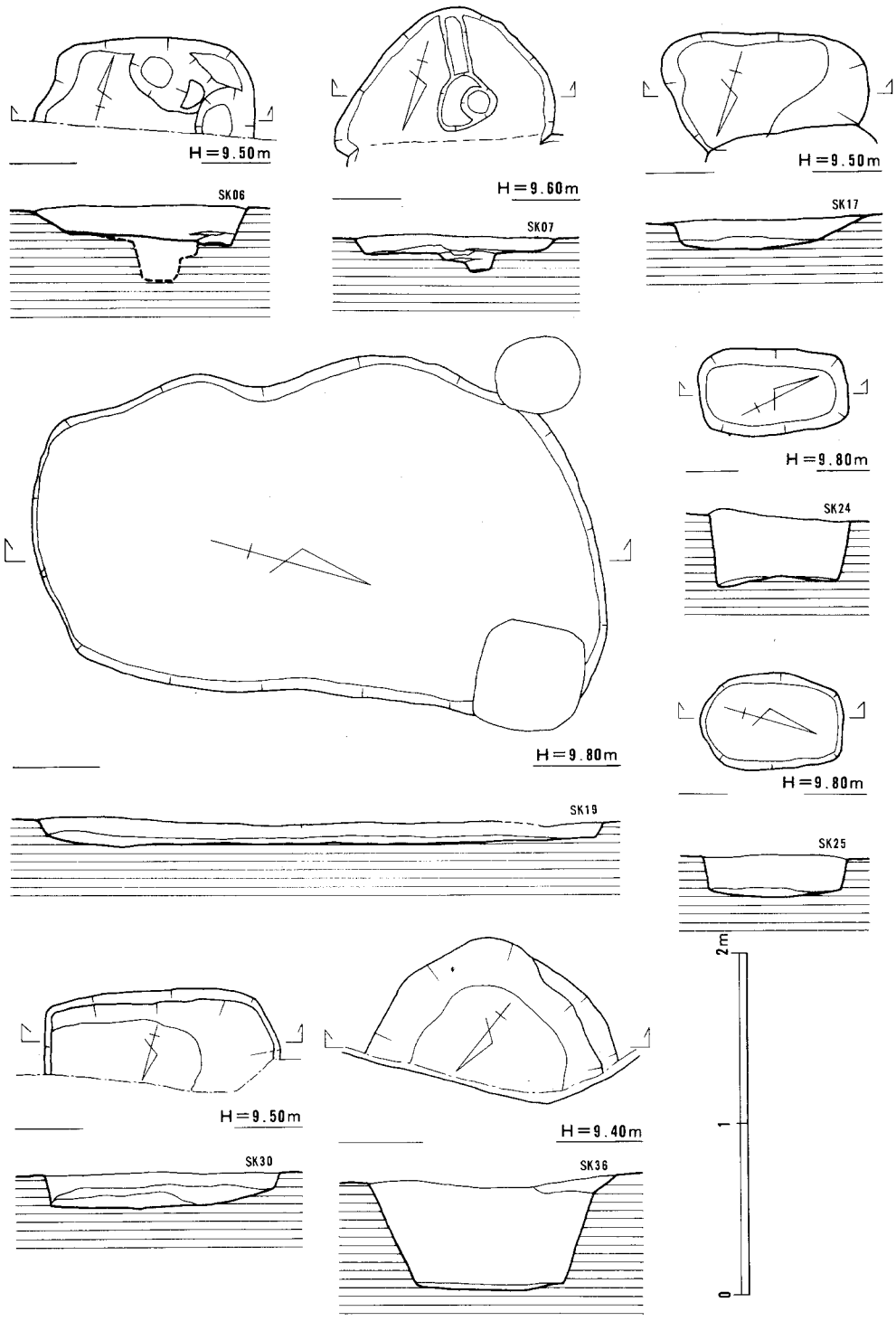


Fig. 33　SK06・07・17・19・24・25
30・36遺構実測図（1/40）

ＳＫ36(Fig. 33)　ＳＫ30の西側に位置する。北側半分は未調査区へ延びている。長径1.5ｍ、深さ0.6ｍを測る。糸切底の土師皿、須恵器片などが出土。中世に属すると考えられる。

ＳＫ38(Fig. 31、32、ＰＬ９．50)　調査区南側に位置し、ＳＣ15、ＳＢ22、23に切られている。長方形を呈し、長辺2.5ｍ、短辺1.2ｍ、深さ0.35ｍを測る。中には焼土が満杯に詰まっており、完形の須恵器長頸壺が出土している。Fig. 32は、口径9.9cm、器高26.4cmを測る。長頸壺である。火を受けて茶褐色～淡黄灰色に変色している。外面にはカキ目調整が施される。胎土には石英、長石粒を含む。その他、須恵器坏片、土師器片などが出土している。６世紀後半代に属するものであろう。

5　井戸

ＳＥ03(Fig. 34～36、ＰＬ.10、27、28)　調査区西側に位置し、南側の一部はＳＣ04によって切られている。上面形は略方形を呈し、差渡し1.4ｍを測る。断面は、地表下－２ｍで鳥栖ロームから八女粘土に変り、この部分から大きく抉れる。地表下－3.9ｍで灰色～灰黒色の凝灰岩質に変化し、井戸底はさらに掘り窪められ、地表下－5.1ｍまで達している。遺物は中位及び－3.5ｍ以下の下位に集中して出土している。Fig. 35は上位及び中位から出土した土器群である。13は口径17.8cmの壺である。14とは同一個体と考えられ、底面は凸レンズ状になる。器色は黄灰色を呈する。15は蓋である。口径23.8cm、赤褐色を呈する。時期的に古いものが混入したものであろう。16～18は甕である。２次的に火を受けたものがあり、３点とも赤褐色を呈している。19～23は手捏ねの器台と鉢形土器である。23は下位から出土しているが、他は上位及び中位からの出土である。井戸の廃絶に関する祭祀と関係するものであろうか。

Fig. 36は下位から出土した土器群である。24は細頸の壺で外来系の土器であろう。口径9.6cm、器高25.2cmを測る。口縁部にはタテ刷毛目を施し、凹線を８条巡らす。胴部上半はヨコ刷毛目の後タテ刷毛目調整を加える。胴部下半はヘラ削りの後、ヘラ

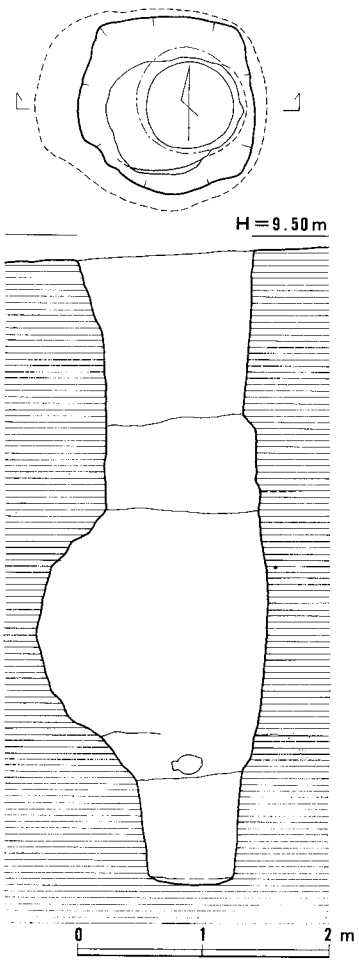


Fig. 34　ＳＥ03遺構実測図（1/60）

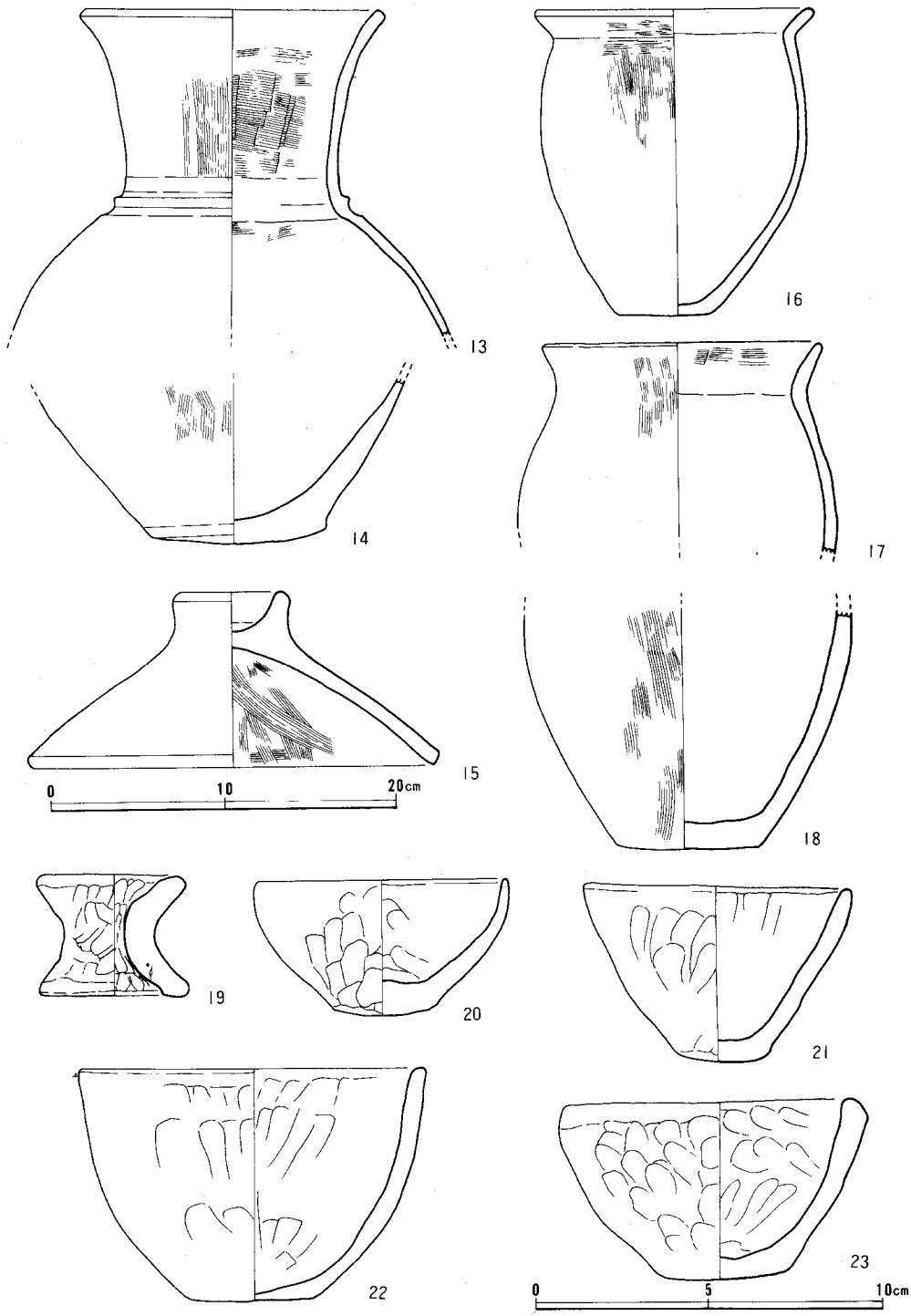


Fig. 35　ＳＥ03中層・下層出土遺物実測図（13～19・1/4，20～23・1/2）

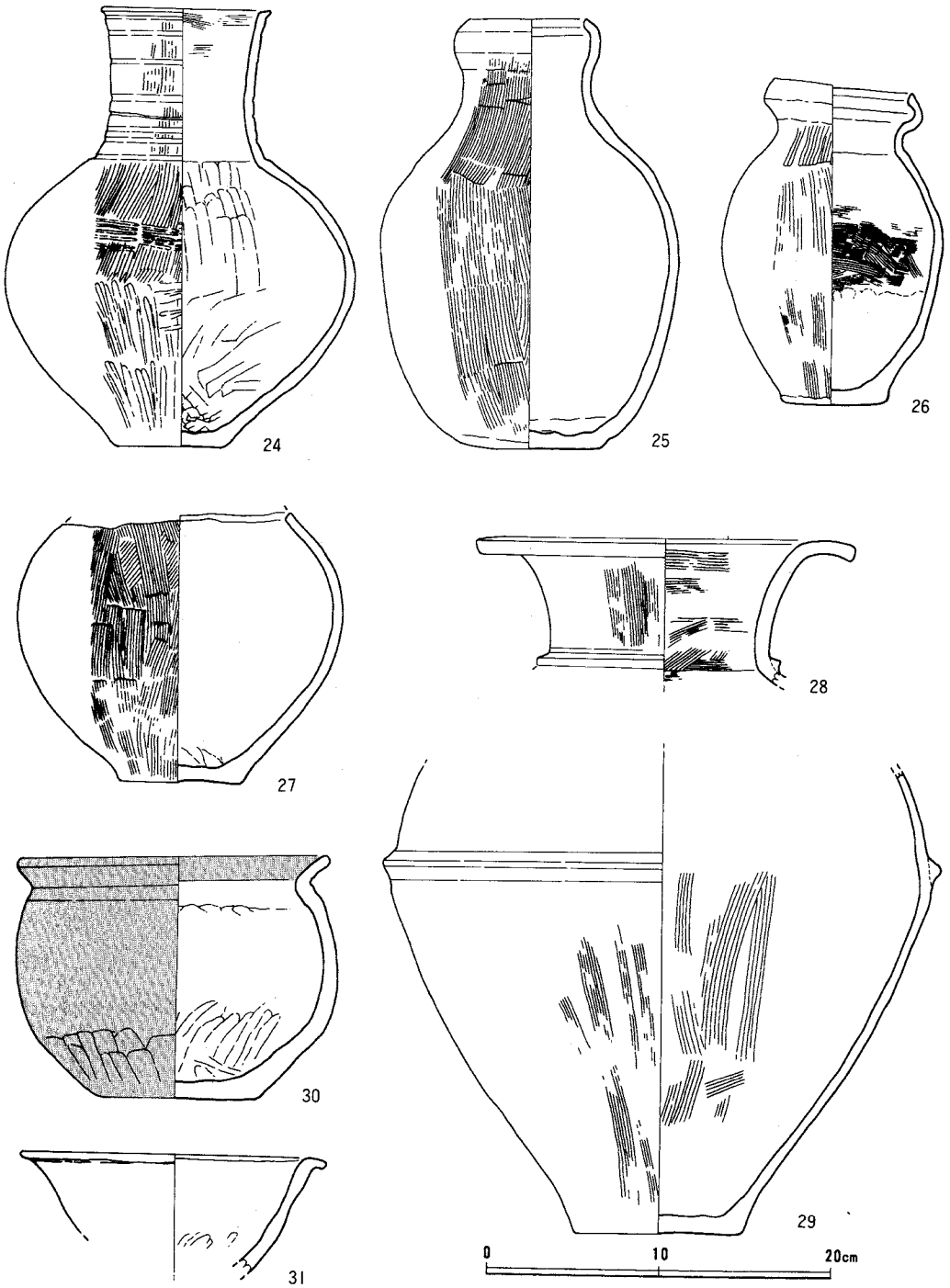


Fig. 36　ＳＥ03下層出土遺物実測図（1/4）

磨きを施す。灰褐色を呈し、胎土は比較的砂粒が少ない。25、26は袋状口縁壺である。粗雑な作りになっている。27も壺形の土器であるが口縁部を欠失する。28、29はやや大型の広口壺である。28は口径22cmを測る。30は厚ぼったい作りの短頸壺である。口径18cm、器高14.2cm、底径9cmを測る。胴部下半にはヘラ削りを加える。口縁内側から外面底部までは丹塗り研磨が施されている。31は粗雑な作りの鉢形土器である。ＳＥ03の下位から出土した土器群は壺が殆どであるが、弥生後期初頭の良好な資料である。

ＳＥ08(Fig. 37～40、ＰＬ.10、29、30) 調査区中央部西寄りで確認した井戸である。掘方の上面形は楕円形状で非常に大きく、長径3.3m、短径2.9mを測る。断面形は漏斗状に窄まり、－2.1mで鳥栖ロームが八女粘土に変化するあたりからさらに膨らみ、－3.1mで底に達する。掘方東側には水の汲み上げで地面が擦れて生じた半円状の窪みができている。書き漏したが弥生後期のＳＥ03にも東側に、桶か土器で汲み上げの際、擦れて生じた半円形の窪みが観察される。ＳＥ08からの遺物は上位及び中位からも出土しているが、－2.5m前後で完形に近いものがまとまって出土している。Fig38は上位から中位にかけて出土した遺物群である。32は須恵器の坏蓋でやや古いものの混入であろう。33、34は高台付の須恵器坏である。35 36は土師器の坏である。37は盤状の器形をとる大型の土師器である。口径38.2cm、赤褐色を呈し、砂粒の多い胎土を持つ。内面にススが付着している。38、39はカマドの一部である。40～42は布目丸瓦である。40、41は行基式で、41

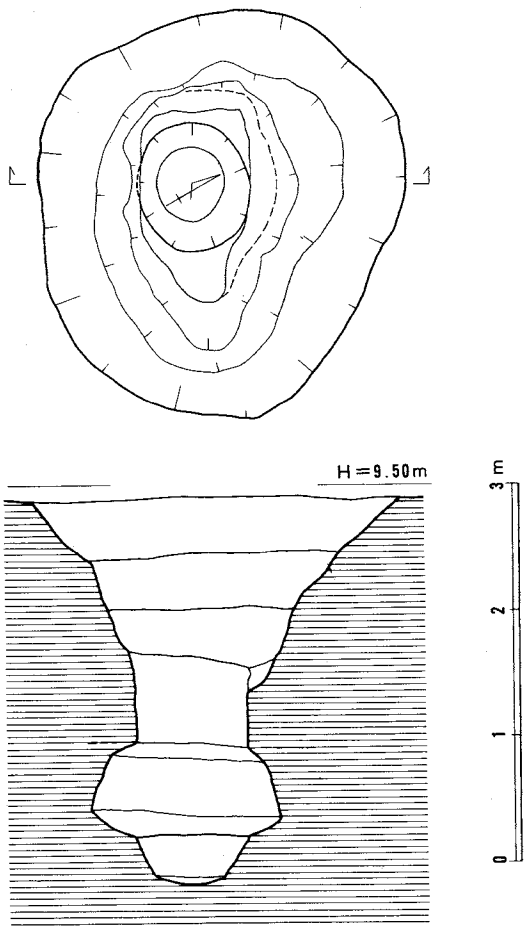


Fig. 37　ＳＥ08遺構実測図（1/60）

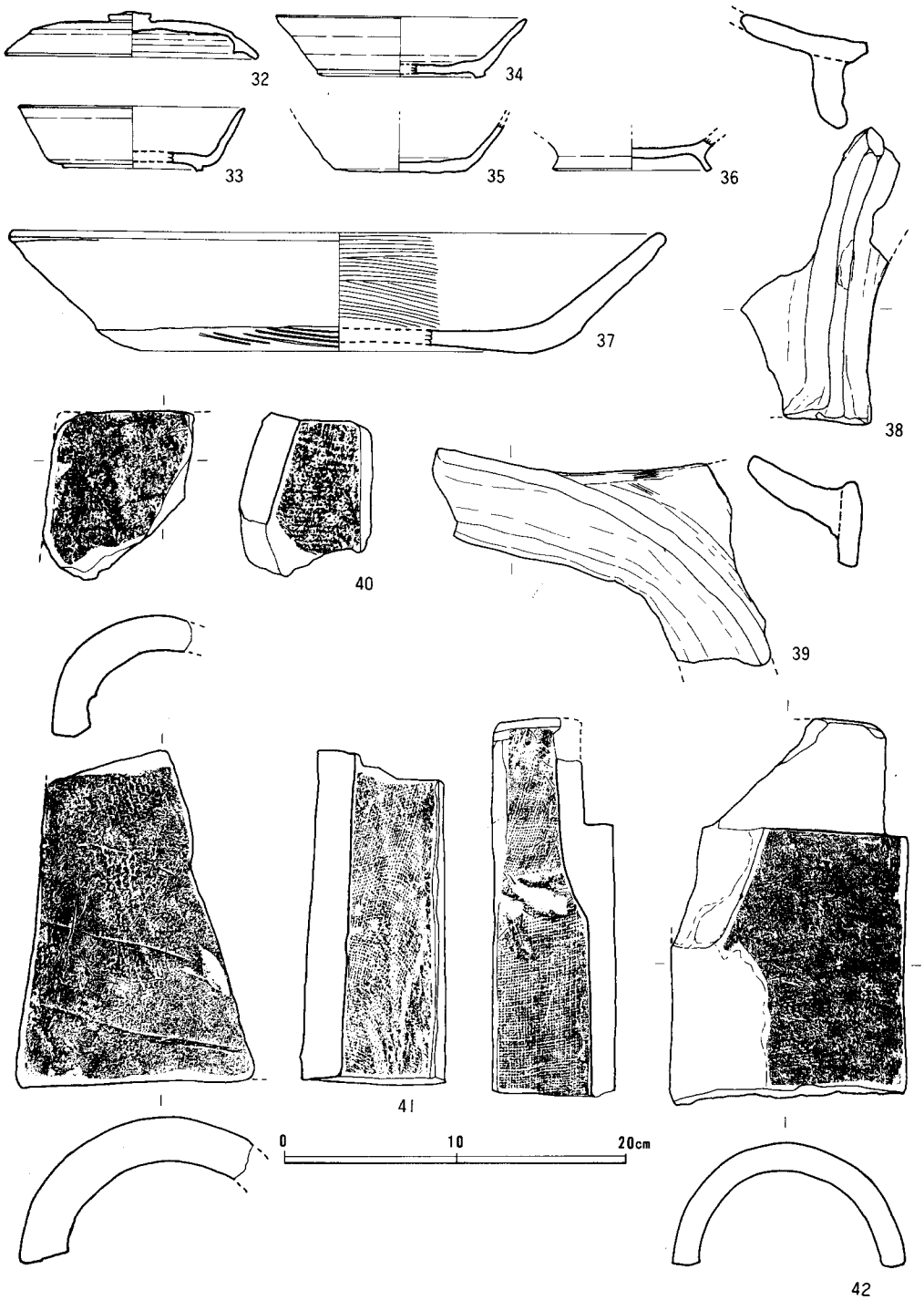


Fig. 38　ＳＥ08上層出土遺物実測図（1/4）

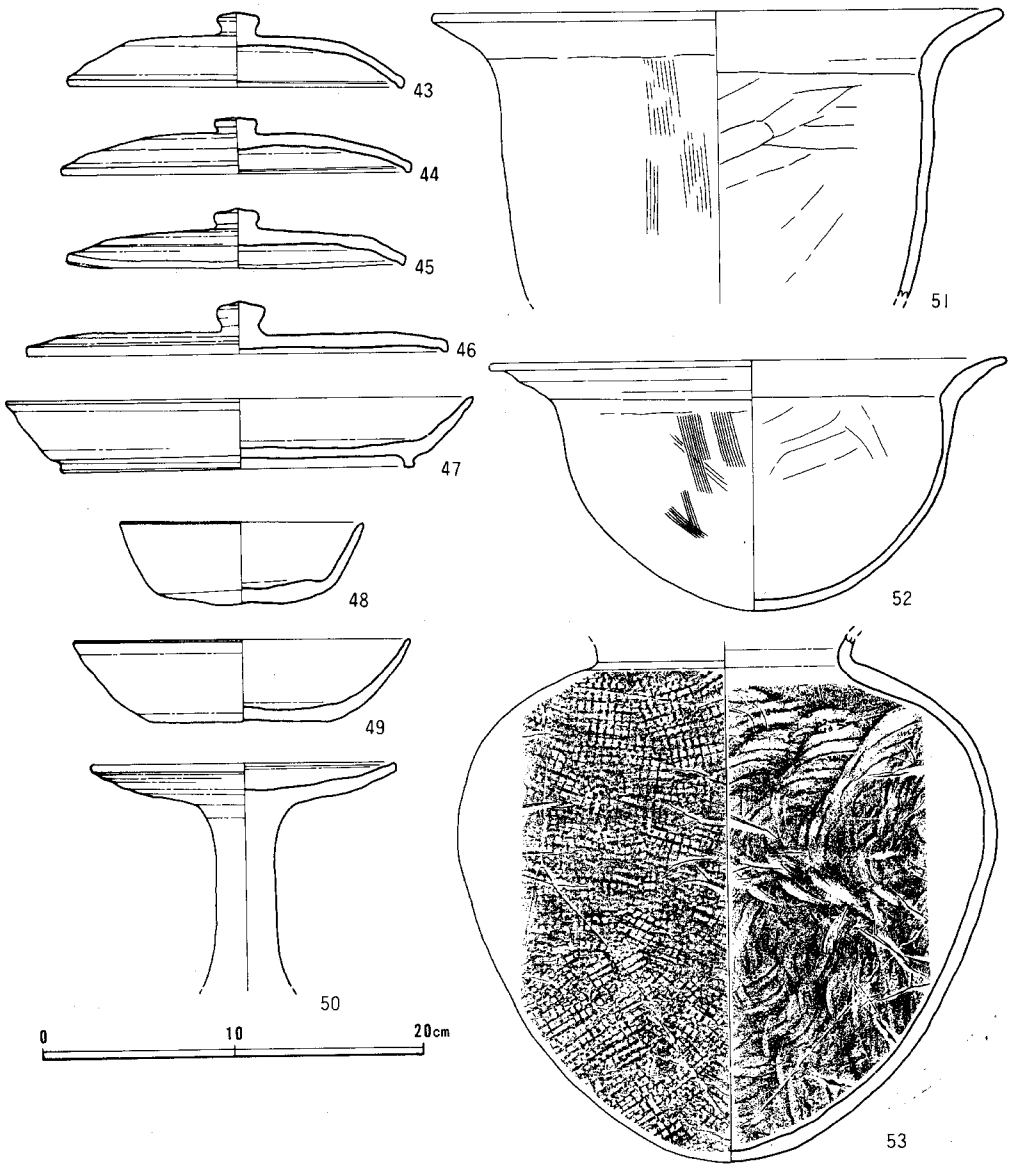


Fig. 39　ＳＥ08下層出土遺物実測図（1/4）

には外面に縄目タタキのあとが観察される。42は玉縁をもつタイプで、外面はナデ調整が施されている。Fig.39・40は下位から出土した遺物群である。43～46は坏蓋である。擬宝珠状のツマミを持ち、口縁端部が直角に折れて下方へ尖る。器高が高いものと扁平なものがある。色調は45が青灰色を呈している他は、赤褐色を呈し、赤焼きになっている。47～49は坏である。47は口径24.6cm、器高3.8cmを測る。底部にコの字状の高台が付く。赤褐色を呈し赤焼須恵器

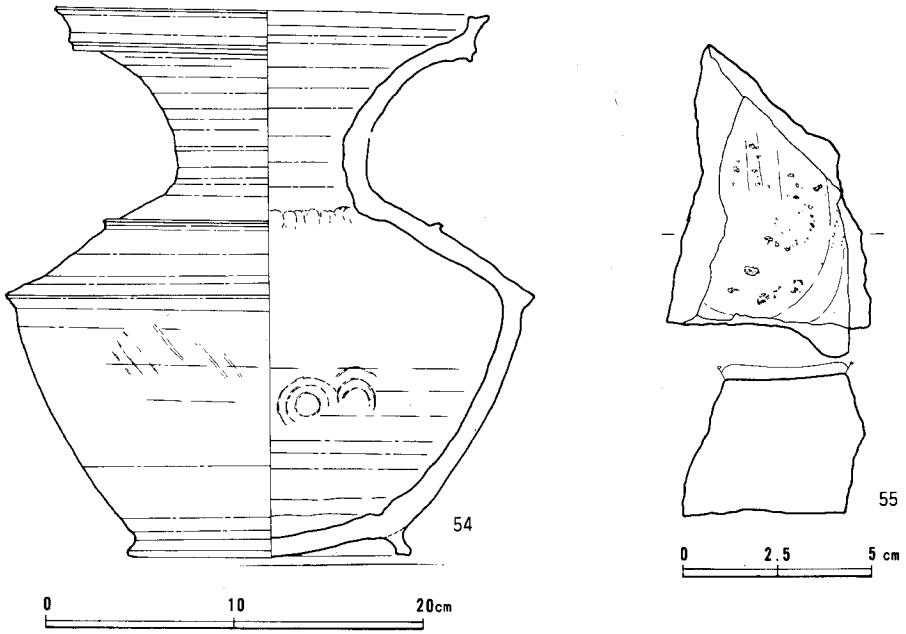
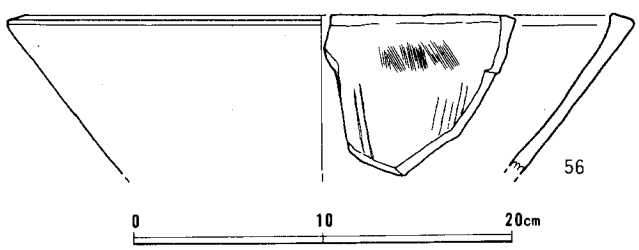


Fig. 40　ＳＥ08下層出土遺物実測図（54・1/4, 55・1/2）

の部類であろうか。48、49は無高台である。50は高坏で脚端部を欠失する。色調は48が黄灰色、49、50が赤褐色を呈している。胎土は全て精良である。51、52は土師器甕である。口径30.2cmで口縁部は大きく外反する。52は口径27.3cm、器高13.4cmを測る。ともに外面は刷毛目調整、内面は粗いヘラ削りが施される。53は須恵器の甕である。胴部最大径は28.4cmで、やや上位にある。外面は平行タタキ、内面は青海波のタタキ痕が残る。54は盤口状の口縁を持つ須恵器壺である。井戸の最下部で単独に出土した。口径22.9cm、器高28.5cm、底部15cm、最大胴径27.8cmを測る。口縁上端部はやや窪み、側面も大きく２段に窪みを持つ。頸部は締り、肩部にはコの字状の突帯を貼付する。胴部上半は直線的に外方へ広がり、強く屈折してやや丸味のある胴部下半へ移行する。屈折部には三角突帯を施し、鋭角に仕上げている。胴下半部には平行タタキの痕跡が観察され、下位にはヘラケズリが施される。底部には高台を有する。胴部内面には同心円タタキの痕跡が僅かに残る。器色は青灰色を呈し、胎土に長石や茶色の砂粒を少し含む。焼成は堅緻である。同様の壺の出土例は、太宰府学校院跡、肥前国府、佐賀県惣座遺跡（以上太宰府市教育委員会木戸氏ご教示）などがあり、熊本県の古閑遺跡でも出土している。現在のところ主要な遺跡のみで出土しているようである。55は砂岩製の砥石である。破損品の一部で、砥面は表裏２面ある。表面に敲打痕が観察される。その他、もう１点砥石の破片が出土している。以上、ＳＥ08は、出土遺物から８世紀中葉から後半代にかけての時期であろう。



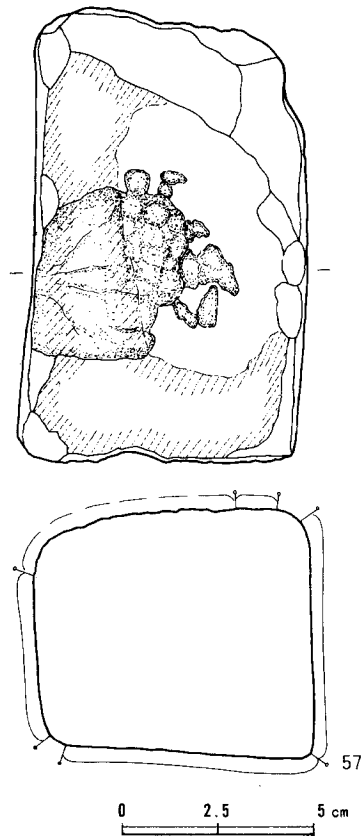


Fig. 42　ＳＥ26出土遺物実測図（56・1/4, 57・1/2）

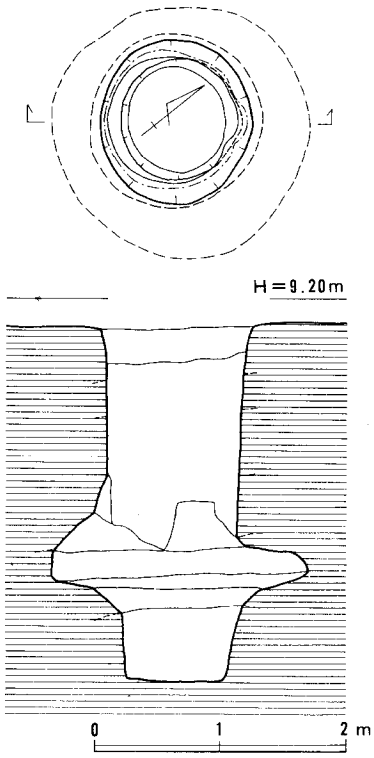


Fig. 41　ＳＥ26遺構実測図（1/60）

ＳＥ26(Fig. 41、42、ＰＬ. 11、31)・調査区北側東寄りで検出した素掘りの井戸である。径1.2～1.3m、深さは確認面から－2.8mである。－2m部分で土層が八女粘土に変化し、この部分が大きく抉れている。井戸底は八女粘土で止っており、他の井戸に比べて浅い。また抉れも他の井戸に比べて幅が小さい。使用期間が短かかったのではなかろうか。掘方北側には、水を汲み揚げる際に擦れてできる半円状の窪みが観察される。この半円状の窪みも浅い。遺物は、見込みに印花を持つ龍泉窯の青磁碗、李朝青磁、瓦質の擂鉢、砥石などがある。Fig. 42－56は擂鉢である。復元口径32.8cm、黒褐色を呈し、外面にススが付着する。57は砥石である。残長12.1cm、最大幅7.2cm、最大厚6.5cmで、淡灰褐色を呈する。

砂岩製である。砥面は４面あり、上面には敲打痕とカーボンが厚く付着する。カマドの上の据石に転用されたものであろう。ＳＥ26は出土遺物から15～16世紀に属すると考えられる。

ＳＥ27(Fig.43、44、ＰＬ.11、31)　調査区北側中央部に位置し、ＳＣ28を切っている。径1.2m、深さは確認面から－4.9mを測る。－1.7mで土層が八女粘土に変化し、大きく抉れ始め、－3.1mで収束する。井戸下部は灰色の凝灰岩質の部分まで到達している。掘方西側には水を汲み揚げる時に擦れてできた半円状の窪みが観察される。遺物は、土師皿や桶の部材などが出土している。Fig.44－58～62は桶材である。長さ22.8～22.9cm、最大幅3.6～3.8cm、両端の幅3.0～3.2cm、厚さ0.4～0.5cmを測る。61だけは幅がやや小さく最大幅3.0cm、両端の幅2.5cmである。両端の幅は各部材どおしは同じである。外面上端から１cm下がったところに幅約１cmの箍の痕跡が観察される。内面上端から約２cm前後下がった所にも幅１～1.15cmの浅い窪みがみられる。内側にも箍状のものがあったのであろう。下端部外面には、端部から1.5～1.8cm上がった所に箍の痕跡がある。内面は底板に取り付けるため、内側を削いでいる。58、59、62には外面に刃物キズが観察される。63～65は底板である。復元すると径19.5cmになる。４枚の部材を継ぎ合わせていたとみられ、板の接合面に各２箇所木釘を埋め込んで固定している。木釘の穴は４～５mmである。材は全て針葉樹と考えられ、板目材を使用している。66は土師皿である。口径8.9cm、器高1.7cmを測り、底面は糸切りである。その他、瓦質の擂鉢片や時期的には古いが高台の付いた須恵器坏なども出土している。井戸の時期は土師皿から考えると15～16世紀代ではなかろうか。

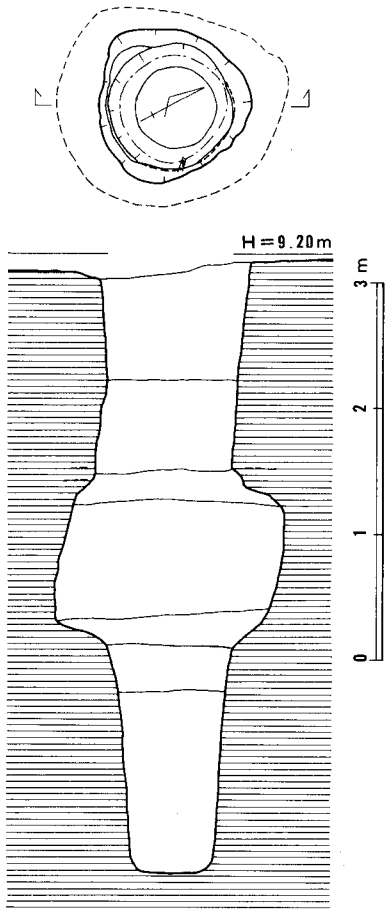


Fig. 43　ＳＥ27遺構実測図（1/60）

ＳＥ35(Fig.45、ＰＬ.12)　ＳＥ27の北側に位置する。平面形は円形でやや小さく径1.0mである。深さは検出面から－4.5mあり、径の割りには深い井戸である。－1.8mで土質が鳥栖ロームから八女粘土に変化し、これ以下が抉れている。遺物は、須恵器坏、甕、青磁碗片、糸

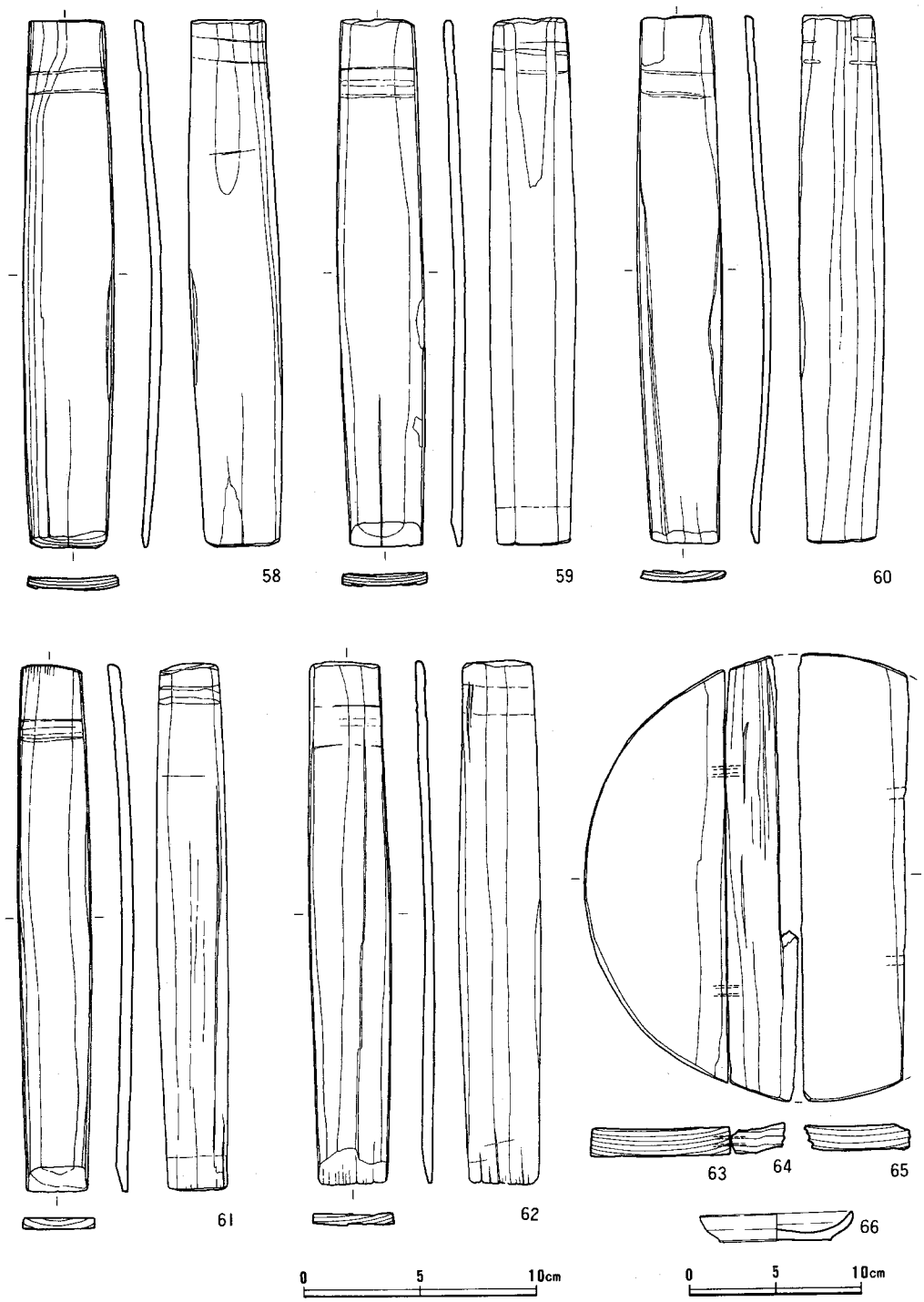


Fig. 44　ＳＥ27出土遺物実測図（58～65・1/3，66・1/4）

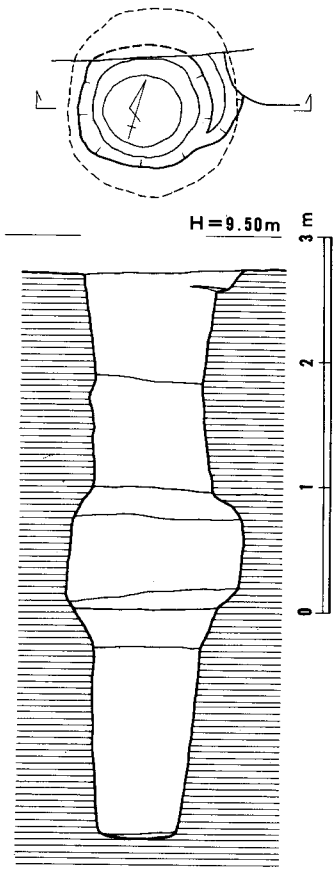


Fig. 45　ＳＥ35遺構実測図（1/60）

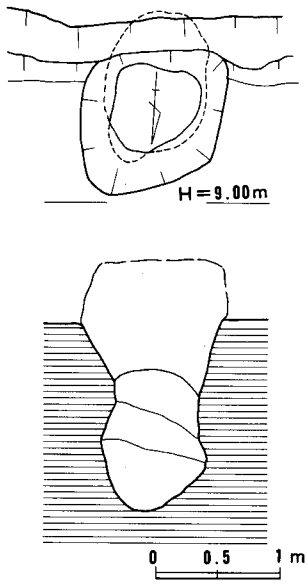


Fig. 46　ＳＥ37遺構実測図（1/60）

切り底の土師皿、坏、擂鉢などが出土している。図化できるような遺物はないが、土師皿や坏などから15～16世紀の時期を考えておきたい。

ＳＥ37（Fig.46、47、ＰＬ.12、30、31）

調査区中央部に位置し、ＳＤ01と重複している。ＳＤ01が埋没後に掘り込まれているが、土色が見分けにくかったので、ＳＤ01の埋土をある程度掘り下げた段階で確認した。平面形は略方形に近いが、かなり削平されているので本来の形は判然としない。確認時の径は１ｍ強である。深さは－1.5ｍで、底の部分がやや膨らむ。遺物はかなりまとまって出土している。Fig.47－67～69は甕である。67は口縁部を欠失する。残高21cm、胴部最大径23.4cmである。黄灰色を呈し、内外面に刷毛目調整が施される。68は直口状の口縁を有し、口径10.8cm、器高23.8cmを測る。淡褐色を呈し粗砂粒を混入する。胴部は左下がりの粗いタタキを施し、底部は右下がりのタタキと交差する。底部の形成は五様式甕の影響がうかがえる。69は大和型の庄内甕とみられるものである。口径14cm、残高11.7cmである。暗灰色を呈し、外面にススが不着する。胎土には白濁色の砂粒や角閃石を含む。胴部には右下がりのタタキが全面にみられる。70～72は壺である。70は口径14.5cm、器高21cmを測

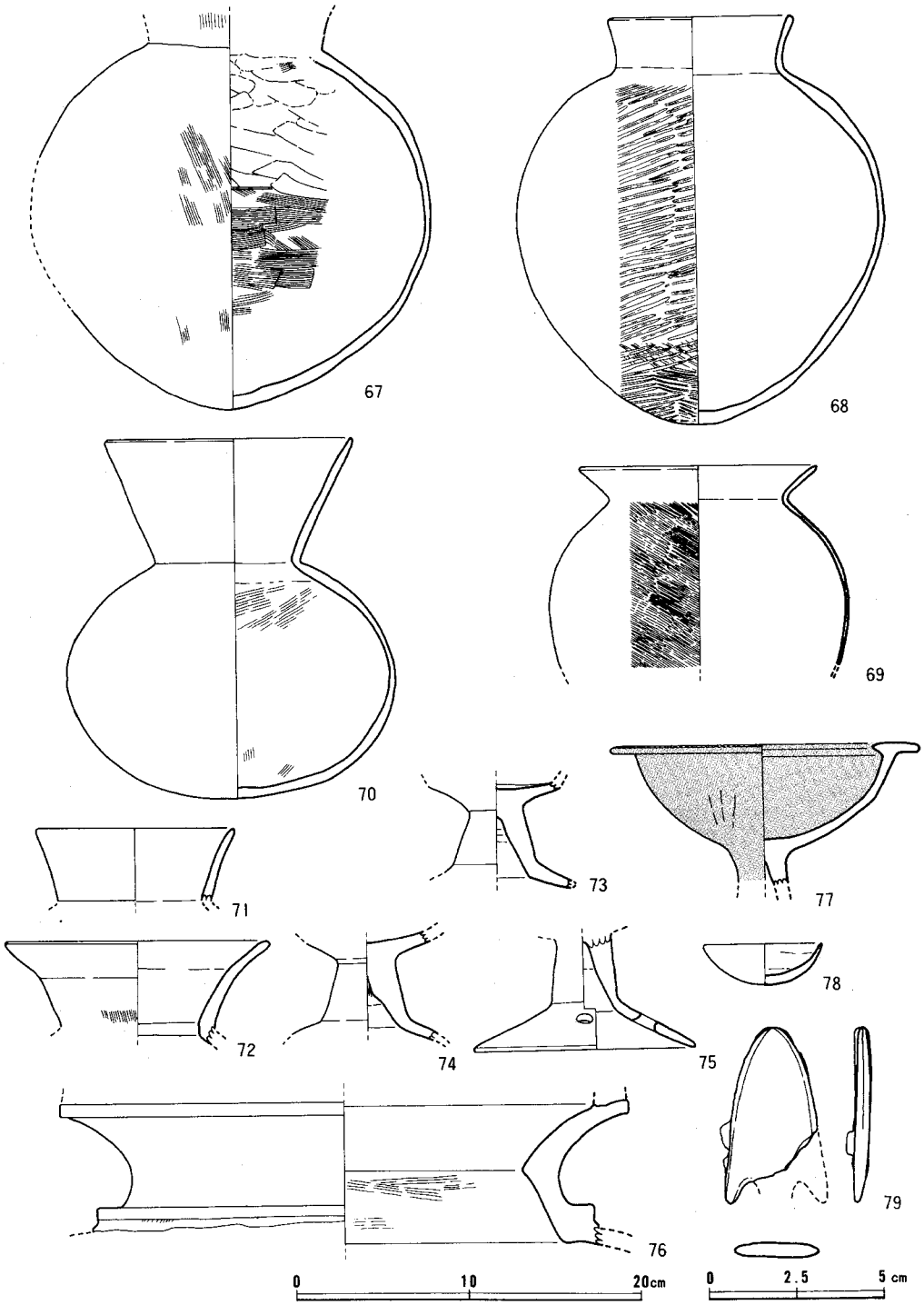


Fig. 47　ＳＥ37出土遺物実測図（67～78・1/4，79・1/2）

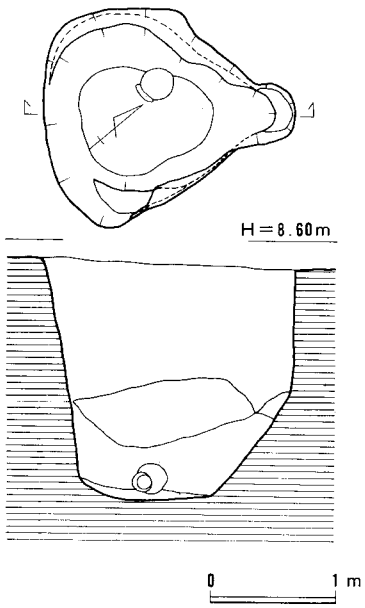


Fig. 48　ＳＥ102遺構実測図（1/60）

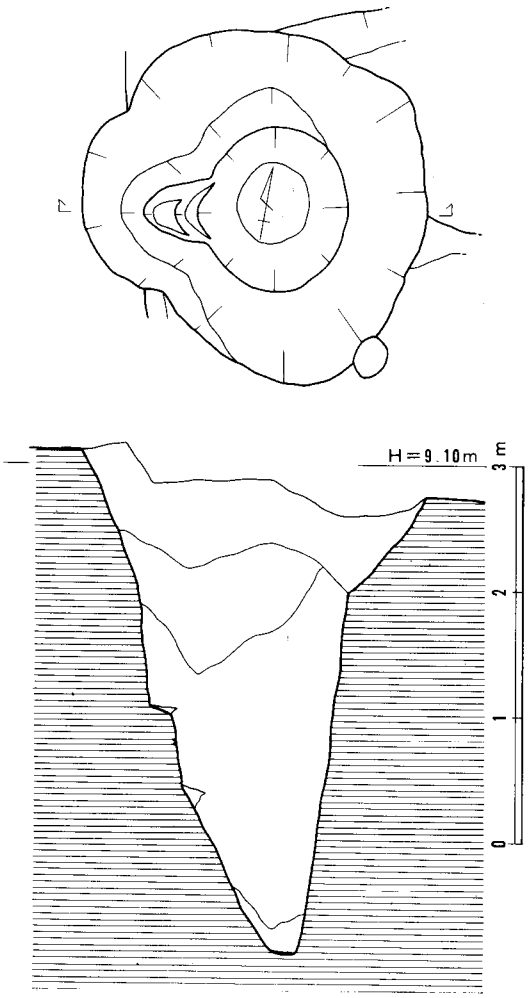


Fig. 49　ＳＥ103遺構実測図（1/60）

る。黄褐色を呈し、胎土は精良である。71、72も黄褐色を呈する。73～75は短脚の高坏である。赤褐色～黄褐色を呈し、胎土は精良である。76は二重口縁の土師器大甕である。褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含む。77は混入した弥生中期後半の丹塗り高坏である。78は小型の椀、79は鉄鏃である。324は復元口径18cmを測る甕である。淡灰褐色を呈し、胎土に石英、長石、金雲母などを含む。胴部には左下がりのタタキが全面に施される。ＳＥ37は外来系の土器を含み、古墳時代初頭のまとまった資料として注目される。

ＳＥ102(Fig. 48、50、ＰＬ. 13、30、31)　Ⅱ区の東側段落ち部で検出した井戸である。上部はかなり削平されていると考えられる。平面形はヒョウタン形で、東側の半円形の窪みは水の汲み揚げでできた抉れとみられる。東西２ｍ、南北1.7ｍ、深さ1.9ｍである。井戸底から完形の古式土師器が横倒しの状態で出土している。Fig. 50－80は井戸底出土の甕で、口径18.8cm、器高29cm、胴部最大径26.3cmを測る。丸みのある体部を持ち、外面に平行にタタキとハケ

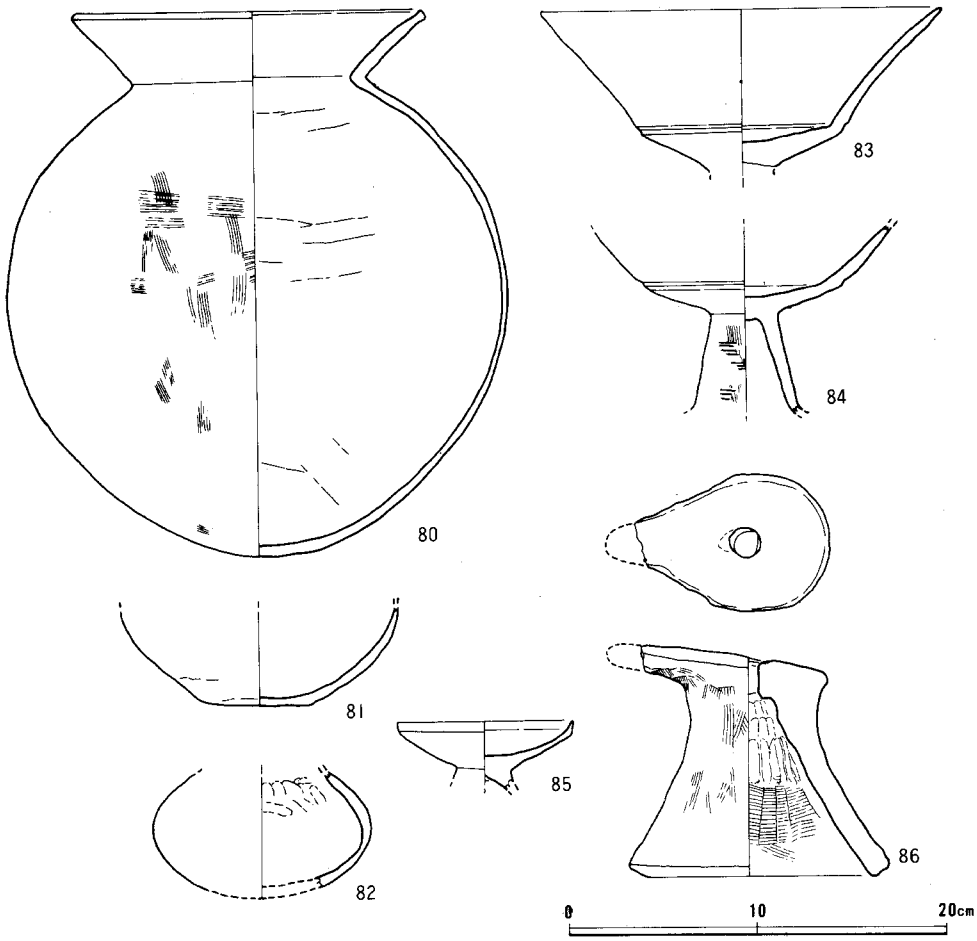


Fig. 50　ＳＥ102出土遺物実測図（1/4）

目調整が施される。胴部下半はナデ消されている。口縁部は外方へ開き、端部内側は僅かにつまみ出す。黄灰色を呈し、胎土に細砂粒を多く含むが密である。焼成はやや軟質である。81は弥生土器の混入品である。82は丸底壺、83・84は高坏である。83は口径21.2cmを測る。85は小型の器台である。口径9.3cm、坏高2.5cmを測る。赤褐色を呈し、胎土は精良で焼成も良い。86は沓形器台である。底径13.8cm、残高12.4cmである。孔径は1.6cmで、孔の周りはやや盛り上がっている。外面は赤褐色を呈し、胎土には砂粒を多く含む。ＳＥ102からは古式土師器がまとまって出土しており、古墳時代初めに位置づけられよう。

ＳＥ103（Fig.49・51、ＰＬ13・31）　Ⅱ区西側で検出した井戸で、平面形は略円形を呈する。径2.8ｍで窄りながら座へ移行する。井戸底は小さく、検出面からの深さは－４ｍである。西側は－2.1ｍと－2.9ｍの位置に階段状のゆるやかな段がある。半円形に窪んでおり、水を汲

み揚げる際に生じた窪みであろう。出土遺物は中世のものが主体である。87は湯釜である。復元口径17.7cm、残高8.5cmを測る。褐色を呈し、胎土には砂粒を少量含む。88は土師器椀である。口径8.5cm、器高3.6cmを測る。赤褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含む。混入品であろう。89は滑石製の権である。奈良時代の物と考えられるのでこれも混入品であろう。截頭四角錐で、高さ5.4cm、最大幅3.4cm、重量92.1gを測る。黒灰色を呈した滑石で、中心孔は0.4cmを測る。ややキズが付いているが完形品で、底面はよく擦れて使い込まれている。その他、同井戸からは滑石製の石鍋片も出土している。ＳＥ103は出土遺物から15～16世紀の時期ではないかと推察される。

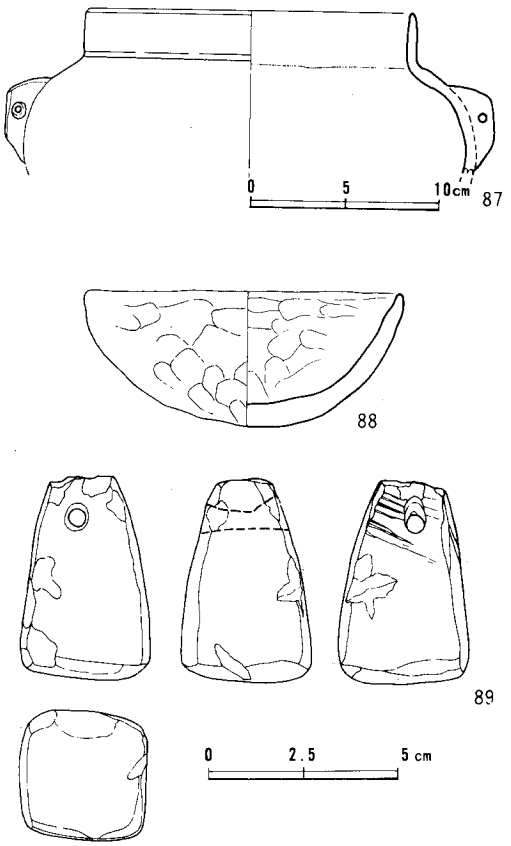


Fig. 51　ＳＥ102・103出土遺物実測図
(87・1/4, 88, 89・1/2)

6　溝

ＳＤ01 (Fig.52～78、ＰＬ.14～24・32～49)　調査区中央部を東西に横切る大型の溝である。東側は削平されて浅くなっているが、やや蛇行しながら西側へ続く。溝の最大幅は2.7m、深さ1.6mで、断面は逆台形を呈する。調査区内で長さ38m分を確認した。土層堆積は幾つかの層群に分かれており、Fig、52・53に示している通りである。西側では１を上層、２を中層上、３と４の上半を中層中、５・６を中層下、７・８を下層上、９以下を下層下として遺物を取り上げている。２～４には遺物が多量に含まれている。中央部では２・３を上層、４～８を中層上と中層中、９～11を中層下としている。上層は弥生中期末から後期前半の遺物を含む。破片が多く、青銅製鋤先、中広銅戈の鋳型はこの層群から出土している。中層上～中層中は中期後半から中期末の土器を多く含み、破片が大きく完形品も多い。中層下は基盤土の再流入土で中期後半の遺物を多量に含む。12～16は下層、17は基盤土を踏みつけた層、18は基盤土である。遺物の分布は集中する部分と散漫な部分がある。中央部が最も多く集中しており、東側と西側にもそれぞれ集中する地点がある。中央部には溝底に仕切溝様の小溝があって幅20cm前後、深さ10～30cmを測る。小溝と小溝との間隔は8.5cmで、この小溝に区画された

範囲内に筒形器台を含む祭祀土器や日常土器などが200個近く投入されていた。

Fig. 55から78はＳＤ01から出土した遺物群である。90～96は石包丁である。90・92・95・96は灰緑色の安山岩質凝灰岩ホルンフェルス、91・93・94は小豆色の輝緑凝灰岩を使用している。92・95・96は上層及び試掘溝から、90・91・94は中層上、93は中層下からそれぞれ出土している。97・98は磨製石斧である。97は既に用途を変更して敲打器に転用されている。上下端が潰れており、体部にも敲打痕が残る。２点とも安山岩製で97は上層、98は中層中から出土している。99・101は石鎌である。共に安山岩製で99は中層上、101は中層中の上の方から出土している。101は全長24.7cm、幅６cm、最大厚0.9cmを測り、重さは230ｇである。基部の長さは7.

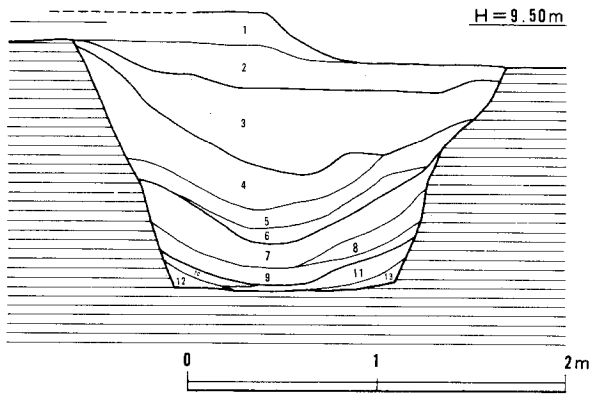


Fig. 52　ＳＤ01西側土層断面実測図（1/40）

西側土層名称

1　黄灰褐色粘質土
2　暗茶褐色粘質土
3　黒褐色粘質土
4　暗茶褐色粘質土(2・3よりも粘性が少ない)
5　暗茶褐色粘質土(カーボン含む)
6　暗茶褐色弱粘質土(カーボンを多く含む)
7　黄茶褐色粘質土(暗茶褐色粘質土、黄褐色粘質土のブロック堆積。溝掘り上げ土の流入土か)
8　暗茶褐色粘質土(7より暗茶褐色土の割合が高く粘性が少ない。細かな黄色土のブロック含む)
9　暗茶褐色弱粘質土
10　茶褐色弱粘質土(基盤の再堆積土か)
11　黄茶褐色弱粘質土(基盤の再堆積土か)
12　黄褐色粘質土(基盤の土とほぼ同じ)
13　暗茶褐色弱粘質土(8よりやや黄味を帯びる)

中央部土層名称

1　黒色土(古墳時代掘立柱建物の柱穴)
2　黒褐色土(固結)
3　暗褐色土(固結)
4　暗黄褐色土(黄褐色の細かな粘土粒子を含む)
5　暗黄褐色土(黄褐色の細かな粘土粒子を含む)
6　黄褐色土(粘土ブロック)
7　暗黄褐色土(黒色味が強い。黄褐色の細かな粘土ブロック含む)
8　暗黄褐色土(やや黒色味の部分がある。黄褐色の細かな粘土ブロック含む)
9　黄褐色土(1～3cmのブロック状)
10　黄褐色土(やや黒味を帯びる。粘土ブロック含む)
11　黄褐色土(粒子が細かく、やや茶味を帯びる)
12　黒褐色～暗茶褐色土(黒色味が強い。ある時期の溝底であったか。細かなザラついた粒子状)
13　暗茶褐色土
14　暗茶褐色土(ザラついた粒子状の土。溝形成後、雨水等によって最初に流れ込んだ土)
15　暗茶褐色土(やや黒味が強い。ザラついた粒子状の土)
16　暗茶褐色土(やや茶味を帯びる。ザラついた粒子状の土)
17　暗黄褐色土(基盤土と黄褐色粘土の大きなブロック状堆積土。溝掘削時に踏みつけた土か)
18　暗黄茶褐色土(白色の粒子及び脈がはいる。風化の進んでいない火山灰層)

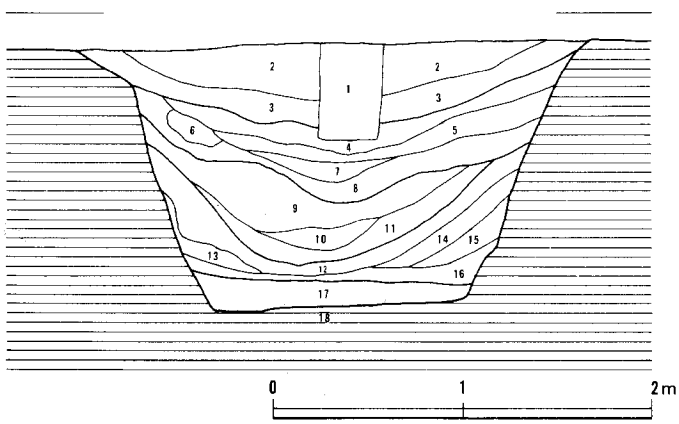


Fig. 53　ＳＤ01中央部土層断面実測図（1/40）

Fig. 54　ＳＤ01遺物出土状況実測図（1/60）

4cmで、剝離によって調整されている。刃部は研磨が施され、研磨痕が一部に残る。100は緑色変岩の扁平打製石斧である。中層上から出土している。古い時代のものが混入したものであろう。102は頁岩製の扁平片刃石斧である。表面の風化が激しい。103は石剣の先端部である。頁岩製か。102は中層中～下、103は中層下から出土している。混入品であろう。104は磨製石鏃である。全長4.7cm、重さ３ｇで灰黒色の頁岩製である。中層中～下から出土している。105～113・120・125は砥石である。様々なタイプがある。用途によって使い分けられていたのであろう。105・111は頁岩製、他は砂岩製である。109・113・120・125は上層出土、106・108・111は中層上からの出土である。111は仕上げ用の砥石であろう。107・110・112は中層中からの出土、105は中層下からの出土である。114は３面が砥石、１面が窪石として使用されている。流紋岩か石英長石斑岩かであろう。中層中から出土している。窪石は他に２点出土している。117と118である。ともに砂岩製で、上層からの出土である。118の側縁は敲打器としても使用されている。115・116・119は敲打器である。115は花崗岩製で中層上からの出土である。両端と両側、両面に敲打痕が観察される。116は粒子の細かい砂岩製、119も砂岩製である。共に上層からの出土である。121は滑石製の加工品である。推定径６㎜の孔の痕跡が観察されるので、石製紡錘車の再加工品ではないかとみられる。上層出土。122は水晶玉の未製品か。断面六角形の結晶体の各稜を面取り状に擦り磨いている。中層中からの出土である。123は緑色変岩製の線刻石製品である。全長4.7cm、上端及び下端は削りによる抉り込みがみられる。右側縁に５本の短い刻目を施す。表面には直線と弧線を組み合わせた線刻が観察される。裏は剝離していて不明である。中層中～下から出土している。124は頁岩製の紡錘車である。径5.2cm、厚さ0.6cm、孔径0.8cmを測る。端正な作りである。上層から出土。126は大型石錘の未製品か。緑泥変岩製で削り痕が観察される。中層上出土。172は中広銅戈の鋳型片である。関から茎にかけての部分で、残存長3.6cm、残存幅8.2cm、、残存厚2.9cmを測る。石材は乳白色を呈し、石英長石斑岩であろう。両面とも型が掘り込まれ、黒変している。破損後は砥石に転用されている。側縁には紐かけ用か、窪みがみられる。関の長さは復元すると13cm前後になる。上層下と中層上の境の部分で出土している。

青銅製品は、鋤先が１点出土している。171は、幅8.4cm、長さ6.1cm、最大厚2.0cmを測る。内法は7.1×1.0cmで、ややひろがっいる方が1.2cmである。両面には多数の使用痕が観察され、実用の鋤先と考えられる。上層と中層上の境の部分で出土している。

土製品には、紡錘車、杓、投弾がある。128は径4.7～4.8cmの紡錘車である。最大厚1.9cm、重量は45.5ｇである。中層中から出土している。129は土製杓で174の甕形土器の内部から出土した。全長10.8cmで、明褐色を呈し、胎土は精良である。焼成は堅緻で、整形時の指おさえの跡が残る。中層上からの出土である。130～166は投弾である。一度にまとまって出土したことは重要である。10.2ｇから13ｇ前後の小型品、16.8ｇから20.5ｇ前後の中型品、22.6ｇから26.

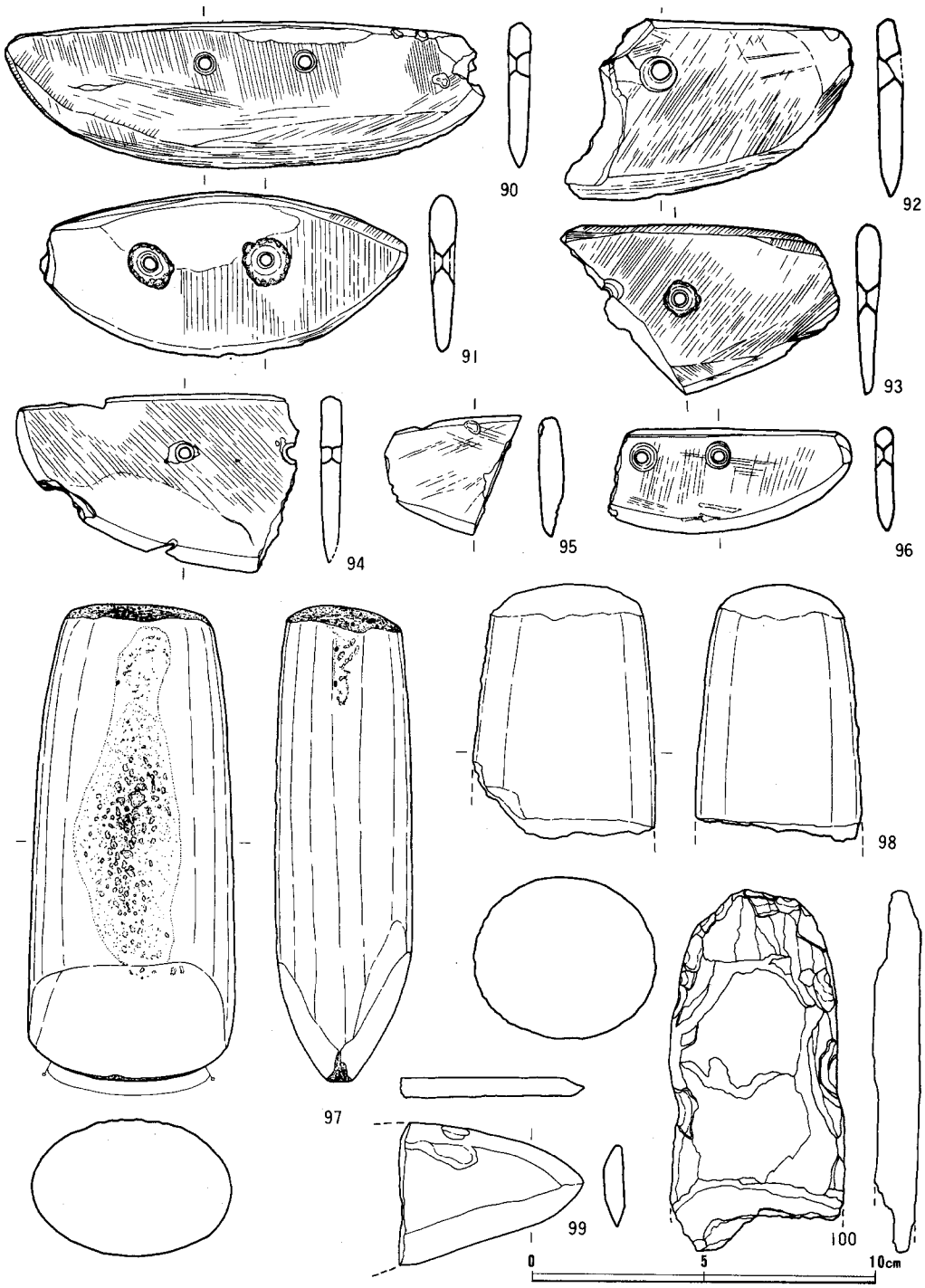


Fig. 55　ＳＤ01出土遺物実測図１（石器）(1/2)

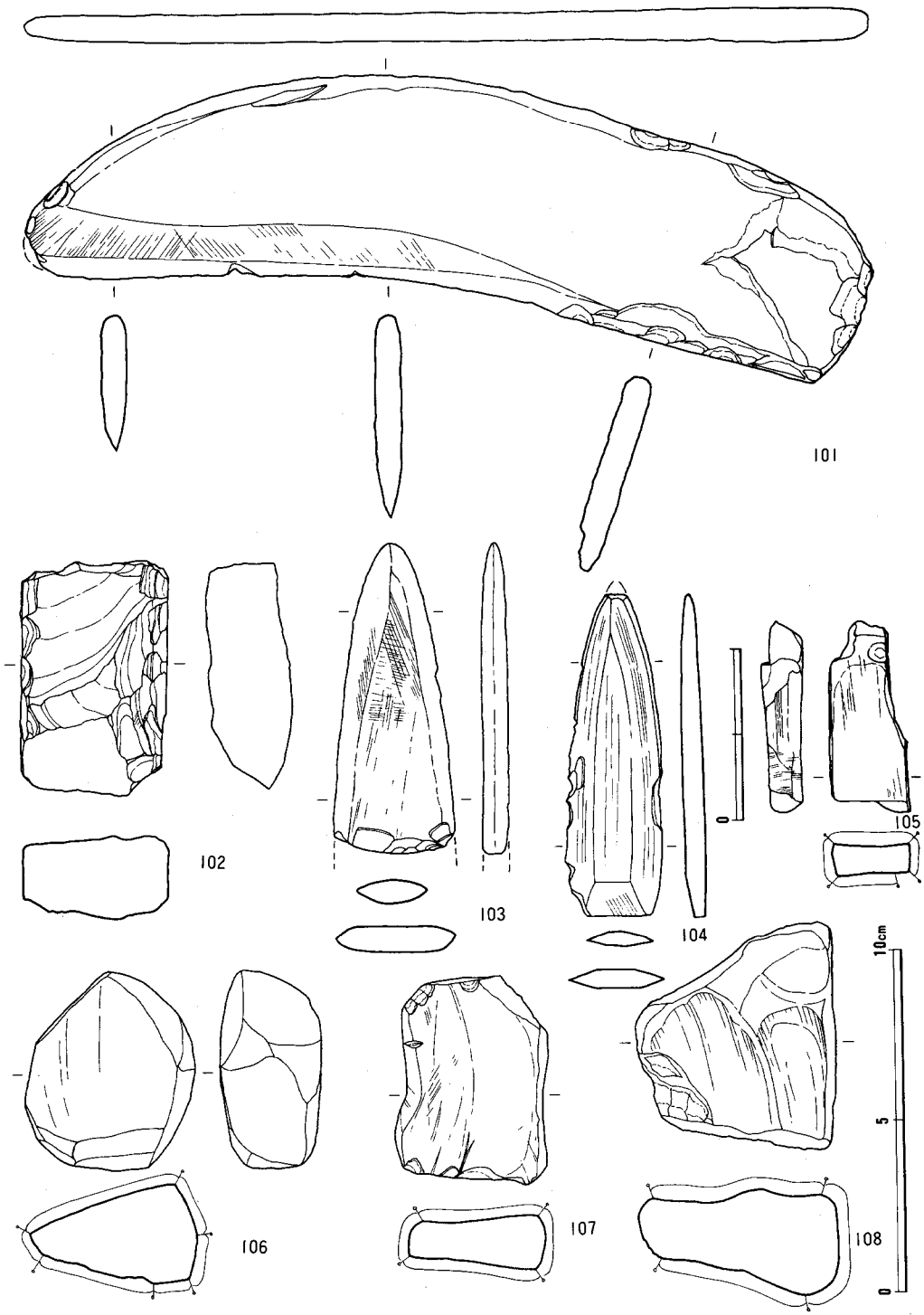


Fig. 56　ＳＤ01出土遺物実測図２（石器）（104・1/1，101～103．105～108・1/2）

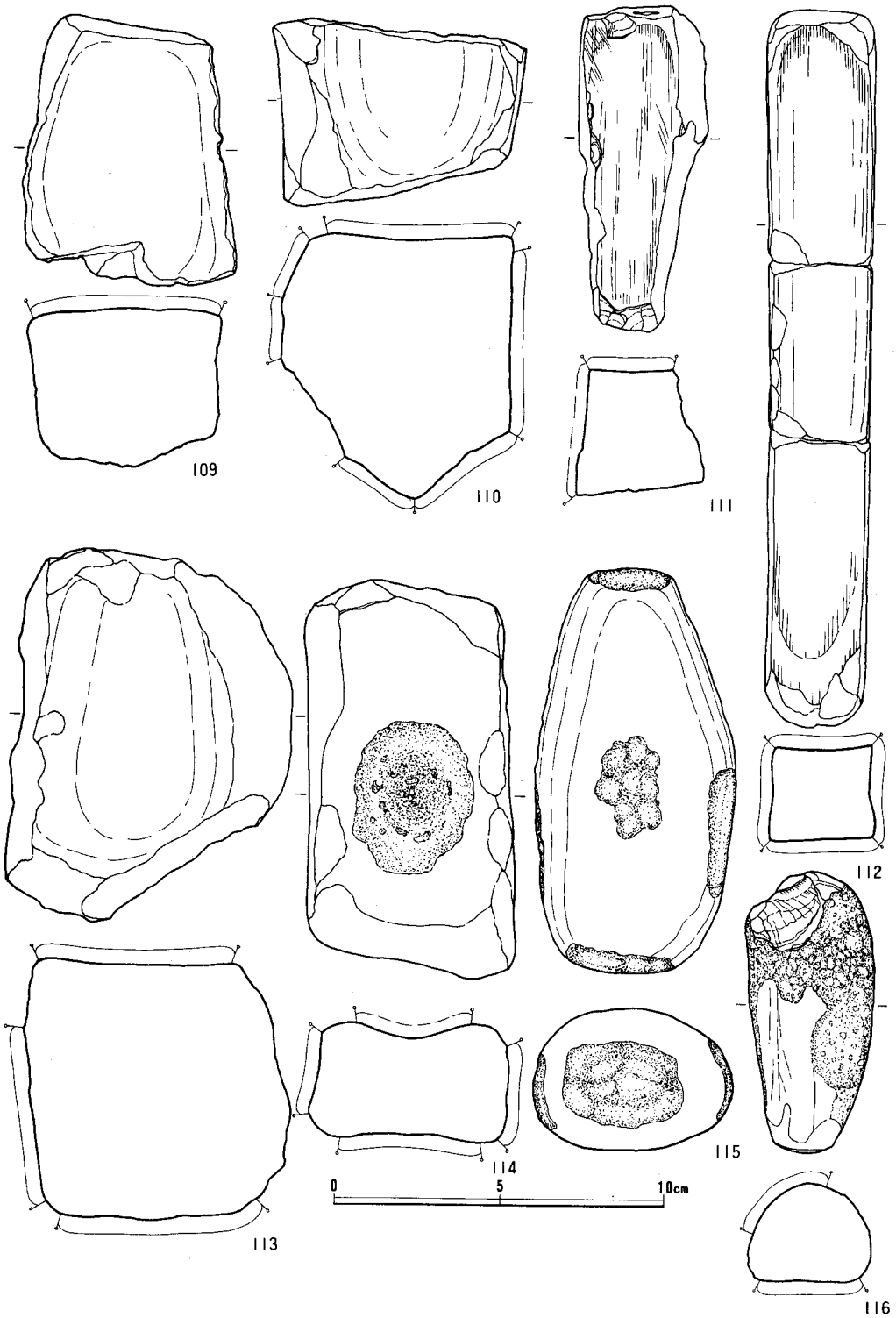


Fig. 57　ＳＤ01出土遺物実測図３（石器）(1/2)

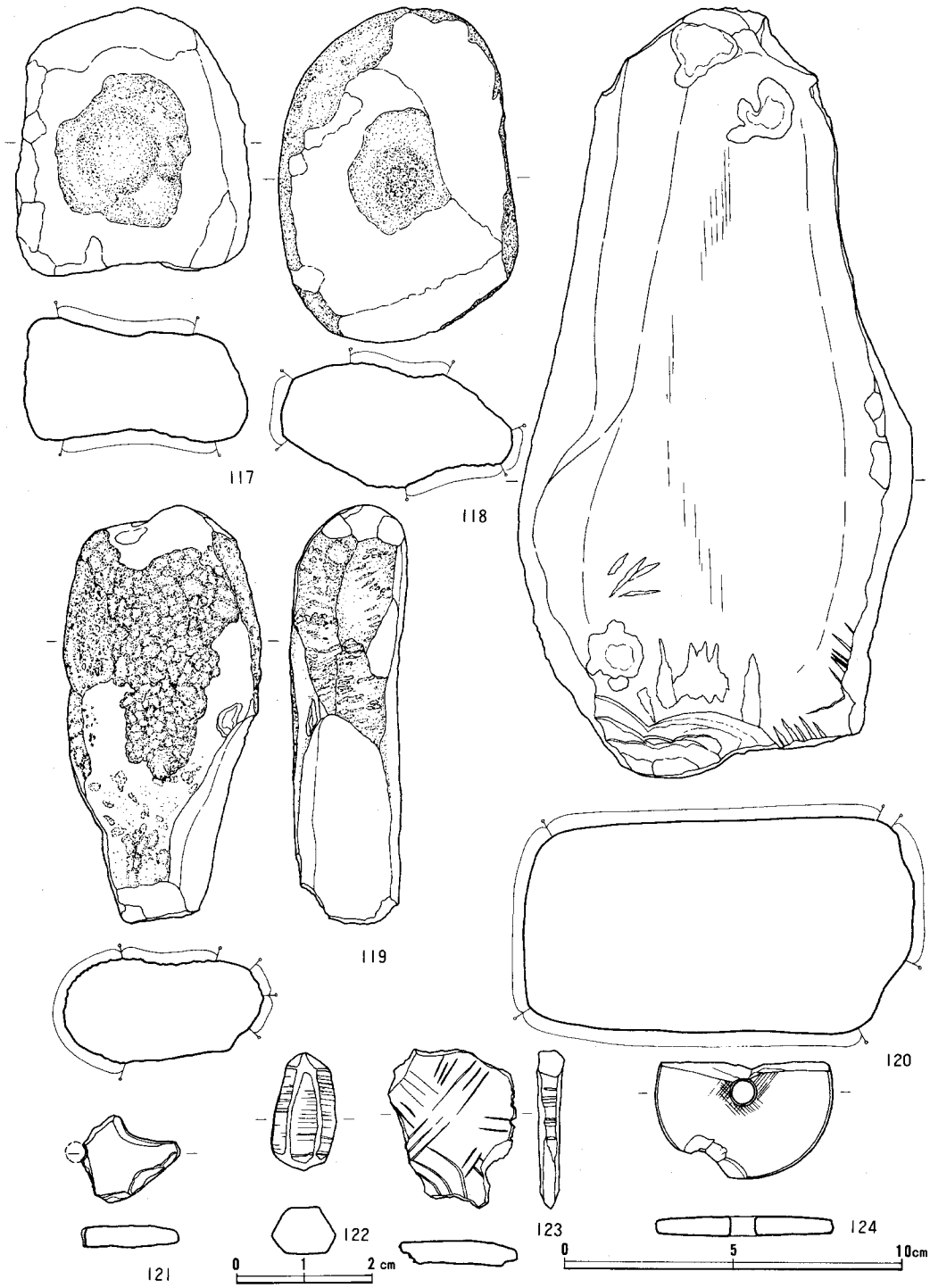


Fig. 58　ＳＥ01出土遺物実測図４（石器・石製品）（122・1/1，117～121．123．124・1/2）

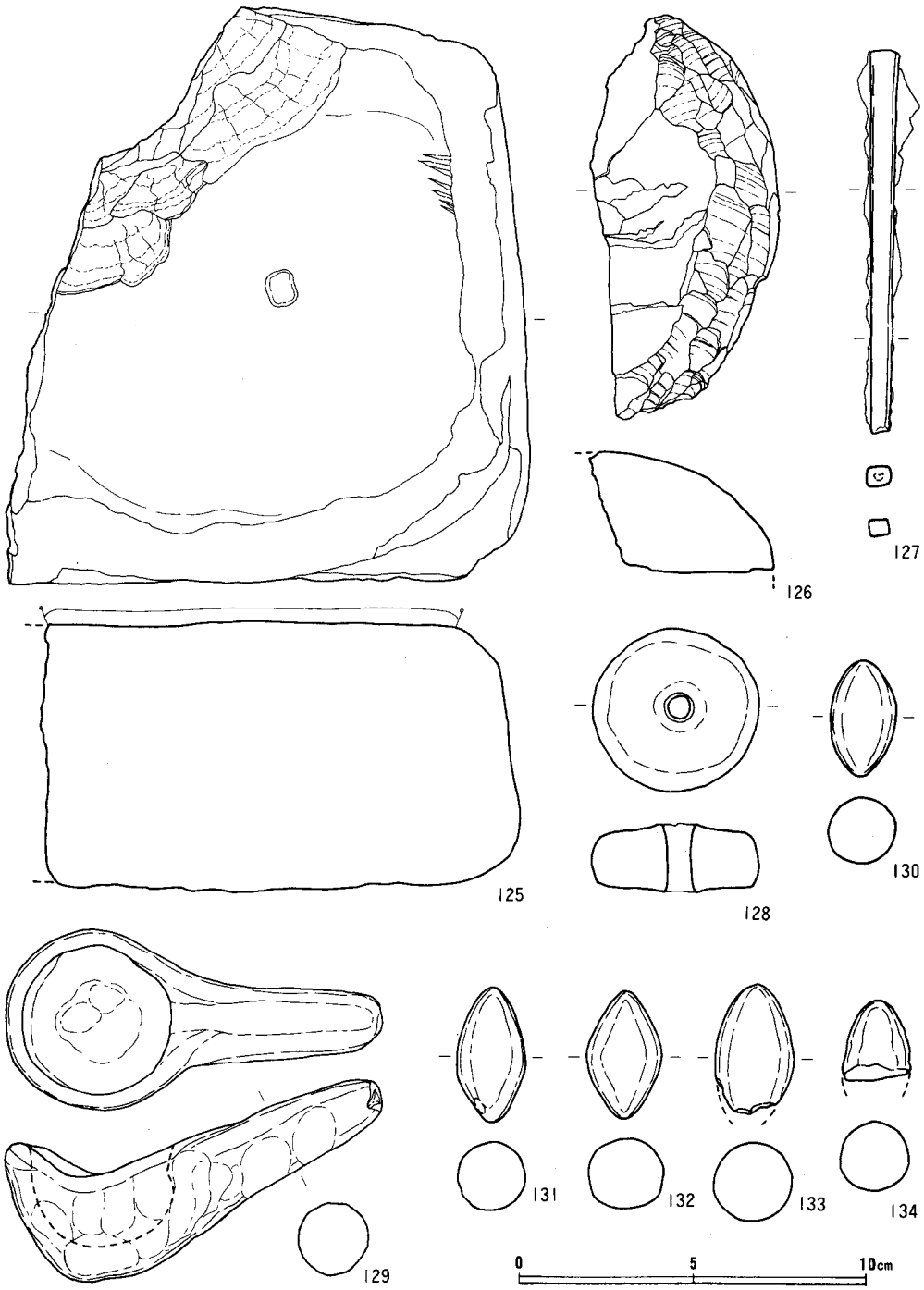


Fig. 59　ＳＤ01出土遺物実測図５（石器・石製品・土製品・鉄器）(1/2)

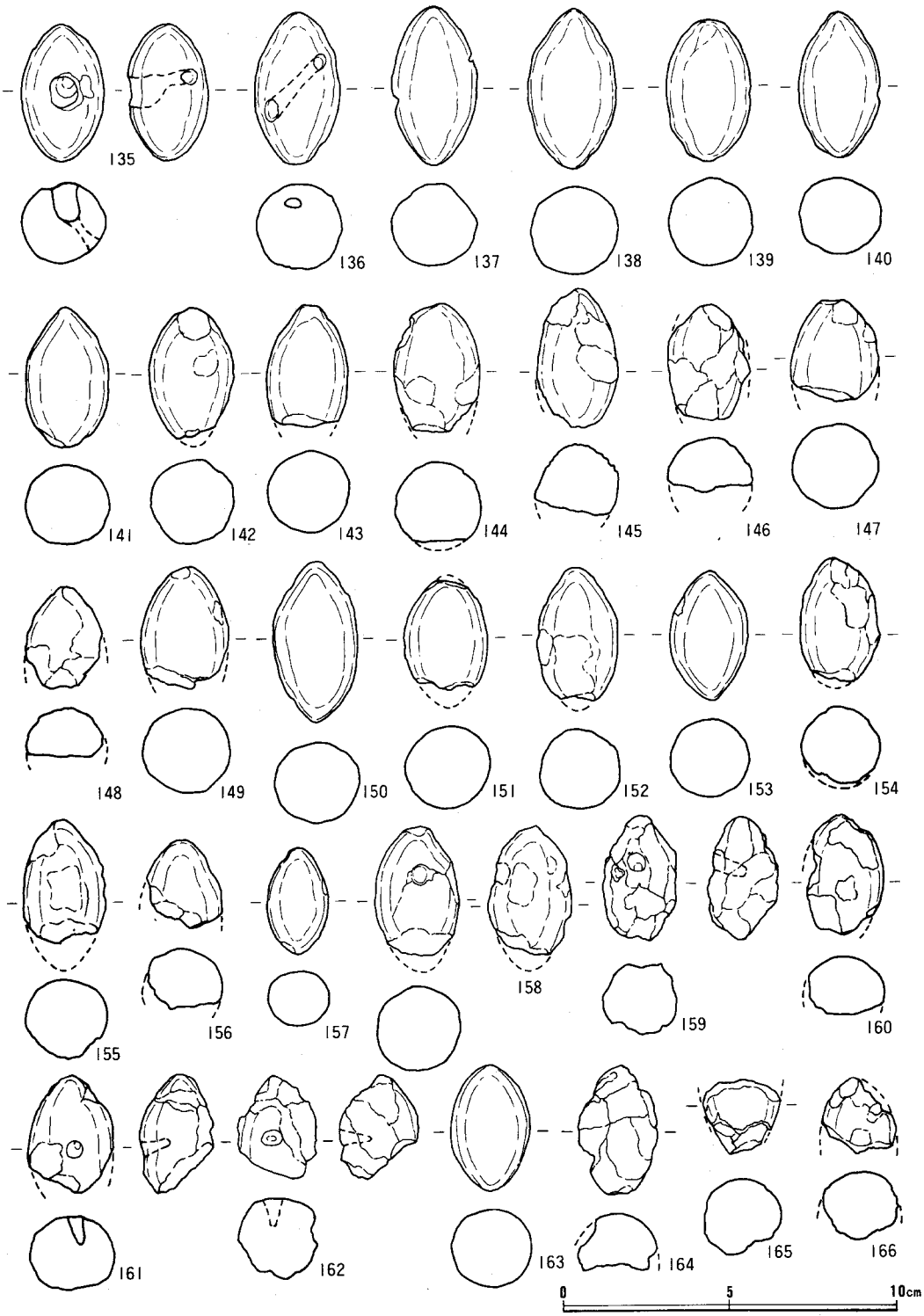


Fig. 60　ＳＤ01出土遺物実測図６（土製品）(1/2)

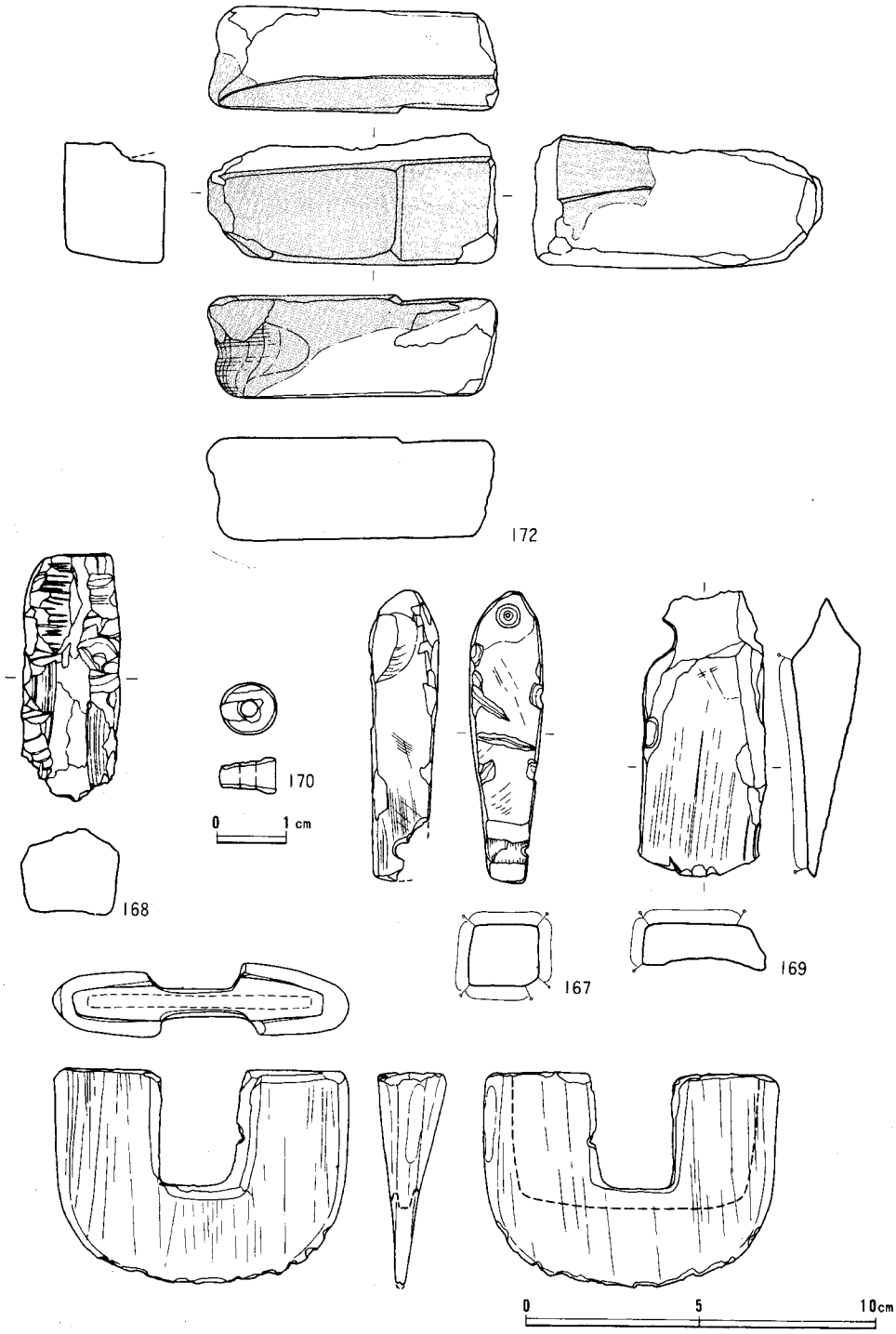


Fig. 61　ＳＤ01・ピット群出土遺物実測図　（170・1/1　167～169　171～172・1/2）

.9ｇ前後の大型品に大別できる。小型品は焼きの良いものが多い。135・136は胴部に孔が貫通している。飛ばす時に音を発生させるものではないかと考えたが、明確な音は出ない。158・159・161・162は途中まで孔が開いている。130～135・137・139は中層下出土。136・138・140～149は中層中～下、150～162は中層中、163～166中層上からそれぞれ出土している。

173～188は東側の中層上でまとまって出土した土器群である。173・174は瓢形土器である。173の肩部には「ノ」の字状の貼付文が施される。174は口径21.8cm、器高42.9cmを測る。共に外面には丹塗りが施される。174の体内から土製杓が同時に出土している。175は鋤先状口縁を持つ壺で、口縁端部には刻目を施す。頸部に１条、胴部に３条の断面M字状の突帯を巡らす。176は無頸壺、177は蓋である。178は胴部に三角突帯を巡らす壺である。179～181は鉢形の土器である。180と181には丹塗りが施される。182は厚い作りの支脚であろう。183は倒卵形の胴部に直口状の口縁を持つ壺である。口径17.2cm、器高50.8cmを測る。184は丹塗りの高杯である。185と186はセットになると考えられる蓋と甕である。形態的にはやや古そうである。187は口縁端部をやや肥厚させる逆Ｌ字口縁を持つ甕である。188も逆Ｌ字口縁を持つ甕である。胴の張りが強い。

189・191・192は東側中層下で一括して出土した土器群である。これにくの字状の口縁を有し、頸部に三角突帯を１条巡らす中型の甕が伴う。189は大型器台である。口径18cm、底径30.8cm、器高46cm（復元）を測る。明褐色を呈し、胎土に１～６mm大の石英、長石砂を含む。191は鋤先状口縁を有する壺で、頸部に三角突帯、胴部に２条のM字突帯を巡らす。この壺は189は器台に載せられていたのではなかろうか。192はくの字状口縁を持つ甕である。

190は東端部で単独に出土した筒形器台である。上径19.7cm、底径37.1cm、残高70.7cmを測る。淡褐色を呈し、胎土は精良である。鍔より上部を欠失する。外面上部は指おさえ、筒部はヘラ状工具によるナデ、脚部には細かい刷毛目が見られる。内面脚端部はヨコナデ、筒部内面は粗い指おさえが観察され、凹凸が激しい。本来は全体が丹塗りであったらしく、脚端の一部に丹塗りの痕跡が残っている。

193～242・253は中央部中層下で集中して発見された土器群である。193・194は逆Ｌ字状口縁を有する壺である。頸部と胴部の境に三角突帯を１条巡らす。195・196は鋤先状口縁を持つ壺である。195には肩部に「ノ」の字状の貼り付け文を有する。197・199は無頸壺、198は無頸壺の蓋である。197には丹塗りが施される。200・201は丹塗りの袋状口縁壺、202は丹塗りの広口壺である。頸部に暗文を有する。203～205は小型の壺である。206～208は直口気味の口縁に倒卵形の胴部を有する壺である。208は頸部と肩部との境にM字状の突帯を巡らす。丹塗りも施されている。209はくの字状の口縁を有し、胴の張る甕の底部である。丹塗りが施される。210は瓢形土器、211・212は樽形の壺である。これらの外面には丹塗りが施される。213～215は鉢形の土器である。216は鋤先状口縁を有する丹塗りの甕である。口縁端部に刻目を施し、

頸部と胴部にM字状突帯を巡らす。217～226はくの字状口縁を有する甕である。217は胴が張り丸味がある。219は口径25.5cm、高さ30cmで、胴部に10×13cmの丸窓を開ける。窓は焼成前にヘラで切り取って開けられている。220は鉢形に近い器形をとる。221の口縁内面には数本の短沈線が入れられる。227はハネ上げ状の口縁を持つ甕である。228～233もくの字状口縁を持つ甕である。228・229は中型である。228には口縁下に、229には胴部に三角突帯が巡る。233は底部中央を穿孔できるようにあらかじめ薄く作り、焼成後穿孔されている。234と239は小型の鉢形土器である。235は、中央土器群に組み合わさる大型器台である。口径19.8cm、底径36.3cm、器高57.5cmを測り、胎土は明褐色で石英、長石、雲母の細かい砂粒を少量含む。口縁端部には刻目を施し、口縁下にM字状の退化した突帯を巡らす。外面には丹塗りが施され端正な作りである。丹塗りの広口壺と一緒に使用されたものであろう。236は中型の甕、237・238・241・242は器台である。240は甕棺用の大甕である。胴部以下を打ち欠いて調整している。口縁下と胴部に２条の太い三角突帯が巡る。口径55.8cm、残高50.3cmである。253は丹塗りの広口壺である。頸部に暗文が施されている。

243～245は、西側の中層下で一括して出土した土器群である。243は口径20.9cm、器高35.1cmを測る鋤先状口縁壺である。口縁上端に４箇所円形浮文を貼付する。口縁下に三角突帯１条、頸部と胴部にM字状突帯をそれぞれ２条づつ巡らす。器面が荒れて器壁が薄くなっているが、本来は全面に丹が塗ってあったものとみられる。244は倒卵形の壺、245は胴部が丸味を持つくの字状口縁の甕である。

246～315は各層から出土した、取上げ番号を付していない土器群である。246は底部穿孔の鉢形土器である。下層上出土。247～250は下層上から出土した器台と支脚である。251・252は中層下から出土した支脚である。254～263・267・268・269も中層下から出土した土器群である。254・255は無頸壺、256は袋状口縁壺、257・258は高杯である。全て外面に丹塗りが施される。259・260は鉢形土器、261は頸部の締った壺である。口径15.6cm、胴径35.5cmである。262は器台、263は沓形器台である。器台を半分に切ってフタをし、小さな突起を貼り付けた初源的なものである。267は支脚、268はくの字状口縁を有する甕、269は甕棺用の大甕である。口径65.4～65.6cm、復元胴径73cmである。褐色を呈し、口縁下に三角突帯１条、胴部にコの字状に近い突帯を２条巡らす。中期後半代のものである。264～266は中層中で出土した支脚である。270～288・299・307は中層中から出土した土器群である。270は丹塗りの広口壺である。頸部に暗文を施す。271は袋状口縁壺であるが層位がはっきりしない。上層に近い部分での出土であろう。272・273は丹塗りの無頸壺の蓋と壺本体である。274～276は袋状口縁壺である。274と275には丹塗りが施され、275は端正な作りである。277は円筒形の胴の長い壺である。口径16.4cm、残高27.1cm、胴径22.9cmを測る。褐色から明褐色を呈する。胎土には１㎜前後の石英は・長石砂を含む。口縁下に太い三角突帯を巡らし、外面には刷毛目調整が施される。278

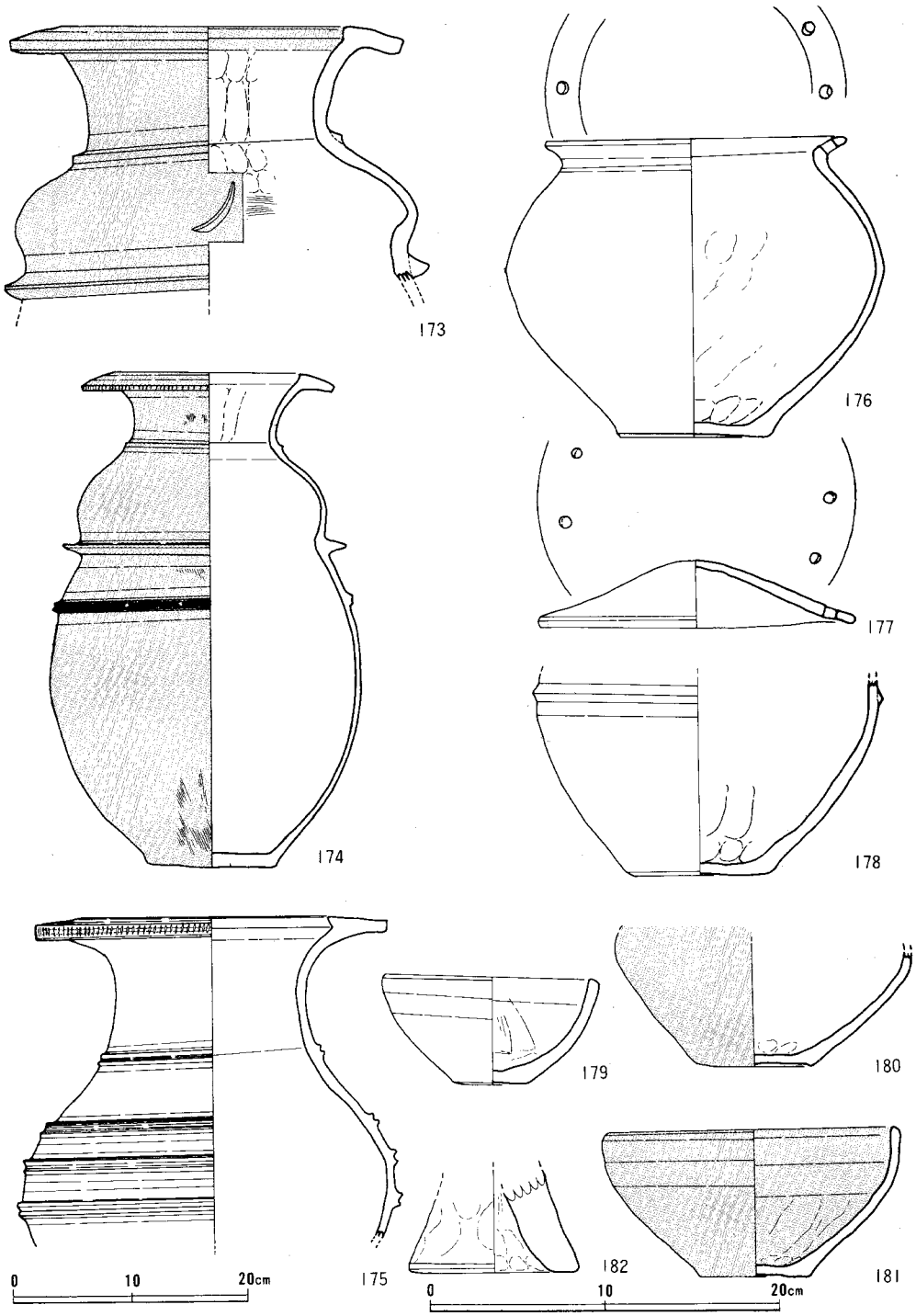


Fig. 62　ＳＤ01出土遺物実測図（173，176～182・1/4，174，175・1/6）

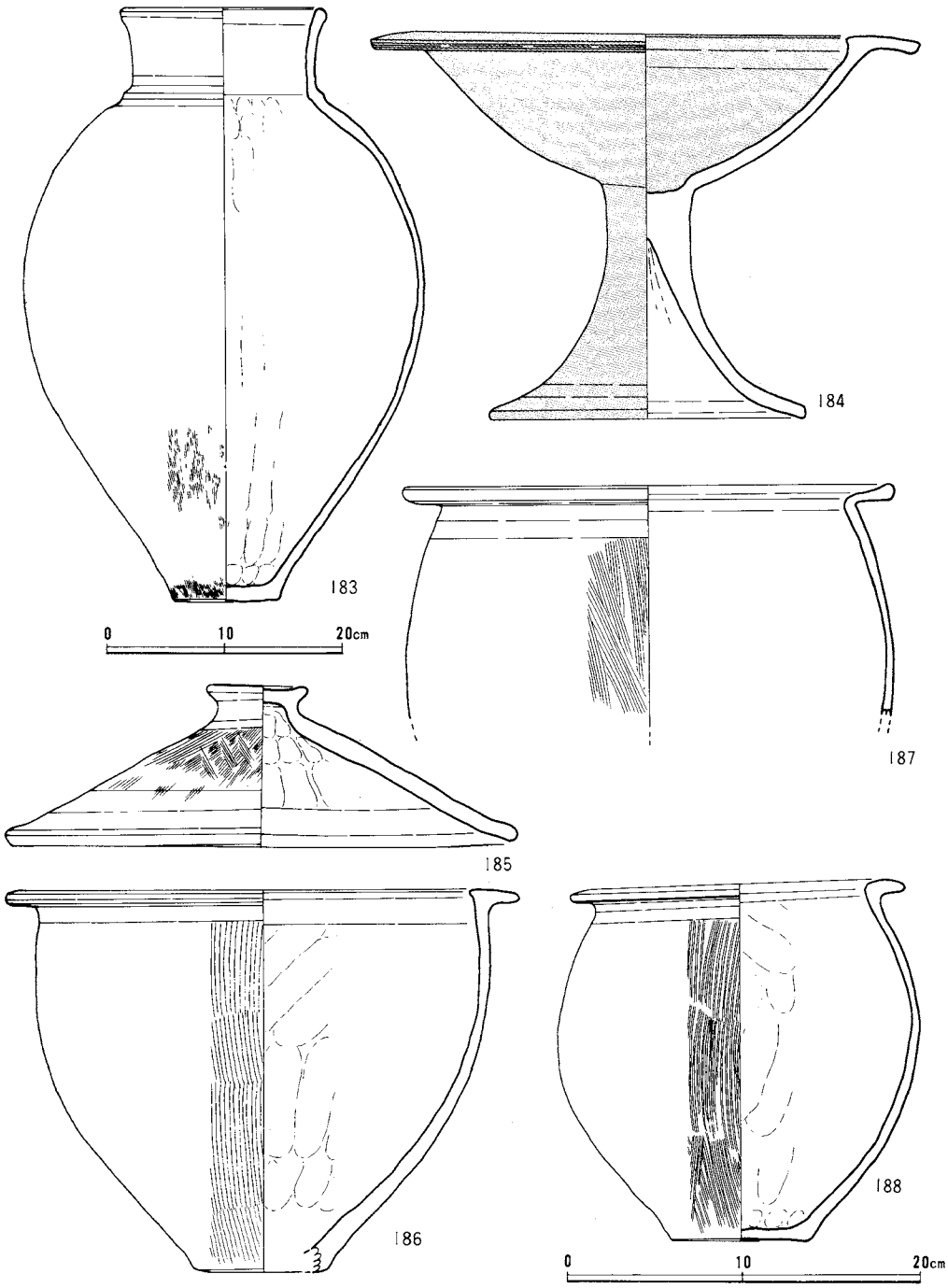


Fig. 63　ＳＤ01出土遺物実測図（184～188・1/4，183・1/6）

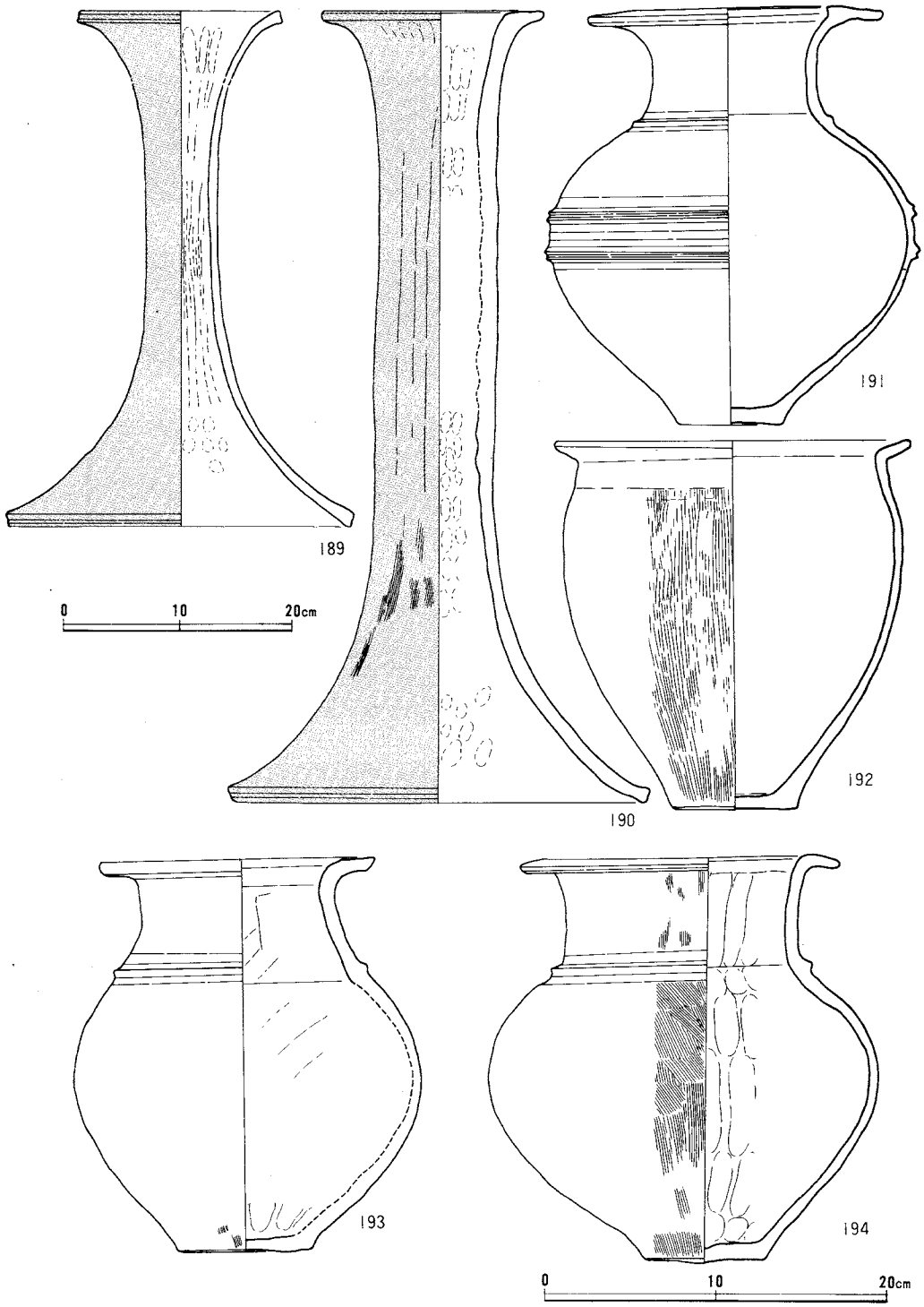


Fig. 64　ＳＤ01出土遺物実測図（189～191・1/6，192～194・1/4）

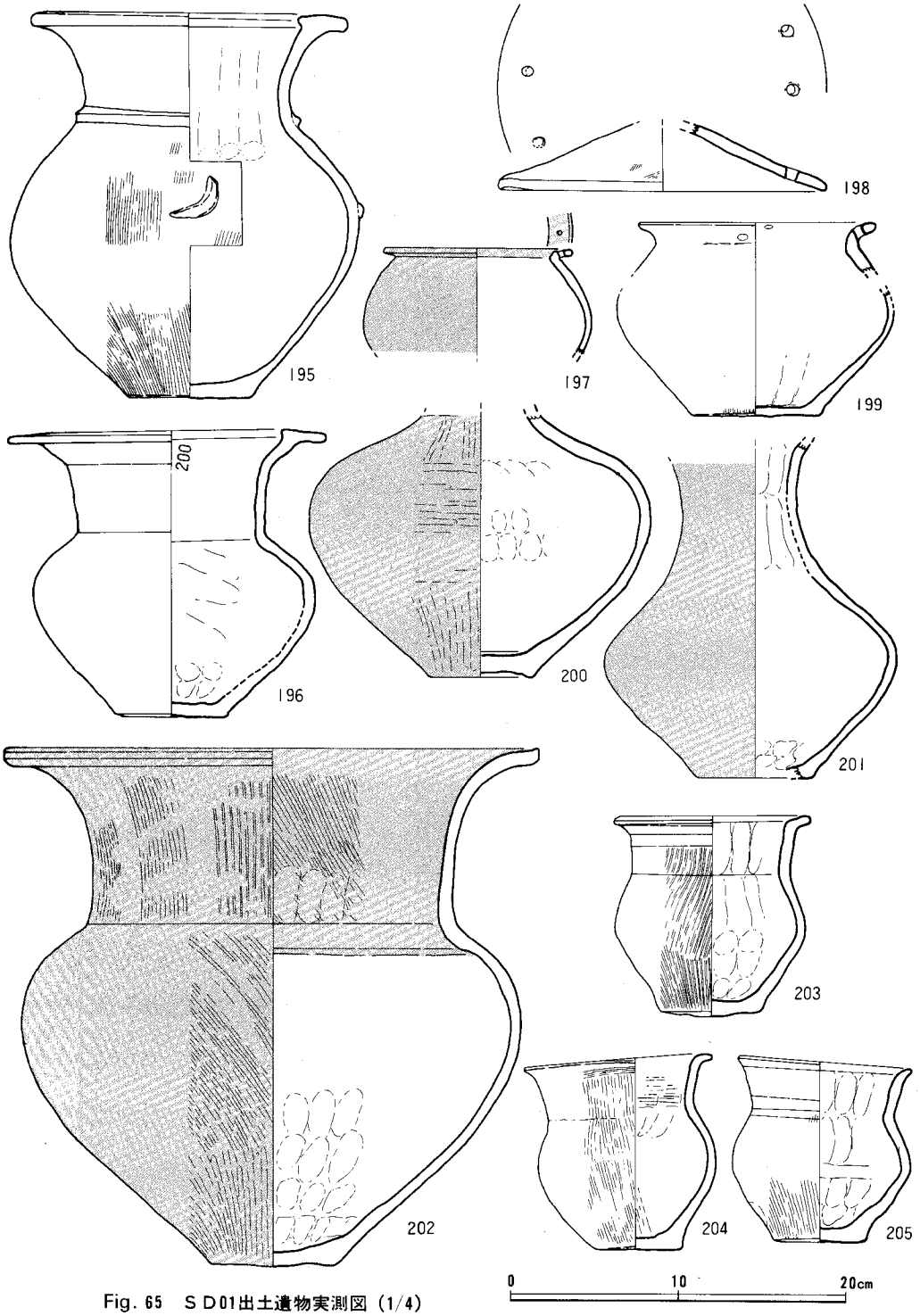


Fig. 65　ＳＤ01出土遺物実測図（1/4）

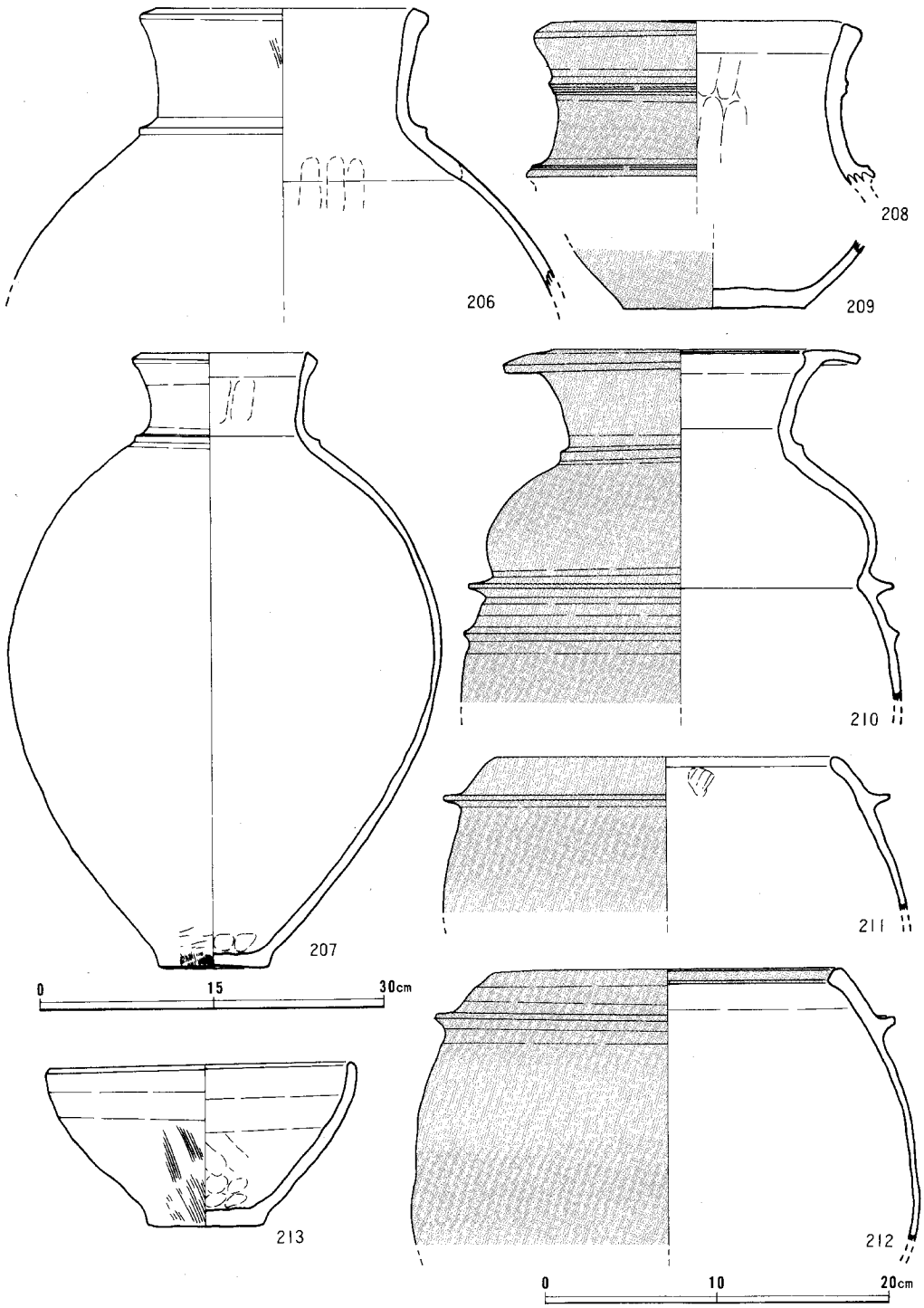


Fig. 66　ＳＤ01出土遺物実測図（206，208～213・1/4，207・1/6）

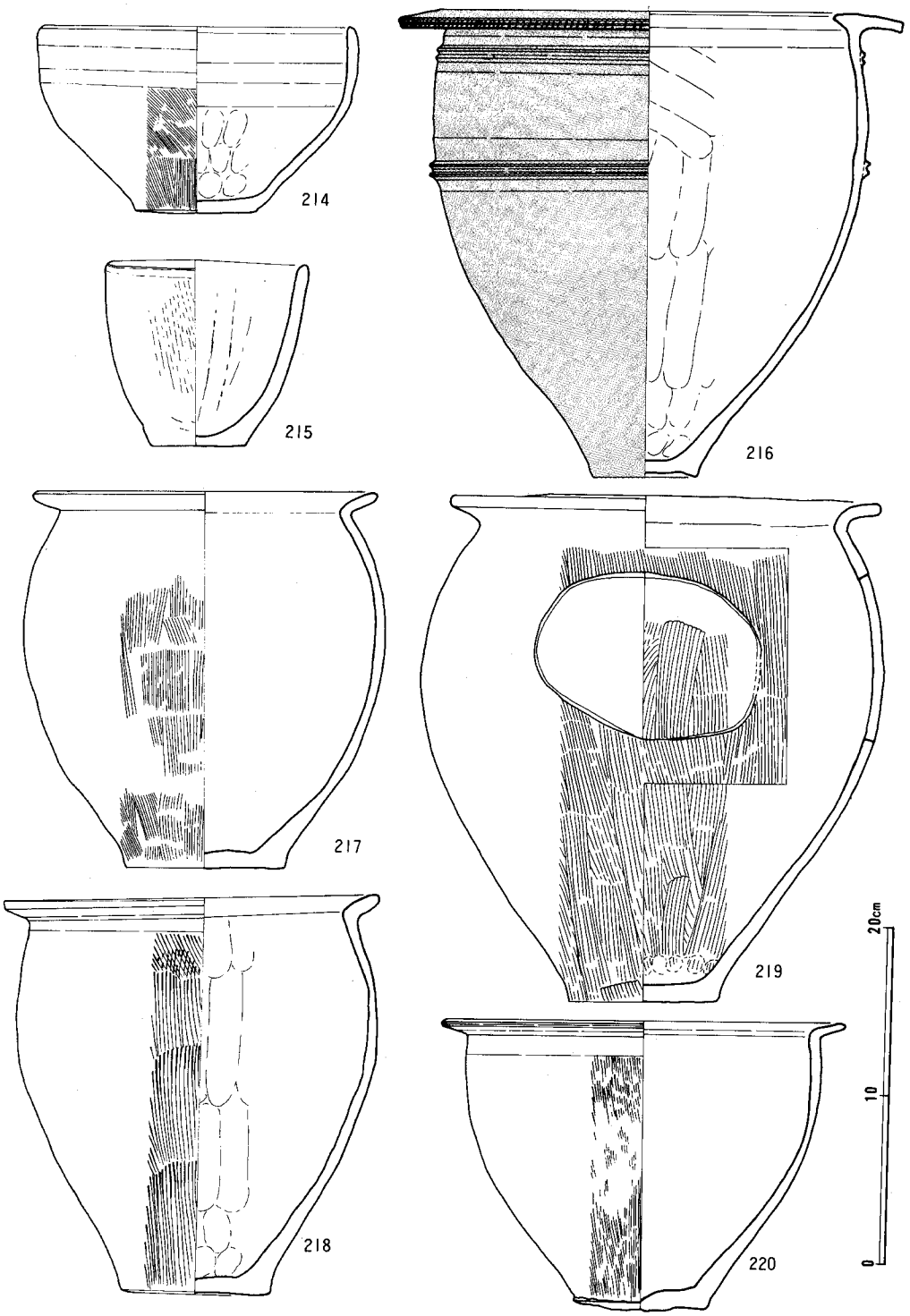


Fig. 67　ＳＤ01出土遺物実測図（1/4）

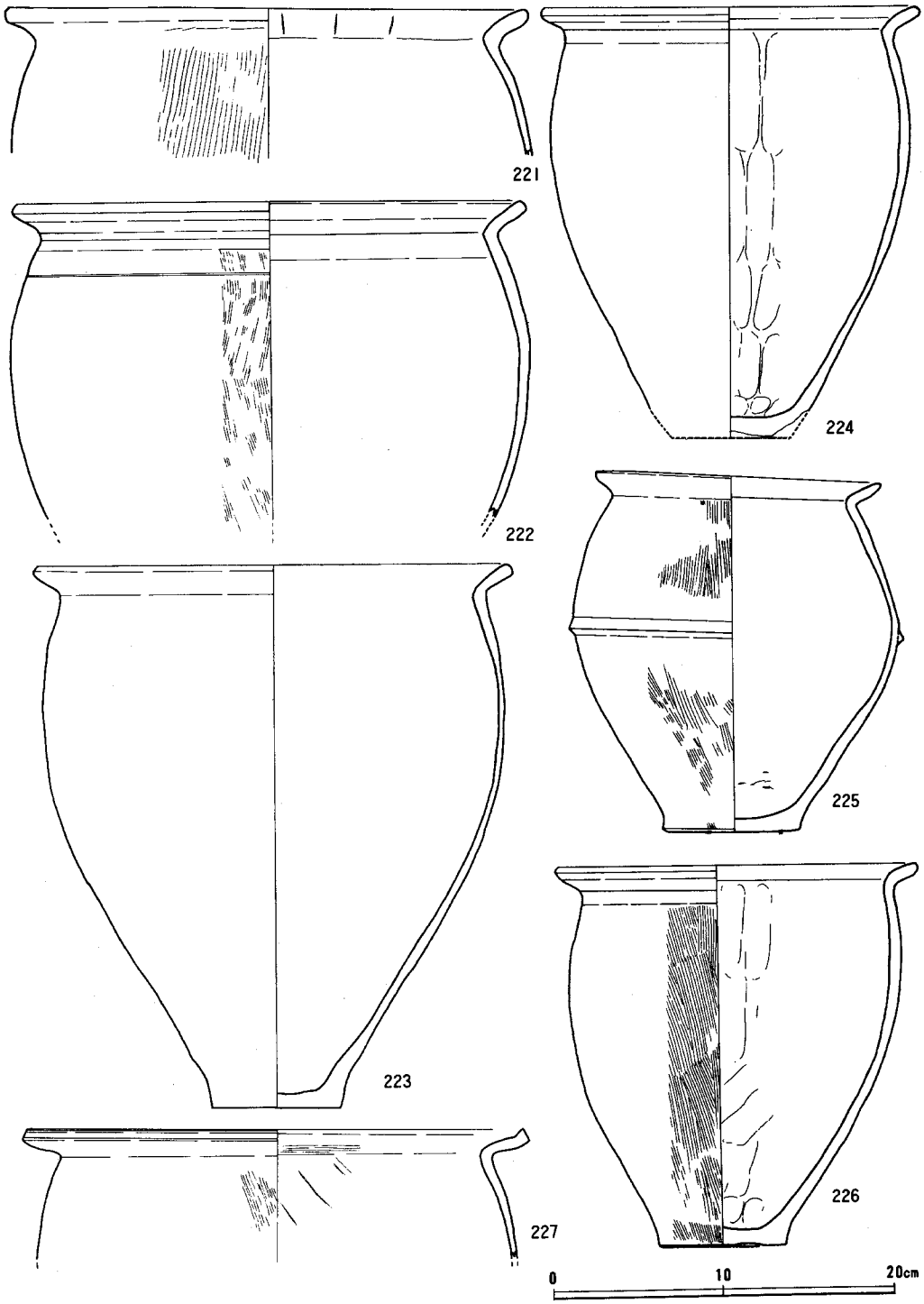


Fig. 68　ＳＤ01出土遺物実測図（1/4）

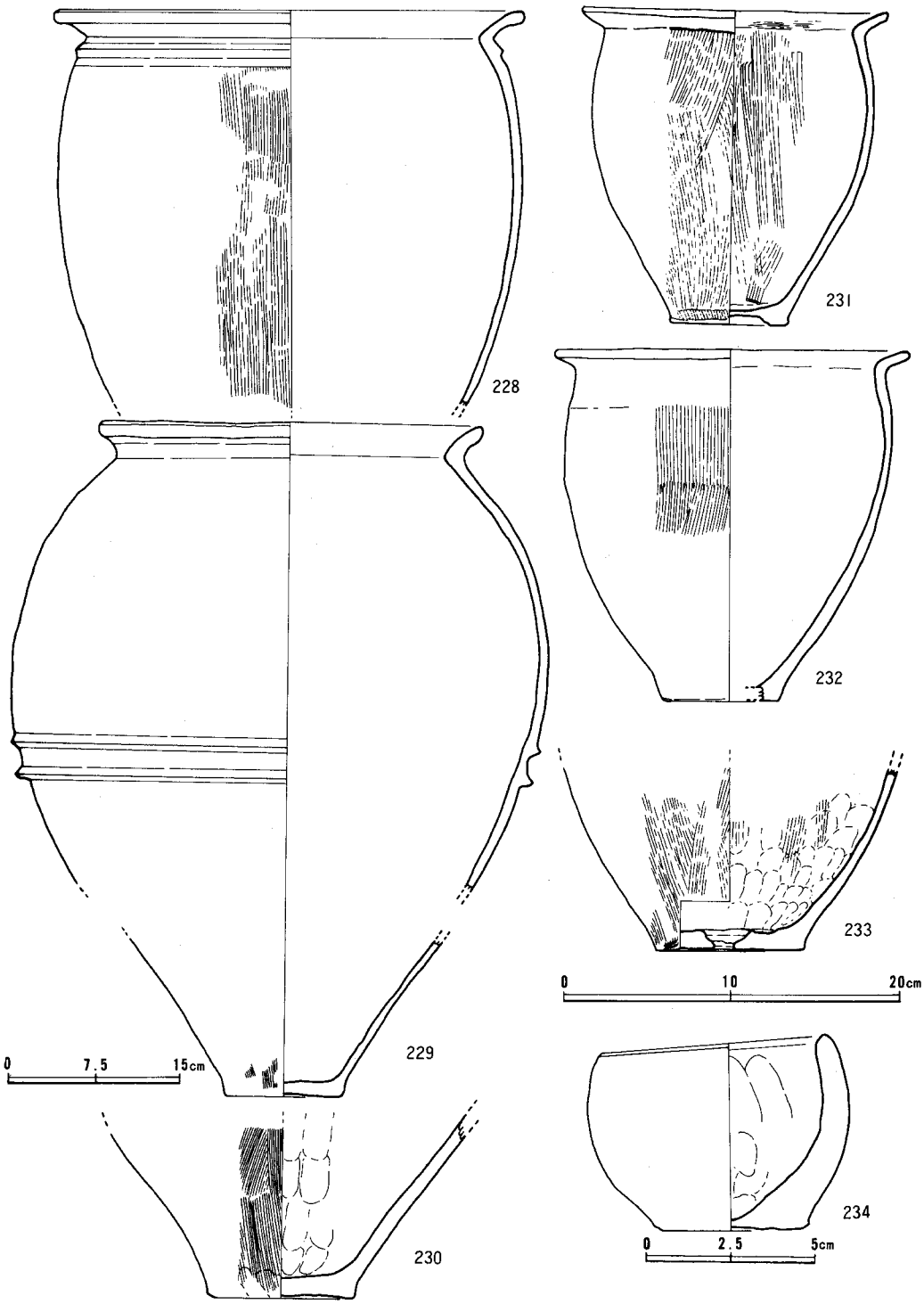


Fig. 69　ＳＤ01出土遺物実測図（228．229・1/6，230～233・1/4，234・1/2）

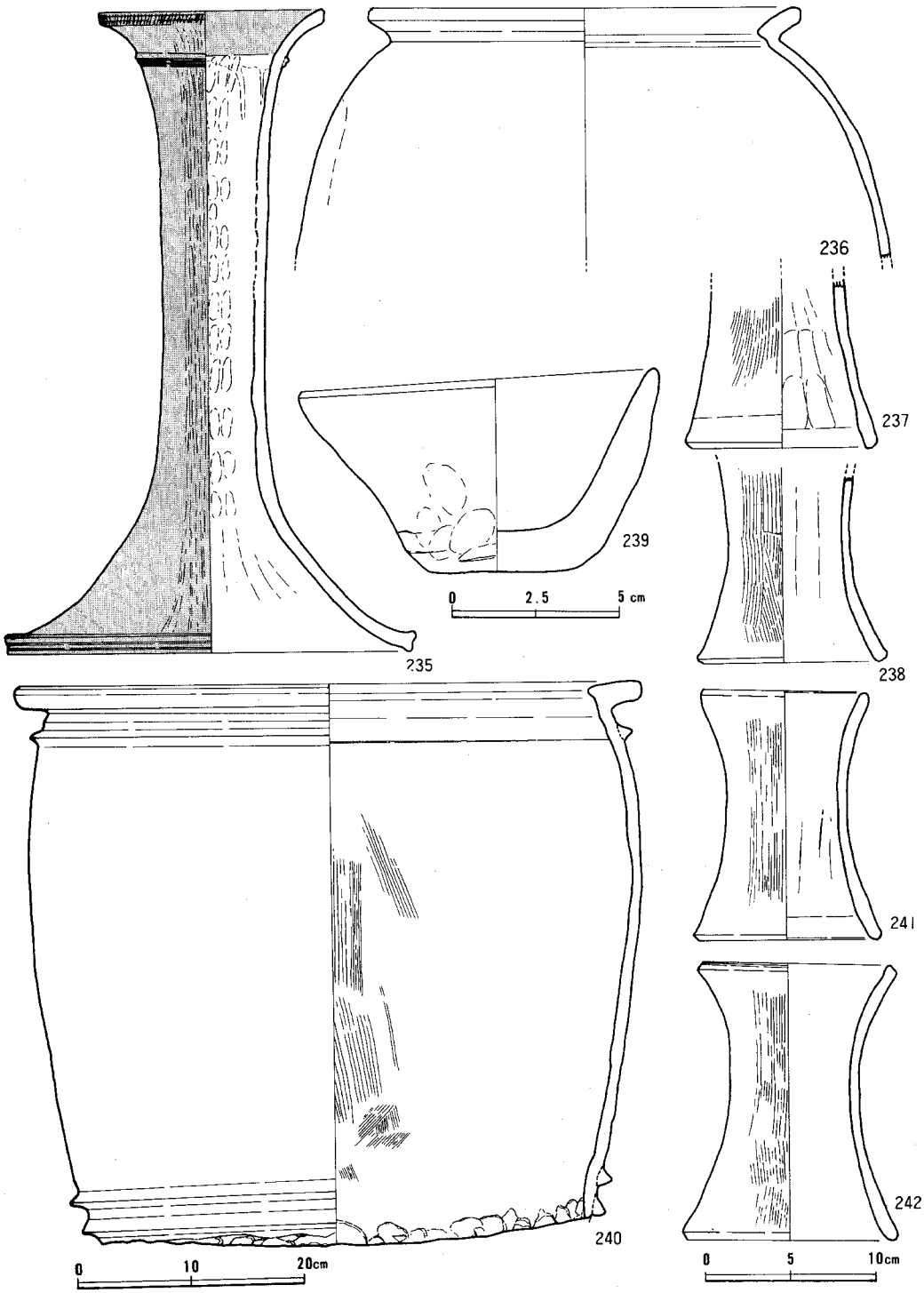


Fig. 70　ＳＤ01出土遺物実測図（239・1/2, 237. 238. 241.242・1/4, 235. 236. 240・1/6）

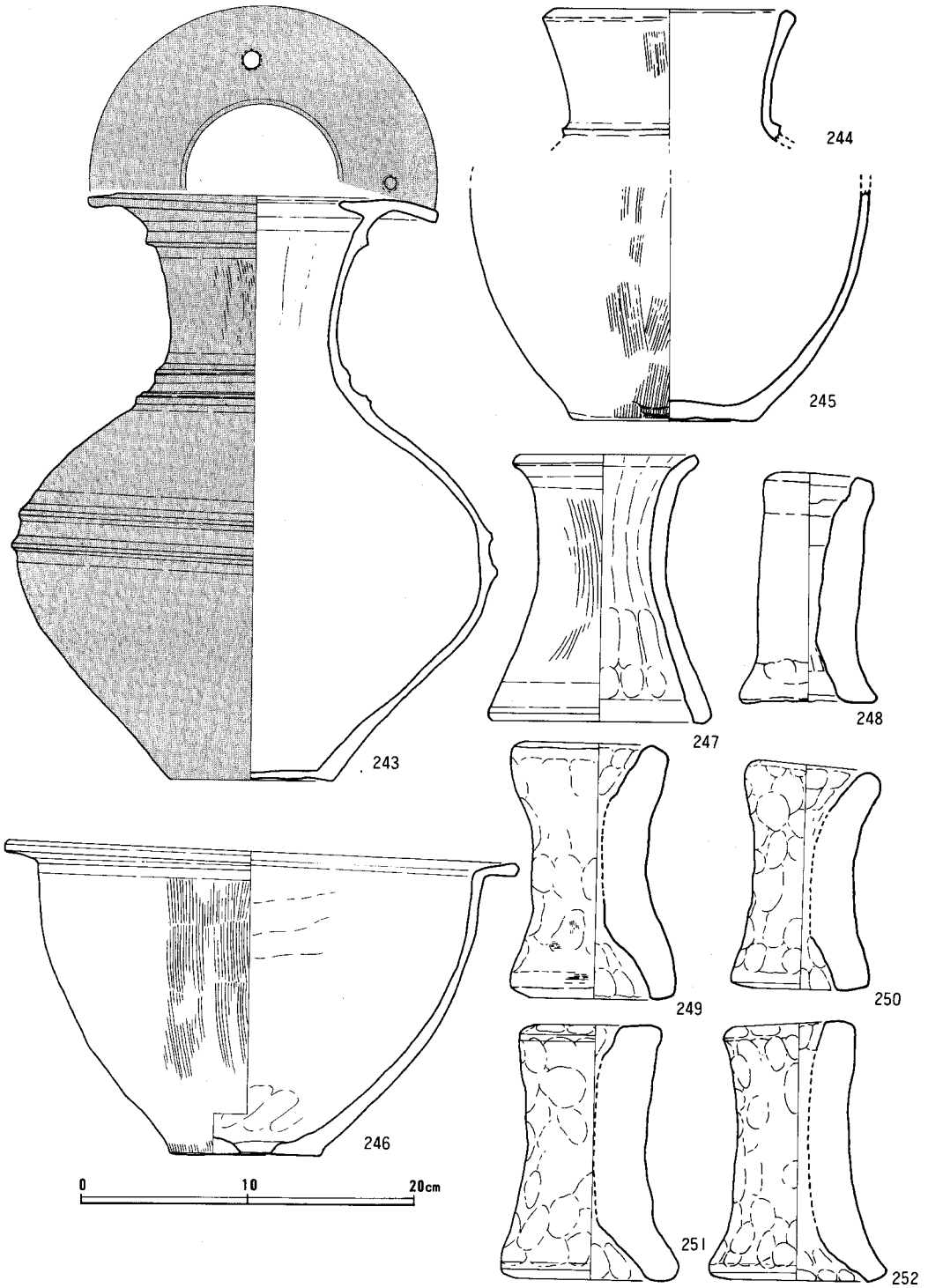


Fig. 71　ＳＤ01出土遺物実測図（1/4）

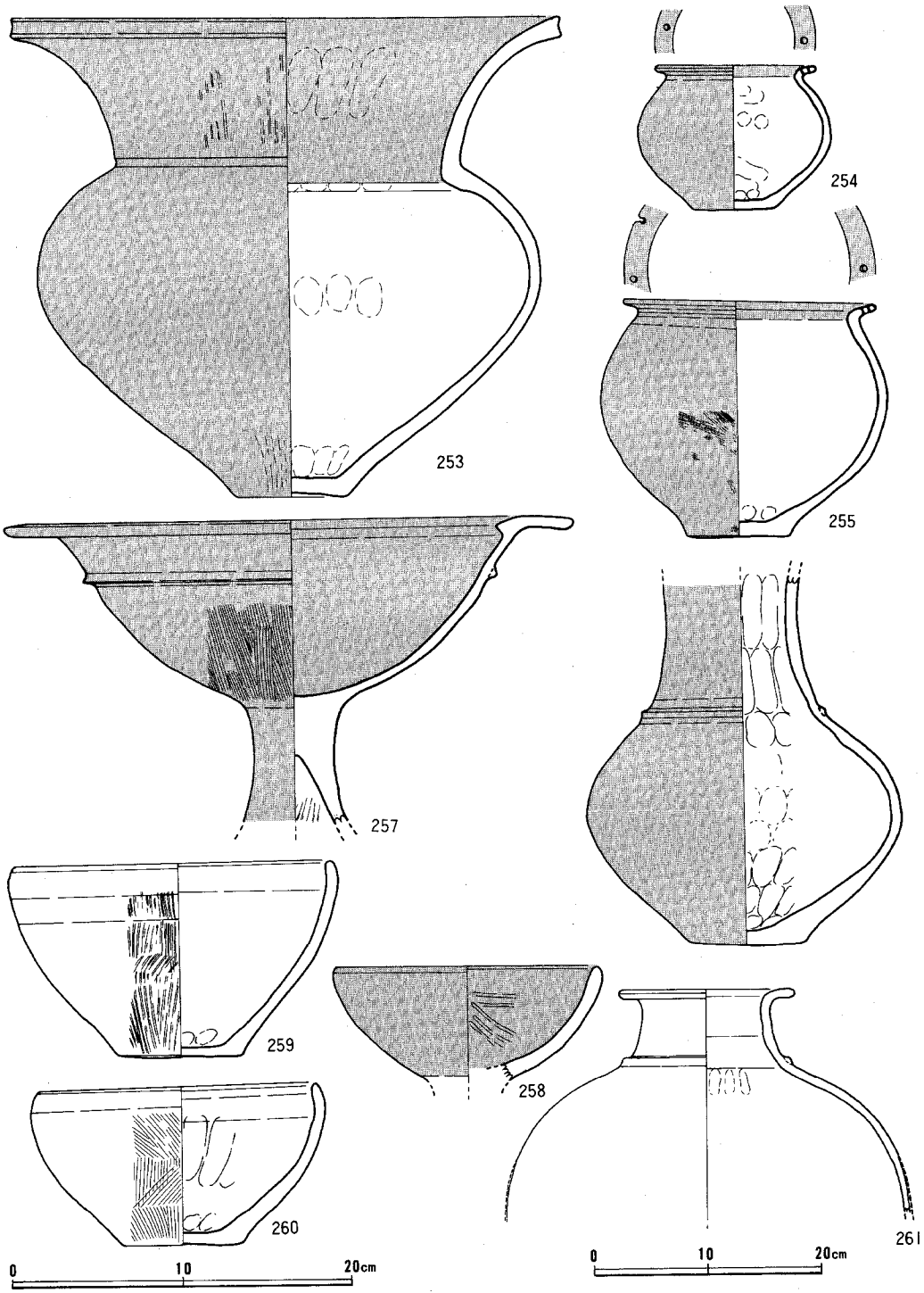


Fig. 72　ＳＤ01出土遺物実測図（253～260・1/4，261・1/6）

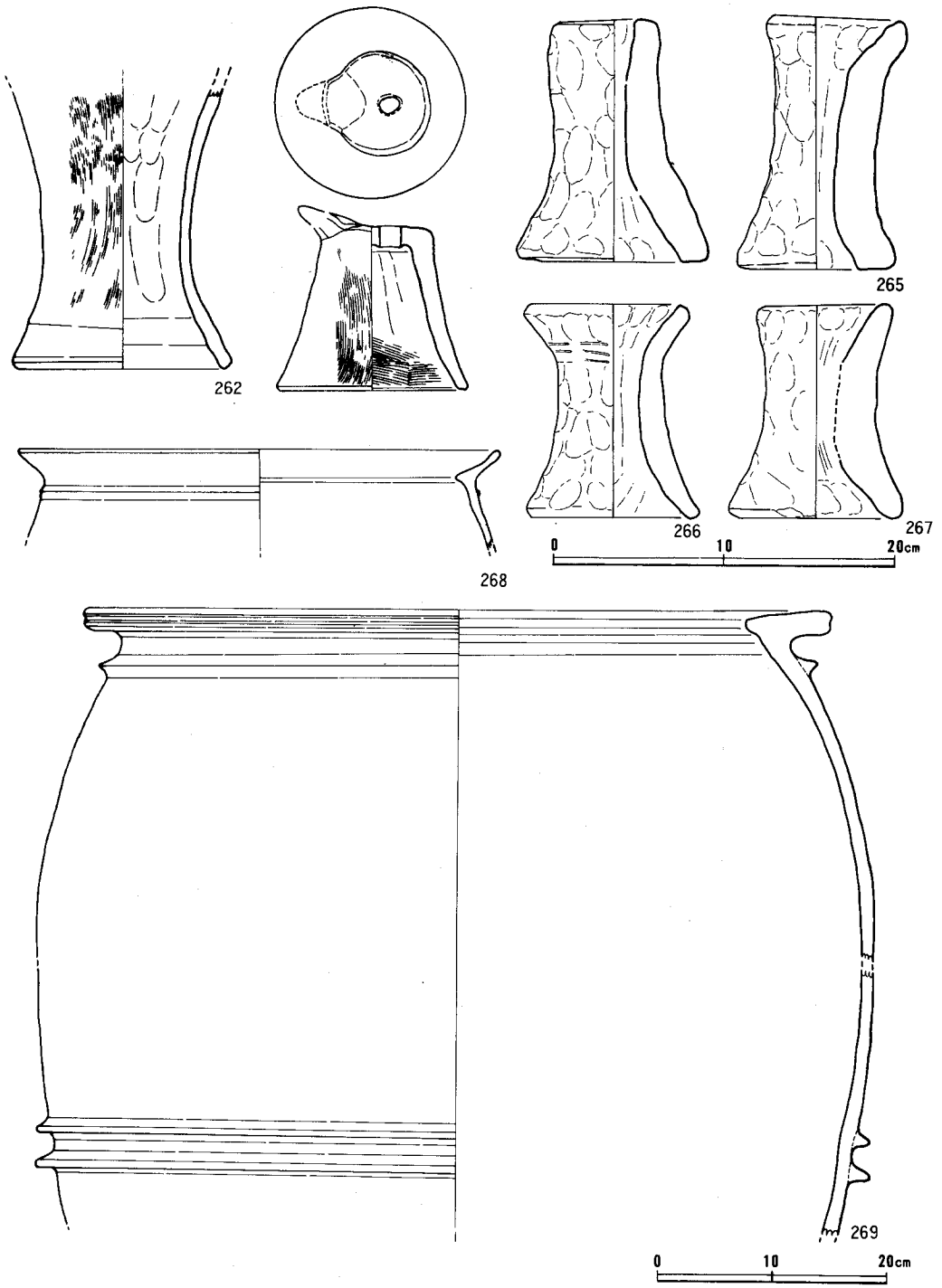


Fig. 73　ＳＤ01出土遺物実測図（262～267・1/4，268．269・1/6）

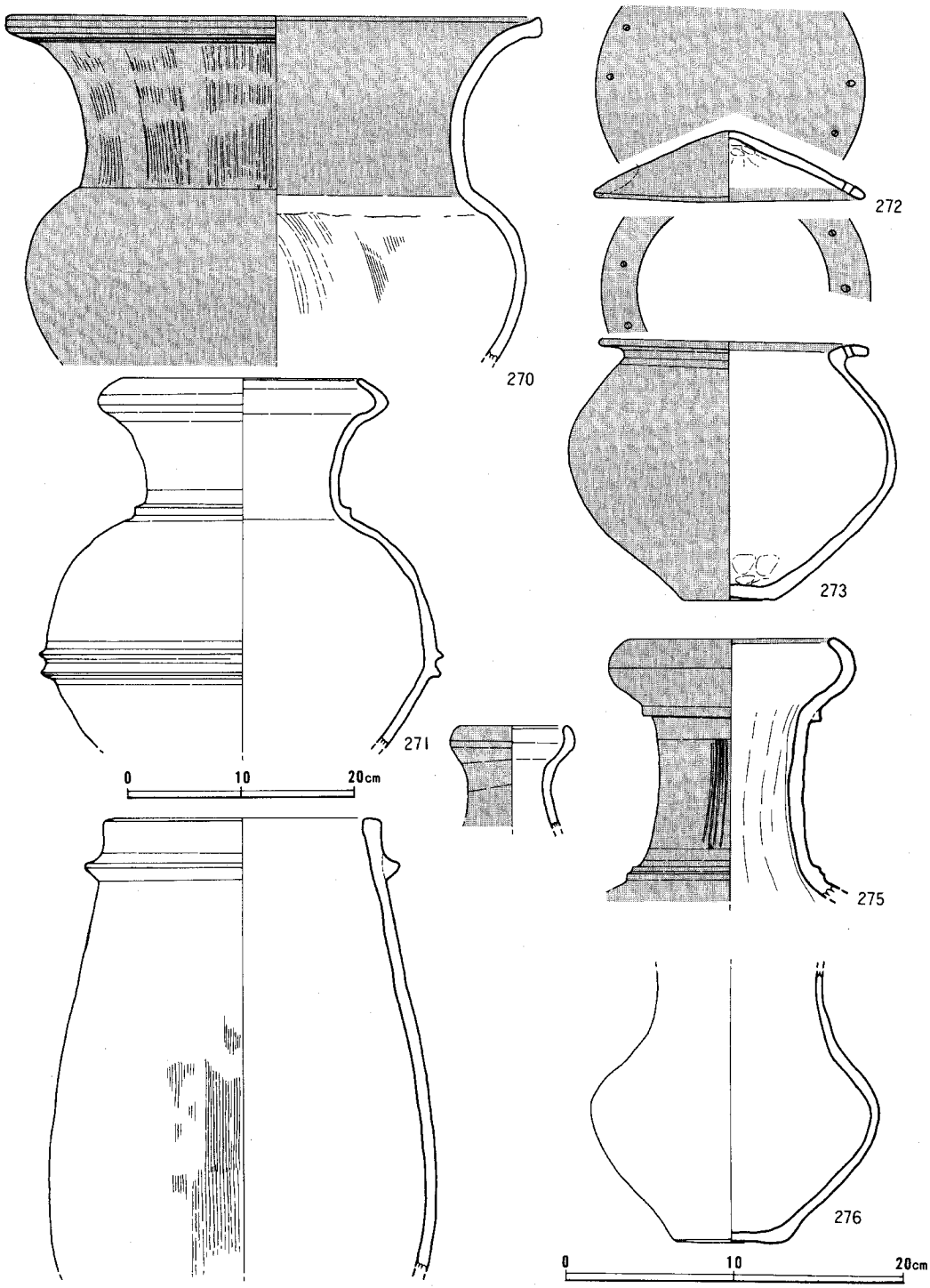


Fig. 74　ＳＤ01出土遺物実測図（270，272～276・1/4，271・1/6）

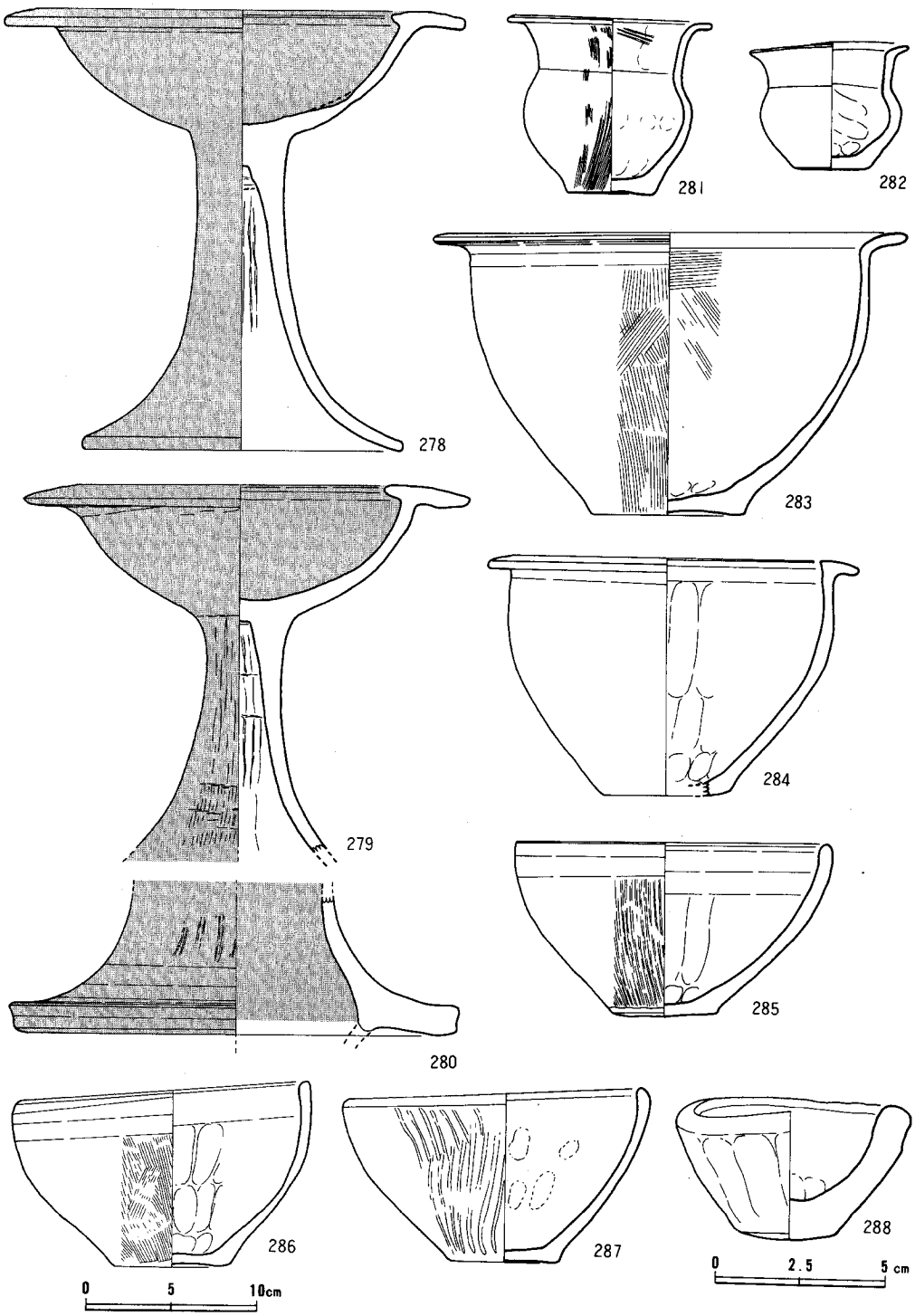


Fig. 75　ＳＤ01出土遺物実測図（288・1/2，278～287・1/4）

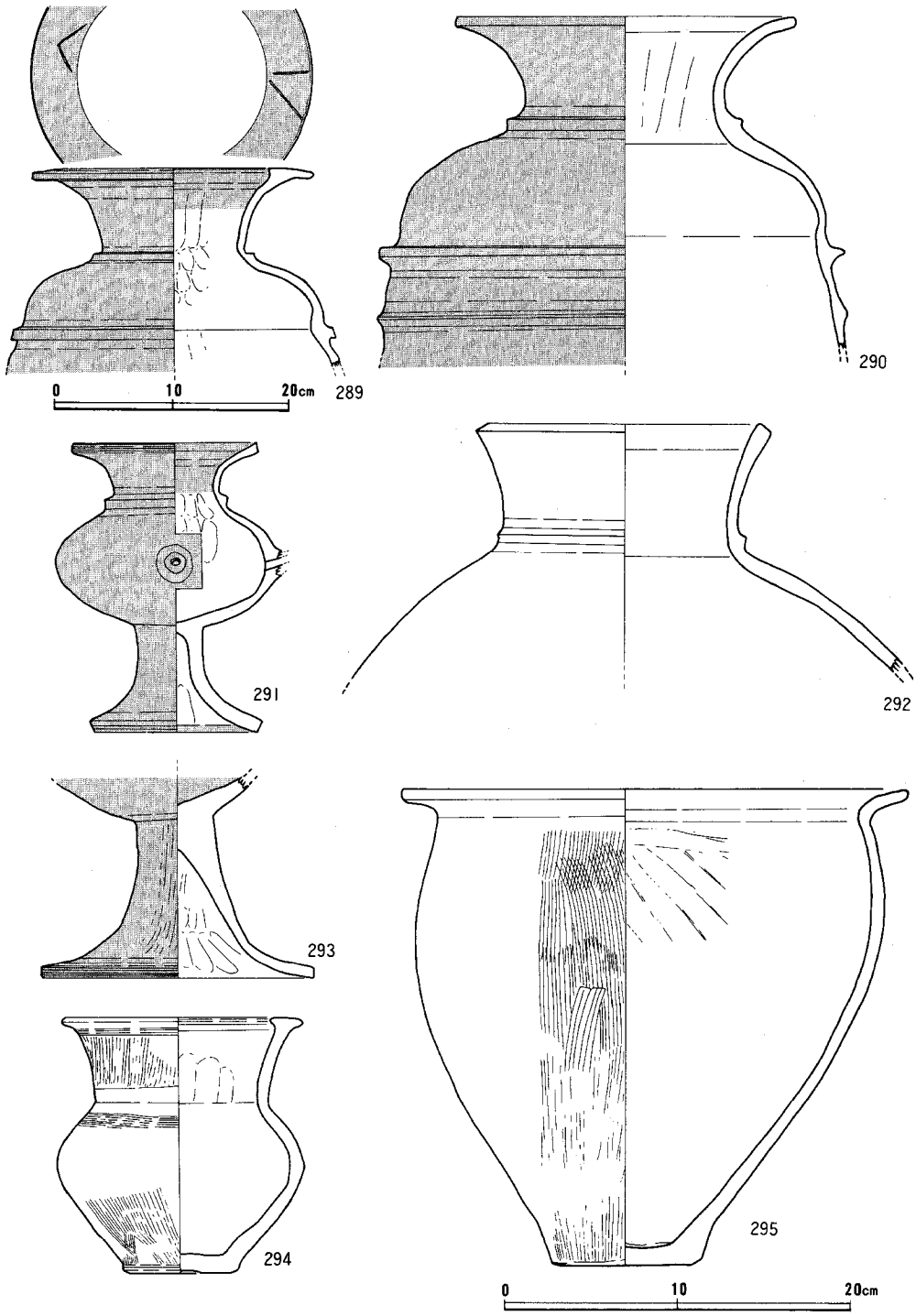


Fig. 76　ＳＤ01出土遺物実測図（290～295・1/4，289・1/6）

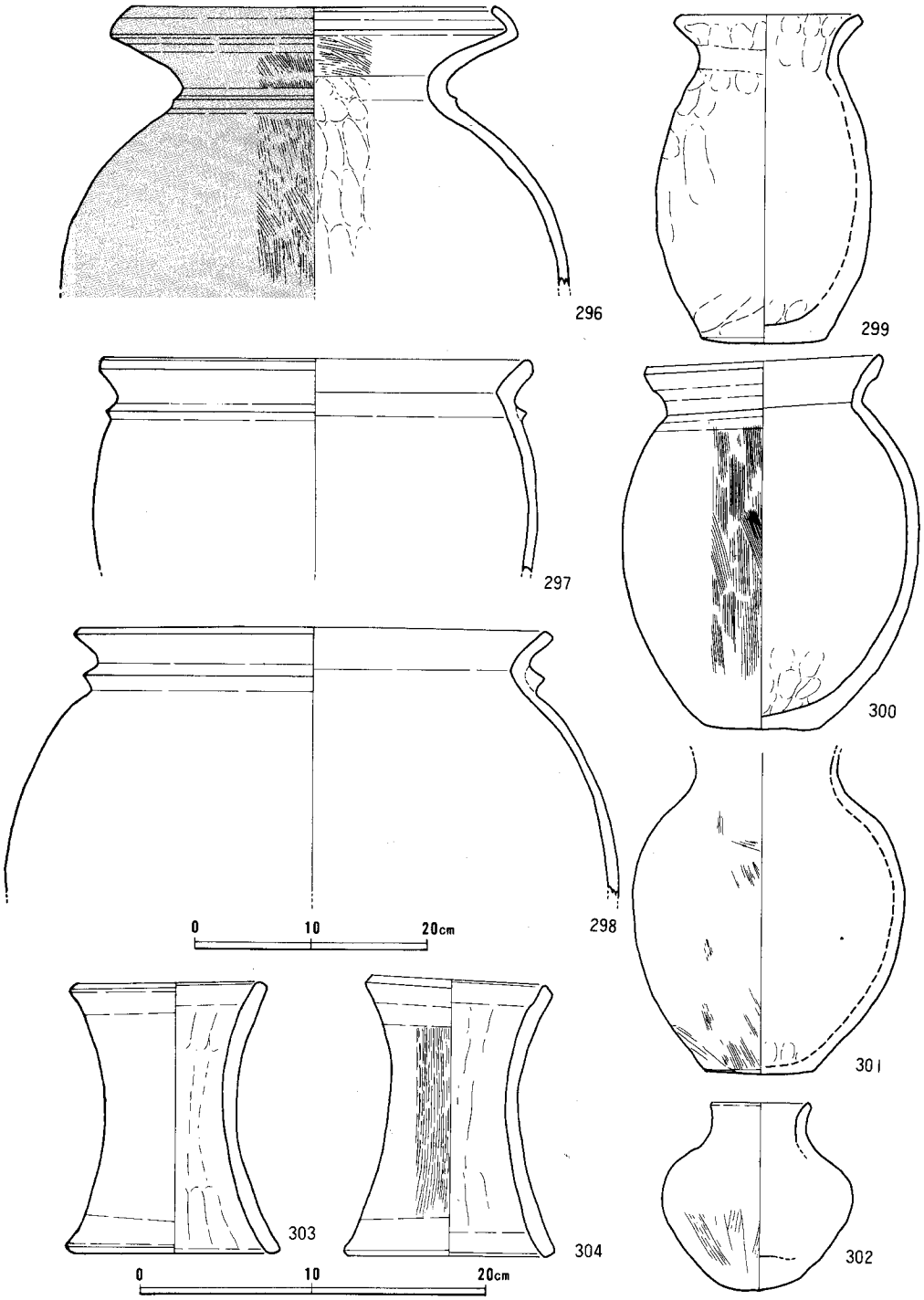


Fig. 77　ＳＤ01出土遺物実測図（299～304・1/4，296～298・1/6）

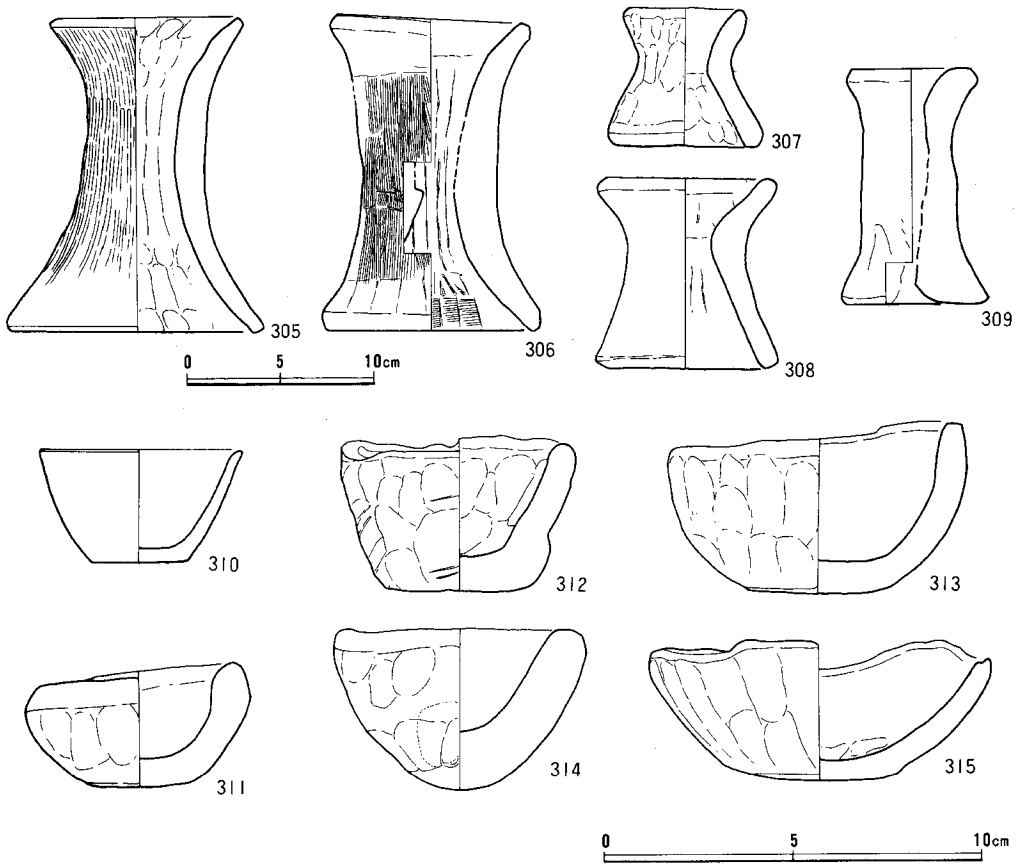


Fig. 78　ＳＤ01出土遺物実測図（311～315・1/2，305～310・1/4）

・279は丹塗り高杯、280は筒形器台の鍔から上の方である。281・282は小形の壺、283～287は鉢形土器である。288は手捏ねの小形土器である。289～315は中層上出土を中心とする土器群である。304と314・315は上層出土である。289・290は甕形土器である。289には上端面に山形の線刻を行ない黒色顔料を詰める。290は口縁端部が鋤先状をとらないタイプである。291は脚台付注口付壺である。復元口径10.8cm、器高16.8cmを測る。胎土は精良で、厚く丹塗りされ研磨が施されている。293は丹塗り高杯、294は小形の壺、292は倒卵形の壺、295はくの字状口縁の甕である。296は丹塗りの複合口縁壺、297・298は中型の甕、300～302は壺、303～308は器台、309は支脚である。310～315は鉢形を呈した小形の手捏ね土器である。PL.46～48は写真のみ掲載した資料である。325・341・343は鉢、326は脚付注口付壺の注口部、327は上層出土の手捏ね土器、328・329・335は小形の壺、330は壺胴部、331・333は袋状口縁壺、332・334は甕形土器、334は支脚である。それ以外は甕形土器である。342は撹乱から出土した小形の甕である。329・336・337・339・347～353は中層下出土、325・326・328・330・333・334・338・

340・344～346は中層中出土、331・332・335・341は中層上からの出土である。343は中層出土であるが詳細は分からない。

SD02(Fig. 4. 79 PL. 49)　調査区東側で検出した溝である。幅0. 8m、深さ20cm前後で、断面は浅いU字状を呈している。方位はN1°Eで、ほぼ磁北を採っている。調査区内で22. 5m分確認した。覆土は暗茶褐色土である。遺物は須恵器甕、坏身・坏蓋、壺、土師器甕などが出土している。甕は口縁部が肥厚し、頸部が締まらずにすぐ胴部に移行する形態をとるものである。外面に平行タタキ、内面に青海波のタタキ痕が残る。坏身は、須恵VIbの立ち上がりが低いものと、底部にコの字状の高台を有するものがある。坏蓋は釦状のツマミが付き、内側に返りが付く。Fig. 79－316は須恵器擂鉢である。底径9. 5cmで、底面に小孔を多数穿つ。小孔は殆ど内面に貫通しており、内面は使用による磨滅が激しい。土師器甕はくの字状の厚味のある口縁部を有し、内面には粗いヘラ削りが施される。遺物は7世紀終末から8世紀にかけてのものが多く、溝の年代は8世紀代と考えておきたい。

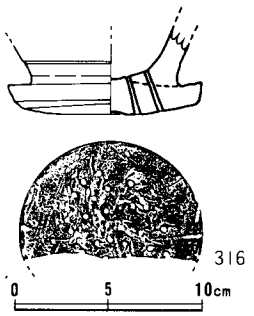


Fig. 79　SD02出土遺物実測図 (1/4)

SD09(Fig. 4. PL. 6・25)　調査区東側で検出した、断面V字状の溝である。深さは0. 8m前後で、北側で一旦浅くなって、再度深くなる。方位はN5°Eである。覆土は茶褐色土で、中世の遺物が割と多く出土している。古いものでは、コの字状の高台が付いた坏や高台が付かない須恵器坏がある。8～9世紀のものであろう。中世のものでは、龍泉窯の劃花文青磁碗片、青白磁の皿、白磁の八角皿、白と黒で文様を描いた高麗青磁の瓶、瓦質土器、擂鉢、捏鉢、瓦、糸切り底の土師器坏・皿、石鍋などがある。時期幅を持つ遺物が一緒に出土しているが、新しいものでは15世紀代を中心とする時期であるので、溝も同時期と考えて差しつかえあるまい。

SD10(Fig. 4. PL. 6・25)　調査区東側で検出した細い溝である。SD11・12・SX13などを切っている。覆土は灰茶褐色土で、北側は淡茶褐色になっている。幅0. 6m、深さは20cm前後で、北側に向かってやや深くなっている。北端部は深さ35cmである。主軸はN3°Wである。遺物は、青磁皿、白磁碗底部、須恵器坏片、土師器甑把手などがある。遺物はやや古いが切り合い関係から15～16世紀の年代ではなかろうか。

SD11(Fig. 4. PL. 6・25)　調査区東側で検出した溝で、SD09と10に区切られている。幅1m、深さ0. 4～0. 5mを測る。主軸はN15°Wで、茶褐色土が覆土となっている。遺物は須恵器甕、高台の付かない須恵器坏身、土師器坏、瓦質土器などがある。時期は古代の可能性があるが遺物からははっきり決め難い。

SD12(Fig. 4. PL. 6・25)　調査区東側に位置する細い溝である。幅0. 5m前後、深さは10cm未満である。茶褐色土が覆土になっている。主軸はN8°WでSD10に切られている。遺物の出土は極端に少なく、須恵器片と土師器片が少量出土している。SC29. 32を切っているので古墳

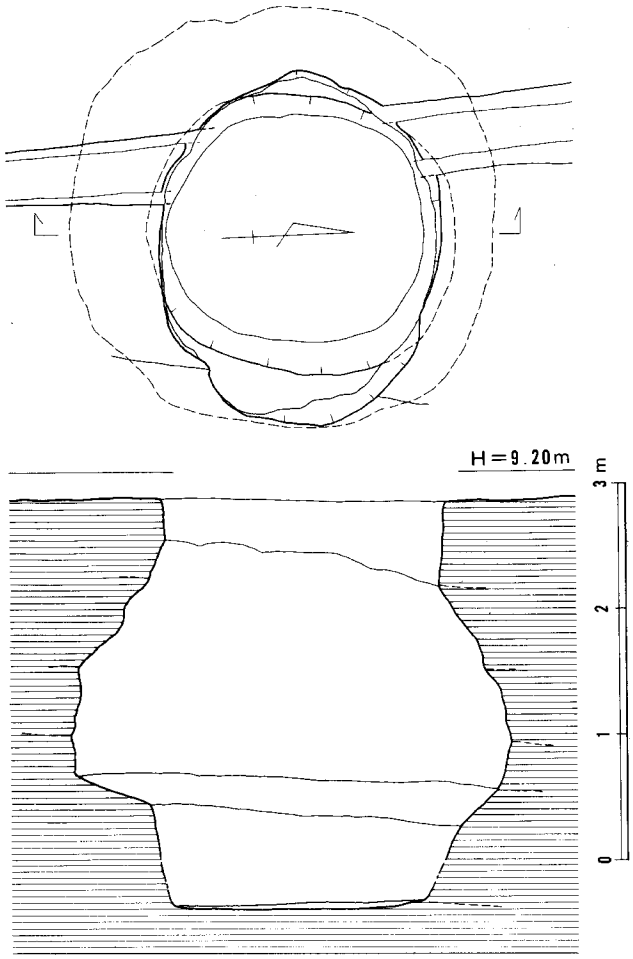


Fig. 80　ＳＸ13遺構実測図（1/60）

時代以降の時期が考えられる。古代から中世にかけてのものであろう。

SD18(Fig. 4)

調査区東側で検出した溝である。主軸はN83°Eで、幅0.8m、最深部0.8m、長さ7m弱である。断面は逆台形状に近い。覆土は淡茶褐色土で、覆土中から、弥生土器片、須恵器甕片、土師器片、白磁、青磁、瓦質土器片などが出土している。中世の時期の溝と考えられるが、細かな時期は決め難い。その他、北側ではSD10の北側部分東隣りにもう1本溝を検出している。N6°Wの方向をとる。遺物は全く出土していないので番号を付していない。中世の時期のものであろう。

SD101(Fig. 5. PL. 3)

第II区北端部で検出したV字溝である。主軸はN68°Eで、幅1.4m以上、深さ0.9mを測る。遺物は弥生中期の甕棺の口縁部、須恵器坏片、土師器甕片、中世末から近世にかけての陶磁器片などが出土している。中世に作られ、近世まで機能していたものであろう。地権者の広田満氏によれば、水路の痕跡が明治時代まで残り、水がヘキゾノの溝へ流れ込んでいたとのことである。

SD104(Fig. 5. PL. 3)　SD101と直交する方向で、南から北に向かって延びるV字状の溝である。最大幅2m、最深部0.6mである。方位はN15°Wをとる。出土遺跡はない。

SD105(Fig. 5. PL. 3)　SD104 の西側に位置する溝である。N15°Wの方向をとり、幅1m、

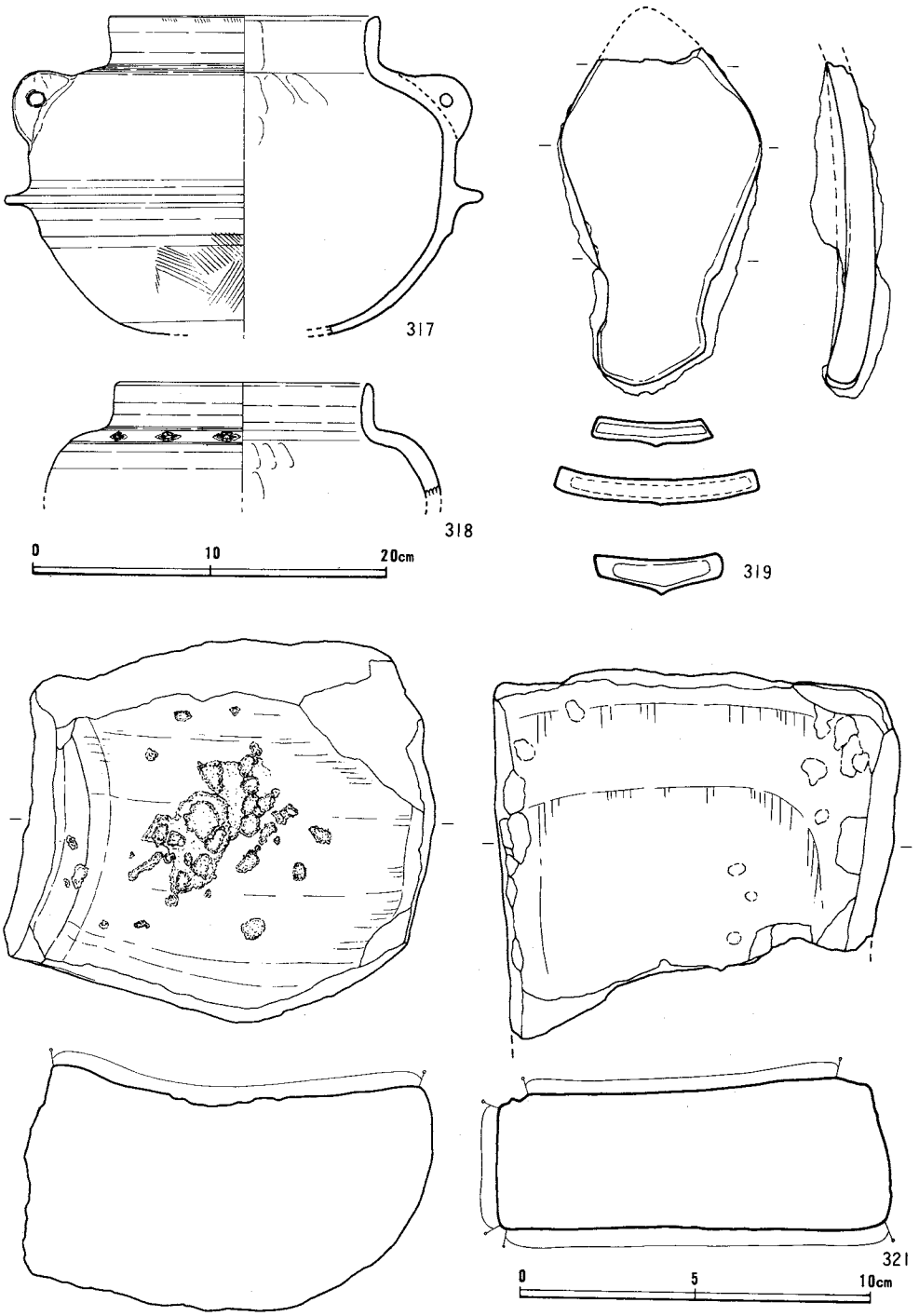


Fig. 81　ＳＸ13出土遺物実測図（317，318・1/4，319～321・1/2）

深さ0.3mを測る。須恵器甕・坏、土師器甕片などが出土している。時期ははっきりしないが古墳時代以降のものであろう。

7　その外の遺構

SX13(Fig.80・81、PL.26・49・50)　調査区東側で確認した大型の堅穴状遺構である。径2.2～2.4m、深さ3.3mを測る。内部は崩落して大きく抉れ、最大径は3.5mになっている。地表下－2mで土質が鳥栖ロームから八女粘土に変化し、湧水がみられる。崩落は黄褐色ロームと黄茶褐色ローム(風化が進んでいない)との境から始まっている。抉れの最も大きい部分は－2mの位置である。底の部分は黄白色の八女粘土である。均質な土質で黒色の粘質土がなくなったので底と判断したが、これ以上下がるかどうかは湧水が激しく、且つ危険なため確認できなかった。当初、地下式土拡ではないかと考えて調査を進めていたが、堅坑が発見されなかったので、地下式土坑ではない。井戸の崩落したのでもなさそうである。穴蔵の一種ではなかろうか。

Fig.81 はSX13から出土した遺物である。317・318は湯釜である。317は中位から出土し、口径15.4cm、鍔径26.9cm、残高は18.1cmを測る。茶褐色を呈し、胎土に石英、長石粒を僅かに含む。鍔より下部は灰褐色を呈し、煤が付着する。２箇所に耳が付く。318は復元口径14.7cmで灰茶褐色を呈し、肩部に花菱のスタンプ文を施す。319は鉄製品である。器種は不明であるが、残長9.6cm、最大幅5.7cm最大厚0.9cmを測る。全体が弯曲して、上半が菱形状になる。下半は括れ、括れを中心に反対側にシンメトリーになるかどうかは不明である。断面は裏側に稜を有し、中心部には不純物が詰まる。全体に銹が厚く巻いており、孔、目釘等は不明である。320・321は砂岩製の砥石である。321にはカーボンが付着し、カマドの据石に転用されたものであろう。SX13は出土遺物から15世紀代に属すると考えられる。

SX106(Fig.5.PL.3)　SE103の東側に取り付く溝状の遺構である。東方向から南東方向に向きを変え、次第に低くなっている。遺物は須恵器甕、高台付の坏、白磁、土師器の捏鉢などが出土している。中世の時期である。SE103の排水に使用されたものであろうか。

SX107(Fig.5.PL.3)　第II区の東端部で確認した遺構である。一部しか掘っていないので全体の様子は分からない。溝の一部であると考えられる。底まで－1m。出土遺物はない。

その他の遺物(Fig.59・61.PL49)　Fig.59－127は鉄鏃の箆被部である。SP215出土。168は滑石加工未製品。170は滑石の臼玉である。前者はSP379、後者はSP182出土。167はSP04出土の砥石、169はSP386出土の砥石である。共に頁岩製の小型品である。

Ⅳ おわりに

今回の調査で検出した遺構は、竪穴住居址13軒、掘立柱建物12棟、井戸８基、土坑９基、溝10条、その他の遺構３基の計55である。柱穴状の小穴は724個確認し、その内437個から遺物を検出した。遺構の内訳は、弥生時代のものが掘立柱建物７棟、竪穴住居址１軒、井戸１基、溝１条である。古墳時代のものは、竪穴住居址12軒、井戸２基、土坑３基で、掘立柱建物は判然としなかった。古代のものは、掘立柱建物４棟、井戸１基、土坑４基、溝２条である。中世に属するものは、掘立柱建物１棟、井戸４基、土坑２基、溝７条、その他の遺構３基である。小穴の多くは覆土の状態から中世に属するとみられるものが多いが、建物としてまとめることができなかった。

弥生時代で注目されるのは、調査区を東西に横切る大溝である。断面逆台形を呈し、東側からやや蛇行しながら西側へ延びる。東側はどのように続くか不明であるが、西側は約200ｍ離れた第23次調査地点まで続く。第23次調査地点では、北東側から延びてきて、方向を西側に変へ、さらに北側に回り込むように続いている。台地中央部はほぼ直線的に延び、台地部を仕切るような格好になるが、台地縁辺部は回り込んでとり囲むようになるとみられる。弥生時代の遺構群はこの大溝の北側に広がり、溝も北側に回り込むことから、この溝は集落を取り囲む環濠のひとつではないかと考えられる。調査時点ではかなり削平を受けていて、幅2.7ｍ、深さ1.6ｍしか残存していなかった。本来はもっと大規模な環濠であったと推察される。濠内からは、３箇所に分かれて祭祀土器群が出土している。筒形器台、広口・無頸・短頸・直口・小形・袋状口縁・甕形の壺、鋤先状・くの字状口縁の甕、鉢、蓋、高坏、器台、支脚、ミニチュア土器、土製品などがある。第23次調査でも同様の器種の祭祀土器が５群に分かれて分布していた。その中には筒形器台が各１点ずつ組み合わさっていた。今回検出した祭祀土器の分布は、中心部に多数の土器が折り重なって集中していた。土器群の両端には濠底に仕切り状の浅い溝が掘られ、遺物の集積はこの範囲内が中心となっている。土器群の多さから、数回分の祭祀行為に使用された土器群が、決められた範囲内に投棄されたのではなかろうか。但し、このグループからは丹塗りの大型器台は１点しか出土していない。

筒形器台もしくは大型器台を持つ祭祀土器の組み合わせは、甕棺墓地にみられる墓地祭祀の組み合わせとよく類似している。今回検出した大溝（環濠）は、甕棺墓を取り囲む溝ではなく、集落を囲む溝である。集落遺跡での筒形器台、大型器台の出土は極めて珍しい。今回４個体分検出している。第23次調査の報告でも触れたが、環濠は防禦のための溝である。その防禦のための溝に墓地祭祀と同じ組み合わせの丹塗りの祭祀土器がみられるのは、祭祀内容が極めて類似していたからではないだろうか。墓地祭祀は死んだ人、つまり祖霊が祭祀の対象となるものであろう。その同様な祖霊祭祀を集落内でも行ない、祖霊の加護による防禦を願ったものでは

なかろうか。環濠は削平を受ける前はもっと大きな溝であったはずであり、土塁なども築かれ極めて堅固なものであったろうと考えられる。そのようなハードな面に加え、祭祀による〝祖霊の守り〟という精神的な依り処を希求し、集落内の安寧を願ったものではなかろうか。祭祀土器が環濠内に投入されるのは、そのような霊力の籠った土器が見えない力で集落を守るという祈りが込められていたのではないかと推察されるのである。場合によっては、敵方の人骨や動物の頭蓋骨なども使用されたのかも知れない。環濠の使用期間は中期後半から末期であり、後期前半にはかなり埋没していたと考えられる。後期前半の層から中広銅戈の鋳型や青銅製鋤先が出土している。その他、弥生時代の建物群は北側に広がり、梁間１間、桁行２間が中心になる。ＳＢ47は束柱があり、梁行２間、桁行２間の建物になると考えられる。柱穴の掘方は殆どの建物は略方形で大きく、柱間のスパンが長い。ＳＢ33は柱痕が方形であるので角柱が使用されていた可能性がある。竪穴住居址は、明確なものは検出できなかった。ＳＣ05は竪穴住居址としたが、土坑の一種ではなかろうか。井戸は１基検出している。弥生後期前半のものである。

古墳時代の遺構は、後期の竪穴住居址、土坑、井戸などがある。竪穴住居址はカマドを持つものが多く、調査区全体に分布している。２～３回程度切り合っている。古墳時代で注目されるものは古式土師器を出土したＳＥ37と102であろう。同時期の竪穴住居址は確認していないが、削平された可能性がある。ＳＥ37からは、大和型庄内甕と呼ばれるタタキのある薄手の甕や五様式の伝統を残す甕などがまとまって出土している。胎土が在地産と異なっているようであり、外来系の可能性がある。また、ＳＥ102は布留式の甕を中心とする土器群がまとまって出土している。200ｍ北には古式の那珂八幡古墳が造営されており、成立基盤を考える上で重要な資料になるものと考えられる。

奈良時代では、磁北をとるＳＤ02とこれに直交して配列されるＳＢ21～23、大型のＳＥ08などが重要である。ＳＤ02は区画溝で、この東側に、梁行２間、桁行４間のＳＢ21、さらにこの東に梁行２間以上、桁行５間の大型掘立柱建物が配列される。ＳＢ21と22は梁の柱筋が通る。ＳＢ22の東側に、さらにＳＢ21と同様な建物が配列されていた可能性がある。残念ながら調査区外になるので確認はできなかった。ＳＢ23は梁行２間、桁行３間で重複するＳＢ22よりも後出である。これらの建物群の北側には大型の井戸がある。出土遺物は質が高く、底から出土した須恵器壺は注目される。主要な遺物からしか出土例がなく、一般集落のものとは考え難い。那珂台地では、これまでの調査で確認されている同時期の大型井戸は、全て出土土器の質が高い。規格性に富む溝や大型掘立柱建物群、井戸などの配列は一般集落にはみられないものである。何らかの公的な施設の一部ではないかと推察される。今後、周辺の調査成果と合わせて、検討する必要がある。中世の遺構も重要である。東西、南北に巡るＶ字溝、井戸、穴蔵などがある。掘立柱建物も建っていたと考えられ、15～16世紀の遺物がまとまって出土している。調査区北側の溝はヘキゾノに流れていたといわれ、山浦氏との関係も検討する必要があろう。

PLATES

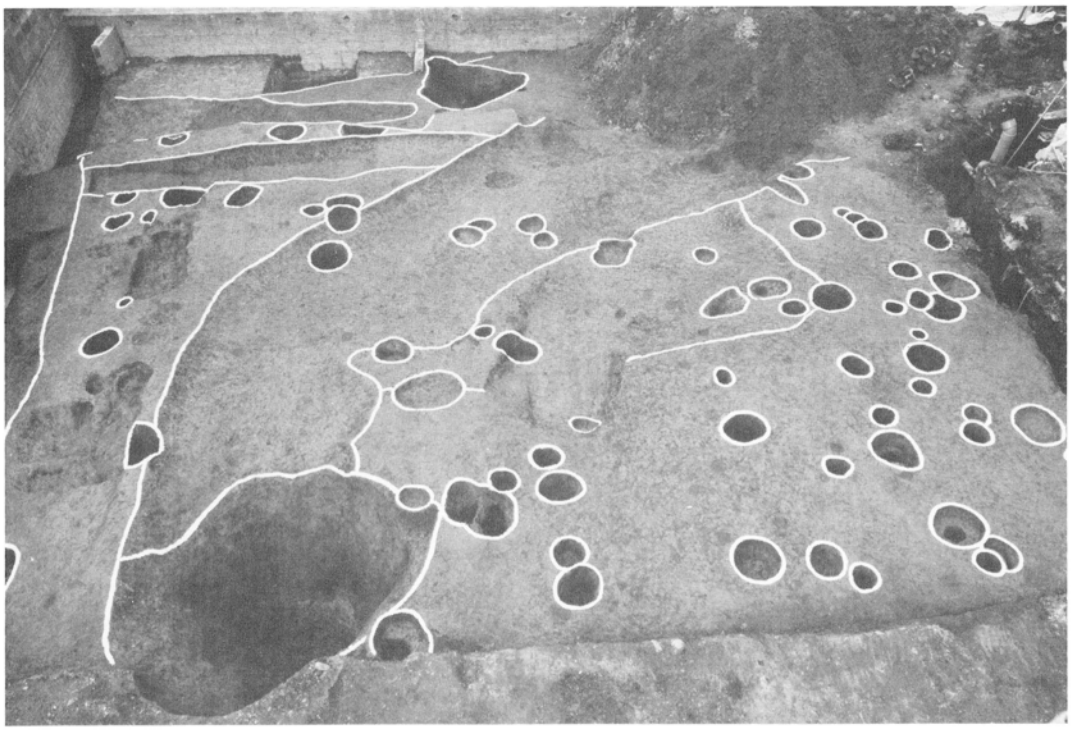
▲（1）調査区から北方那珂八幡古墳を望む

▼（2）調査区西方油山を望む

調査区全景第Ⅰ区（東から）

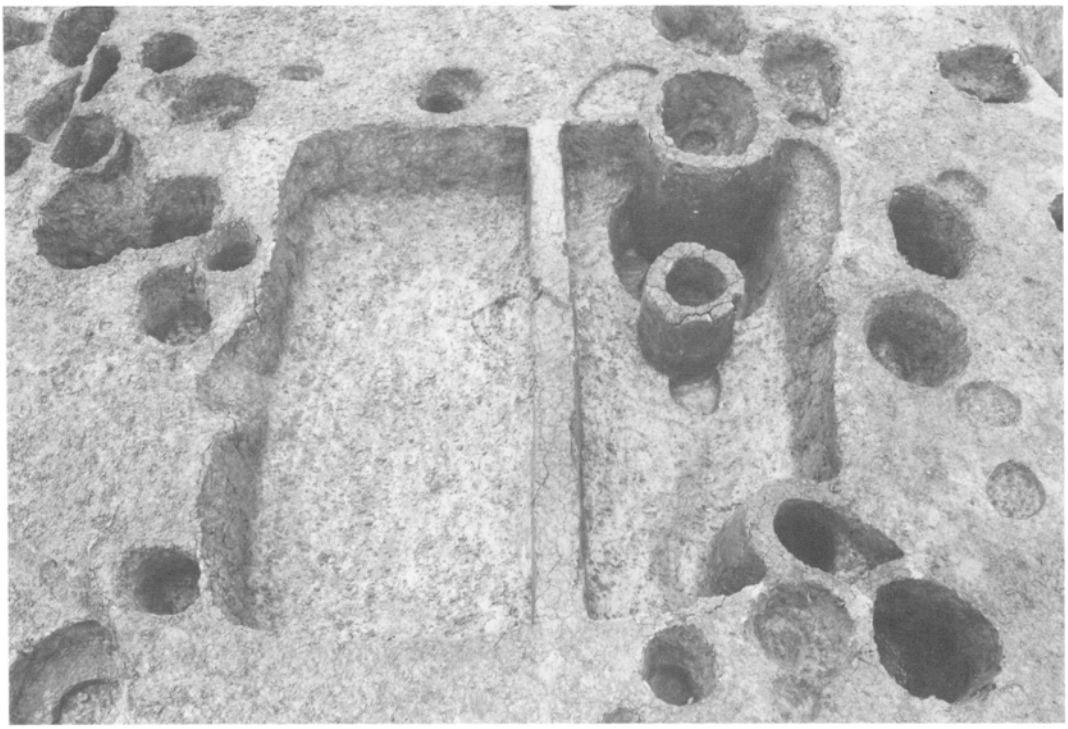
▲（1）調査区全景第Ⅰ区（南から）

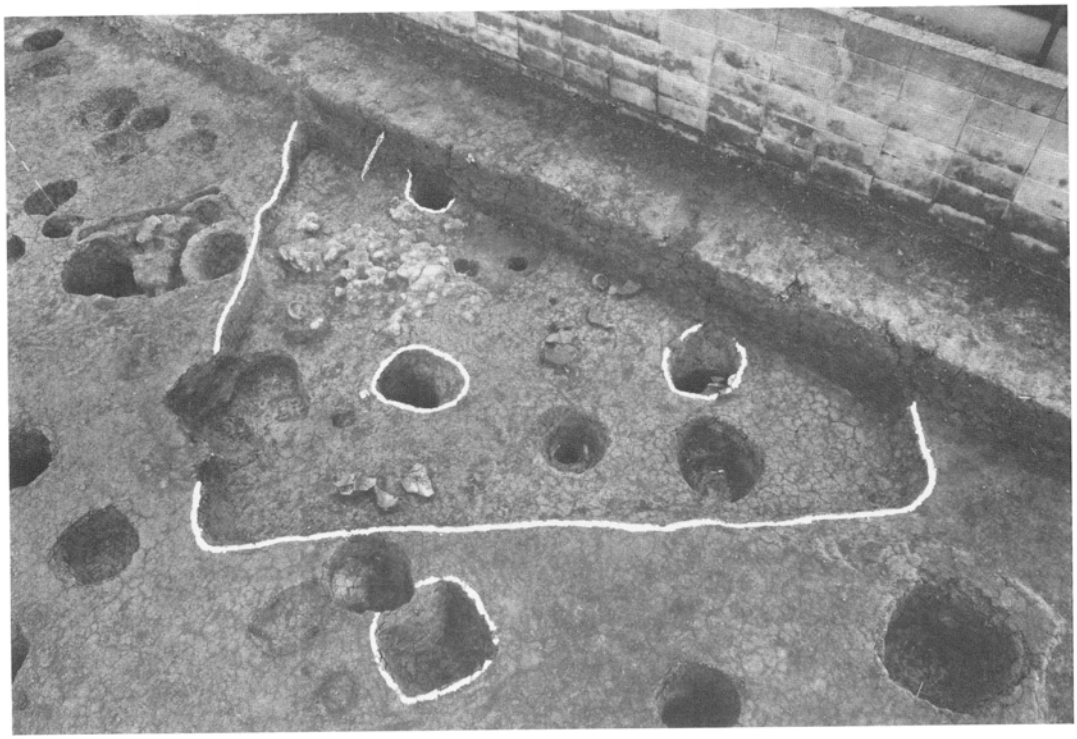
▼（2）調査区全景第Ⅱ区（西から）



▲（1）ＳＣ04（左）・ＳＣ14（右）出土状況（北から）

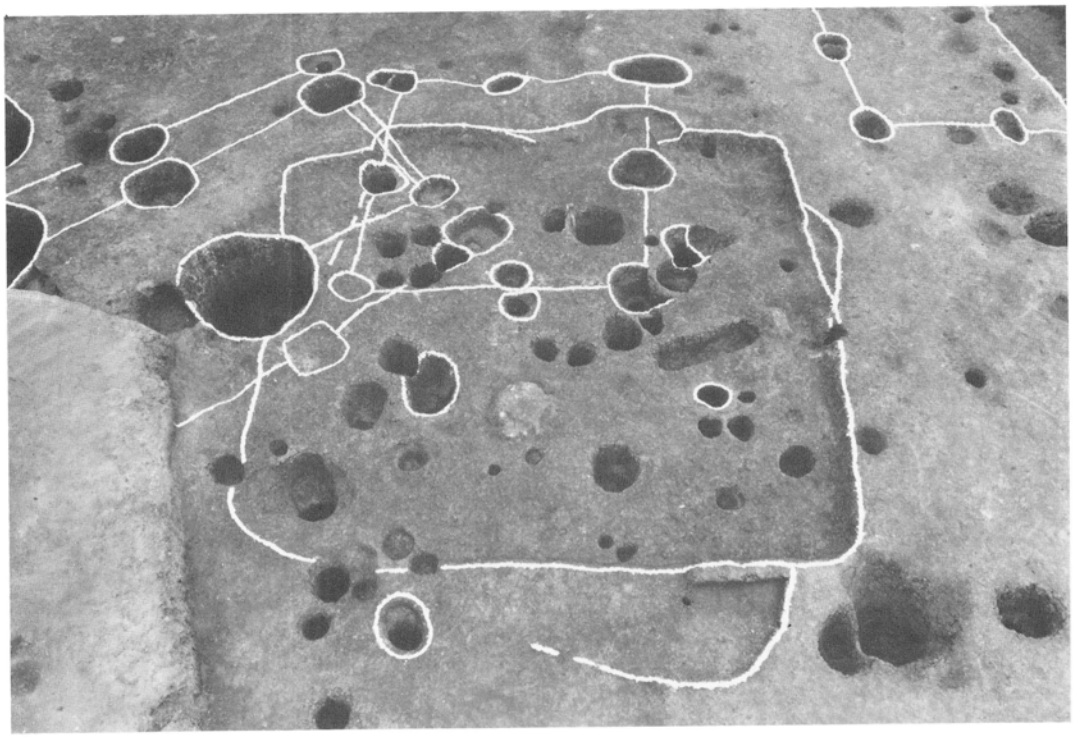
▼（2）ＳＣ05出土状況（南から）

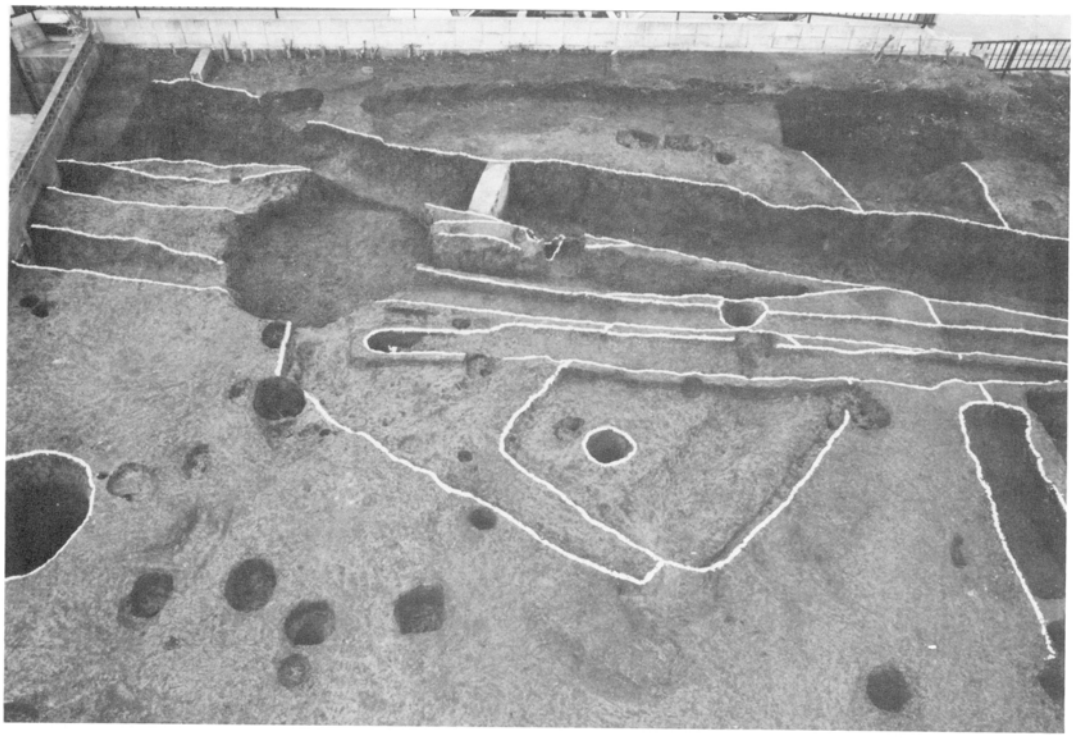




▲（1）ＳＣ15出土状況（北から）

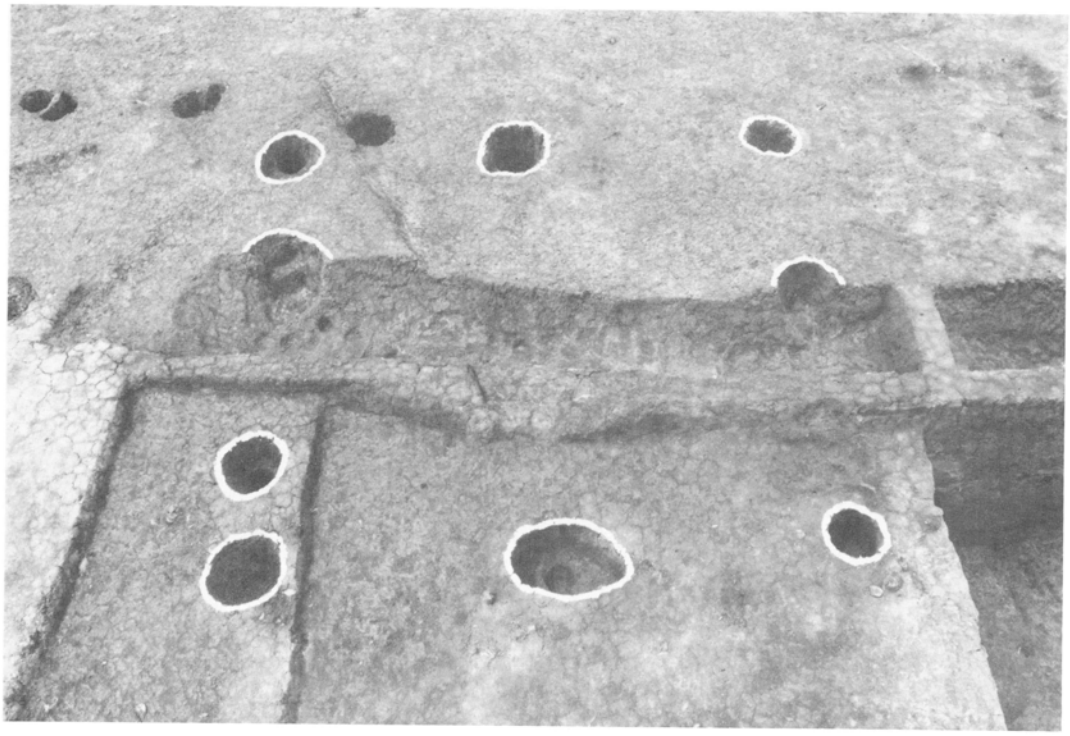
▼（2）ＳＣ28出土状況（西から）

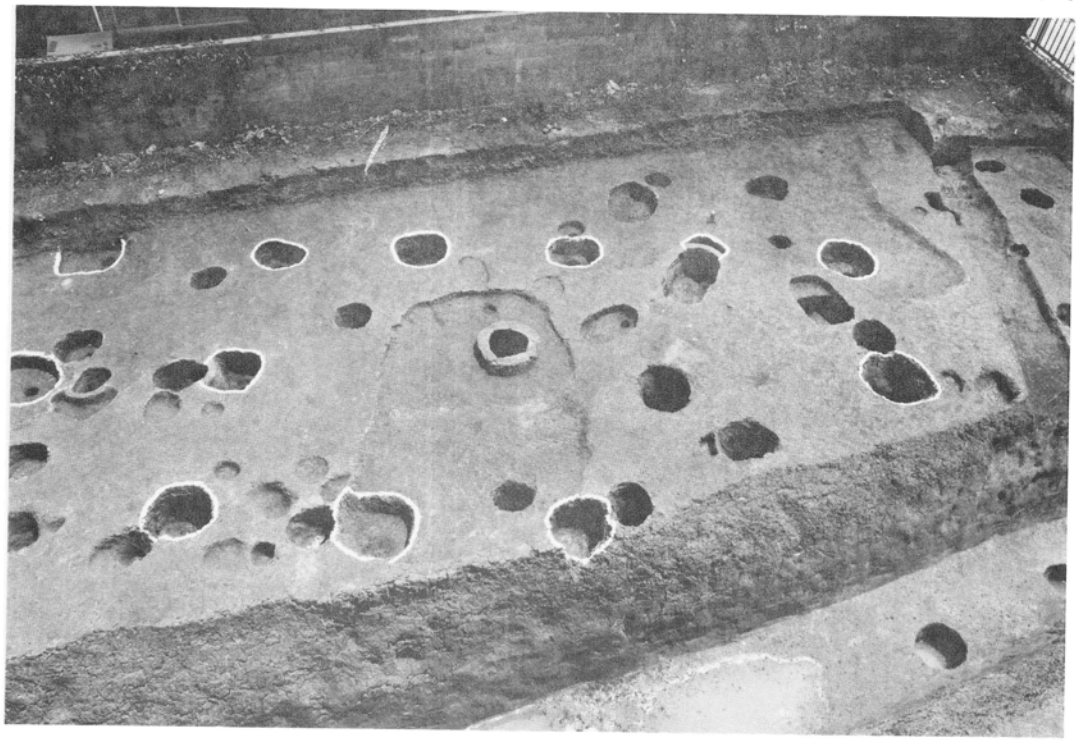




▲（1）ＳＤ09～12・ＳＸ13出度状況（西から）

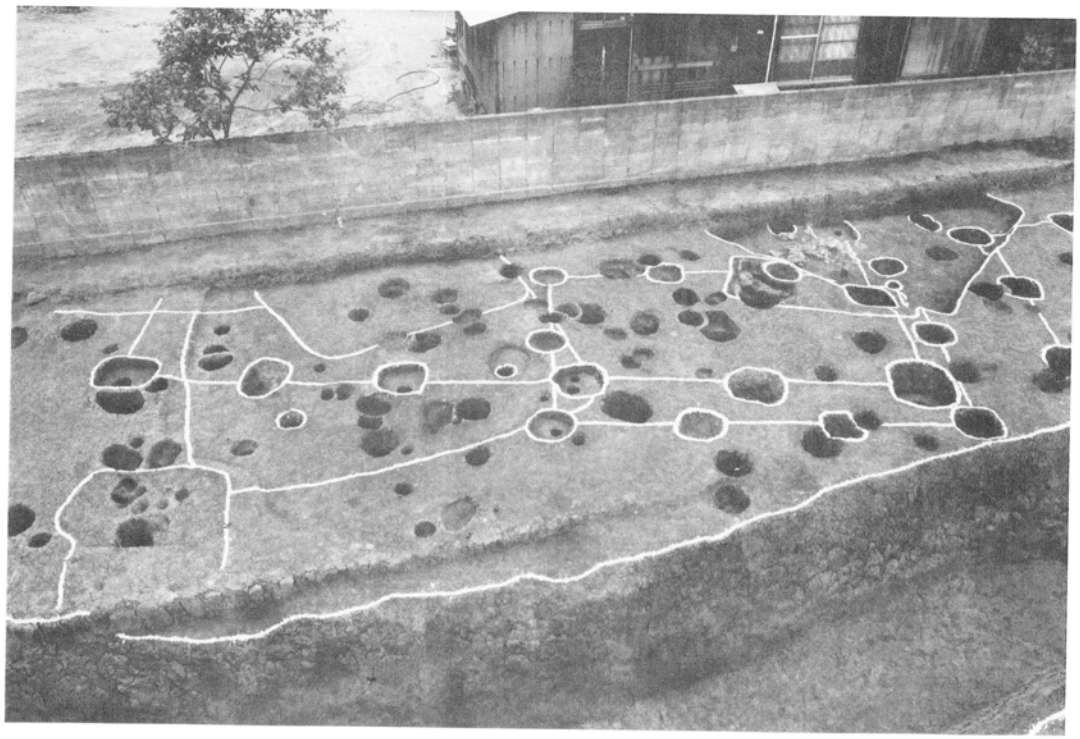
▼（2）ＳＢ20出土状況（南から）

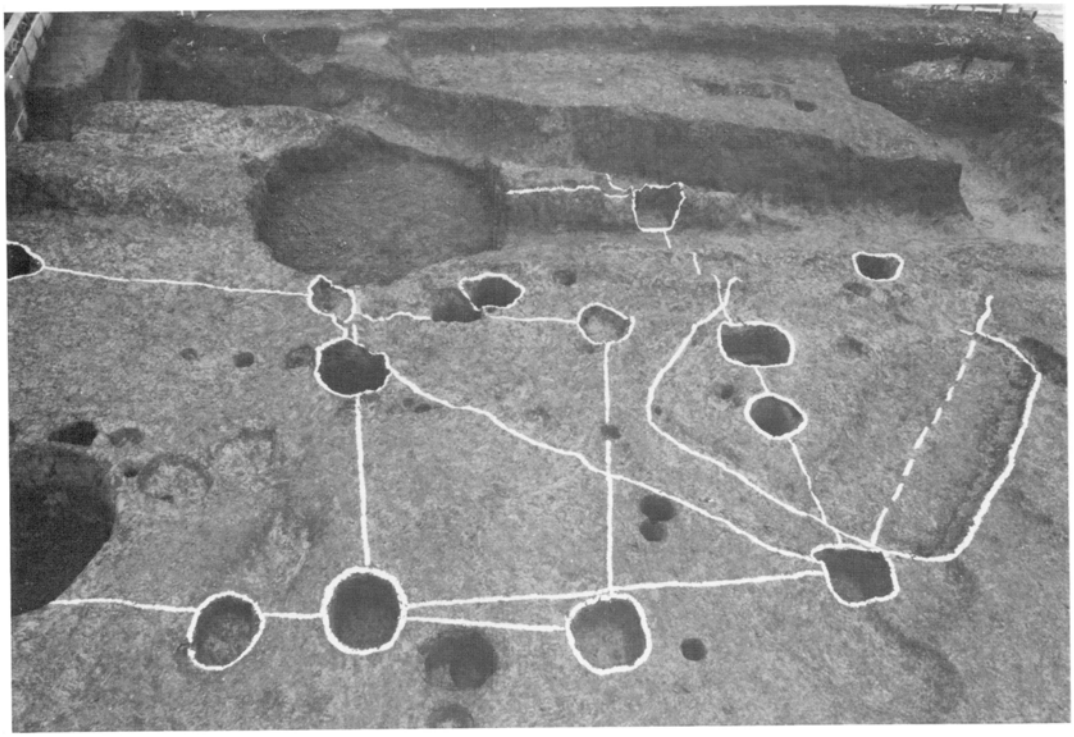




▲（1）ＳＢ21出土状況（北から）

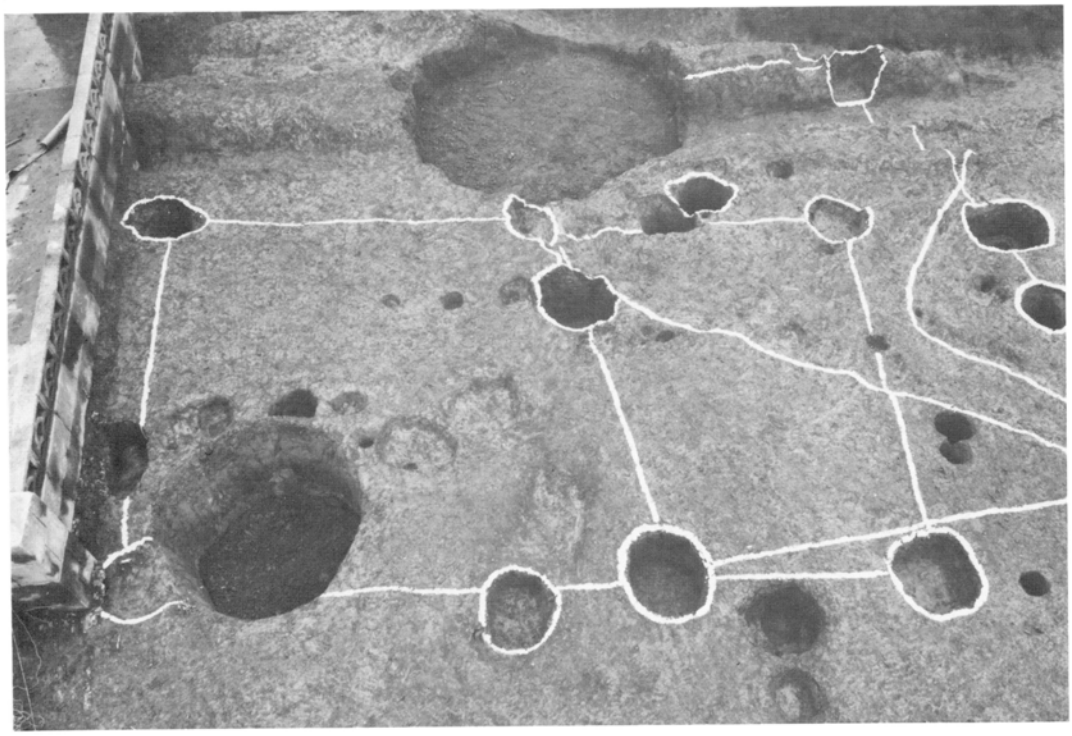
▼（2）ＳＢ22・23出土状況（北から）

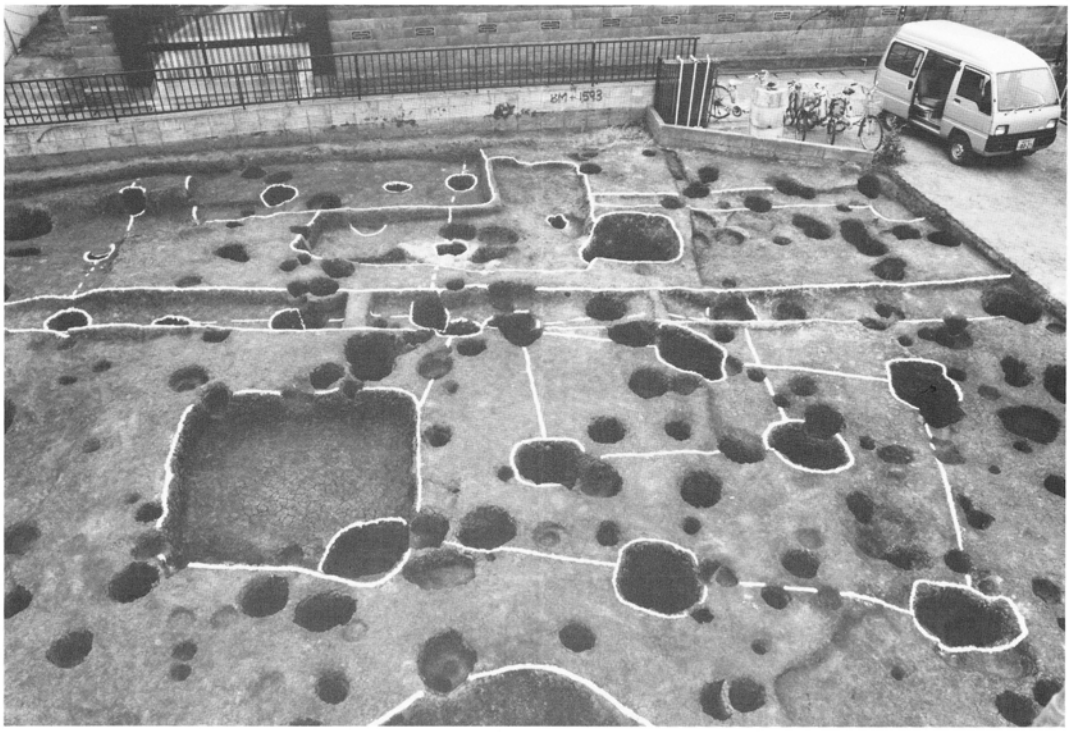




▲（1）ＳＢ34・ＳＣ29・32出土状況（西から）

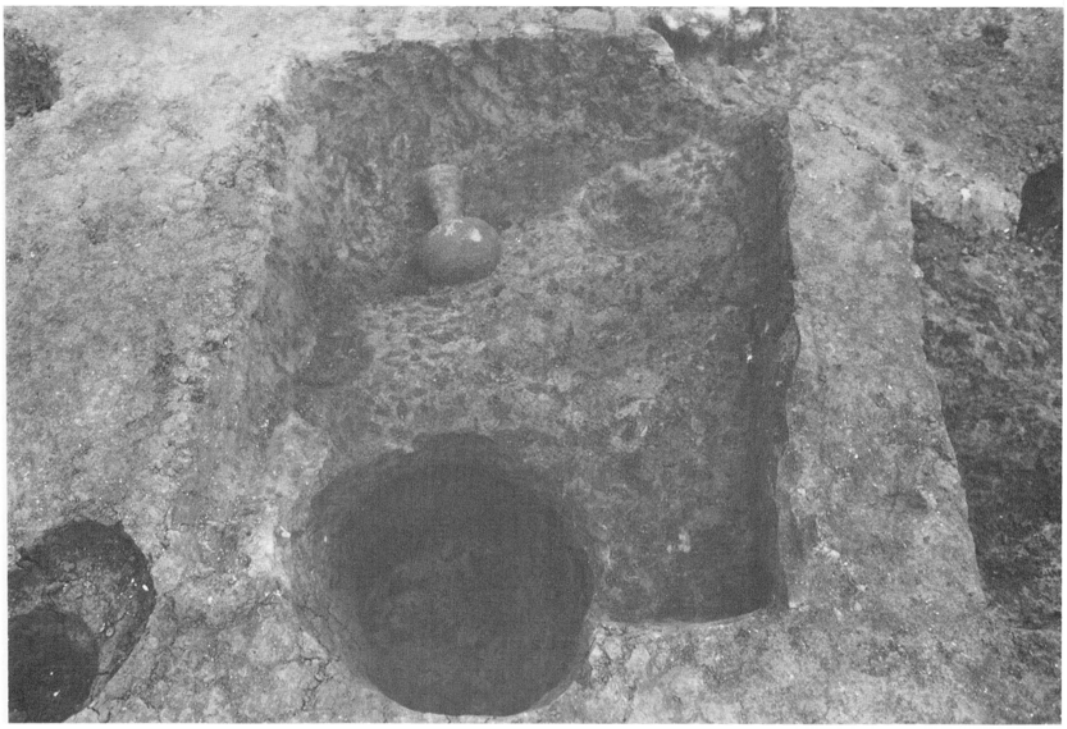
▼（2）ＳＢ33出土状況（西から）

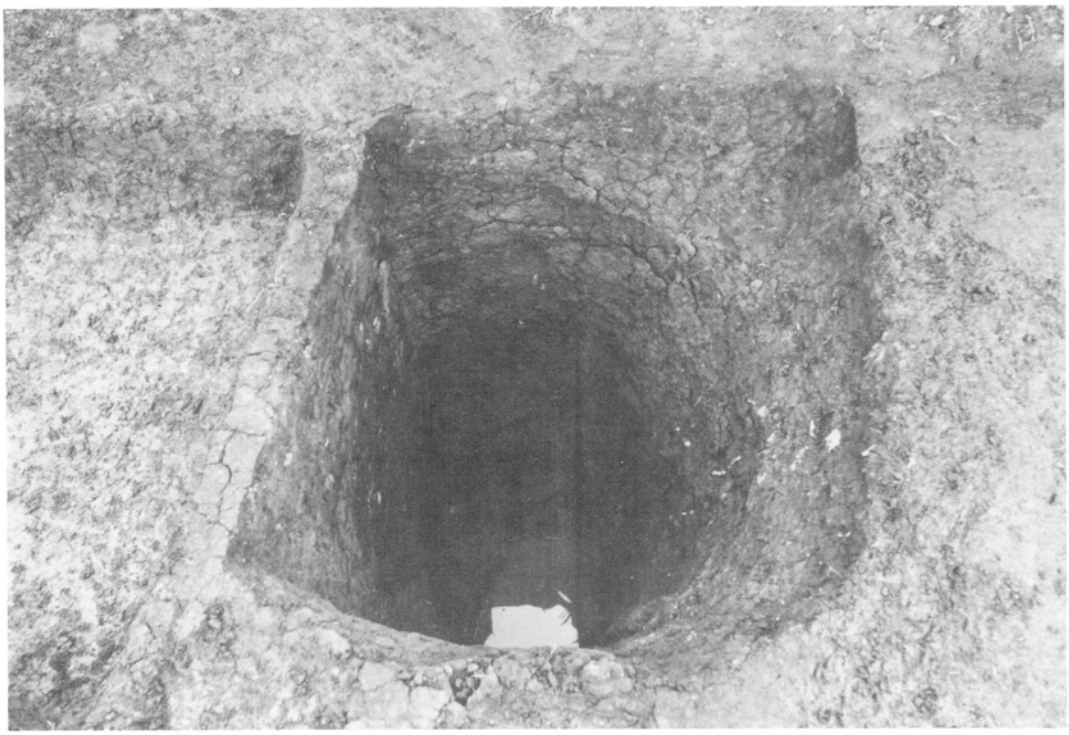




▲（1）ＳＢ42・43出土状況（東から）

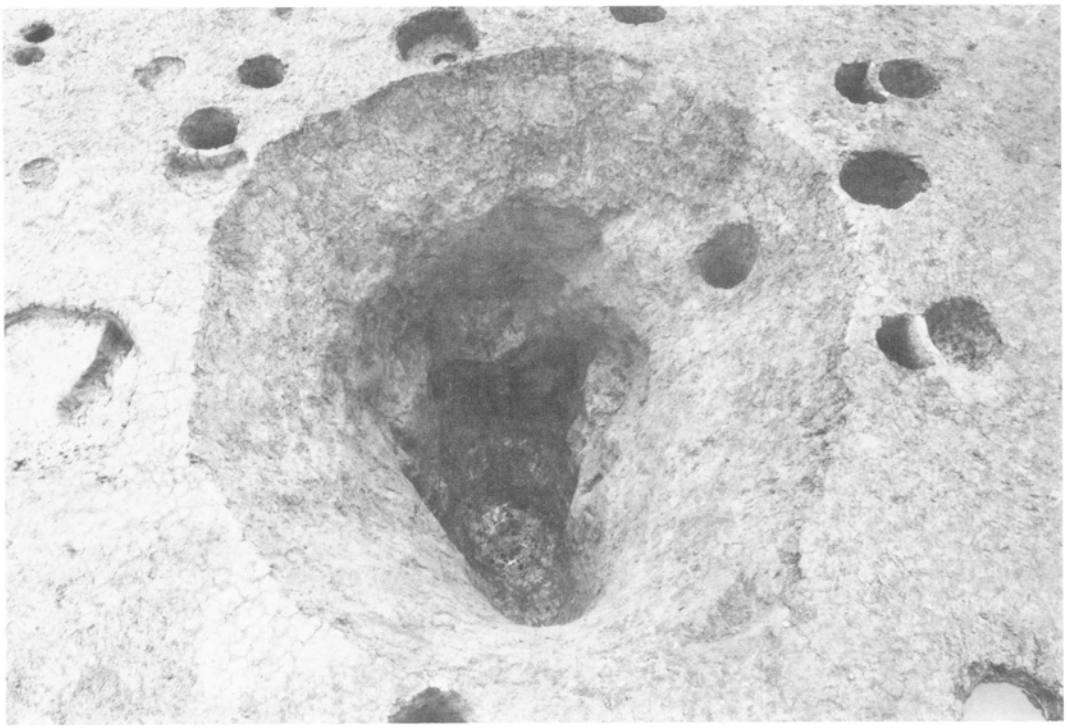
▼（2）ＳＫ38出土状況（北から）

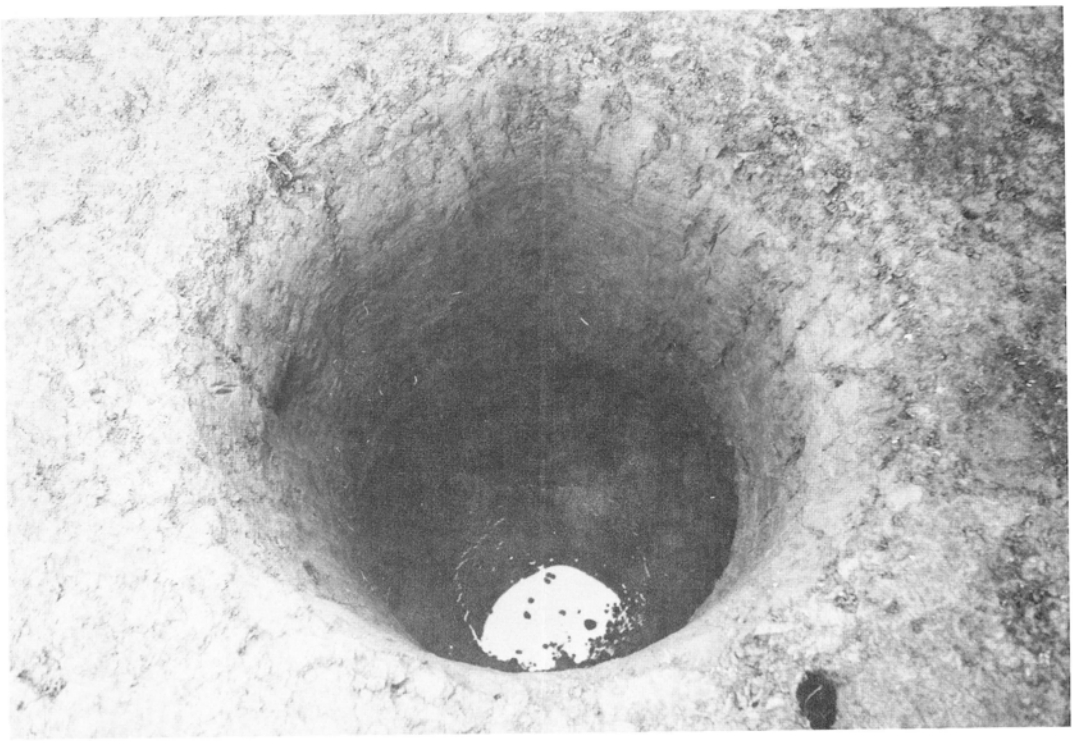




▲（1）ＳＥ04出土状況（東から）

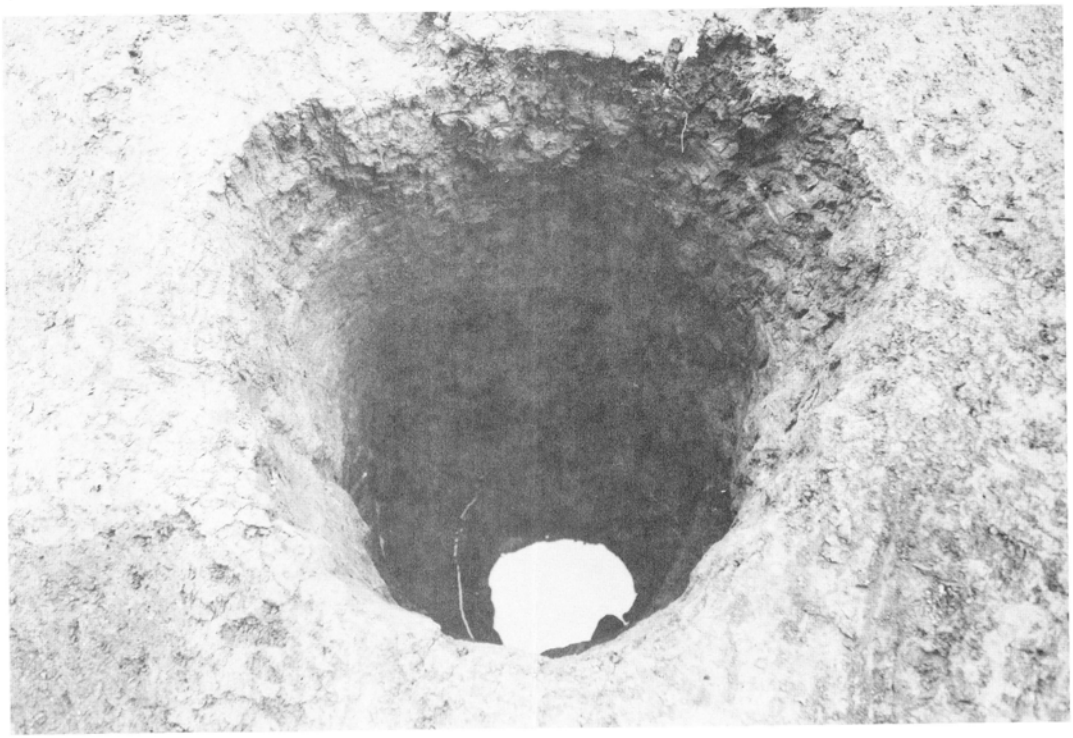
▼（2）ＳＥ08出土状況（東から）

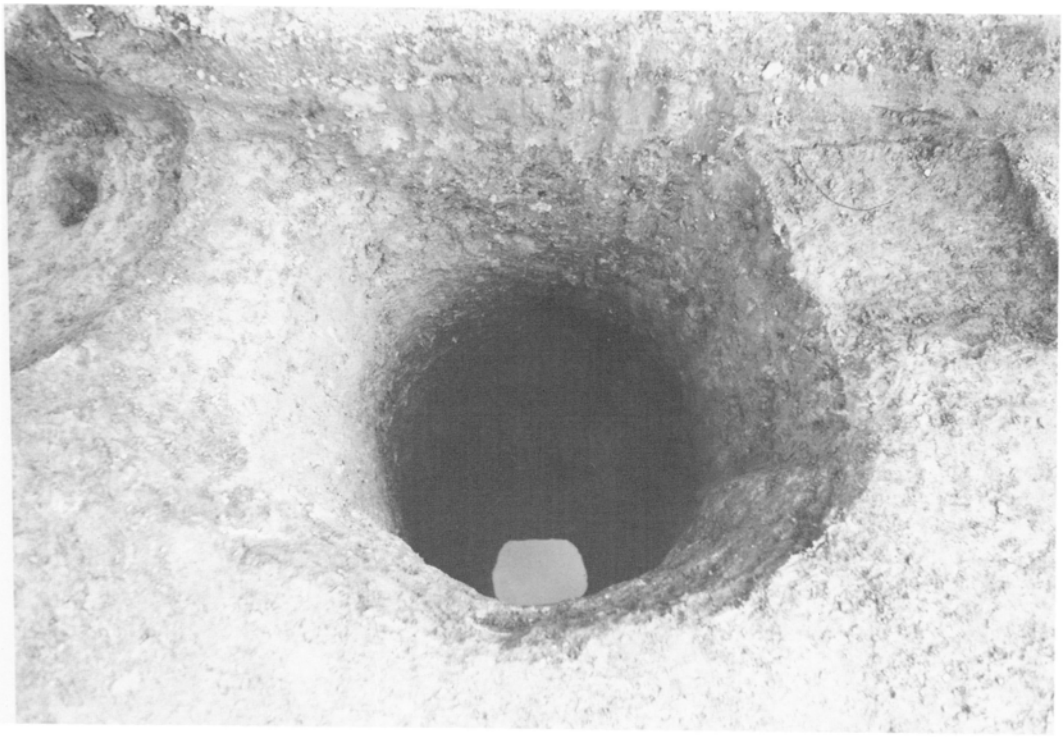




▲（1）ＳＥ26出土状況（南から）

▼（2）ＳＥ27出土状況（南から）



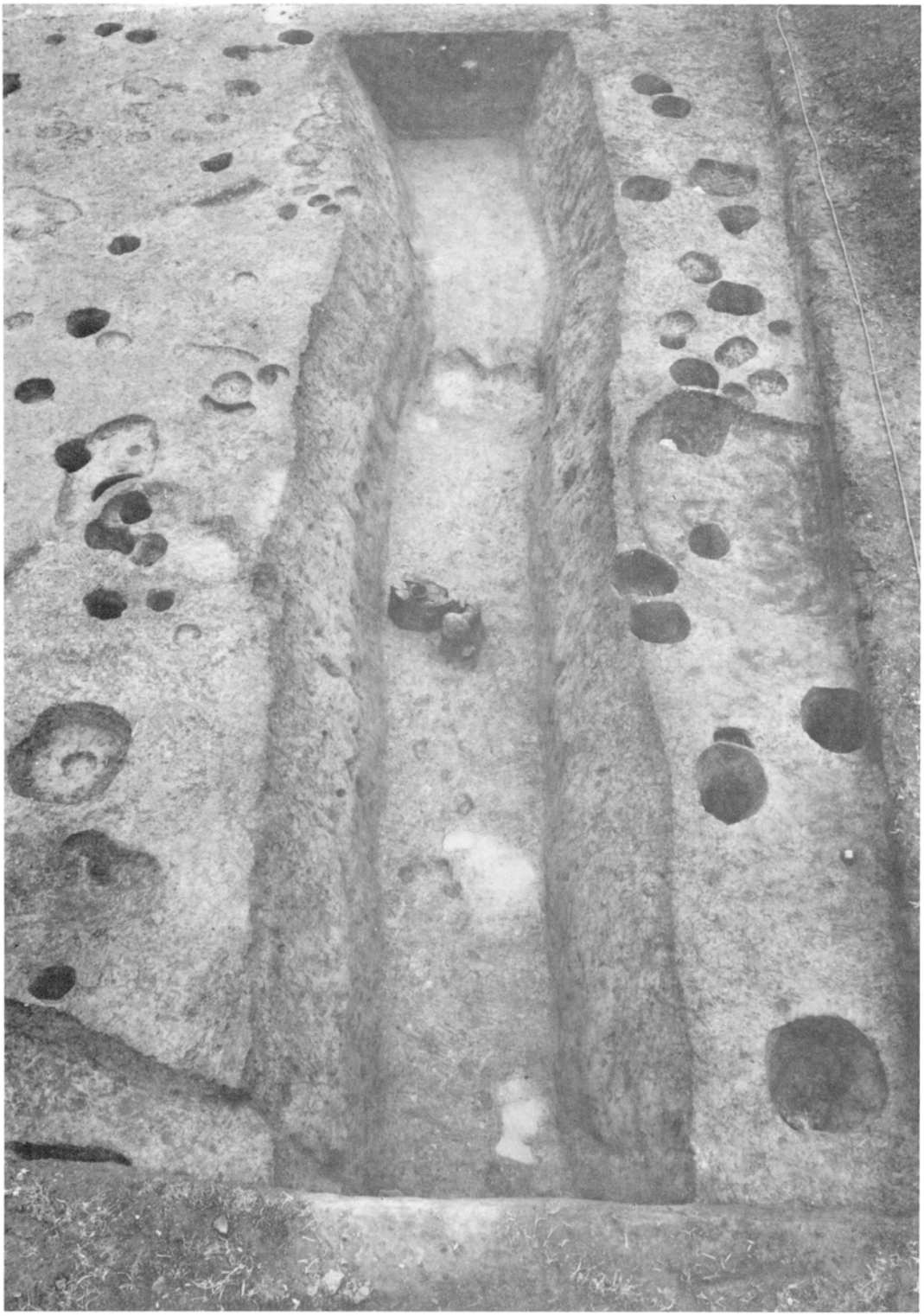


▲（1）ＳＥ35出土状況（南から）

▼（2）ＳＥ37出土状況（北から）

▲（1）ＳＥ102出土状況（西から）

▼（2）ＳＥ103出土状況（東から）

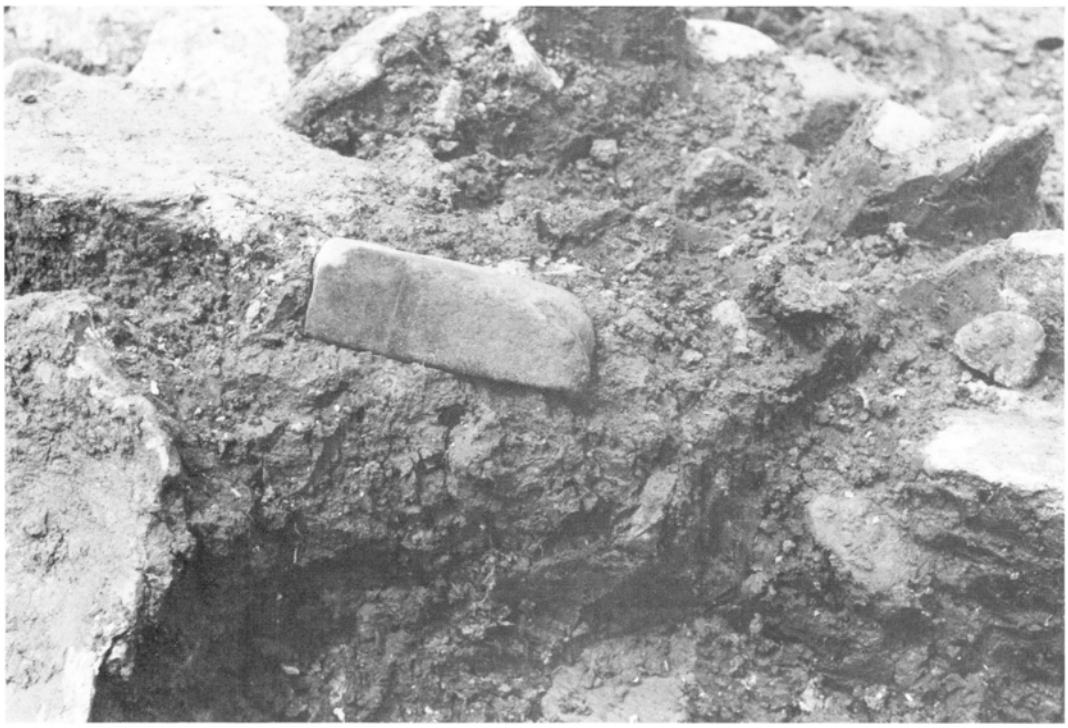


ＳＤ01出土状況（西から）

▲（1）ＳＤ01中央部土層断面（東から）

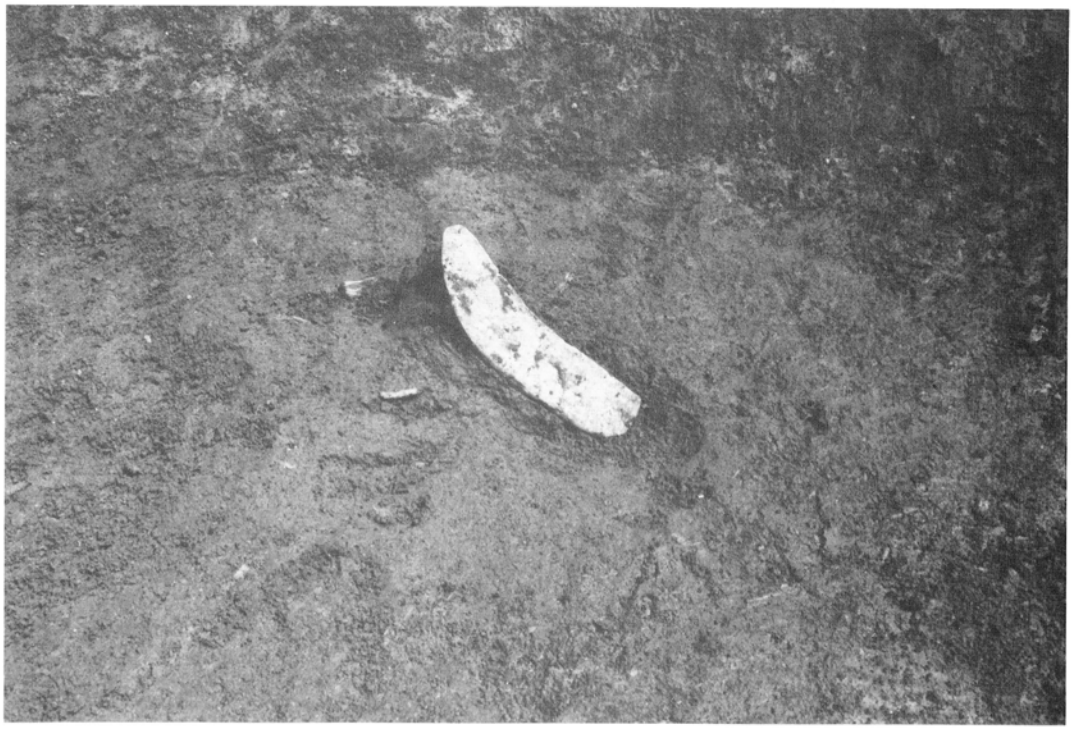
▼（2）ＳＤ01西側土層断面（東から）

▲（1）ＳＤ01銅戈鋳型他遺物出土状況（東から）　▼（2）ＳＤ01中広銅戈鋳型出土状況（東から）



▲（1）ＳＤ01青銅鋤先出土状況（北から）

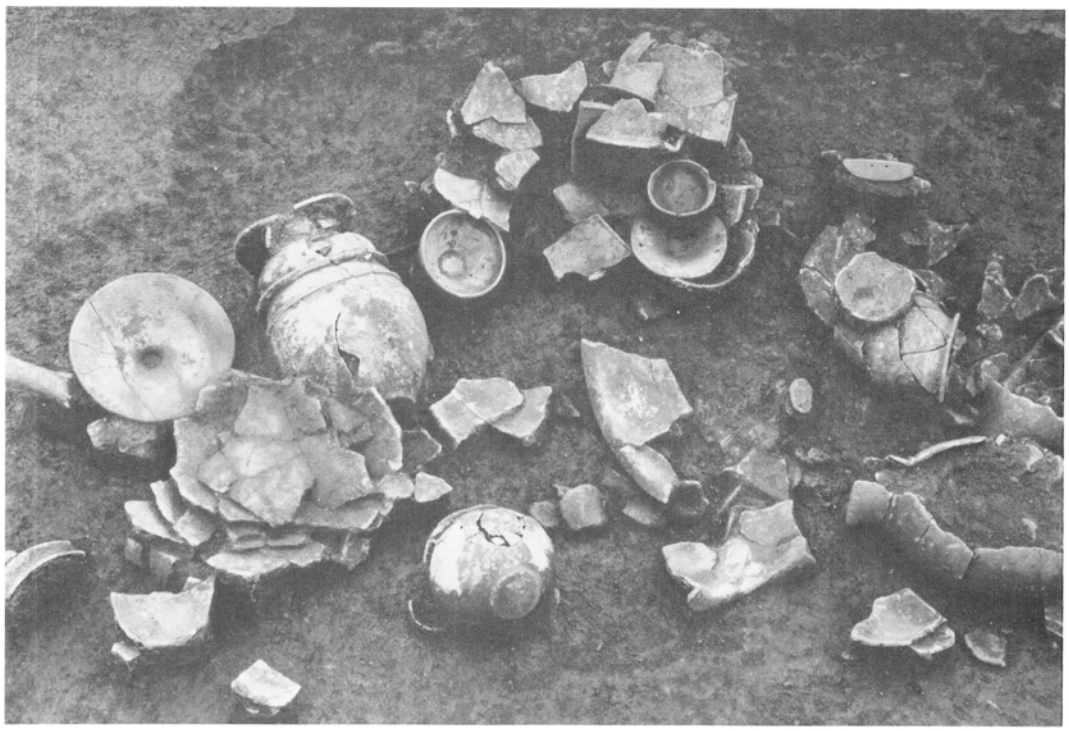
▼（2）ＳＤ01石鎌出土状況（北から）



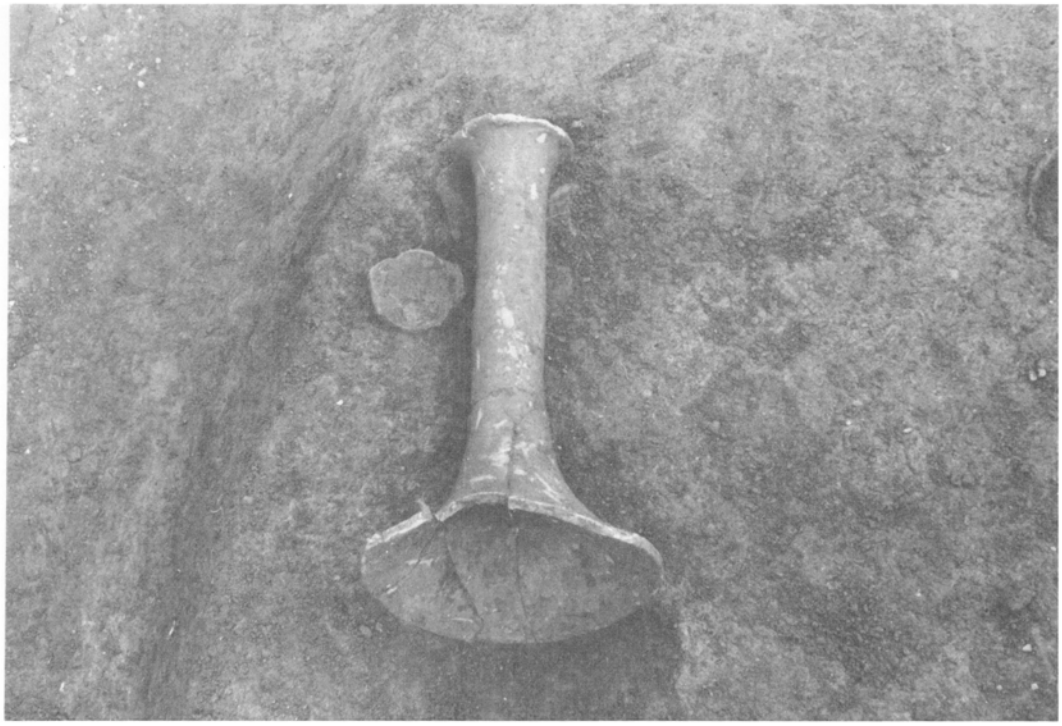
▲（1）ＳＤ01西側遺物出土状況（北から）

▼（2）ＳＤ01東側遺物出土状況（北から）

▲（1）ＳＤ01東側遺物出土状況（西から）　▼（2）ＳＤ01東側遺物出土状況（北から）



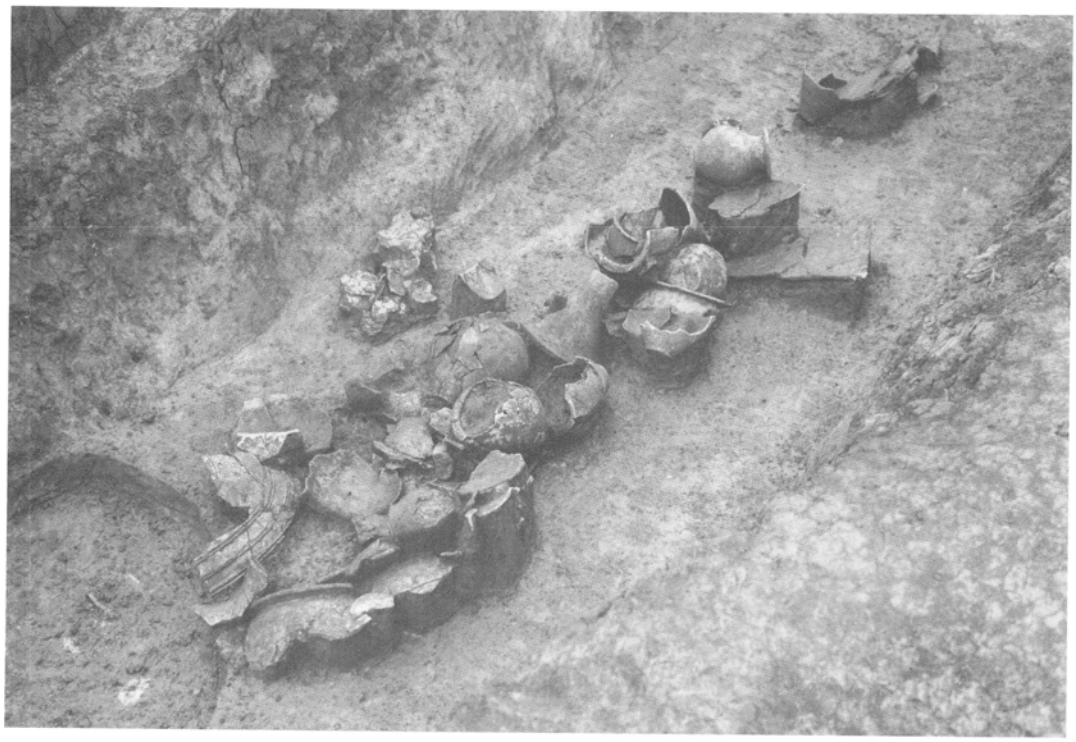
▲（1）ＳＤ01東側筒形器台出土状況（西から）　▼（2）ＳＤ01東側筒形器台出土状況（北から）



▲（1）ＳＤ01中央部遺物出土状況（西から）　▼（2）ＳＤ01中央部遺物出土状況（北東から）

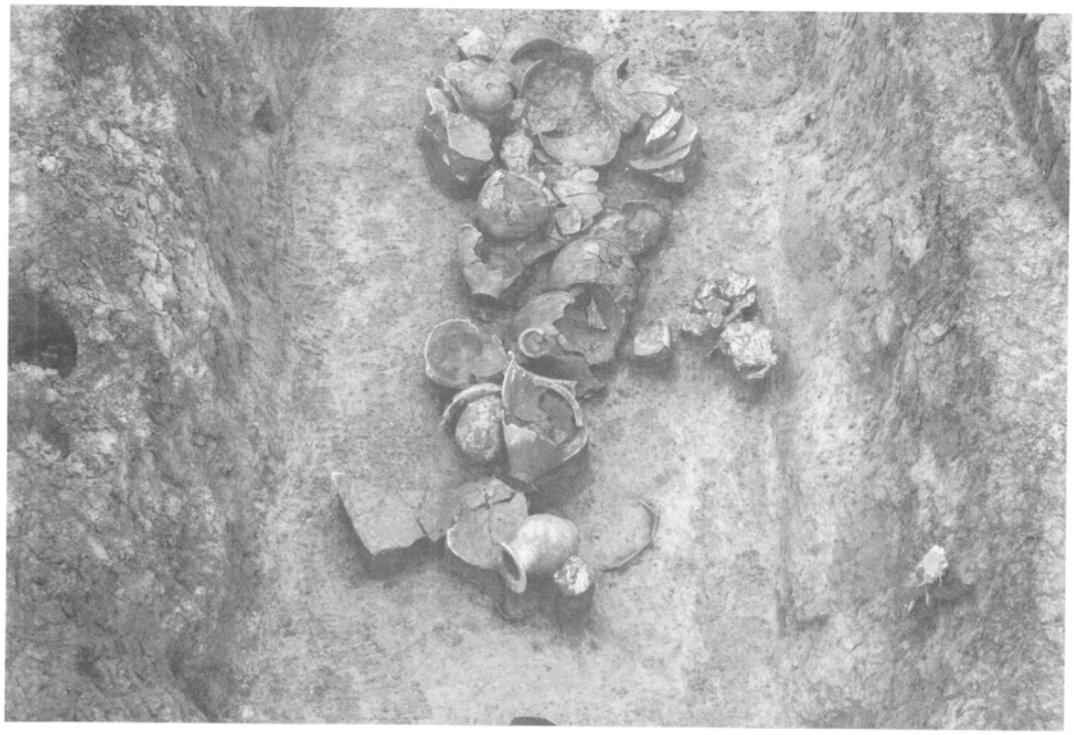
▲（1）ＳＤ01中央部遺物出土状況（西から）

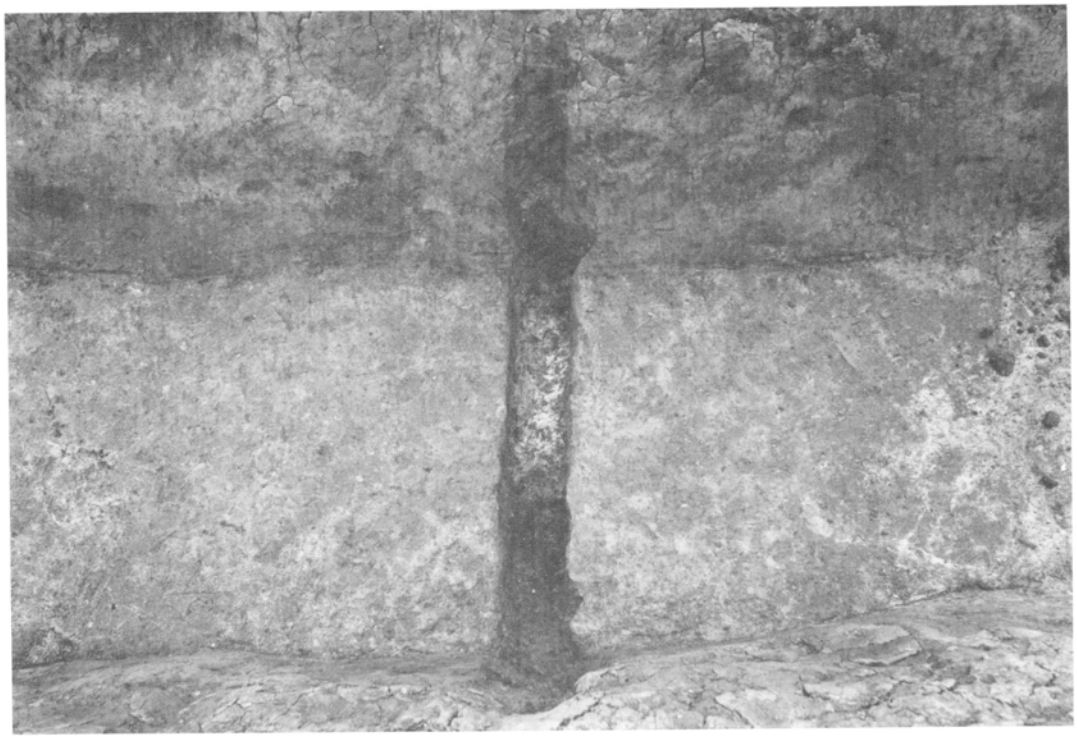
▼（2）ＳＤ01中央部遺物出土状況（北東から）



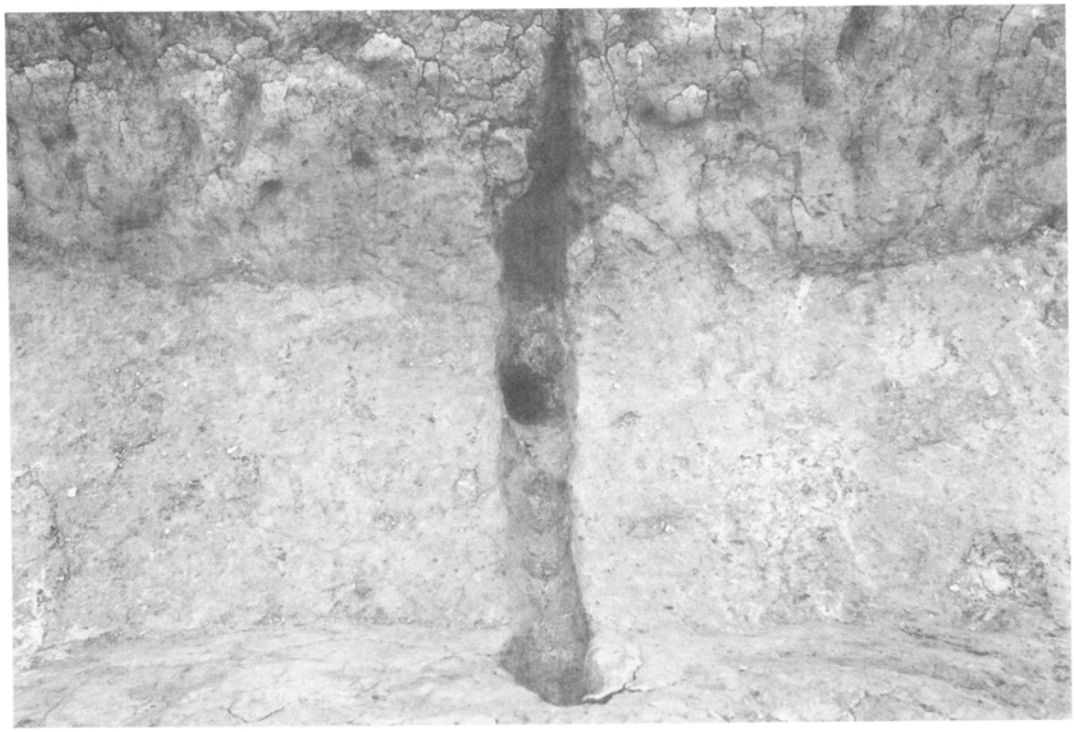
▲（1）ＳＤ01中央部遺物出土状況（北東から）

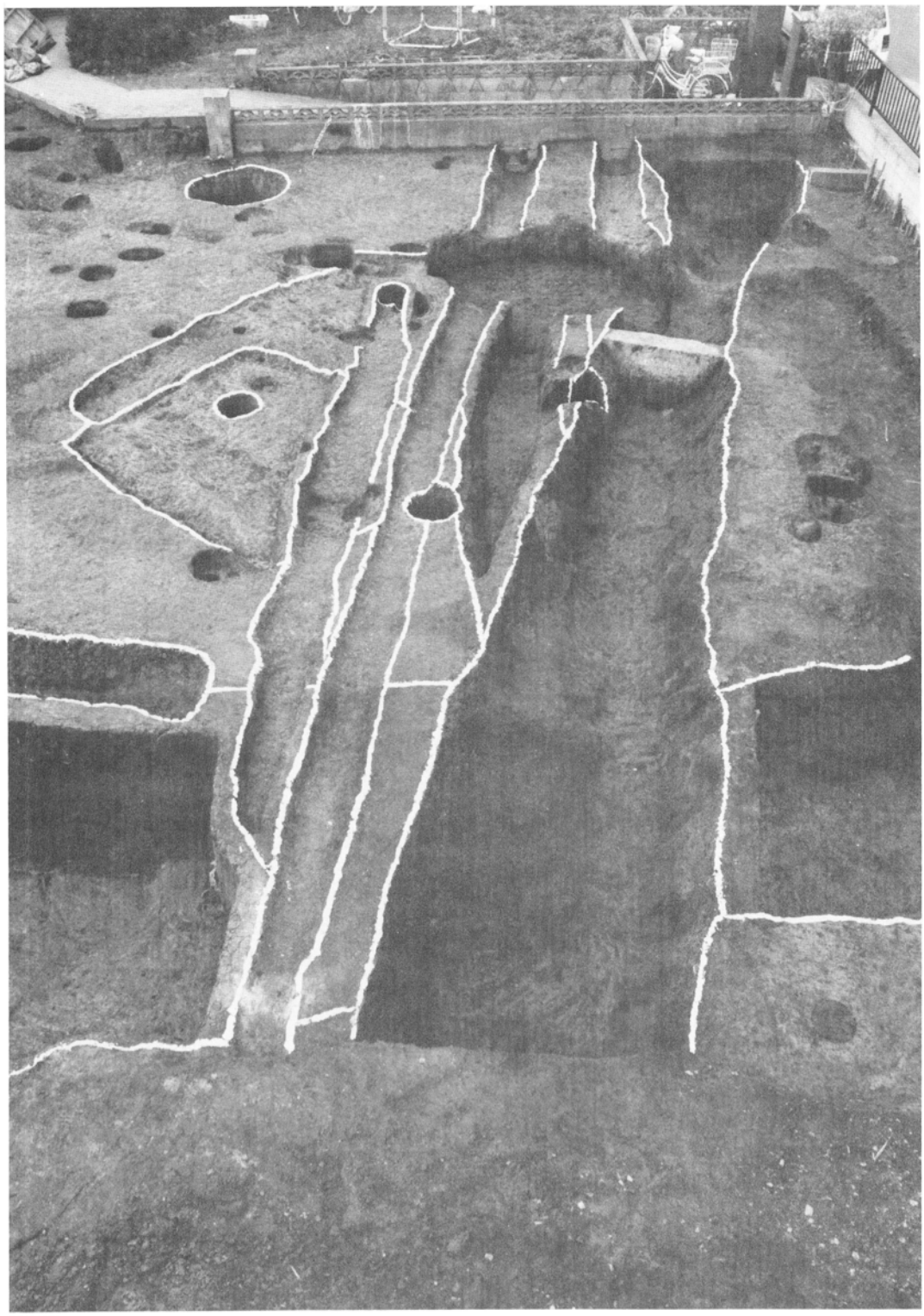
▼（2）ＳＤ01中央部遺物出土状況（西から）





▲（1）ＳＤ01中央部西側仕切溝出土状況（北から）　▼（2）ＳＤ01中央部東側仕切溝出土状況（北から）

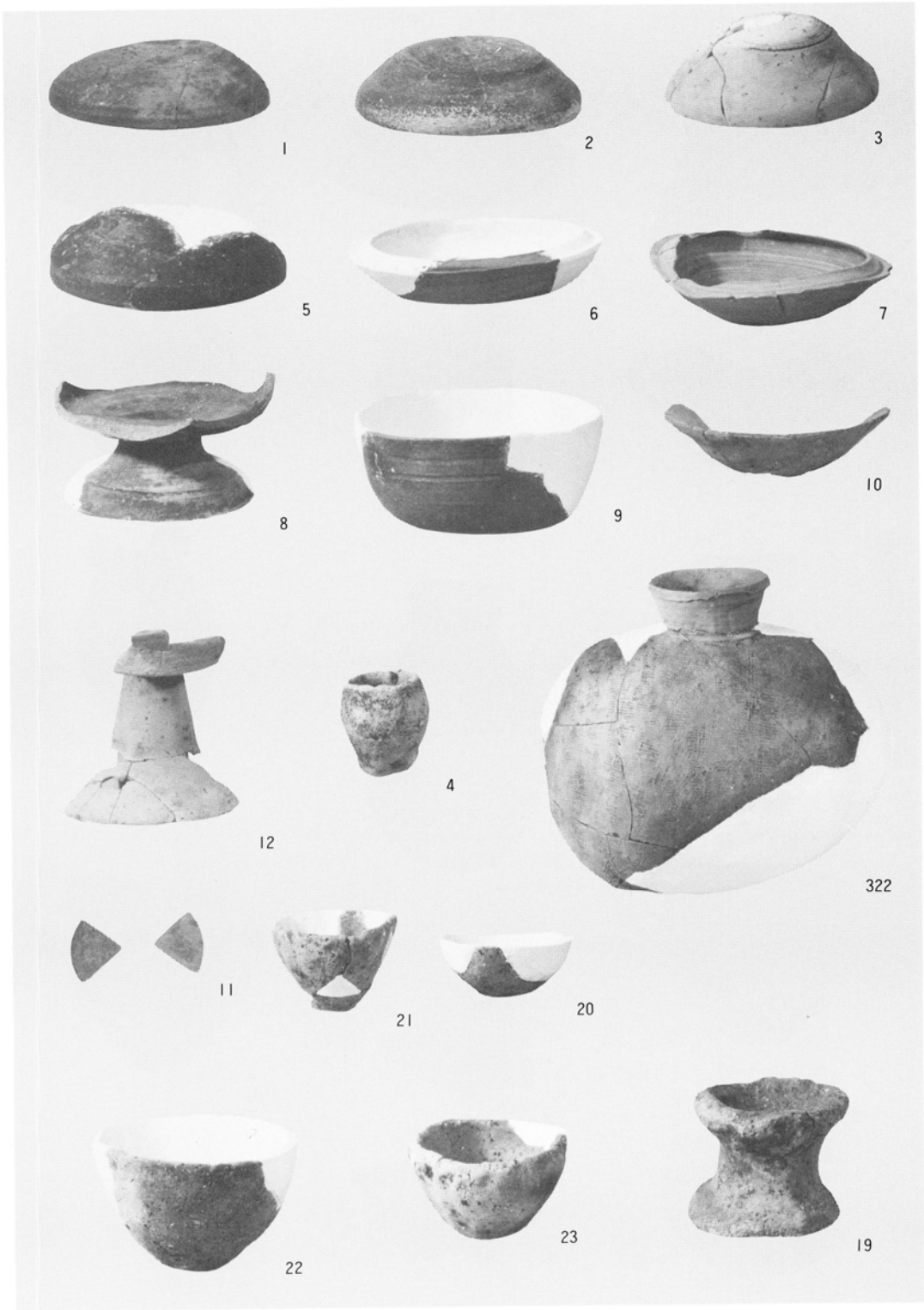




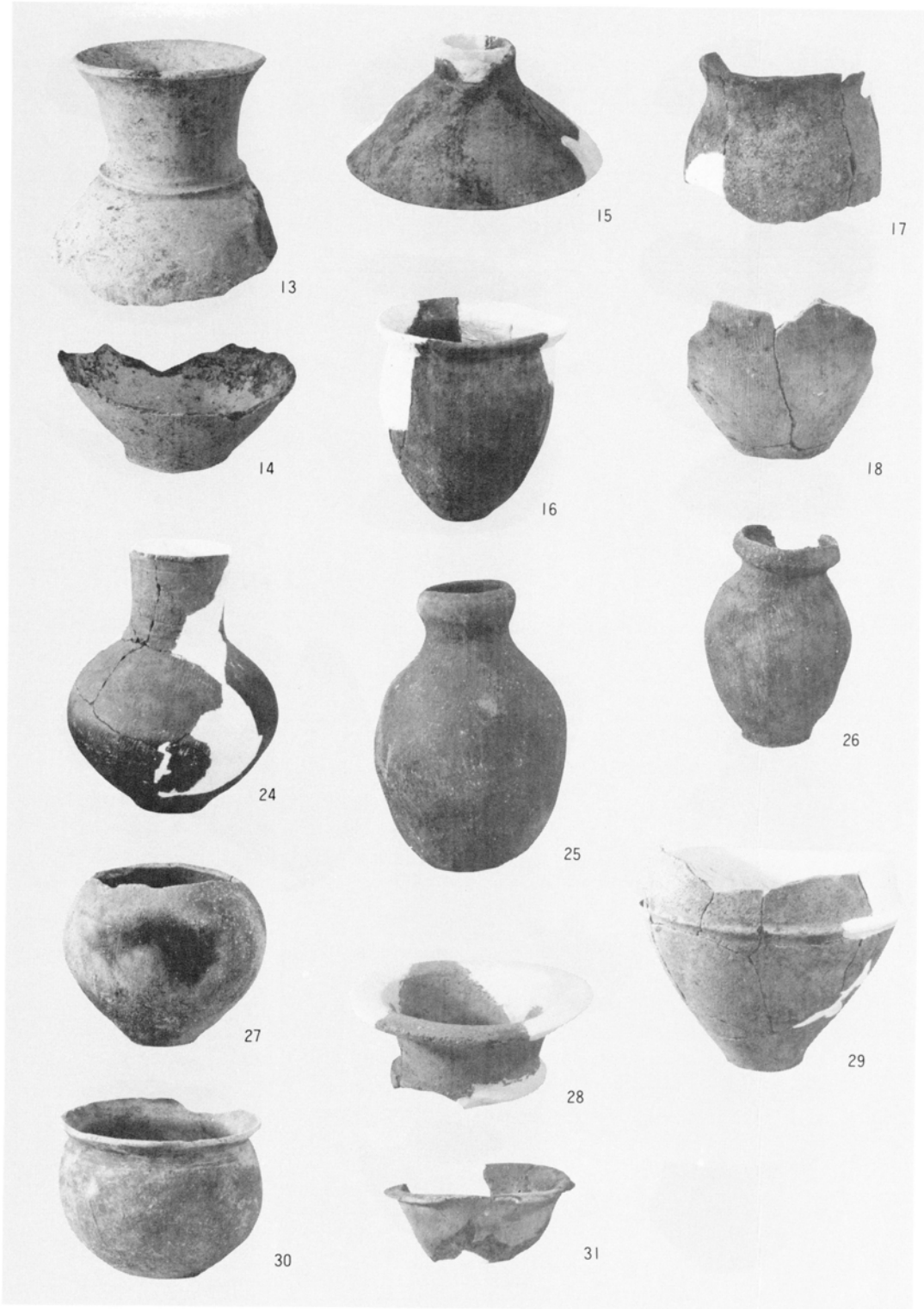
ＳＤ09～12出土状況（南から）

▲（1）ＳＸ13出土状況（西から）

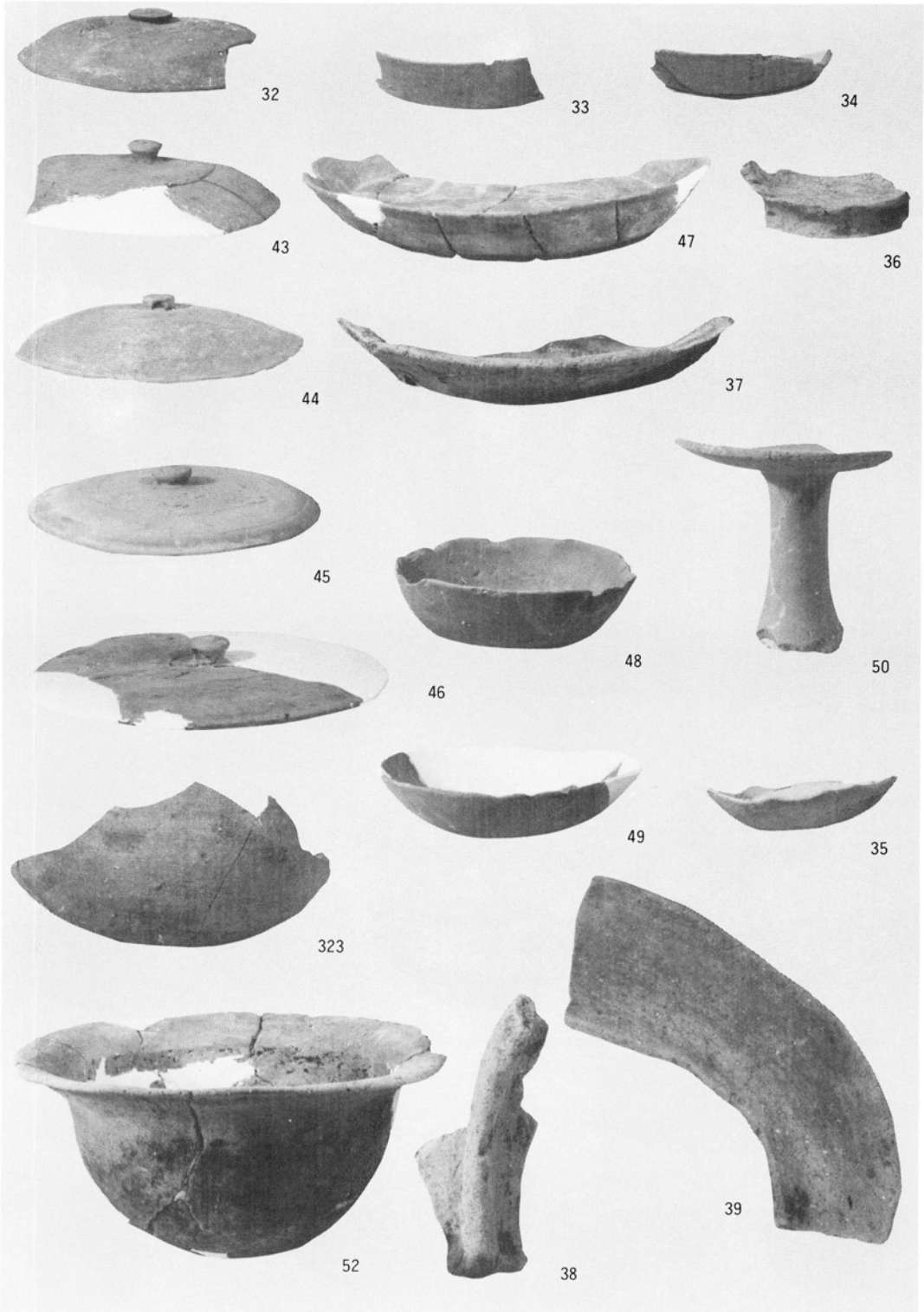
▼（2）ＳＸ13遺物出土状況（東から）



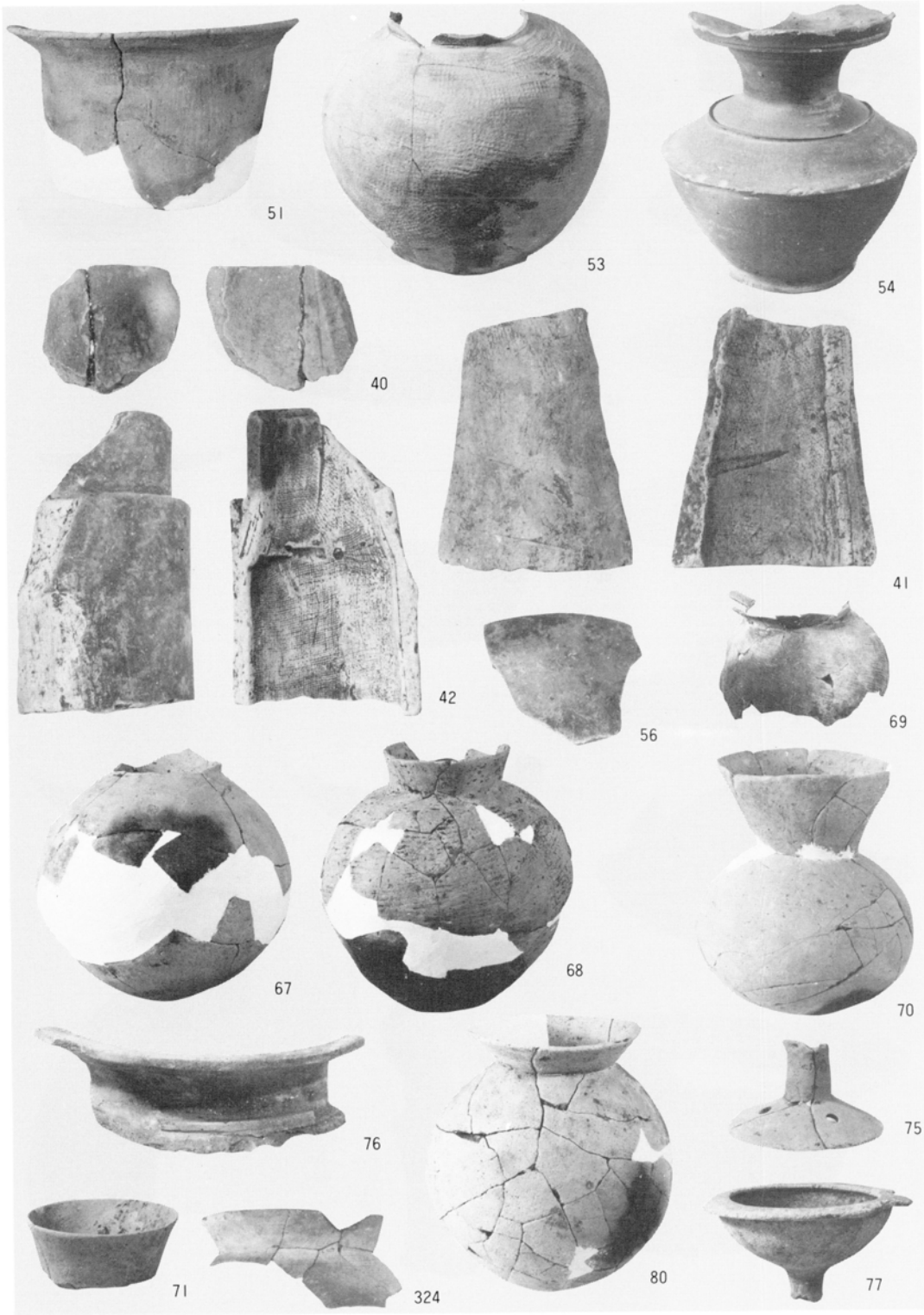
出土遺物 (1)　1～4：SC04　5～9・322：SC15　10・11：SC28
12：SC29　19～23：SE03



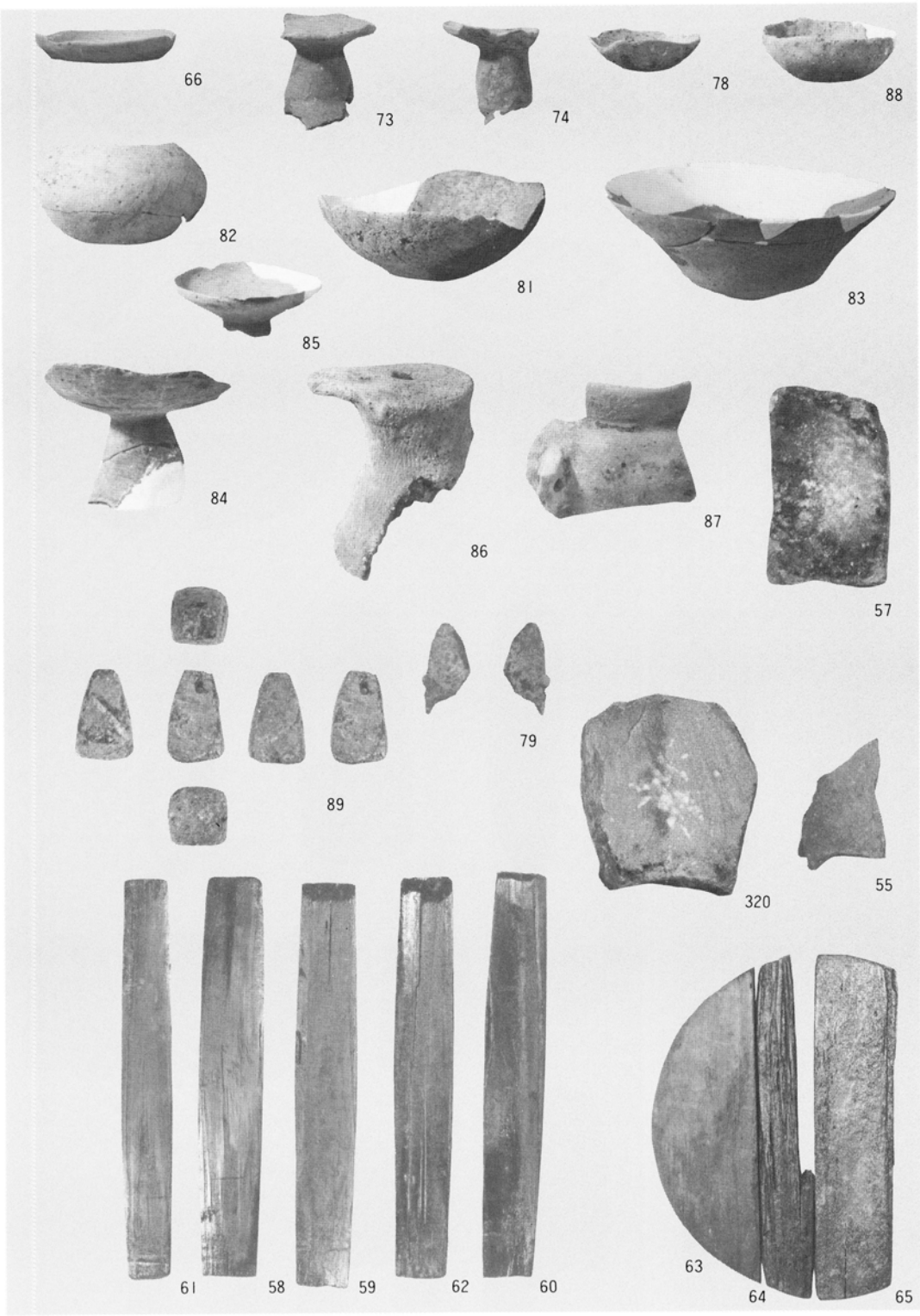
出土遺物 (2) SE03



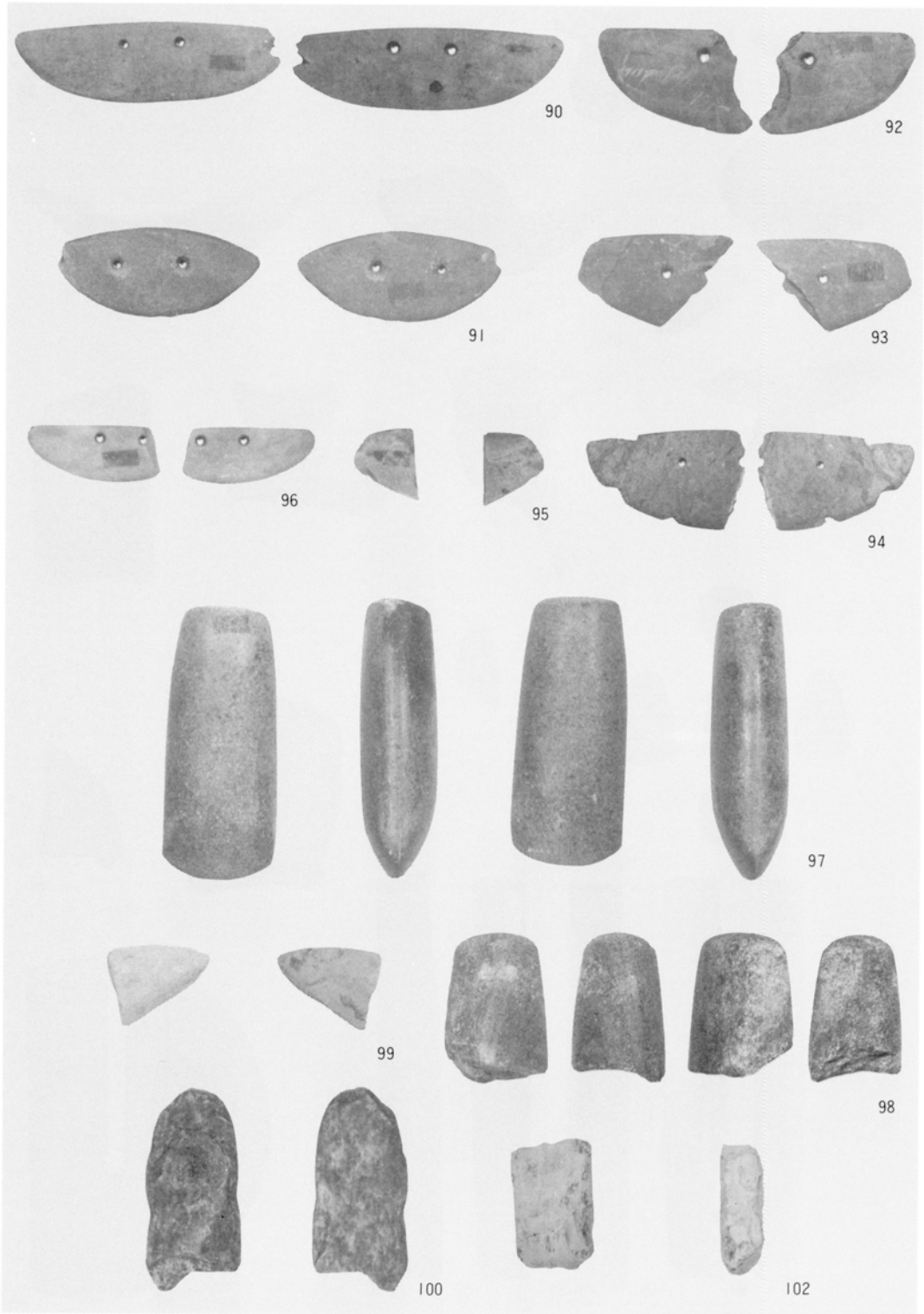
出土遺物（3）ＳＥ08



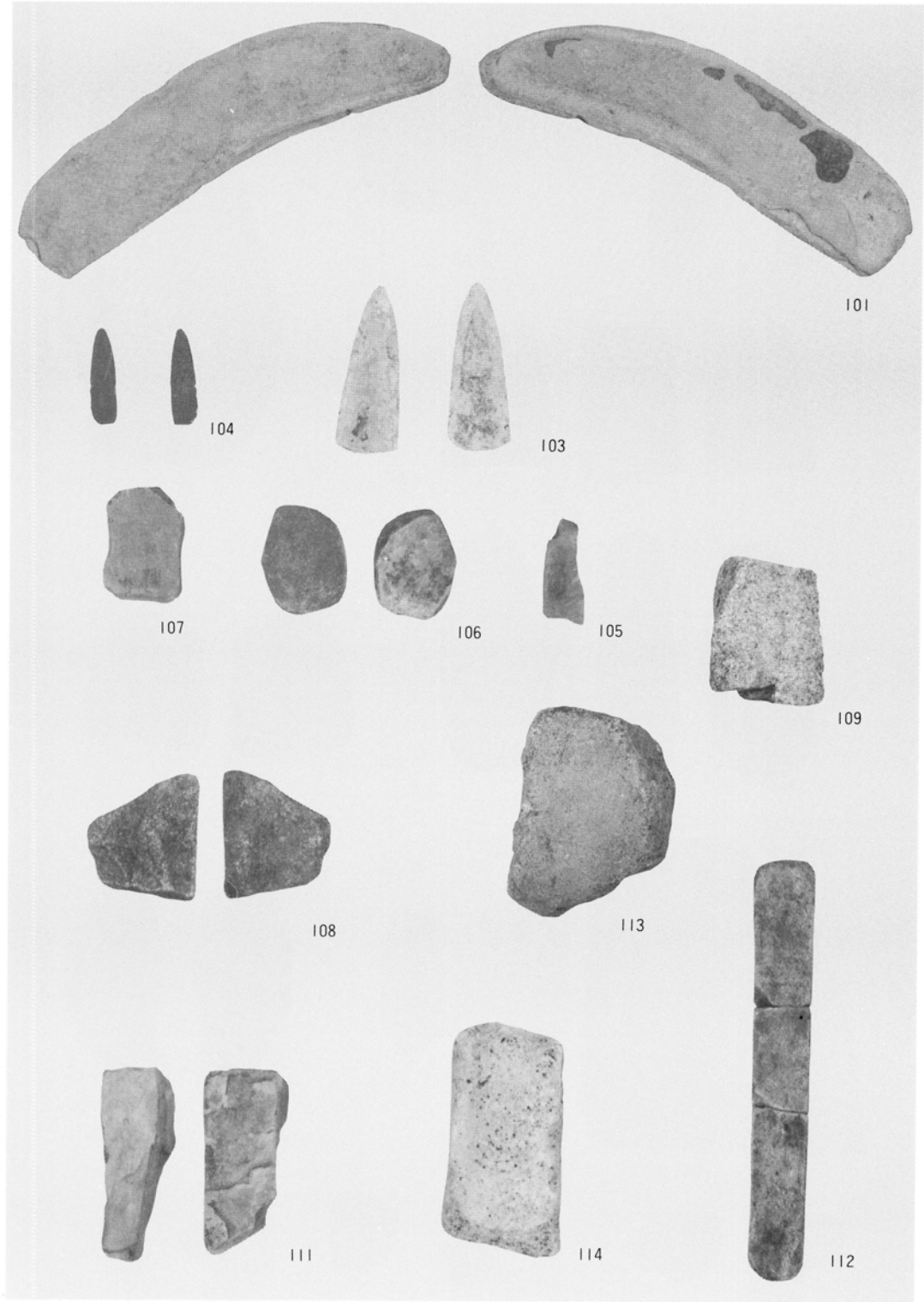
出土遺物 (4)　40～42・51・53・54：SE08　56：SE26
67～71・76・77・324：SE37　75：SD01　80：SE102



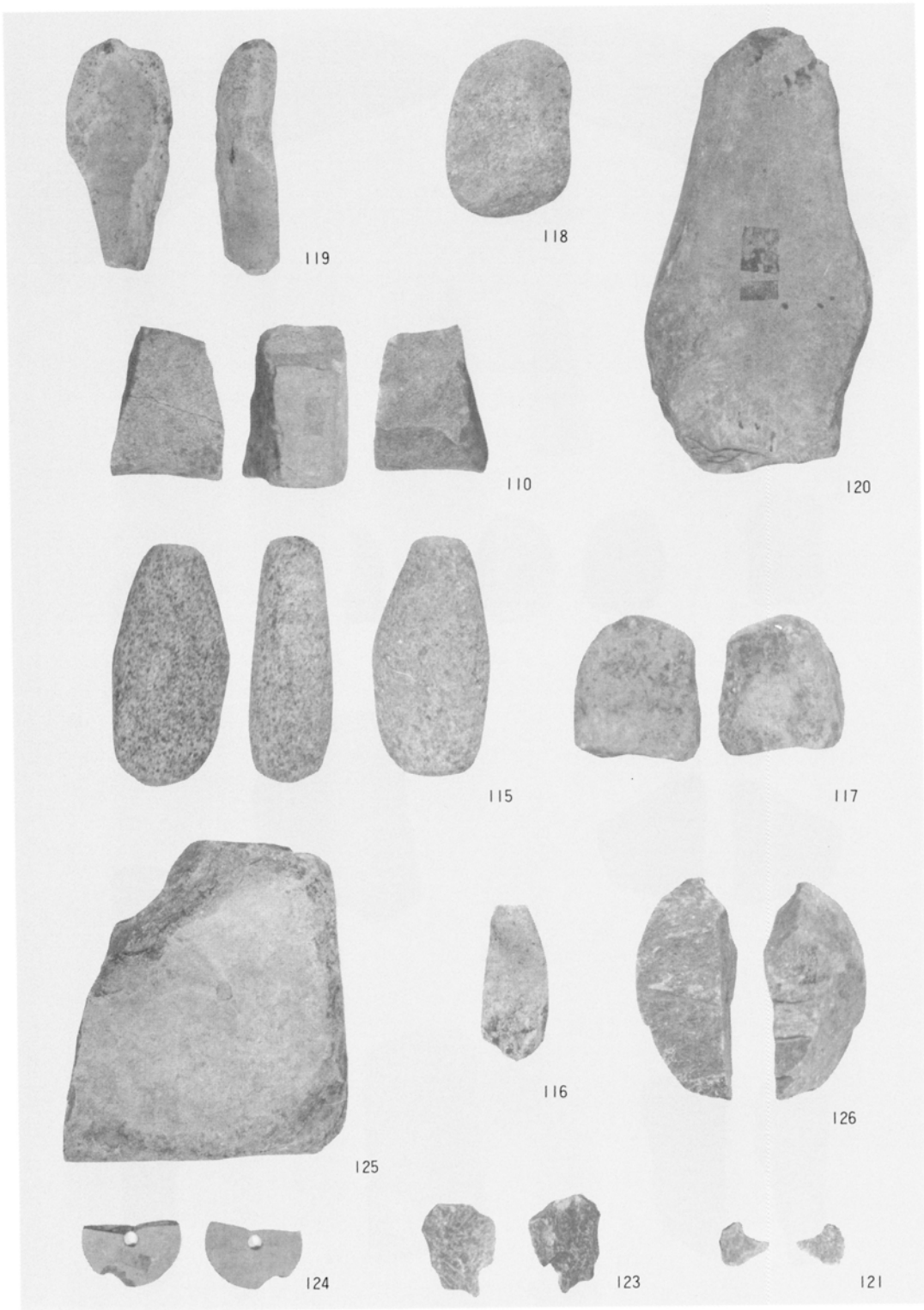
出土遺物（5）　55：ＳＥ08　57：ＳＥ26　58～66・320：ＳＥ27　79：ＳＥ37
73・74・78：ＳＥ37　81～86・88：ＳＥ102　87・89：ＳＥ103



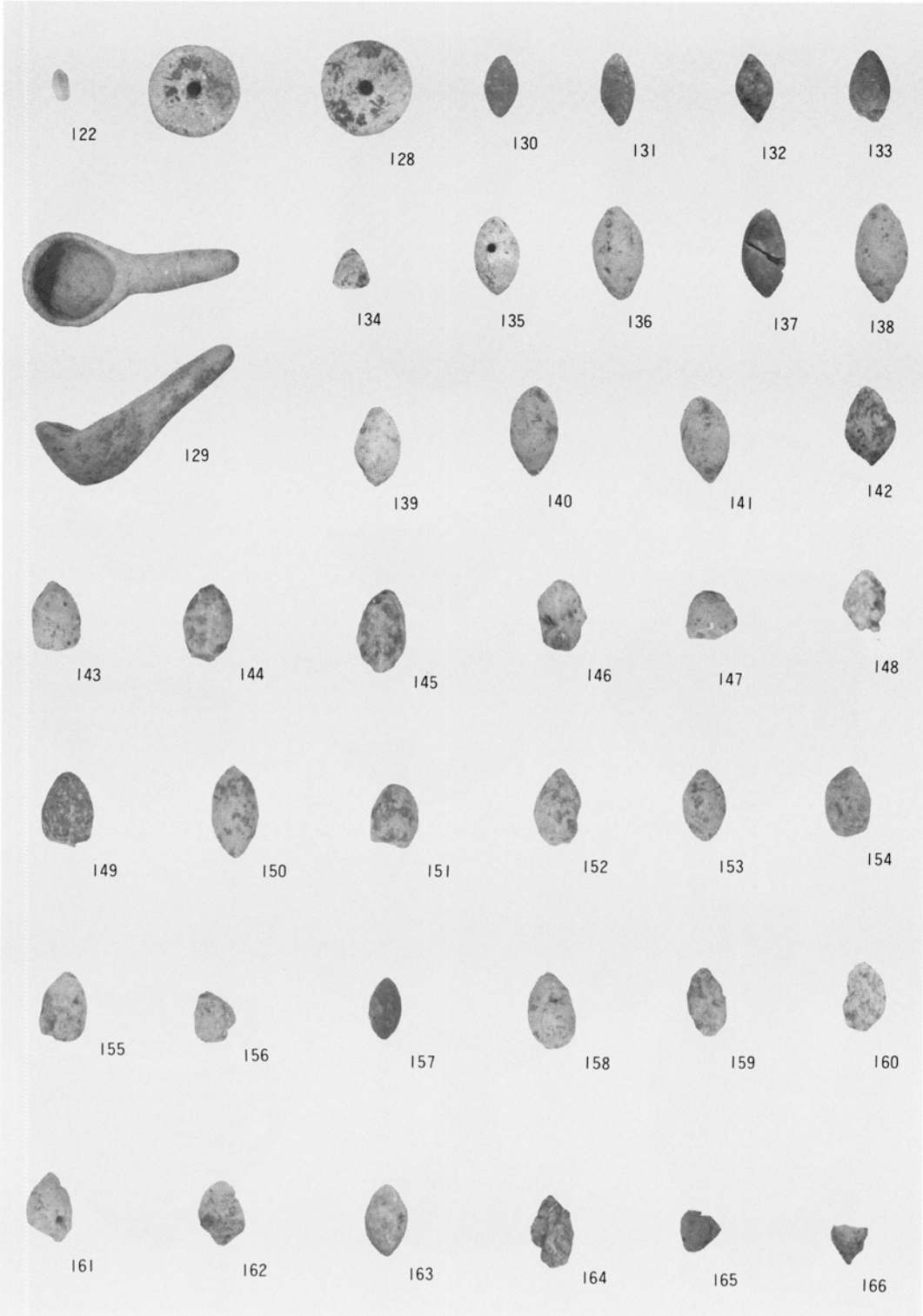
出土遺物 (6) SD01



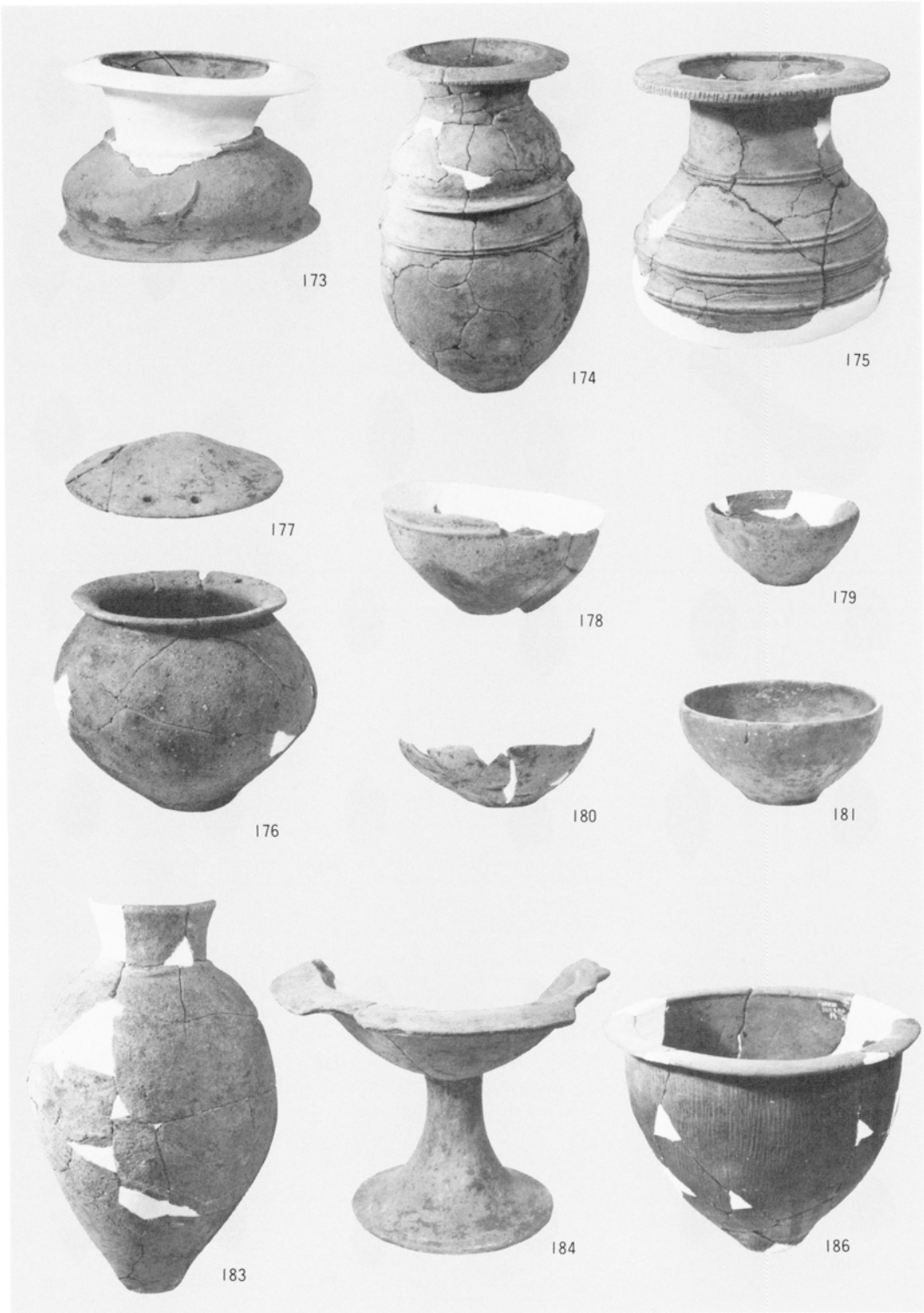
出土遺物（7）　101・103～109・112～114：ＳＤ01
111：ＳＤ09



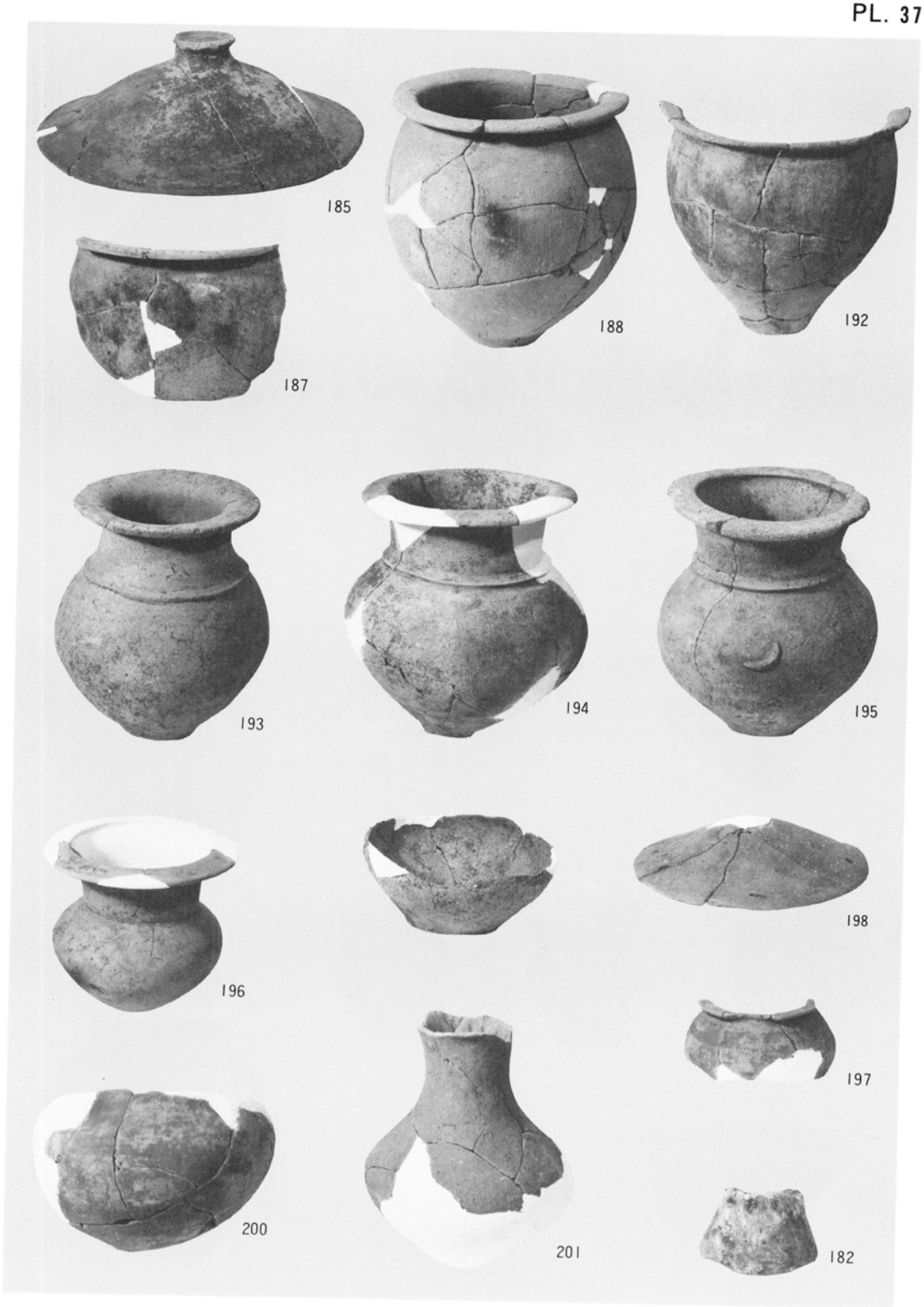
出土遺物 (8) SD01


122
128
130
131
132
133
134
135
136
137
138
129
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166

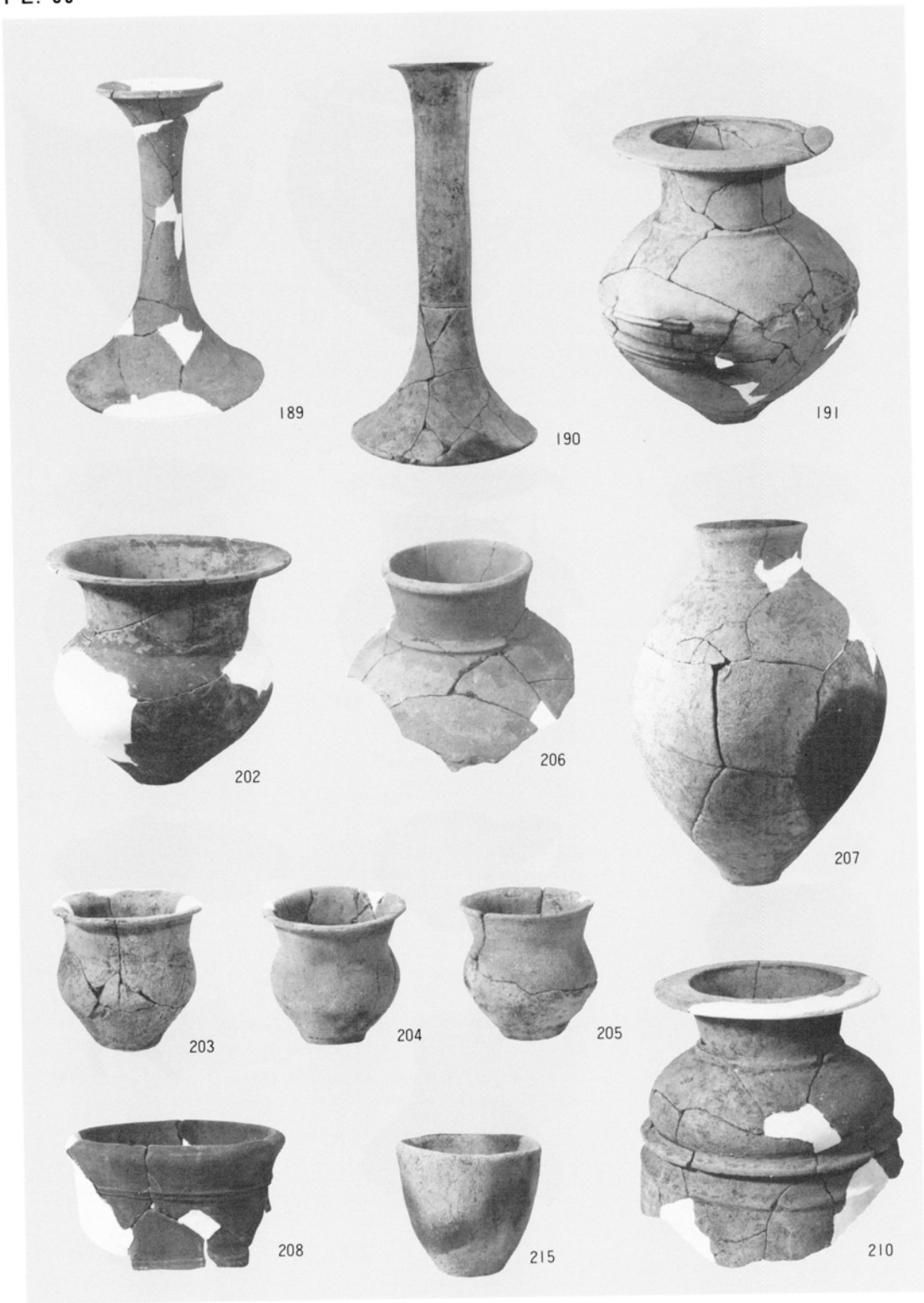
出土遺物 (9) SD01



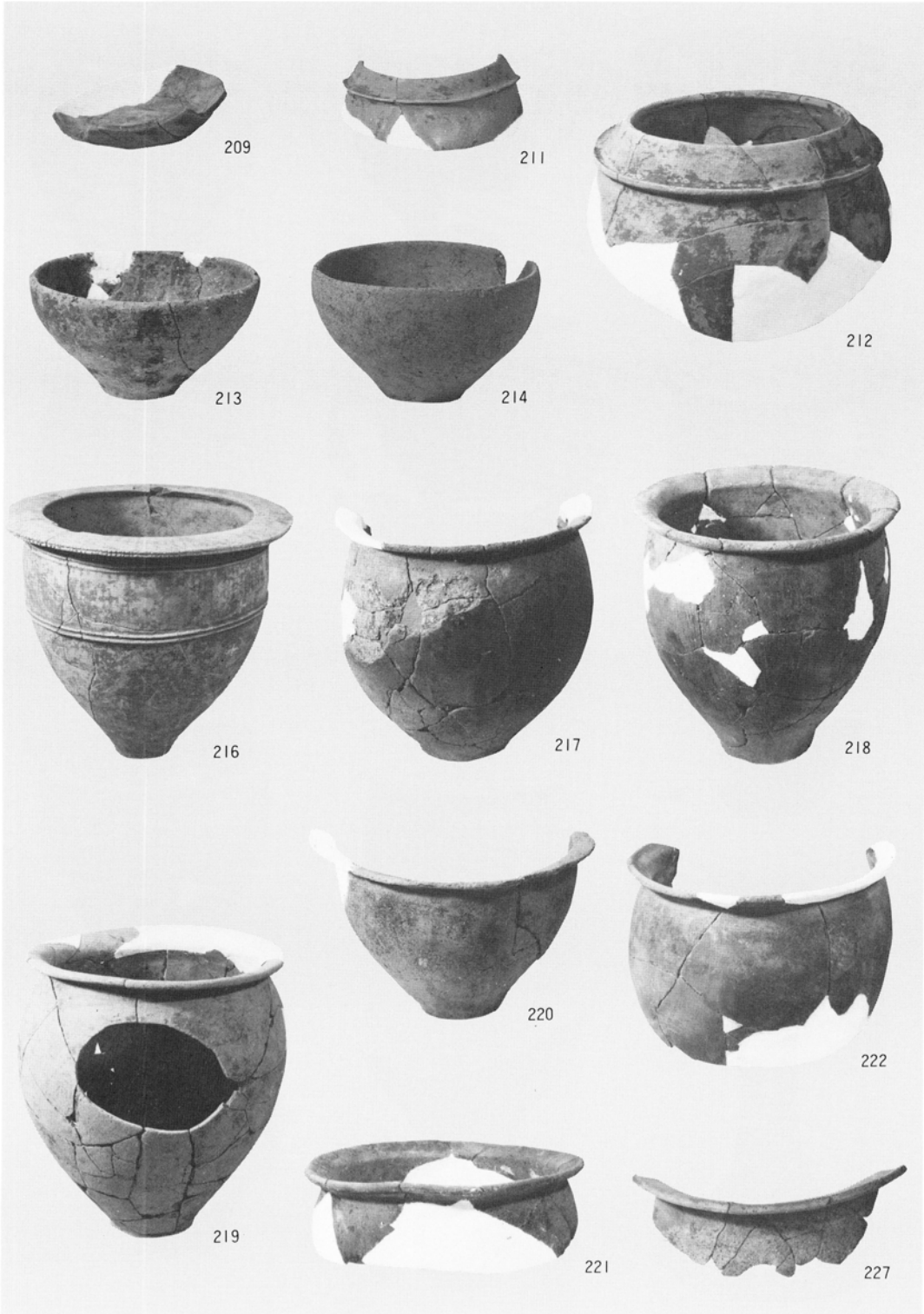
出土遺物 (10) ＳＤ01



出土遺物 (11) ＳＤ01



出土遺物 (12) SD01

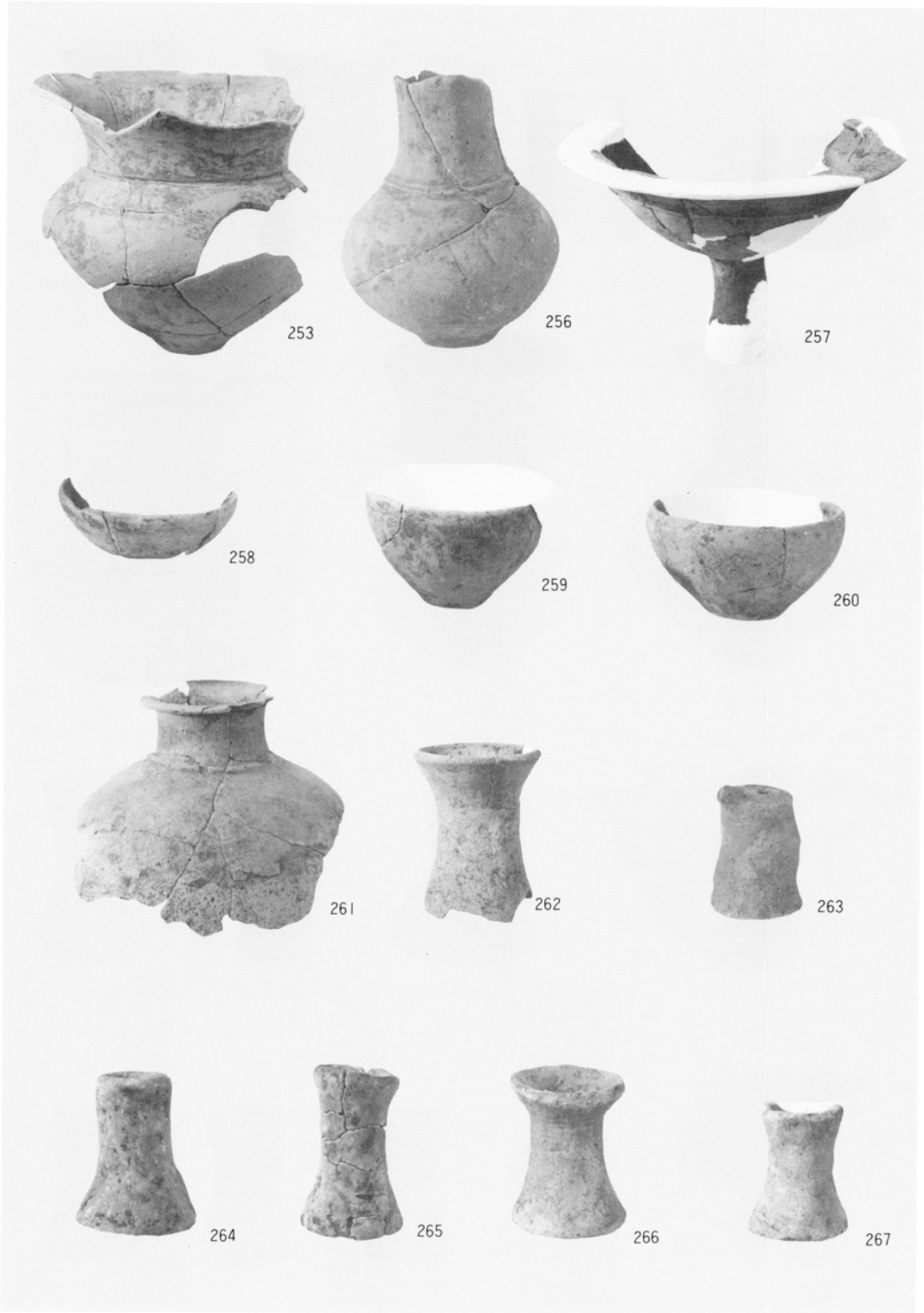


出土遺物 (13) ＳＤ01

出土遺物 ⑭ ＳＤ01

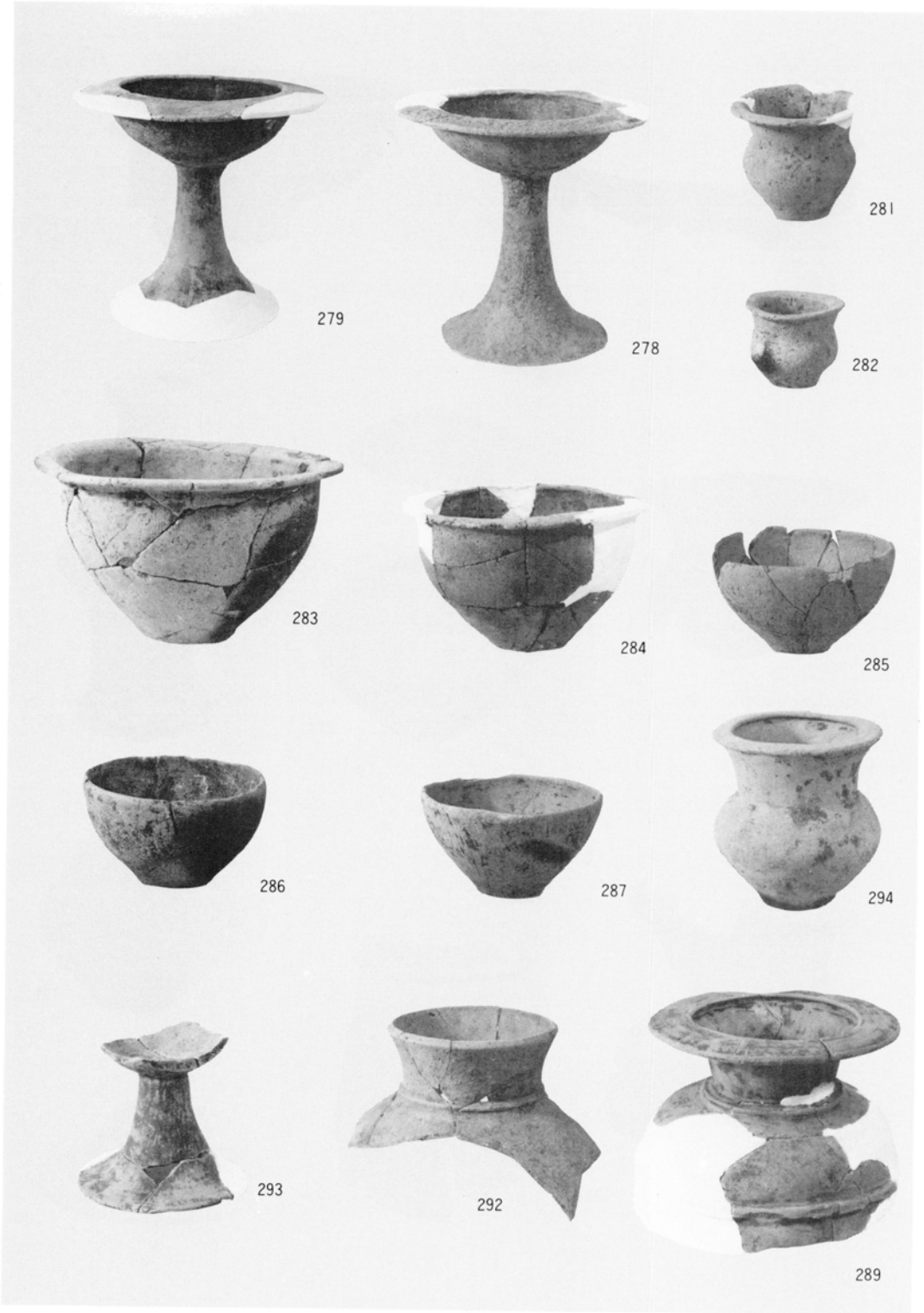
237
238
242
241
243
244
245
240
246
247
248
249
255
254
250
251
252

出土遺物 (15) ＳＤ01

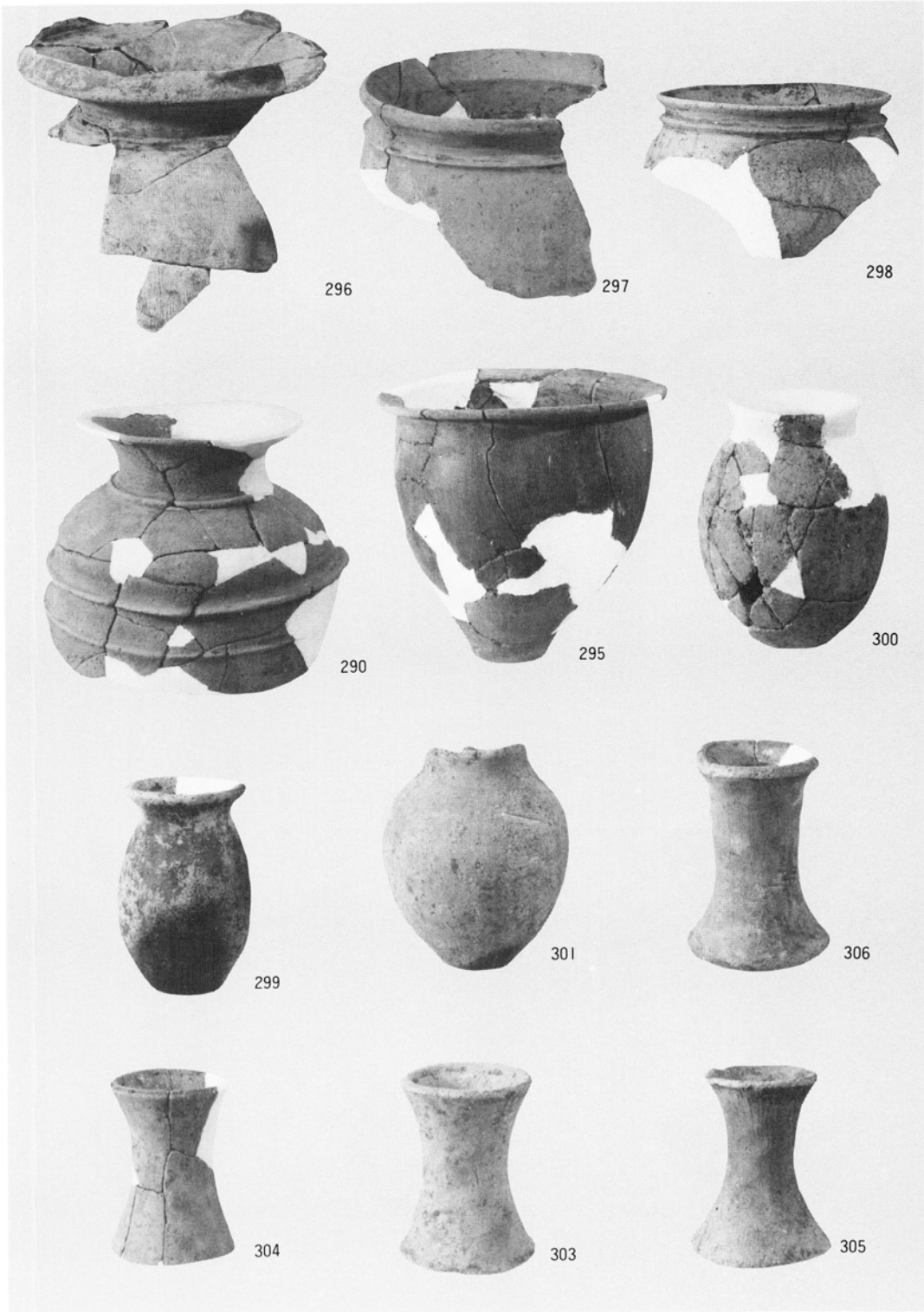


出土遺物 (16) SD01

出土遺物 (17) S D01

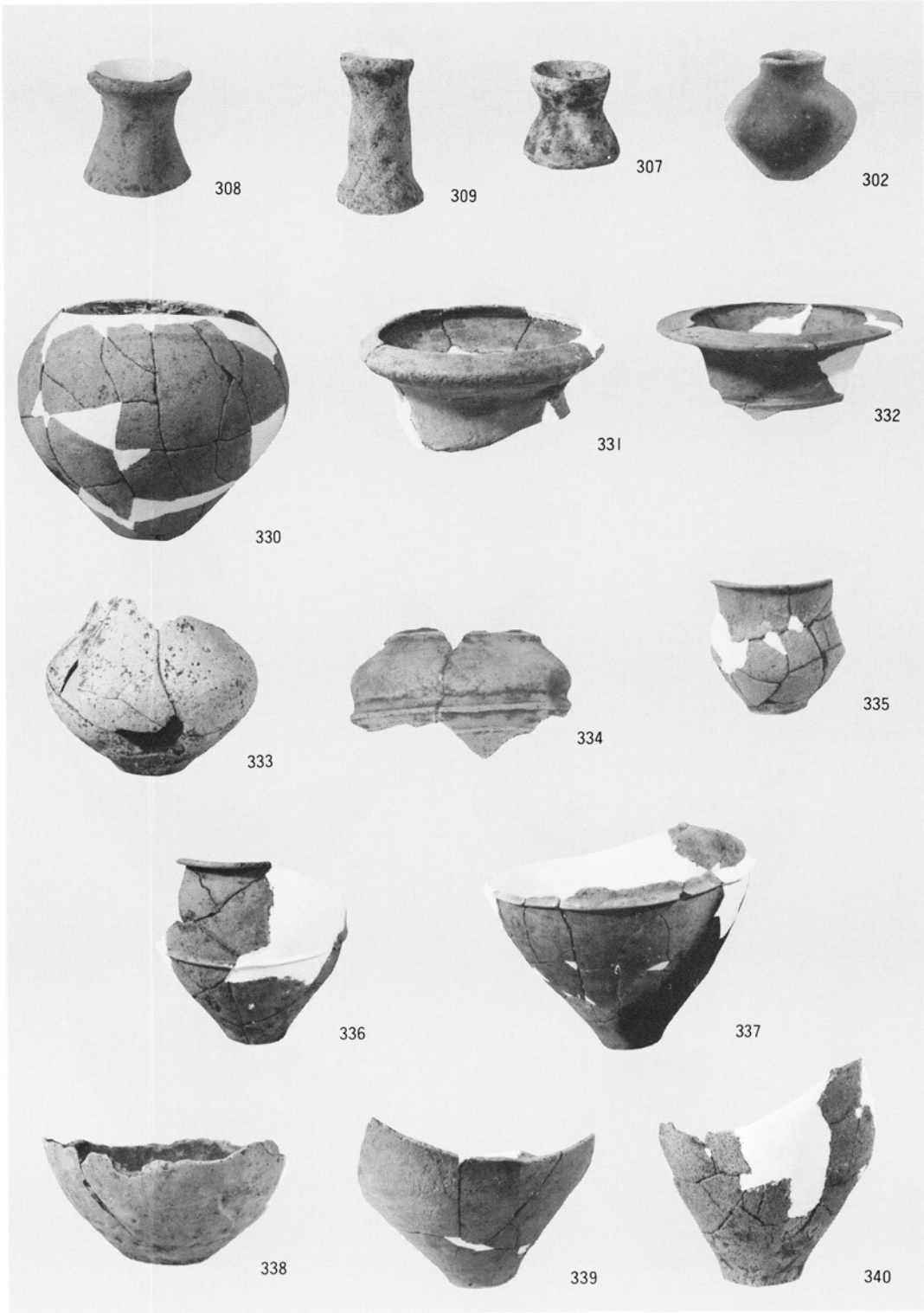


出土遺物 (18) SD01

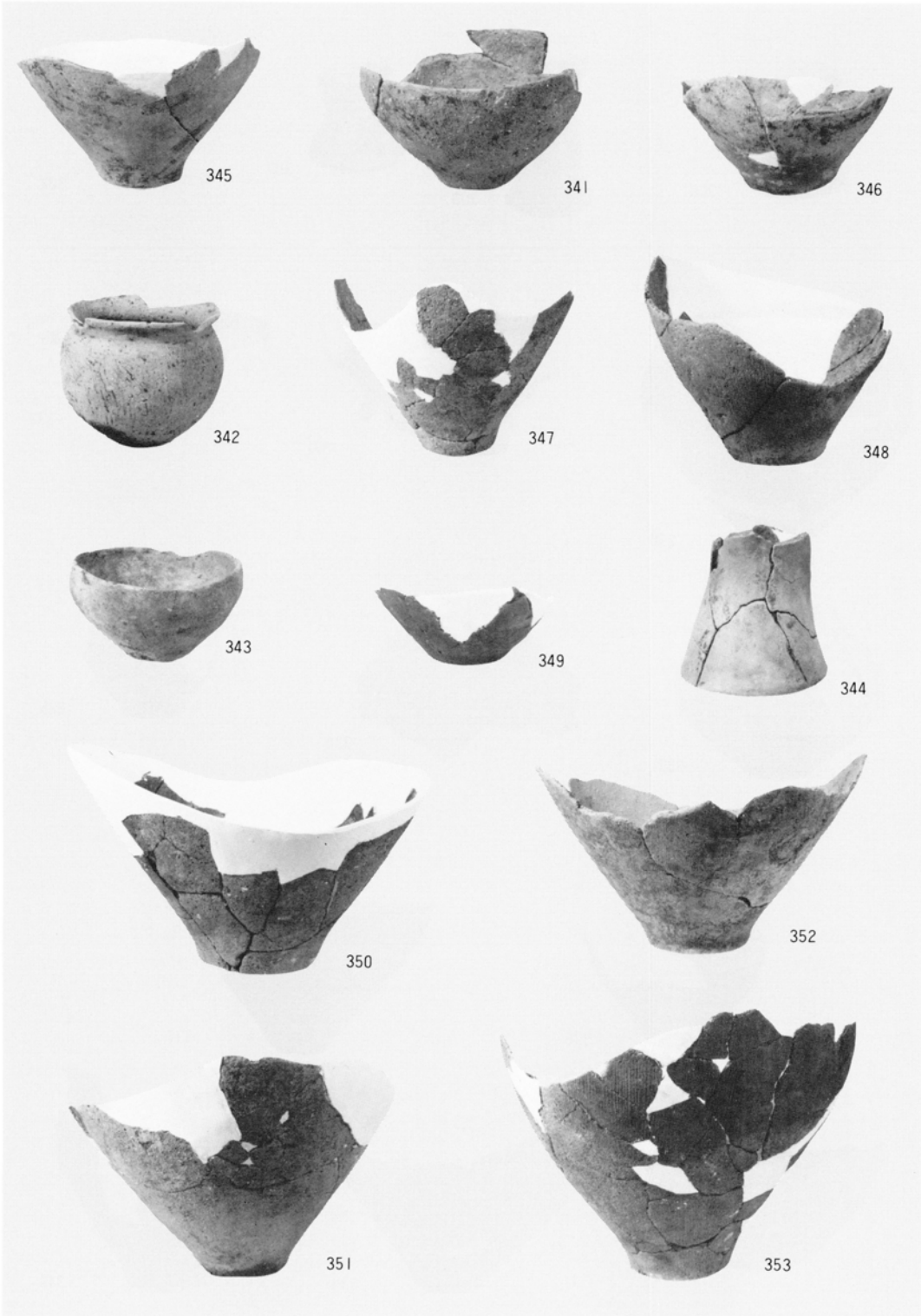


出土遺物 (19) SD01

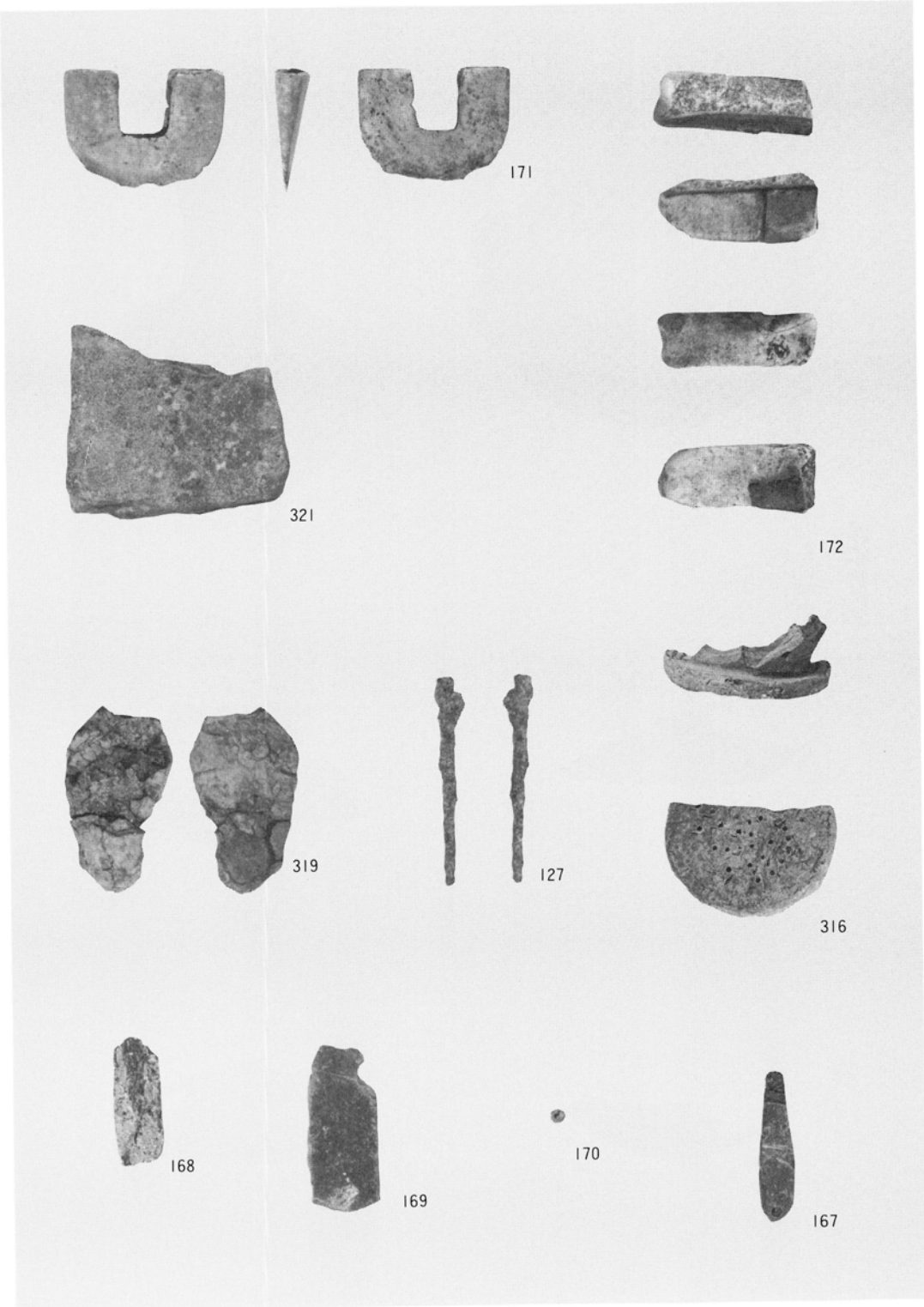
出土遺物 (20) S D01



出土遺物 (21) SD01



出土遺物 (22) SD01



出土遺物 (23)　171・172：SD01　127：SP215
167：SP04　168：SP379
169：SP386　170：SP182
319・321：SX13　316：SD02

317

354

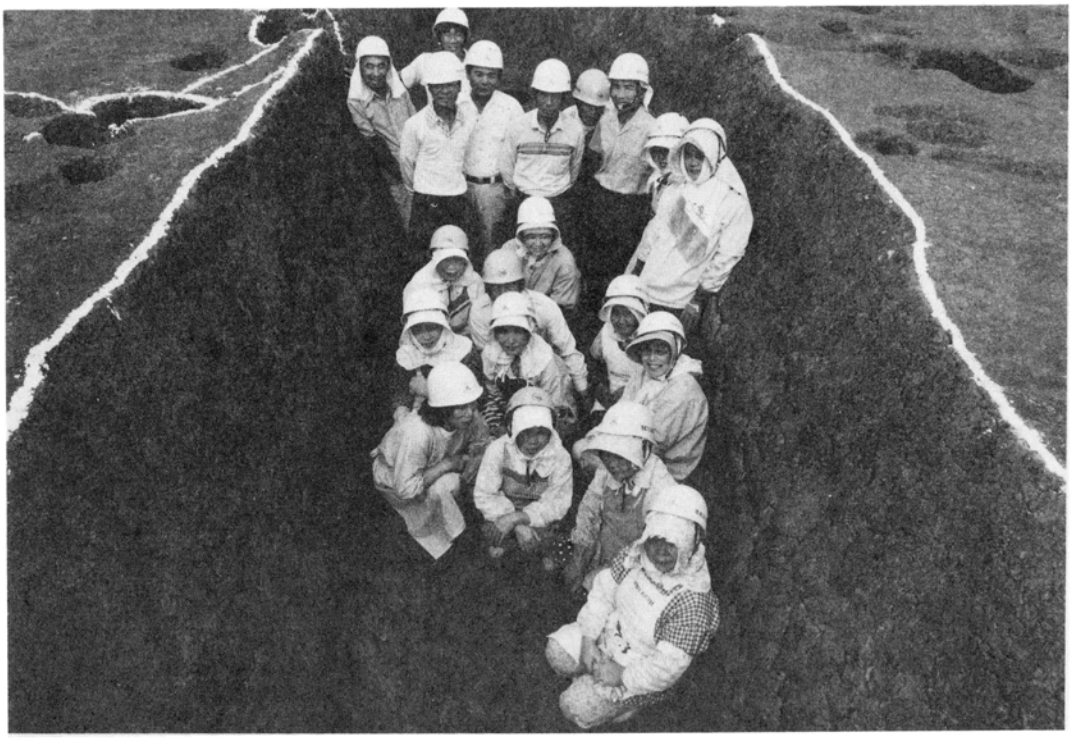
355

318

356

357

出土遺物 (24)　317・318：ＳＸ13
354：ＳＫ38　355～357：遺構確認面



発掘作業員の皆さん。溝の中に20名。環濠の大きさが偲ばれる。

那珂遺跡 8

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第324集

平成５年（1993）年３月13日

発　行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目８－１
(092)711-4667

印　刷　株式会社ミドリ印刷
福岡市博多区西月隈１丁目122-4
(092)441-6747